女子文壇

十月



第五年

第十三號

東京女子文壇社發行

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本品は最も完全なる白毛赤毛染なり
又本品を以て赤毛を染る時は有に半ヶ年以上を保つと云ふ奏効禮狀日々多大なり

全國到る處の小間物化粧品店藥店に有り



本舗

東京市日本橋區通鹽町一番地

服部重右衛門商店

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

國民文庫は歷代文學の精華を拔き、蒐めて三十六册とし、嚴正なる校訂は以て各書の定本たるべく、高雅なる装釘は以て書齋客室の一大美觀たることを期するもの也

國民文庫



本會曩に會員の數を三千名に限りて募集せるに、幸に江湖の賛同を得て、滿員締切後、尚引續き多數の入會希望者あり、數册發行の今日、益其數を増加するの盛況を呈せり。然れども豫ての宣言の如く、校訂、印刷、製本等に於て、此類のものに殆ど先例なき程の注意を加へんが爲に、設備の關係上、定員以外の分は一切拒絶し居たるも、此の如くにして江湖の需要に背くは、固より吾等の素志に悖れる所なり。仍て玆に設備を整へ、更に三千名を限りて募集す。請ふ此好期を逸せざらんことを。

●規定書及装釘内容見本 御入用の方は端書にて直接本會へ申込ありたし

第二回會員募集

●入會締切來る十月廿日限

△略規——全篇三十六册（非賣品にして會員にのみ頒つ）——會期滿二ヶ年——會費毎月金貳圓廿錢但送本料は別に申受く——入會金金一圓（但最終の會費中より控除す）——配本は二ヶ月に三册の割（一册の代價金一圓四十六錢餘に當る）——製本は中村不折装釘意匠菊判總クロース天金紙數平均約八百頁

東京市神田區小川町壹番地（電話本局七百三十二番 振替口座東京一八五七二番）國民文庫刊行會

（滿員に達するときは期限に拘らず入會を謝絶することあるべし）

取次所 東京 東京堂、上田屋、至誠堂、林平 大阪 杉本

女子文壇

第五年第十三號

目次

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ淸々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「董おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京橫濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

登錄商標

五二會品評會功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴアイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入



ヴアイオレツト水製

ぬり製　大壜二十錢　小壜十二錢
水製　大壜二十五錢　中壜十五錢　小壜十錢
玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子壜入

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞贊する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は溫湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

綠、藍、紅彩蝶香ひ　別製罐詰　大袋二錢
罐詰八錢　五拾錢　小袋一錢

登錄商標
西洋白色くなるあらひ粉
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらひ粉



製造本舖　東京東兩國元町（兩國橋際）　壽美禮堂謹製
（電話浪花二七六五番）

取賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めなさるべし

運動



（大江原色版製版印刷）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

▼時勢の要求は斯の如き小説を生む

巖谷小波題句
わらび山人著
鏑木清方挿畫
(コロタイプ)寫眞版

家庭小説 孝女白菊

四六判美本
定價金四拾錢
郵税金六錢

落合直文先生の歌、井上巽軒博士の詩、とに依りて夙に喧傳せられたる、孝女白菊は著者の流麗なる筆により、清き家庭小説となりて出づ、銷夏の好讀物として切に江湖の清鑒を待つ、

大好評第四版發行**特典**本版よりは紙數を増し井上博士の詩『孝女白菊』落合先生の歌『孝女白菊』を附錄し以て愛讀諸君の御希望に副ひたり

殊に井上博士は此擧を賛し(前記)白菊の詩に童蒙の便を斗り傍訓を附するの議を快諾せられ繁忙の中殊に草稿を校訂せられたり謹んで江湖に告ぐ

東京神田表神保町 振替一九〇四四番 **福岡書店**

淺草下平右衞門町 振替一九〇六五番 **岡村書店**

大歡迎

學年別 英語カード

英語を覺ゆるに最も進歩せる方法!!

英語研究記者編輯

用紙上等**厚紙** 中學年別**函入**

一函五百五十枚以上七百枚
中學一二年用定價各卌八錢
同三四年用定價各四十五錢
同五年用定價金五十錢
各函小包税入錢二個十二錢

是は中學校に於て使用する英語教科書中の重要なる單語短句を悉く網羅して一枚宛のカードとし、文例二三を列記して裏面には譯語、動詞形容詞等の不規則的變化を示して別に索引及使用説明書を添へたるものなり、故に初歩より高等に至る迄各自己に適する種類を購求せば即日即刻よりカード式暗誦の便多く効大なる新法を實行し得べく其ヴオカビユラリーを増し其ナレツヂを堅實ならしむる事を得べし

▲記入用**白カード** 函入十二錢 郵税六錢

▲東京麴町區富士見町
▲振替東京一八二三六
英語研究社

再版出來

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本誌の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

本誌を讀むは婦人向上の所以なり

婦人世界

十月一日發行 第十一號 定價一冊拾五錢 郵税一冊一錢五厘

▲夫婦喧嘩は如何に豫防すべきか……村井弦齋

▲私の娘が洋燈を倒して燒死した時の實際 娘の母 飯田千代子

▲大阪の女學生が始めて上京して女子大學寄宿舍に入る 室谷節子

▲獨逸より歸りて第一に母親に忠告した事 醫學博士 加藤照麿

▲十五人の子供を殘して良人に逝かれし時の覺悟……色川靜子

▼▲慰藉と幸福を求むる婦人は讀め

▲北京籠城中に良人を失ひし實歷 楢原政子

▲藝人の娘より發奮し遂に女教師となれる苦心實歷 杉橋よね子

▲御祈禱にかこつけて窃かに生神樣のお告げを承はる記 婦人記者

▲京都の女中は斯くの如き美徳を有す……川村糸子

▲女中となりて狂氣の良人を看護せし苦心…狂人の妻 中澤米子

大隈伯遭難の當時の追懷…伯爵夫人 大隈綾子

東京 實業之日本社（郵便振替口座 三二六番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



十月一日より

一第十八回新柄陳列會

一懸賞課題裾模樣圖案陳列

一和洋小間物新製品陳列會

一懸賞募集優等寫眞陳列

一時代風俗參考品陳列會

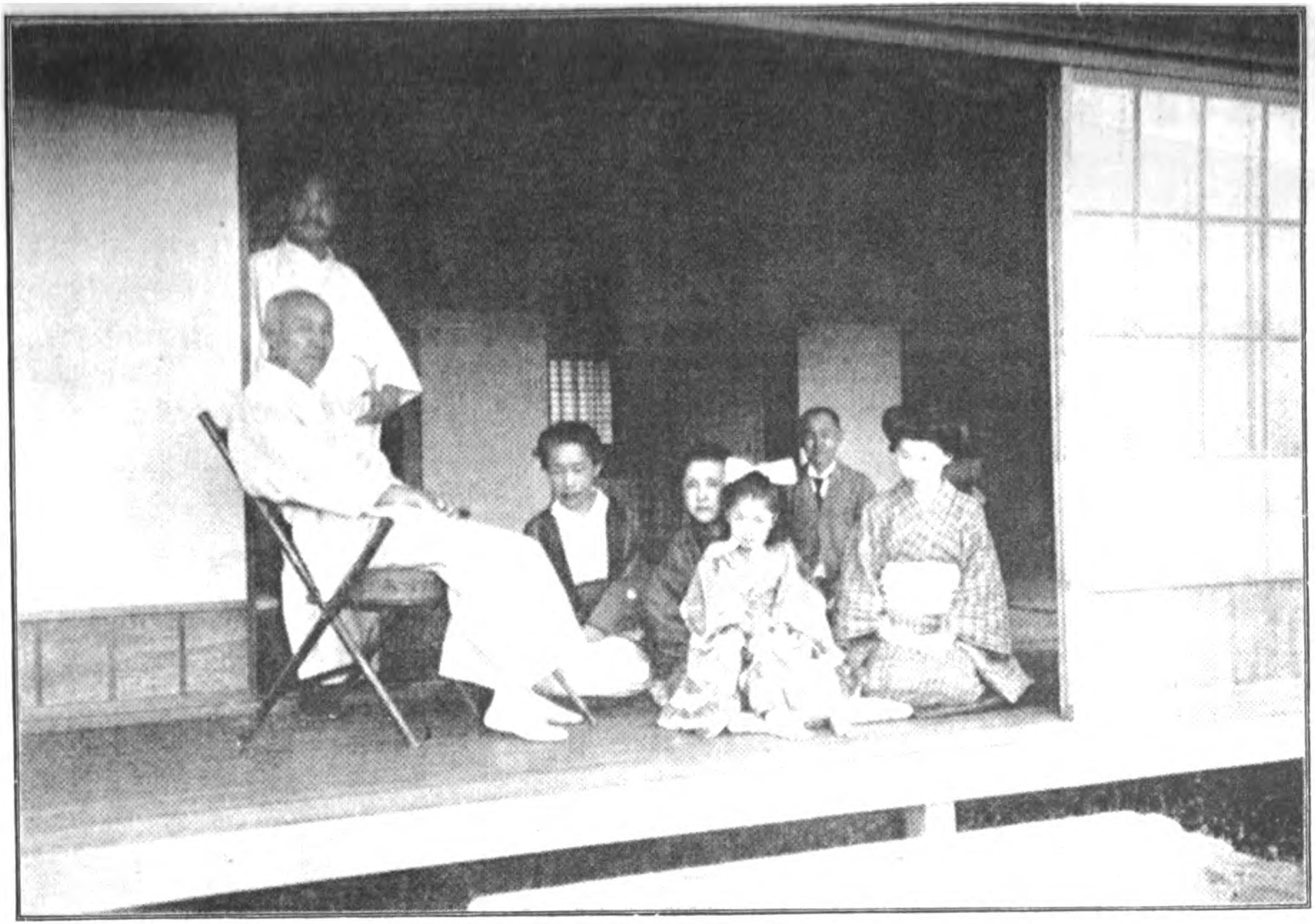
一寄せ裂れ見切り反物大賣出し

地方註文御案內書は御一報次第送呈可仕候

振替貯金口座番號東京三〇〇番

東京日本橋駿河町

三越吳服店



大隈伯爵家庭（最近撮影）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

現代の女醫



井上友子君



吉田賢子君



篠田勢以子君

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

開業 文運堂

帳簿文房具製造發賣

文運堂製品の發賣元は博文館及三越呉服店也！

弊堂は最も進歩し最も有利なる帳簿文房具類を製造し兼て最上の外國製品をも廉價に發賣す（營業品目錄は御申込次第送呈仕候）

四大特色

意匠 兒童用品研究會（三島、新渡戸、坪井、塚本、斯波の各博士、高島、黑田其他の諸大家）及教授用品研究會（東京高等師範學校及東京女子高等師範學校教職員諸氏の組織）の審査指導を仰ぐ

製造 博文館印刷工場にて最新式の機械を以て專門技師監督の許に優良品を製造す

用紙 は內外各製紙會社の代理發賣店たる博進社之を供給するに依り製品の豐富に價格の廉なる他に比類なし

直輸 歐米各國の名聲ある製造元より輸入するが故に品質精良價格頗る低廉なり

九月十五日開業

登錄 商標



製造元

東京市神田區錦町一丁目十番地
(博) 文運堂
電話本局七八〇番
振替口座東京一九七〇〇番

發賣元

東京市日本橋區本町
(博) 博文館
振替口座東京二四〇番

東京市日本橋區駿河町
三越呉服店
振替口座東京三〇〇番

三越呉服店及博文館文房具製造機關は文運堂也！

文運堂は博文館博進社の共同事業也！

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新發明 美容艶麗 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確說す世上種々雜多の色白薬を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新薬

根本的色白くなる内服劑 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡慢性梅毒痳毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當舖にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓九拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾九錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは鋪主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に紛々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回四拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

以上三種專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

有効保證 前代未發 秘傳奇術

全壹册 正價郵税共金拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(目錄大要)神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰〇の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治薬製法●髪の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髪必生法●臭汗治法●白髪を染むる法●髪毛の光澤を美にする新薬●齒磨粉製法●西洋流油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ピットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●雜紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の醜婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盗人を見顯はす神術●女に○れらるゝ薬法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女を○○かす薬法●堅き女の氣を○○す薬法●陰○を長大にする薬法●そばかす必治法●女を○○にて泣す神薬●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に○れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する薬法●閨中の秘薬●即坐に男精を増す法●毒蟲に螫れたる時腰ぬ特効薬●避食の仙術●神速に精力を強む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を○せしむる法●記臆力を増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黑字夜光の奇術●老人終身啖取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服劑新法●寶丹の製法●腹痛速治法●疥癬病の薬法●生たる鯉を遠國へ送る法●服瞬を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●痔病の治法●月經の不順を治する法●瘤氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の痒きを治する法●陰部の蝨を去る法●にきびを去る最新法●頭髪を長くする法●毛生薬の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下瘡を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新薬●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髪豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●疲小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを抜く新法●乳の出る妙薬●陰部の諸瘡治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒除防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齢により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●毒酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊の汚染を落す新法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す(合計壹百四十法あり)着金即刻送本す

專賣元 東京神田五軒町拾九番地 **日新館商店**

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

農學博士稻垣乙丙君閱
工藤齋君著

新編 家庭の科學

全一冊洋裝菊判
美本紙數四百四十二頁
正價金八十五錢
郵税十錢

抑も婦人の本務たる日常家事に於ける百般の事項は悉く科學の理に支配せられざるはなし然るに本邦婦人は槪してその智識に乏しきが爲め往々妄說を信じ鑑別を過り識らず知らずの間に不經濟、不衛生の動作をなすことあるは痛歎に堪へざる所なり著者工藤齋君は高等女學校に敎鞭を執るの傍ら理科と家事科とに連絡を付し兩者共通の資料を採て本邦の主婦たる人にその智識を授け以て婦人の本務を完全圓滿に盡さしめんことを欲したるもの即ち本書なり

治庖會本部主事
安西古滿子女史著

四季毎日三食料理法

全四冊

(一)春の卷 (二)夏の卷 (三)秋の卷 (四)冬の卷 全部完成

菊判和裝美本
紙數各二七〇頁
石版口畫入
正價各金五拾錢
郵税八錢

何れの家庭に於ても毎日三度の獻立に就ては主婦が最も苦心する處ならん此の書は之が相談相手たらんがために安西先生が四星霜の間、苦心を以て衛生と經濟とに留意せられ一年三百六十五日毎日三度の豫定獻立表をつくられ且つ其料理法は平易の文字を以て反覆叮嚀に記述せられたるものなれば親しく先生に就きて敎を受くるに異ならず何人と雖も容易に會得することを得、實に各家庭にはもとより學校及び軍隊に於ても必要缺くべからざる珍書なり

東京日本橋本町三丁目
博文館
振替口座東京二四〇

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

四十年間 墺國宮内省御用

グリスリン入石鹼

此グリスリン石鹼は芳香の馥郁たる色を白く皮膚を滑かならしむるの特徴を有す、特に墺國醫學博士イー、イーボール氏の證明を得たり

一千九百〇五年　墺國タジク會社

日本一手販賣

東京日本橋區橘町二丁目
舶來化粧品輸出入商　竹間商店

●販賣所市内は信用ある藥店小間物化粧品店に有之候

「タジク」の名なきものは僞物なり御注意を乞ふ

GOTTLIEB TAUSSIG
Soap Maker and Perfumer to the Imp. and Roy Court
VIENNA-AUSTRIA.

實用浮石鹼

英國ボツソン、エンドシンプソン會社特製品

千九百〇八年八月最新輸入品

會社の自慢本品特點

香氣の高きは本品の特點なり

價格の低きは本品の特點なり

實用に適すは本品の特點なり

上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也

レックス



論より證據實地御使用を乞ふ

東洋輸入元　東京エスシー

賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物店及び化粧品店に有り



子爵秋元興朝氏令孃光子孃



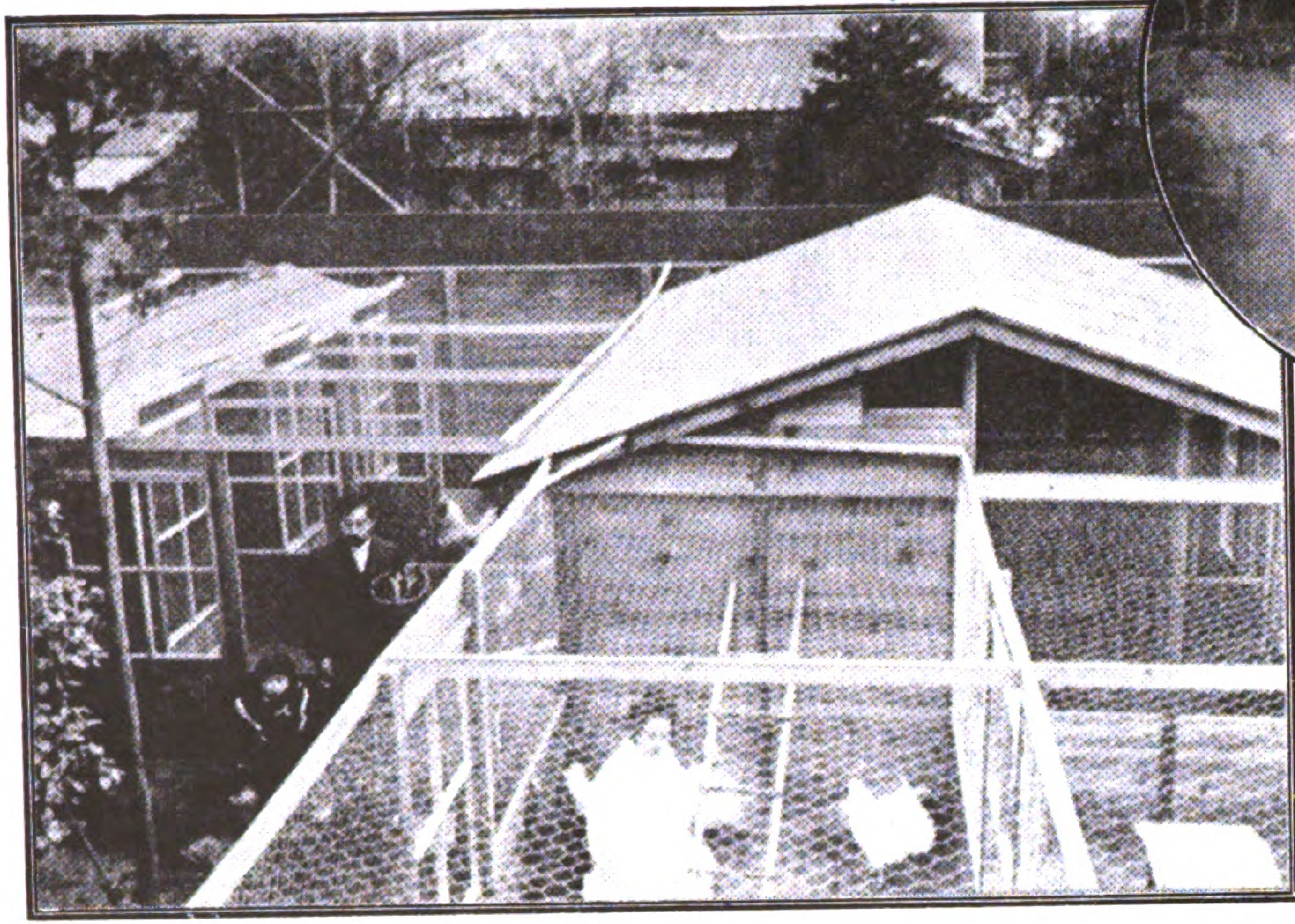
醫學博士弘田長氏令孃房枝子孃
（女子學院本科卒業）



法學士關直彥氏令孃直江子孃
（日本女子美術學校卒業）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

前田子爵家禽園



子爵夫人　子爵前田利定氏と令嬢



子爵令妹靜子孃
中央子爵令孃
子爵令妹秀子孃

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

[illegible]其旨御書添を乞ふ

於[illegible]博覽會 名譽賞牌受領

大改善―新學期開始―會員募集

習字速成講義錄

本會獨特の特許速成法は効果最顯著なるがため既に天下を風靡せり

書者 文部省習字檢定試驗委員 稻川雲谿先生及玉木愛石先生

○女子部書者 小野鵞堂先生外講師大家數拾名

見本 詳細會則無代進呈

東京本郷森川町一 電話下谷三〇壹[illegible]

帝國習字速成學會

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一ばい毒根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たゞれ。ど。疳毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて誓つて根治することを確證す從來諸療費藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スピーゲル氏の發見に係る男女生殖機不能即ち陰萎病。腎虚神經衰弱。遺精。夢精。早漏。遇房。元氣衰弱。老衰無力。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不姙娠。冷症。發育不全等に用ひ輕症は參四劑重症は五六劑慢性難症は八九劑にて根治の目的を達する天下無比可驚奇効ある最新發見藥也世に生殖器を強健ならしめんと望む者精力を增進せんとする者は早く試よ此偉大なる特効眞に如電光世にありふれたる誇大なる名を冒せる内地製無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九拾錢 郵券貳割增

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヰイドナリン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に減し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢著金即刻送藥す

世界唯一 麻病消渇の根治新藥

▲ 麻滅（りんめつ）

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇根治機範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力顯る最新の一新藥を主劑とし麻病消渇の病原菌たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根治することを確證す但し彼の消式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり發効峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢 特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

わきが（腋臭） 根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何なる頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病的改變なき廿世紀眞根治新藥なり速に試み著勝を現せよ 但は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓廿錢著金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛生藥なり即ち男女共腫物の痕、はつけの痕、やけどの痕、其他はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、陰部に毛なき人、頭髪の薄き所に毛のなき人等本劑を用ゆれば忽ち毛を發生することを確證す本劑は特別製分を用ゆれば種々雜多の毛ある人は毛生すると其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるとは玉石混同視することなかれ

特別製分 金五圓三拾錢 大瓶貳圓卅錢 中瓶壹圓廿錢

以上專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房（電話下谷五四六番）

婦人科専門 醫學士北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病 自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、猶も心を痛めて。素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて、生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◉著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳説せり◉病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ。當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

目次

婦人病の總論◉子宮病血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法◉神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◉しらちながちの病理及其根治法◉月經時の手當月經諸病の療法◉姙娠の原理、受胎すべき場合、姙婦の攝生、つわりの養生法

發行所 東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三千六百一） 笹岡省三

乳の出ぬ人

乳呑子を持つ母親にして乳の出ぬ程辛いことは御座いません牛乳やミルクでは分量の過不足ありて胃腸を害め乎數はかかり夏季は腐敗の恐あり此上もなき危險にて何うしても乳呑子には母乳に優たものは御座いません世間には產後始めの内は相當に出乳するも日立つにつれ不足する方多く二人目三人目には一滴もなき方も隨分ありますが斯る婦人の原因は初子の時分に不足を感ずる力に多くされば其當時より手當を施し乳線の發育を充分ならしめる樣心掛けらるべく若し私同樣御困難の方は遠慮なく郵券添へ御照會あれ弘田博士加藤博士等の談及び自分の實驗せし療法等詳細に御知せ致升

東京市麴町內幸町一ノ五 森田豐子

洋畫講義録

執筆 三宅克己先生 石川寅治先生 大下藤次郎先生 河合新藏先生 中澤弘光先生 鹿子木孟郎先生 外 伯爵 大木 ずみ 顧問

洋畫講義録は水彩畫より始め其他油畫、鉛筆畫、ペン畫等凡て一切の洋畫に關する事を詳細に講述す獨學にて容易に畫家たり得る、毎月一回發行、一年卒業、會費每月六十錢、規則書郵券二錢

新學期開始

繪畫講習錄

執筆 川端玉章先生 荒木寬畝先生 寺崎廣業先生 田中古先生 顧問 伯爵 外 大家十數名

繪畫講習錄は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も獨習にして上達せしむ繪畫趣味の解説なる挿入す、每月二回發行一年卒業會費月額六錢、詳細規則郵券進呈

東京市麻布飯倉四丁目 大日本繪畫講習會

●多血症●脂肪過多●中氣

酒ぶとり 肥滿にて御困りの方へ 美容となる奇藥あり 郵券二錢送れば説明書進呈す

●東京小石川區水道町十七 池田製藥部

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

秋季毛髪の保護には

煉香油

パール

パールを以て専一とす

スミレ香水本舗東京横山町平尾贊平店

消毒済

菊の露

白粉

本品は世界白粉中の女王と稱へらる

一葉



女子文壇の愛讀者にして又壽美禮おしろい並に壽美禮洗粉の愛用者なり、日常之を用ひて艶麗なる容姿を具へたるを以て寫眞を弊店に贈られたるにより玆に掲ぐ



壽美禮おしろい愛用者鑑（其一）
東京　鷲見久枝孃

女子文壇の廣告に由り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

趣味津々

九巻貳拾壹號

材料豊富

毎號懸賞

秀才文壇

投稿優待

口絵

●運命……シー、エフ、ワット筆（原色寫眞）

●誘惑（携帯名畫）●林間●浴室●著名なる三史蹟（松下村塾、笠置山頂貝吹石、奥沖阿闍梨の遺蹟）●収穫（二題）●新作家八氏

●霧……吉江孤雁

●祭の後……相馬御風

●秋の第一日……窪田空穂

●凶事……三島霜川

●秋の湖畔……河井酔茗

●海の秋……三津木春影

●旅の秋……岡本松濱

●片へをめぐる衰頽の歌……人見東明

●死を待つ袈裟……加藤介春

●夜の曲……川路柳虹

●悲と疲と……前田夕暮

▲十月一日發行◎正價一冊郵税共金十四錢 半年同金壹圓七十錢▼

發行所 東京神田旅籠町一丁目（振替口座一九五五） 文光堂

賣捌 東京堂 東海堂○北隆館 上田屋

らい病根治新劑

▲藥名……レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効當式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の悉説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の幸福を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す

藥價送料共壹劑分五圓拾錢特別製分拾圓拾錢

美き聲の出る新藥

發聲藥は古來甚だ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり本劑は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又は聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製壹圓拾五錢

腦病を根治し記臆力を増進する靈劑

滋養回春 記臆増進丸

本劑は獨逸大醫スクリトホアト氏の新處方に基き發明的の研究を重ね其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし新時代の先驅に輸入し多年實驗の上なり故に本劑は腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力記臆となり[illegible]を服すれば記臆力大に増進し入世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る[illegible]べき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に増進すること[illegible]顯著なる奇効を知れ

（藥價）七週分壹圓五拾錢 週分貳圓六拾錢 壹週分壹圓六拾錢 各拾錢（送料）

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下す本劑壹劑分を用ゆれば少しキレーに流下す又特別製分を用ふれば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず立處ろに流經す月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及惡血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其效峻烈顯著なるも毫も衛生に害なし婦人[illegible]め安心して試用あれ價は一劑分七拾錢 貳劑分壹圓廿錢 特別製分[illegible]

（注意）本劑の大盛なるを羨み近時無効なる類似偽藥を造りて賣る者あり深く注意ありて「東京日新館藥房」の名稱に注目し購求あらんことを乞ふ



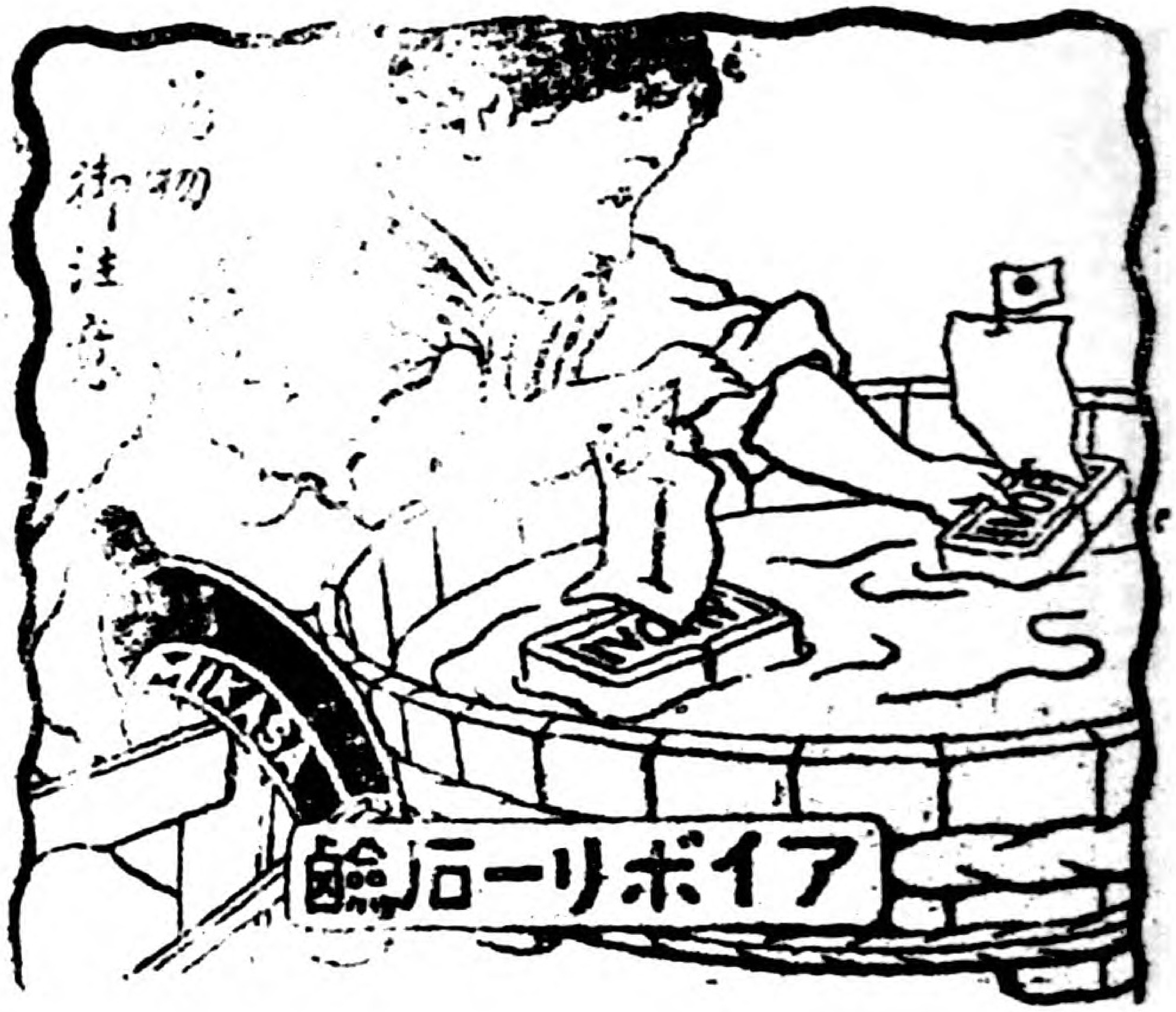
世界無比 最新發明藥 あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまづ、いぼは拾日目に必ず美麗に除去することを保證す

本劑は新發明劑にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へ感謝状及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑はなまづ、いぼ、そばかすを二種に區別し一はほくろを除去し又はそばかす、いぼ等を除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の[illegible]を明細に記して申込まれ度し[illegible]拾錢[illegible]

以上專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



廣告有効●料金割安

●每號發行忽ち本社賣切の盛況●

●早く申込ぬと缺本になります●

女子文壇

到處各號好評

村井弦齋先生御家庭及數萬の愛用者が賞讃を博し居る

みやけ油



東京人形町通三宅堂本舗

天下一品
最良髪油みやけ油
高等みやけ香油
香入みやけ油
スキ油、ビンツケ
洗粉島椿、島の春

等の精良品にして舶來品に優る。僞物四方に顯はれたり東京發賣本舗名と商標に御注意。近時大阪みやけと稱し劣等の僞物を販賣する者あり欺るゝ勿れ

販賣所 化粧品商、小間物屋、薬屋、[illegible]にあり

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

初歩英語

中學生又は英語獨習者のために、この世界一のやさしい新英語雜誌「初歩英語」第一號十月一日に發行します、其内容の重もなるものは

讀本ごツこ 二十有餘種の英語讀本第一巻より比較研究す、讀方の説明は更なり、文法、會話、作文、發音、綴字の各部に亘る迄理解し易く詳説す。

今様松山鏡 鏡を對手に讀者が英語の發音を自修し得らるべき新機軸の講義

そゞろあるき 文雄武雄の兩人、そゞろ歩きに會話、作文の練習を爲す趣味ある無比の教科書

新世界國づくし 世界各國の地理、風俗を寫眞版挿入第一讀本程度の英文に詳しき註解を附して說明したるもの無類の新案英語案內

ハイカラ日記 英和混同したる日記文にして興味の中に日常英語を記憶し得る應用自在の欄

其他記事は多きを貪らず一つ記事を長く詳しく書くのですから有益なる事も世界第一です

毎月二回一日十五日發行 **金參錢** 郵税五厘 六ヶ月分郵税共四拾錢、一ヶ年分廿四冊郵税共七拾五錢

東京市麴町區富士見町六ノ十 **英語研究社** 振替口座東京一八二三六番

英語研究記者編著 **初等英語叢書**

[illegible]

初等 英作文の話

第一、第六版發賣 第二、第三版發賣

英作文の手ほどきを最も分り易く説明したるもの學生も獨習者も之に依りて容易に困難なる斯道の門戸を開くを得ん、中學一二年は更らなり四五年生にも亦必讀の書なるを信ず。

初等 英文法の話

第一、第六版發賣 第二、第三版發賣

英文典は六つかしくもやさしくも如何樣にも説明の出來るものなり從來學生の常に英文典に頭を苦めたるは或は之を平易に説明したる書なきに依らざるなきか、敢て大方に本書を薦む。

譯註 西洋幽靈の話

第三版發賣

當代に於ける讀書社會の人氣者モーパサンの小説を初學にも讀まれる樣の譯文と詳註を加へ、每頁則に殆ど一語を漏さゞる字引を附せるもの、文章平易事實怪異何人にも面白く讀まるべし。

中學 英作文獨習書

萬朝報英文記者國民英學會講師 今井信之先生著（好評訂正三版發賣）

總クロース製金文字入美裝正價四拾錢郵税六錢

やさしき言文一致體を用ひ最新式の方法を以て中學一年級より五年級に至る英作文文法上の智識を如何なる初學者にも獨習し得らるゝ樣懇切に講義せられたるものなり、亦卷尾には精細なる索引を附したれば一種の作文文法の辭書に代用する事を得。

發行所 東京麴町區富士見町六丁目 振替口座東京一八二三六番 **英語研究社**

わが寫眞帖



（徳島）吉田古磨子

（高岡市）内田よし菊



（東京）三谷二葉子



（茨城）岡田梅子





（東京）谷口桂子



（藤澤）常磐幸子

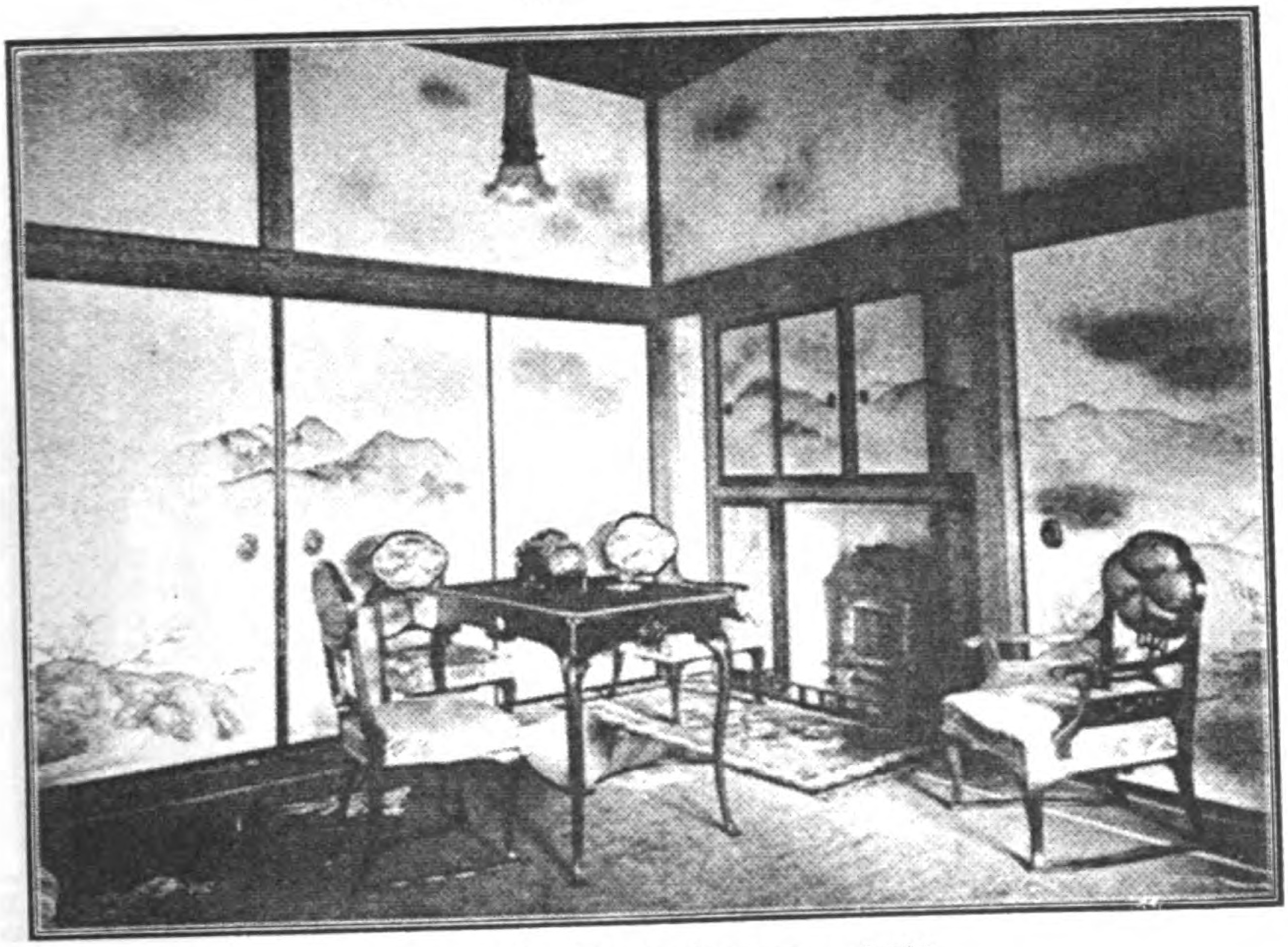
續々寫眞の寄贈を望む



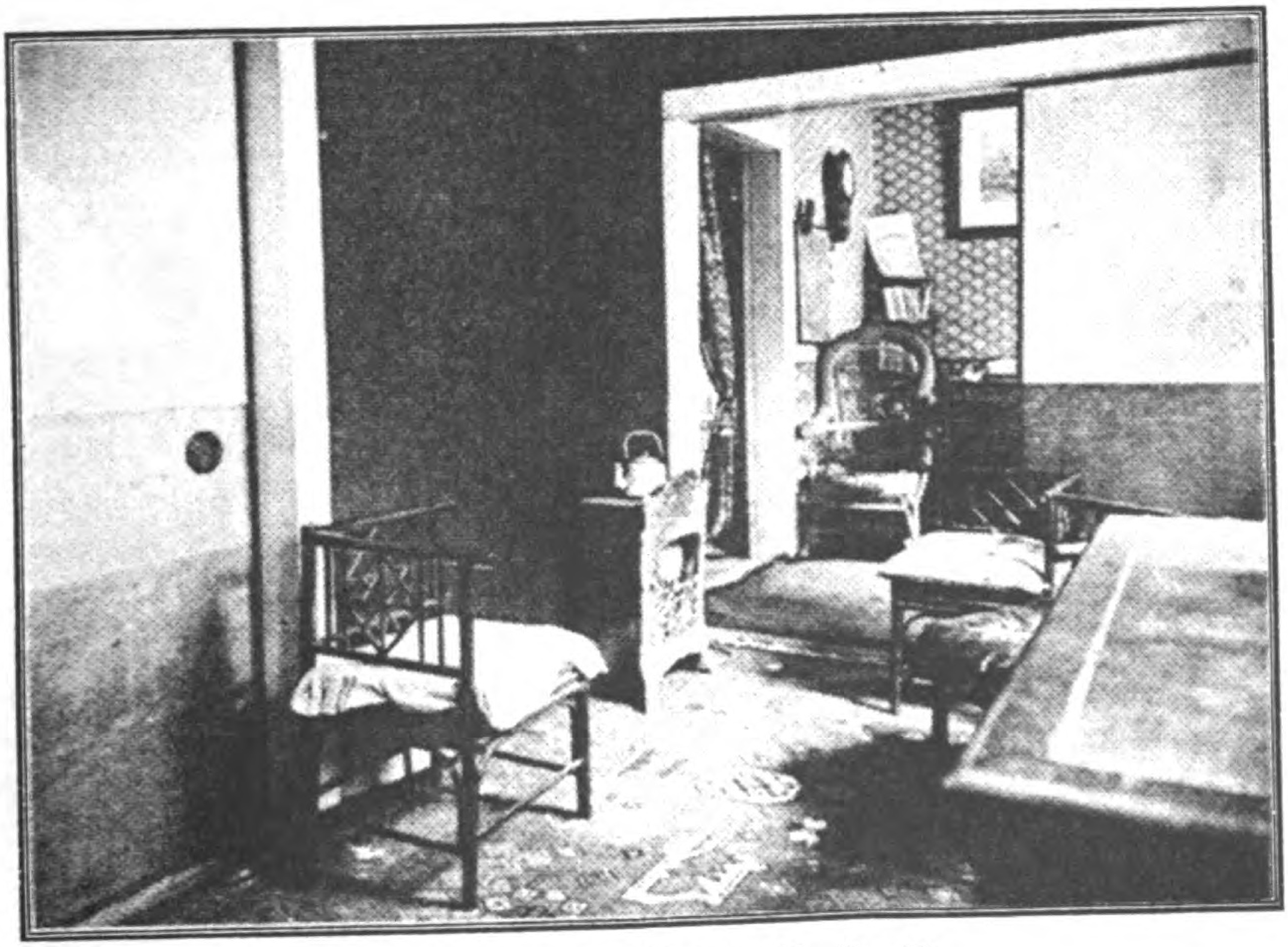
（山口）吉武貞子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

室内粧飾



麻布、三井家夫人居室（梅の間）



伊太利公使館の一室

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

世に持囃されつゝある彼の有名なる

女子技藝研究會長 梶山彬先生の女藝叢書は

裁縫新書

大和綴 仕上方積り方裁方圖百三十余個挿入
菊版頗美本 正價金五十錢 郵稅金八錢

世に裁縫書少からずされど實際に基けるもの尠少にして大抵は理論にのみ走りつゝあり。本書は此の缺陥を補ひたるのみならず實地上必要なる積り方裁方仕上げの難解なる所は一々圖解を以てしたれば如何なる初心なる人にても思ふが儘に縫ひ裁ちの道は會得せらるべし

(ほノ一)

編物新書

大和綴 圖案及雛形圖百二十個入
正價金五十錢 郵稅金八錢

全一冊

袋物製作新書

大和綴 圖案及雛形圖百六十個入
正價金五十錢 郵稅金八錢

全一冊

造花術新書

大和綴 雛形及説明圖二百餘個入
正價金五十錢 郵稅金八錢

全一冊

刺繍術新書

大和綴 圖案及雛形圖百五十個入
正價金五十錢 郵稅金八錢

全一冊

花たば新書

大和綴 雛形及説明圖百二十個入
正價金五十錢 郵稅金八錢

全一冊

摘み製作新書

大和綴 雛形及説明圖百四十個入
正價金五十錢 郵稅金八錢

全一冊

女子の技藝はいと高尚にして實益に富めるが故に今や非常に盛となり學校に家庭に行はれつゝあり、されば之が補佐たらんとして世に出でたる著書少からざれども大抵實際に適するもの無し、此書全國の高等女學校にて最良の參考書なりとせらるゝも實に其の實際を旨とし而かも學理と調和したるに因るなるべし、世の閨秀諸媛の好指南車也

發行所 東京市京橋南槇町十八 廣文堂 振替貯金口座 東京四六八〇

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

◎秋涼と共に本誌は如斯大發展◎

婦人画報

拾月一日發行 拾月の卷 一冊廿五錢 郵税二錢 六冊税共壹圓五十錢 十二冊税共二圓八十八錢

本號より畫報全部を光澤紙とし畫面を增加す

畫報

◎在米日本人の薔薇祭◎百華園と日比谷の秋色◎上野動物園の昨今
◎秋の窓（中澤弘光筆）彩色美人畫◎胡蝶の舞◎箱根塔ケ島の離宮
◎御渡歐の伏見若宮妃殿下◎帶結び方三樣……
◎馬車に召されたる三皇孫殿下◎新婚の大谷武子姫
◎御渡歐中の久邇宮妃殿下◎數名家の令孃
◎巴里にて御撮影の梨本宮同妃兩殿下◎馬上の女學生
◎三閨秀才媛書と其◎月◎シャトル婦人會◎米國女學生
◎當世婦人風俗◎少女劍舞其他……

讀物

▼婦人の職業に對する誤解（法學博士 添田壽一）▼特徵ある子供（岸邊福雄）
▼婦人の結婚難（文學士 三輪田元道）▼夫が議員候補に立ちし時……（星常子）▼神戸絢子女史訪問（ゆき子）▼台所科學
▼鎌倉の女性（文學士 大町桂月）▼烈婦清水數馬の妻（遠山稻子）▼東京名物食物色々
▼最完全なる婦人を生みし時代（文學士 岡部精一）▼我家の子供と下女（與謝野晶子）▼料理 ▼育兒
▼予が看護婦を教育する方針（醫學博士 高木兼寬）▼小說 瀑音（岡田八千代）▼臺所拜見
▼婦人に職業は禁物（嘉悅孝子）▼小說 十五夜（きく子）▼秋の虫……▼其他滿載

婦人界の動靜一目瞭然趣味と實益ニら完備

東京飯田町四の四 東京社 電話番町二三三九

子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

高濱虛子先生選

中村不折先生裝釘 口繪 春風馬堤曲 石版印刷
内藤鳴雪翁戲畫（虛子廿四句）

新選俳句集

新刊

（全一冊 用紙ラフペーパ紙 新式洋裝）

正價四拾五錢 郵税六錢

附錄

文學士 久保天隨先生著

俳文評釋

一、柴門辭 芭蕉翁 二、鉢扣辭 去來 三、松島賦 芭蕉翁 四、五、百花譜 許六 六、簑蟲説 素堂 七、十八樓記 芭蕉 八、九、丈草誄 去來 十、十一、祭猫文 支考 十二、示僧古鏡辭 李由 十三、長雪隱解 許六

木版色刷挿畫

○畫室 ○家の角 ○汐くみ ○高瀬川の曳船 ○夏野 ○花ふゞき ○春の夕 ○山門 ○寺内 ○夏の朝 ○飴賣り ○山家の秋 ○養鷄 ○水汲み
○風船うり ○秋晴れ ○焚火 ○夕ぐれ ○旅かせぎ ○子守 ○川沿の家 ○山家の冬 ○小春 ○春の道 ○休み ○猿まわし ○落花 ○點燈夫 ○郊外の雪 ○秋のまひる ○旁 ○山路
○浮草や ○新頁ひ ○登山 ○熊野の春 ○ポイントメン ○劇 ○田舍の小徑 ○閑日の漁夫 ○道者 ○白百合 ○石屋 ○少女 ○春 ○おどり ○冬の月 ○擊劍 ○おかみさん ○汐干
○社頭 ○一休み ○門つけ ○野 ○左官 ○田舍 ○學生 ○時代の女 ○藝妓 ○裏口 ○花見 ○若葉 ○追羽子

以上六十四葉

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂（振替口座一九五五）

賣捌 東京堂○北隆館○上田屋
東海堂○良明堂○至誠堂

（三ノ三）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第三回新學期開始

●入會の最好機は來れり

拾月卅日迄は入會金免除の特典あり●

▲自宅に在りて業務の傍、高等女學校程度の學術技藝を修得せんと欲するものは速に本會に入れ、本會發行の實用女學講義錄は前記學課の外に我國家庭の事情に參酌して女子必須の諸學藝を遺憾なく講究せしむ。

實用女學講義錄

本會は中學講義錄を發行して成巧せる深き經驗を基礎として新式の教授法により丁寧懇切に教授す、小學校卒業位の學力あらば何人にても容易に了解することを得べし

▲會長　尾崎行雄氏自ら會務を監督し取扱親切也
▲講師　斯道に經驗深き專門大家拾數氏之に當る
▲組織　高女課程以外家政技藝等を加へ實用的也
▲講義　言文一致書入れ假名付きにて誰にも判る
▲質問　不明の處は何回にても自由に質問を許す
▲雜誌　會員には講義錄の外機關雜誌を毎月進呈
▲會員　の詩歌文章俳句は添削して雜誌に掲載す
▲會費　全學期の會費は都合半月の學費にて足る
▲入會　何時入會するも講義錄は第一號より送る
▲章票　會員には會員章、修業證、卒業證を送る
▲特典　此際至急入會者には入會金を免除すべし

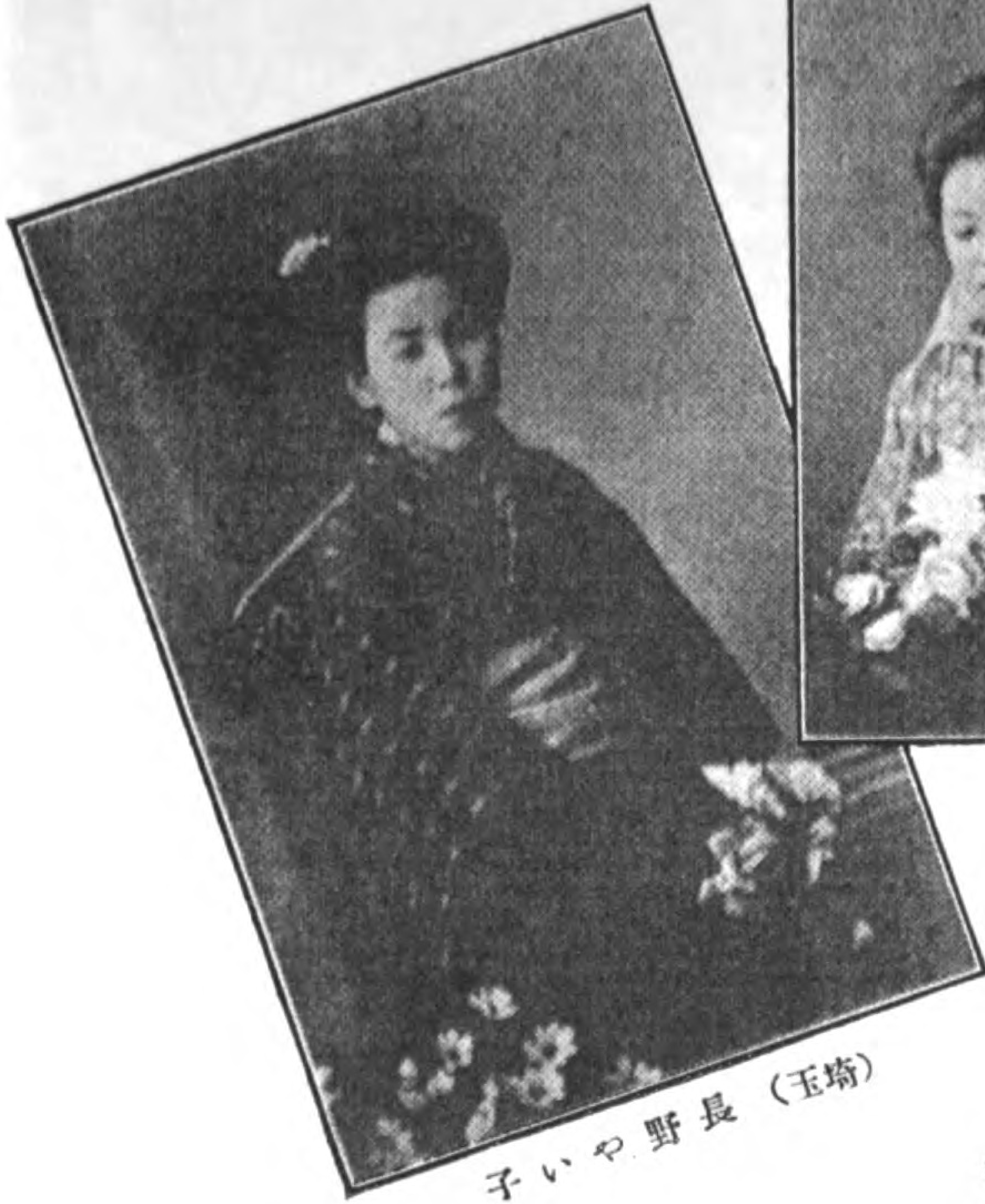
●見本つき規則書 申込次第 無料進呈

講義錄第一號は拾月一日發行す●

東京神田區駿河臺
大日本國民中學會女學部
振替東京四二〇〇番　電話本局（三〇〇四番 三七〇〇七番）

（ほノ四）

清楚



（埼玉）長野やい子



（長野）
中峯蝶子
丸山清子



（東京）末吉文子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



農婦

（加藤菊子寄）



笈瀬川の雨



（名古屋佐野某寄）

庄内川の暮色

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥を服し東京市内有名大家諸先生の診斷服藥し猶は横濱獨逸病院長(ドクトル)の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々喀血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく骸骨同樣に成り最早此上は致方無之只死を待つの外なし然るに私は病中臥褥の内と雖ども常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尚續て服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に望みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其實を告げ試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ内務省の御檢査を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚は淺きにも不拘内地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會**及び**印度パタビアヒイアエーテス社**等、續々輸出す專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらじ天壽を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

藥價…七日分貳圓●十四日分四圓●廿一日分五圓●卅五日分七圓五十錢○七十日分十四圓遞送料十錢●爲替局名は大森局宛取組の事

主治効能●肺結核●肺炎●氣管支加答兒●肋膜炎●肺炎加答兒●たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり

用法及び詳細は本能書にあり但し本舖へ直接御注文の時は病状の模樣を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舖 川名助次郎（電話大森六九番）

東京神田區花房町二番地 山崎帝國堂　東京淺草並木 遠山藥店
横濱吉田町二丁目都橋際 永井永進堂　東京銀座一丁目 佐々木玄兵衛
東京神田區橋本町二丁目 福井甚藏　靜岡市七間町 市川商店
北海道函館辨天町 國領平七　埼玉縣熊ヶ谷町 櫛田金造

肺治散特約店
東京銀座二丁目 岸田吟香　東京銀座三丁目 松澤八右衛門　東京神田區鍛治町 大木合名會社　東京日本橋通 中田清兵衛
東京日本橋區本石町 守谷萬次郎　東京日本橋區瀬戸物町 玉置金八　東京日本橋區本町 大橋博愛堂　東京日本橋通 大野傳兵衛支店
東京兩國米澤町角 吉田安五郎　東京日本橋區上槇町 安川晃榮堂　東京兩國米澤町 大木口哲本店　大阪堺筋伏見町 谷回春堂
大阪西横堀舟町橋西詰 賣藥卸賣株式會社　越後國長岡市 藤井卯吉　長野市大門町 小林傳兵衛
馬關西南部町 賣藥會社　相模横須賀汐入町 茶本商店

（全國到る處の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舖へ申越次第特約す）

女子文壇 第三増刊

短篇小說

八月十五日發兌

頁數二百三十
當選作家寫眞

定價貳拾錢 郵税一錢五厘

好評嘖々

▲奉公人……島崎藤村作

▲水死……森田草平作

懸賞傑作

●破疊……秋葉清子

●女客……加藤貞子

●町の出水……赤崎愛子

●桃代……佐藤増子

●朝顔……吉田駒子

其他美文、詩歌如例滿載豊富

發兌元 東京京橋大鋸町 女子文壇社

全國到る處の雜誌書店にて取次販賣す

懷姙避姙自由自在器

子のできる器及子のできない器

(▲兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自療器)

本器は産科婦人科日東病院長醫學得業士齋藤乙吉先生の發明に係る最も簡易安全にして毫も無害なる懷姙避姙自由自在器兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自宅治療器也即ち本器により膣內へ姙孕を補助する藥劑を入るる時は人工的に**懷姙**することを得らるゝ故に子無き人は用ひて目的を遂ぐべく又本器により膣內へ姙孕素を消失する藥劑を入れて用ゆる時は決して姙娠せず子澤山の婦人は夫にも秘密にて**避姙**の目的を達し得らるゝ所なり多年實驗上確證する所なり且つ本器へ病毒豫防藥を入れて用ゆる時は**梅毒淋病**其他の病毒を傳染する患なし又慢性子宮內膜炎膣炎等の**子宮諸病**患者は本器へ是等治療藥液を入れて用ゆれば自宅にて容易に**自身治療**することを得るものなり本器は彼のルーデサック及子宮サックの如き不快の念なく天然の感觸を鋭敏ならしむる世界唯一の理想的斬新發明品にて一度買へば拾數年間保存し得る婦人衛生上必ず携ふべき要用の良器なり。但し詳細なる說明書及使用法幷に應用諸藥劑處方書は添付す。(正價)ニッケル製壹圓拾五錢。純銀特別製參圓拾五錢。現品に添附し小包郵便密封にて送付す。郵券代用貳割増し。着金即刻送品す。

醫學得業士(齋藤乙吉先生發明)

實用新案登錄特許

アトシア

atocia,

(膣內插入小器具)

世界一手專賣元

東京市神田區五軒町十九番地(電話番號下谷五百四十六番)

日新館藥房

好評嘖々

前半期の女子文壇臨時増刊一、二

新美文

全一册美裝
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

口繪 入選作家十二人寫眞及石版彩色樂聲三隅筆密刷

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百様の觀察は讀者をして送迎に遑なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學はんとする者には無双の寶典たるべし

▲附錄 名家新作

◎小寒日記……薄田泣菫
◎褎の家……吉江孤雁
◎憧憬……小川未明
◎一轉機……高須梅渓
◎女床屋……兒玉花外
◎拾て犬……岡田八千代
◎火葉……澤村胡夷

女子名文 新作家



口繪 原色名畫頗鮮麗 入選作者十七人 寫眞光澤紙密刷

定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

若き女子が大懸賞應募の小說、美文、詩歌俳の文藝を興味ある新式編輯法にて統一せるもの。別に日課表あり登載各自の住所年齡家庭等作物と對照し其人物を一目瞭然たらしむ。

▲附錄 閨秀作家短篇小說

○闇の夜……服部貞子
○敗者……加藤菊子
○火事……永代美千代
○氣まぐれ者……太田樂子
○新粧……尾島菊子
○六月……山田くにえ
○姉……故田中久子

各紙數大判二百四十頁價格は最廉無比

東京市京橋區大鋸町十二番地 女子文壇社出版 振替口座東京第壹七貳九番 賣捌全國書店

最寄書店になくば出版元へ申込を乞ふ



妾事小供の時より薄毛にて種々の薬を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇薬を是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし
三錢郵券を添へ御照會あれ
東京市京橋區越前堀　河村愛子

●診察時間朝七時より夜九時迄●
梅毒りん病ぢ疾わきが生殖器病神經衰弱症
●專門醫擔任診療●
東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横兩國橋ゟ三丁
中央醫院

生殖器病神經衰弱
記憶力減衰陰萎遺精早漏夢精發育不充分症等
梅毒・りん病・わきが・ぢ
横根　下疳　皮膚諸病
▲病状を記し郵券六錢封送せば療養書と如何なる重症も誓て全治し得る特効新薬の説明書を送る
東京市淺草區瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横
中央薬院

ちゞれもくせも
もはへうけあい
一大奇法
本法は女髪結師安部歌子女史の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり照會者は往復はがきにて申込あれ
東京麹町區三番町六十七　小林濟世園

代々家傳の妙薬
經通丸
月やく薬
調劑元
東京市丸の内
本劑は代々家傳の妙薬にて如何なる難澁の月經滯りも胃腸子宮等を痛めず安々と通じ輕症なるは其夜にあろこと請合也他薬を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ定價廿五錢五十錢一圓特製二圓但小包送を望まるゝ方は八錢を要す
有樂町二ノ三
江戸屋

色白くなる新液
色黒き人が用ゆれば次第々々に白色艶美の奇効あり試みんとせば郵券二錢送れ効能書を送る
東京小石川區柳町　東洋堂薬院



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

最廉無比

女子文壇社編輯局選

懸賞文集 **文壇の花**

大判二百五十頁
賣價金拾錢
郵税一錢五厘

女子懸賞文集 第二

中判五百頁
賣價金貳拾錢
郵税六錢

懸賞文集 **文壇の光**

大判二百四十頁
賣價金拾錢
郵税一錢五厘

世に作文書多しと雖も、妙齢花の如き少女の手に成りし生きたる作文作歌の良書は此等を推して其優なるものとす、女子平生の心掛として優しき文章を學ばんと欲する者は來りて本書に親しめ、新時代の新文藝に接觸せんと欲するものも亦本書を繙け、此の如く廉價に此の如く容易に、作文作歌の道に入るの法は殆んど他になし、敢て之を提供す

東京市京橋區大鋸町十二番地　女子文壇社出版　振替口座東京第壹七貳八番　賣捌全國書店

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

國學院學士　小森松風先生編著

東宮侍講本居豐穎先生題詠
文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題歌

女子美文作法

全一冊大判二百卅頁　賣價金貳拾錢　郵税四錢

美文の作り方を最も明瞭に解説し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば、文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

理學博士坪井正五郎先生序文
山田美妙先生序文

女子言文一致文範

全一冊大判二百卅頁　賣價金貳拾錢　郵税四錢

現代の文章は殆んど言文一致に限られんとす、言文一致體の文章を學ばずして現代の文章は作り難し、此書最も選擇に注意したれば言文一致の文範書として殆んど完全せり

報知新聞記者
中村木公君著

實地精査
女子遊學便覽

女學校長寫眞肖像入
賣價拾五錢　郵税四錢

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸孃も之を讀め、一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

出版元　東京市京橋大鋸町　女子文壇社　（振替口座東京第七九壹貳番）

賣捌　全國書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇 第四増刊 大懸賞募集

家庭日記

日記は其日〳〵の出來事を書くものですが、只心覺えに書いて置くものと、少し氣を付けて書くのと二通りあります、今回本誌第四増刊として『家庭日記』を募集いたしますから、之を幸ひとして少し氣を付けた日記を書いて頂きたい、家庭日記と言ひましても、廣い意味ですから、必ず家庭的に書かねばならぬと云ふ理由はないので、皆さんが常住座臥の間から材料を見出して新しい考へ、新しい意味、新しい感興さへ喚起せば好いのです、寄宿舍に居らした處がそれを一つの家庭と見做して差支えないのです、要するに皆さんの生活に伴ふて起る出來事と其出來事に就いて何等かの心持とを明白に、誠實に、而して全力を擧げて書いて頂けば澤山です、日記以外に短篇小說、美文、新論文、書簡文、詩、和歌、俳句等も例の如く募集いたしますから、何うか今より心掛けて好い作を寄稿して下さい。

▲懸賞募集項目と賞金額

日記
一等 正金拾五圓
二等 正金拾圓
三等 正金五圓
四等 正金四圓
五等 正金參圓
自六等至十等 各正金貳圓
▲原稿は二十四字詰百行限り振假名付ける事

小說
天 金七圓。人 金貳圓。
地 金五圓。(物品贈呈)
▲原稿は二十四字詰百行限振假名付ける事

美文○論文○書簡文
新體詩○和歌○俳句
天 金五圓。人 金壹圓。
地 金貳圓。(物品贈呈)
(▲美文、論文、書簡文は廿四字五十行限。詩は長短隨意假名付。和歌俳句は十首迄を限る)

圖畫(三寸の二寸大さにて薄紙を用ふ) 自一等至十等 圖書切符贈呈

▲投稿締切九月三十日
發表十一月十五日

投稿心得
▲投稿の封筒には「家庭日記原稿」と書き添えること▲投稿は女子に限るべし▲紙上には匿名差支なけれど原稿の片端へ住所本名を明記すべし▲原稿は明瞭に認むべし▲はがきに書したるものは一切採用せず▲入賞者には前以て通知する筈なれば其時は寫眞を送られたし▲賞金品は作物發表の翌月末に贈呈

募集發行元 東京市京橋區大鋸町 女子文壇社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

十月一日第二號發刊

美麗口繪數葉 挿畫澤山

少女は天下一品 (好評)

少女



(好評) 面白い雜誌です

定價 一冊拾錢 郵税壹錢 ○半年分六拾三錢 郵税とも ○壹年分壹圓貳拾錢

●雪達磨斬り(三色刷 古洞畫)……佐野天聲
▲きのこの家庭…都園女
▲兎の餅つき…宮崎與平
▲リボンの話…きく女
▲カタツムリ…竹久夢二

●七十三人の兄弟……磯萍水
▲名人の繪…澤村文學士
▲みそ萩…永代美知代

●胡蝶の墓……河井醉茗
▲人間の始…羊飼
▲面白い俳句…記者

東京 京橋區大鋸町 **女子文壇社發行** (振替口座東京弐七貳九番)

特約大賣捌所 東京堂 至誠堂 東海堂 上田屋 北隆館 良明堂 外取次全國雜誌店

●五十年前の武家のお孃様……塚原澁柿
▲叱る人を持つてゐますか……中村文學士

●忘れな草……水野葉舟
▲理學遊戲 鏡中の魔…千駄木山人
▲おうたいなさい ▲春坊の指

●少女文壇 ◎文章◎日記◎日用文◎和歌◎俳句◎詩◎筆蹟◎圖畫◎笑話◎工夫畫◎少女料理◎少女實驗談◎世事問答◎少女くらぶ……益々富豐
▲英語の手ほどき城西隱士 ▲少女ノート ▲新聞
▲初號より取揃へ御注文に應ず速に本社へ申込あれ



第五年第十三號

明治四十二年十月一日發行

花なる人の
　こひしとて
月に泣いたは
　夢なるもの
たて綻びし
　ころも手に
涙の痕の
　しるくとも
うき世にあさき
　我なれば
君もさのみは
　とがめじ
——花なる人の
　戀しとて
月に泣いたは
　夢なるもの——
つらけれど、紅葉
　綾なす押葉ろの
籠に今は
　歸らうよ
破れ太皷は
　叩けど鳴らぬ
落る涙を
　知るや君

横瀨夜雨氏

『花守』より

土さむし霜を待つなる
小さき葉の昨日もそよ
ぎ今日もそよぎぬ
羽垂れて鳥がゆくなる
夕空に涙せぬまで心す
さびぬ
たへがたき心の憂ひ秋
風にゆらるる花をひと
り見るかな
燈火の油も今し盡きぬ
べし殘るわがよのなが
ながしさに

尾上柴舟氏

『永日』より

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

若き婦人の根本修養

羽仁もと子



第十一　愛情の純潔を全ふすべし

結婚は嚴かなる人生の義務

これまでに記しました程の修養をなし、而して普通の健康を有する婦人でありましたならば、いつでも結婚することが出來ます。結婚することが出來るといふだけでなく、他に正當にして充分なる理由があるのでなければ、男も女も出來るだけの用意を以て、よき結婚をなすことは、一の嚴かなる人生の義務であります。

昔は一般に主として家のために結婚するやうに考へられて居りましたが、近來は家のために娶る妻でもなければ、親のために貰ふ婿でもないといふやうなことを申して結婚は恰も自分の都合、自分の勝手であるといふやうに考へる人々が多くなりました。けれども家のために娶るといふ考に、間違ひのあると同じ様に、

自分一己の都合のために勝手のために結婚するといふ考も、また間違つてゐると思ひます。さうして後者の間違ひは、前者の間違の、やゝ上品なるに比べて、甚だ無責任なる間違ひ方だと思ひます。

欠くべからざる二大要件

一の小なる事をするにしても、斯う〳〵するのは、自分のために都合がよいといふとばかりを考へて、それが他人にどんな影響を及ぼさうとも頓着せぬ人がありましたならば、何人もその無責任なる行爲を片腹痛く思ふてありませう。一人の人の結婚の人世に及ぼす影響は大いなるものであります。殊にその子孫の直接に受くべき幸不幸に至つては、實に思ひの外なるものであります。男も女も唯自分の都合勝手ばかりを本位として結婚するといふやうな無責任なることは、いづれの世に於ても、決して許さるべきものではないと思ひます、男も女もその結婚は、勿論他人の意志によりて支配せらるべきものでなく、各自の所信によつてなすべきことではありますが、自分の彼人と結婚することはよきことであるといふ、所信の基礎となるべきものは、唯に互の愛情のみでは、不充分で御座います。即ち同時に彼の人と結婚することは未來の子孫のために幸福であるといふ、充分なる自信を持ち得ることが大切であります。

私は相互の眞正なる愛情とまた相互にその結婚は子孫のために確かに幸福なるものであるといふ。自信とこの二つのとを以て欠くべからざる結婚の二大要件であると思ひます。

愛情の純潔と結婚

結婚者の生涯を最も幸福にするものは、相互の純潔無垢なる愛情であります。

見合ひといふやうなかたばかりの紹介をうけるか、さもない人は、殆ど顏も見知らぬ程の相手と、吉か凶か本人同士は恰も神籤でも引くやうな工合に、目をねぶつて結婚した昔の方がなまじ、少しは知り合つて結

婦するやうになつた今日よりも、却て幸福な結婚の多いやうであつたのは武士の家庭などにありては、婦人は勿論男子でも、戀愛といふことに就て、餘程愼み深かつたゝめと、一つには婦人の心に、貞婦は二夫に見えじと、結婚といふものを、人生の離すべからざる結び目であると思ふことが、充分に眞面目であつたからであらうと思ひます。

今の或種類の若き男女の如く、恰も愛人を有することは、一の誇りでもあるやうに、わが愛情の動くがまゝに、或は甲と或は乙と、屢々不謹愼なる戀愛に陷るやうなことがありますと、純潔なる處女の感情は、そのたび毎に荒み行き、結婚の後も眞實に夫を信じて、これを熱愛するといふやうなことが出來なくなります、結婚したる相互のために、これよりも不幸なことはないと思ひます。

若き方々は、その結婚の日の來るまで、己れの愛情を最も純潔に保護することをつとめねばなりません。

婦人の生命、その魂

婦人の與へられたるものゝ中に於て、愛情こそ、その最も貴きものゝ中の貴きもの、美くしきものゝ中の美くしきものであります、即ち愛情は婦人の生命、その魂で御座います、輕卒にわが魂を他人の手に委ねるやうなことをするのは、婦人の生涯の恥辱であります。

意中の人をもつてゐるといふことは、誇るべきことどころではなく、却て容易に愛せぬことこそ、處女の價値であります。いまだ弱年の婦人にして、かゝることのあるといふのは、即ちたやすくわが大切なる愛情を他人に捧ぐる證據であつて、甚だしき不名譽で御座います。よしその相手とする人の、自分に對する愛情も眞實に深きものであり、またその人柄に於ても尊敬すべきものがあるとしても、互の思想も互の趣味も、將來に於てどのやうに變化するかも知れぬ間に、輕々しくその愛を打あけあふことは、深く己が感情の神聖を重んじその純潔を誇りとする所の男女のせぬことであ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るからです。況んや相手とする男子の人格も高からず假令多くの男子を知らざる自分には立派なるものに見えても、己れに對する愛情も眞面目でなかつた場合にはそのやうなる男子に、己が魂ともいふべき愛情を捧げたる、婦人の恥は何程でありませうか。

　世間を知らざる若き娘などには、容易に男子の人柄及びその己れに對する愛情の眞僞などは、分らぬものでありますゆゑ、假令己が愛の動かさるることがありましてもつとめて、色に現はさず後に至つてその人の人柄の立派なものでないとが分つても、あの人はあの樣な男子を愛してゐたのだと他人に笑はれ、或は人知れず我とわが心に愧づることのないやうにしたいと思ひます。

異性の友に對して

一體若き自分の心に、他に對する愛情の動いた時に直にこれを重大なることに考へて、われとわが心を熱せしむること、及び他人の自分に對する動作や仕打にその愛情を認むべきことのあるやうな場合に、直にその人が本當に自分を愛してゐるものと思ふやうなことは、最も注意して慎まねばならぬことで御座います。

　若き男女の間には、趣味や人柄のあまりに不釣合なる仲でない限り、自分にもまた他人にも、多少他の感情を引きつける力のあるものです。殊にその容貌ものごしに、またはその心立に、少しでも優れたる特色を持つてゐる男女は、他の感情を引きつけることの一層に深いもので御座いますけれども、久しきにわたつて飽きも飽かれもせぬといふやうな愛情の要素となるべき相互の資格は、なか〳〵に複雑なものであります。甲の男子ばかりを見てゐる人は、その男らしき態度を好ましきものに思つてゐても、また親切な乙の男子に接する時にはその優しさに何よりの價値があるやうに思ふこともあるといふやうな風に、男子も女子も、樣々なる異性の友の、樣々なる特色に、その時々の心を動かすものでありますゆゑ、相互にそれらのことを戀愛などゝ大業なるものに考へることは、非常に

輕卒なることとであります。

かゝる種類の感情を抱くことのあつた時には、成るべく輕く淡泊に氣を持つて、日々の職分を殊に忠實につとめるやうに心掛け、自然に空想に耽る餘裕を持たぬやうにしてゐると、一時の感情はいつしか過ぎ去つて仕舞ひます。

處女の墮落、愛情の安賣

或る熱心なる女子教育者の話しましたことに、「私はこの誘惑の多い時代には若い娘たちにもう少し確乎して貰ふことが出來ないのかと齒搔く思ふことが度度あります。調べて見るといふと、その戀愛に陷る動機などでも、實に下らぬものが澤山あります。例へば學校の歸り途に、下駄の緒がきれたので困つてゐると、通り合せた一人の學生の、親切にしてくれたが、身にしみて嬉しかつたとか、口惜しいことがあつて泣ゐて居ると、從兄が來て慰めてくれるとか他愛もないことなのです。」

その外これに類する樣々のことがありました。かういふことが、果して教育を受けたる娘の中にもあるとすれば、實に驚くの外はありません。途上に於て漫りに男子の好意を受けること、男子の目につく樣泣いてゐる事などの、嗜みなき業であるといふことは、姑く措いて、途上の人の好意一言の慰めに、直に愛を以つて酬いるなどとは、愛情の安賣も實に極まれりといふべきであります、若しも今日の若き男女の風俗がみだれかけてゐるならば、一方にくだらぬ男子があると共に、また他の一方には、かゝる娘の居ることとてありませう、若き人の墮落とは必ずしもより以上に進みたる罪惡を犯したる男女にもあてはむべき言葉ではありません、以上の如き愛情の安賣は、即ち處女の墮落であります。深窓の中にも、嚴めしき女學校の中にも、この種の婦人はないでせうか。私はこの愛する若き婦人の、一人も殘らず、謹みの德に於てやさしく、純潔の誇りによつて輝くやうにありたいと思ひます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



月三ツ

志賀矧川

五月七日夜の月（陰暦）

従僕共は梱包を解きて予等の寝臺を作くる、寝臺の上に毛布を敷きて除蟲菊の粉を振りかける、日本の人夫は小屋掛をする、木の皮を剝ぎて屋根を作くる、テントを張る、露人の馬夫は、明日早天出發の用にと其の車輪に油を注ぐ、小銃を發して遠方まで秣食ひに分け入りたる馬を呼ぶ、馬は五頭七頭と馳せ來る、途中にて嚙み合ふ、引き分けんとするもイツカな止めぬ、ヒイーン〳〵と高く叫ぶ、遂には喧嘩せる馬の主人と主人との喧嘩となる、相互に罵り合ふ、引き分けんとするも露人同志にて聽かぬ、日本の人夫が仲に入りて止める、すると其の露人は日本語雜りの片言にて大聲を揚げ事情を訴へる、對手は一層大なる聲を振り揚げて訴へる。かかる間に馬は益々馳せ集つて來る、水にて洗つて遣る、毛を剔いて遣る、馬の中にも柔和のもある、荒れびれるもある、子駒を連れたるものもある。露人の馬夫共は其の受負人二名（一名は露人、一名は

カフガス人）と大聲にて談判して居る。受負人は日本樺太境界劃定委員、本部に來り、馬夫共が徒黨を組みて强請する故に、明朝は午前四時に出發し、同夕は是非デレベンスコエまで行進して呉れと云ふ、日本本部にては今日僅か四里半の行程すら汝等の荷馬車に落伍者多く、未だ未着のものあれば、明夕はデレベンスコエまでは行くべからず、其の此方なる下アルムダンに宿泊すべしと云ふ、受負人は、然らば未着の八輛を出迎ひに行き必ず伴ひ來るべければ、此の請求を是非容れられたしと述べ、やがて小銃を肩にして車を馳せて出掛けんとする、中村通譯も本部より同行を命ぜられ拳銃を取りて急ぎ出て行く、日本兵二名も護衛の爲め同行を命ぜらるゝ、すると砂烟が後方より颺つた、落伍の荷馬車は到着せりと叫ばれた。露人の受請人は最早出迎ひに行く必要なしと、復たもや日本本部に來り明夕はデレベンスコエまで行進さして呉れよと請求する、日本本部にては落伍の荷馬車は合計八輛である、唯今到着せしは內六輛である、未だ二輛到着せぬ、かく既に夜に入りても二輛の未着ある情況にては、明夕はデレベンスコエまで行進すべからずと云ふ、受負人は何卒と哀請する、本部にては實際より見て許可が出來ぬと云ふ、然らば露人の馬夫共は途中にて一揆を起すと云ふ、本部の外にては露人の馬夫共はワイ／＼騷いて居る、成程一揆を起し兼ねまじき勢も見える、依て明夕は落伍者なきことを誓約せしめ、遂に其の請求を容るゝことにした。受負人との談判が了ると、宿泊處の露人には、日本委員一行の馬が靑草を悉皆食つて了ひ、向後非常に難澁するとて二十留を請求に來た、是は無理ならぬ請求てはある、然りとて、二十留とは法外なりと答ふ、露人は哀請する、元來簡單なる答辯にも複雜に答へ、一寸したることもクド／＼敷敍ぶるは露人一般の癖であるが、殊に哀請などにかけては最もクド／＼敷口說く、本部の主計は十五留遣りて追ひ拂つた。さて繁雜匆忙も漸く了りたれば、家僕長吉にアルコワにて獲たる鱒を炙らしめ、札幌ビールを酌み、一醉陶然たる儘、外を窺へば、大なる活動の後の反動と

て、五百有餘の人馬は疲れ果てゝ早く既に熟睡し、際前までの大活動は頓に失せ、終日の紛々騷々、囂々、喧々も掻き消す如く、曾々天上には鰯雲列りて陰暦五月七日の月は皎々と冴え渡り、シコタン松の海を照らして、銀濤萬頃、其上よりエングイス山の殘雪の反映する處、天地蕭瑟、萬籟寂然たる折柄、地上にては、唯だ日本金櫃護衞兵二名が非常を警戒して嚴肅不動宛から死者の如く直立するを見るのみてある。



七月十五日夜の月（陰暦）

支笏湖は、面積四方里九、雨面積約八方哩四二、海拔二九六米突、北海道に於ける大湖の一てある。湖上にカパチェッポ魚（Onochyohus ner ka）孵化用の一舟横はれることゝて、吉川工學士と之れを浮べて湖上に出てた。湖水は晶明澄徹、底を窺へば、波動の結果に依り、輕き火山灰と重き火山礫とは交る〳〵層を作り、火山灰は白く、火山礫は淡墨色に

火山礫の中央には更に重き火山石累なり、純黒色を染むを以て、白色、淡墨色、純黒色と相交代し、宛がら天上なる卷積雲の湖底に映るが如き、半生未だ曾て知らざる奇觀である。湖水の狹まりて千歳川に落つる所（銚子口）に舟を繫ぎ、吉川學士が東京より携へ來りし釣竿二條を垂れ、鈎を投ずるに、忽ちにして綸に懸るものあり、竿を上ぐれば、鯇の鰓を張り口を開きて躍り來るものである。學士は十五尾を獲、予は六尾を獲た、即ち或は炙り、或は鱠にし、苫小牧驛より携ふる所の麥酒を滿酌し、舷を敲きて唐詩を放吟するに、吟聲湖邊の連山に反響し、殊に奇調を極めた會々中元の大月皎々として湖東なるキムウンモラップ、ピシュウンモラップ二嶽の間より昇るや、忽ちにして當面なるフーブシヌプリ（一、〇五七米突）は其の三角形の峰尖を水に映し、水上の三角形（山）と水中の三角形（影）と相合して長方形を作り、其左には樽前の火山（一、〇九六米突）煙を噴き來り、時々空に逆上するや、月光の透し去る處など、亦た一種の奇景である。湖西に聳ゆるは、ニナルシュトマヌプリ（一、一二五米突）である、此を超えて天際に參はるものは、白老岳、漁岳、（一、三六六米突）である、湖の東、水より起りて畸形なる峰頂を露はし、我に長揖し來るものはエニワ岳（一、四〇七米突）である、是れ二十年前、札幌の學舍にある時、其の嵐光の絕えず書窓に落ち來りたるもの、仰ぎ望みて座ろ舊知に會ふに似たり思へば、月明の夜、二十年前の舊知に會ふ、人をして恍として夢の如き感あらしむるものは非なるか。既にして夜愈々深く月益々高く、千岳萬峯悉く影を湖水に浸し、無數の鯇泳ぎ來るや、魚は山に登る如く、月光は冴え渡りて湖底に徹し、四顧物凄きまでに大平和を現はす處、誰れか知らん、四周の山岳は火山岩より組成し、當年憤恚の燄は九地に燃え、九定劫の善種善根を焚き、溶岩を雨らし、熱灰を吹き、硫煙を逆上せしめ、此湖は即ち其際に土地の陷落して起生せしものならんとは、然かも我れ今此の大平和の境に來り、塵界に遠ざかり、五障三從の女人を見るなく、茲に離垢精

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

進の湖水に浮び、茲に絕言無念の釣綸を垂れ、茲に虛明靈照の月光を仰ぎ、心鏡明かに鑑して廓然と瑩徹し、平生の愛欲、我慢、愚痴は一時に解脫し、眞空の正覺は一時に現前し來る、遂に湖畔に宿したれば、夢に入るもの復た人間の物てなかつた。

十月十六夜の月（陰曆）

土屋將軍には東鷄冠山北砲臺なる中間の敵壕を占領する故に同行すべしとて案內された。折柄、夕陽は白銀山砲臺の上に落ちんとして、眼上、眼前、眼下は一面に黃色に染まり、此の黃金世界の間を破つて時々白色に爆裂するは、我が海軍砲てある。正六時、我が陸軍攻城砲は一齊に放ち來り、今までの黃金世界も見る〳〵白化し白化して銀世界となる。六時四十二分、第二十二聯隊幾中隊の步兵は、味方の砲火に掩護されつゝ鬨の聲を揚げて突擊する。小銃の聲は萬斛の豆を熱火に煎るが如くにパチ〳〵〳〵と一時に起る。日は全く暮れ果てたるより、敵は味方の所在を照明し、これを目懸けて小銃を直射し、又た爆藥を投げ付けんとて五分間を距てゝは火箭は半空に飛びて一時に六七十顆宛の火の玉を落下する、其間に光彈をも四度放つた、光彈は地に落ちて一面に濃かなる電光狀の光とを迸發し大地は白雪を播き散らしたる如くになる、敵は又間斷なく爆藥を投げ付ける、其の綿火藥は炭素が多量なる故に朱よりも赤き光を四射する。更に又た我兵の所在を照明せんと、各色の火光を放つ、いづれも硫黃と鹽酸加里とが燃立つより此くなる色を發するのであるが、靑きは硫黃と鹽酸加里とに炭酸銅を調合し、白きは硝石を調合し、赤きはストロンチヤムを調合し、綠なるは硝酸苦土を調合し、黃きは炭酸曹達を調合したるものと思はれる。此等各色の點火は敵が今晚初めて使用したるものと思へるが、彼等は其運命の愈々切迫し來るより、所謂窮鼠の如き境遇となり、此く必死となつて我兵を防禦するものと見ゆる。各色の火の餘りに麗かなれば、予は菅生川（三州岡崎）の天王樣の御祭を見る樣てすなーと云ふと、將軍には菅生の御祭に

吉田（三州豊橋）の花火を雑ぜた様なりと答へられた。八時少前、味方は確實に目的地を占領せりとの通報に接するや、副官の中村中尉に三鞭酒を將軍に侑め、予にも侑めたれば、盃を擧げて戰勝を祝した、祝し了つて獨り山を下り行くと、頻りに名を呼ぶ者があるより、振り返へり見ると、第十一師團經理部長の上田一等主計正（五郎）である、主計正には、貴君に差上げるものがあるとて、一冊の白紙本を出されしかば、折柄差し上りたる陰曆十月十六夜の月の光に照らし見ると、男郎花、女郎花、我毛香、野菊、撫子、萩、小巣菜など三十餘種の草花を乾搾し、心盡しに二冊の卷とし、卷の末に

　武夫の踏み荒したる野末にも
　　時を得顔の秋の七草

とありたれば、予はこれを受けて實にも優しき武夫の贈り物かなと厚く謝すると、主計正には、先日來、此卷を作り、誰にぞ贈らんものと案じ居けるに、ア、此の戰勝の月の夜に君に贈つてこそ、心に殘る隈もなけれと云つた。

西行の月の歌

佐々木信綱

西行法師の家集『山家集』を見ると、その中に際立つて詠まれた題目は、月と花とである。勿論古來、殊に古今集以來の歌人にして、月と花とを多く詠まぬものはない、月と花とは古來の歌人の主なる歌題であつた。併し西行に於いては、特に多く月と花とが詠んである。而してその歌ひたるいづれも月と花とを眞にめて眞に愛し眞にあはれと感じた深い感情を歌つたものて、決して多くの歌人に見るやうな、單に昔からの思想を繰返すものとは違つてゐる。それらの歌をよむと西行が實に自然に對してまれなる熱情を持つて居た歌人てあることがわかる。西行にすぐれたる戀の歌はあるが――外の歌人の戀の歌に見るやうな熱情が、西行に於いては、これらの月と花との歌に見られる。けだ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し人間をすて人事の煩累から縁を絶つた彼も、もとは決して冷やかな人ではない。否、熱情に富んだ歌人である、彼がこの抑へがたき熱情は、こゝに自然に向つたのである。而して彼の月と花との歌を爲したのである。その爲に彼の歌には自然の美に對する深い愛を詠むとともに、よく自然の美しさを看取してよみ出でたものが多い。こゝには彼の月の歌に就て紹介しよう。

まづ彼が月の美しさをめで樂しむ餘り、殆んどこれを熱愛するといふやうな情をよんだ歌には、左の如きのがある。

うちつけに又こん秋のこよひまで月故をしくなる
命かな

いとふ世も月すむ秋に成ぬればながらへずばとお
もふなるかな

こむ世にもかゝる月をし見るべくは命を惜しむ人
なからまし

いづれも、人世を捨てた彼の心も、月の美しさに對する執着の心は斷ちがたい情を詠んだものである。

かくの如く月を愛づること深き彼である。彼が月の美しさを感ずるや、往々にしてその美にあくがるゝ餘りに、自ら忘我の境に入り、宛然月の懐に入るのである。即ちかゝる情は現はれて、

限もなき月の光にさそはれて幾雲井まで行く心そ
も

行方なく月に心のすみ／＼てはてはいかにかなら
んとすらむ

などの歌となつてゐる。

世を捨てた彼ではあるけれど、もと熱情に富める歌人の彼である。月は單に月としての美しさを感ぜしめて已まぬ。即ち月は彼に於いてはしば／＼懐古の情を寄する縁となつて、幾多の哀れふかき詠をなしてゐる。例へば、

いにしへを何につけてか思ひ出でん月さへかはる
世ならましかば

何事もかはりのみ行く世の中に同じ影にてすめる
月かな

よもすがら月こそ袖にやどりけれ昔の秋をおもひいづれば

等、いづれも自然の常住なるを、人事の變遷に對して、深い感慨を寄せたものである。更に又、

もろともにかげをならぶる人もあれや月のもりくる笹のいほりに

の歌に至つては、さすがに孤獨の寂寞に堪へかねた、人戀しさの情が詠んである。しかもその情の淡として自ら悟道の人の詠と思はれるのは、さすがに西行の歌である。また、

眺むればいなや心のくるしきにいたくな澄みそ秋のよの月

の詠に至つては、悟道と人情と、この間の煩惱がふかく現はれて殊に感が深い。

月をめて愛する心のかくの如く深き彼のことであるから、その月の美しさを觀察し又了解することに於いても、もとより尋常歌人に卓絶してゐる。從つて月の敍景の歌にも勝れたのが多い。例へば、

雲消ゆる奈智の高嶺に月たけて光をぬける瀧の白糸

清見潟沖の岩こすしら波に光をかはす秋の夜の月

秋風やあまつ雲井をはらふらん更けゆくまゝに月のさやけき

等は、いづれも月光の澄みわたつた、神々しい景色が詠んであつて、讀者の心の底まで月の光に照らされる感がある。また、

人もみぬよしなき山の末までにすむらん月のかげをこそおもへ

都にて月をあはれとおもひしは數より外のすさびなりけり

等は、山深く庵をしめて浮世をよそに吟詠した彼の面影が忍ばれる歌である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

月を見たる時

小川未明

△自分が月を見て感じたこと、記憶してゐる印象を語つて見やう。

いつてあつたか、ターナーが「古時の伊太利」といふ題ての畫を見たことがある。其に對照して、「近時の伊太利」といふのがあつた。無論着色したのてもなく、單に寫眞版の挿繪に過ぎなかつたが、其ても十分に作者の心持が覗ふことが出來た。「古時の伊太利」といふのは賑かな繁華の町を月が夢のやうに照してゐたのてある。幾層か高い莊麗の建物が犇々と空に立て罩めて河流が流れてゐる。女が橋の上に立つてゐるのだと思つた。たゞ其の氣持――穏かな月光に古の文明の町が眠つてゐる。人は美しく何れも皆な詩や歌を、管弦に合してゐるやうな――しかも今は亡びてしまつたといふ感を與へる。是に比して「近時の伊太利」はたゞ荒涼たる平原に古の城の跡が尚ほ殘つてゐる。町が僅かに一方に見えるといつたやうな趣を書いてゐる。私は其の繪を見た時の印象を思ひ起す。

△又私は月を見ると、月に對して其々感懷を述べた詩人のことを思ひ出す。其等の詩人はやはり月に對して懷舊の情を寄せた人達てある。今は寄せた涙の詩人も此の世にゐないと思ふと、古人今人の流水の如く共に去つてしまふといつた李白の言葉が思ひ出される。シエクスピアのロメオとジユリエツトの相逢ふた夜は良い月夜てある。而して月下て樂しく月を見て戀を語つたと思つた。「かゝるお月夜に……」といつた言葉が今ても耳に響くやうだ。是に較べると支那の詩人が月に對すると、大抵は悲しき涙の種となる。月を賑かな樂しいといふよりも月を淋しい、悲しいと見たものが多い。東西の詩人の異なる特質だと思ふ。

△自分にも月を賑かに思つた時代があつた。是れは幼年の時代てある。夕方、青空に圓く、淸く、澄み渡つた月を仰いて「お月樣幾つ十三七ツ」といつた。其頃

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

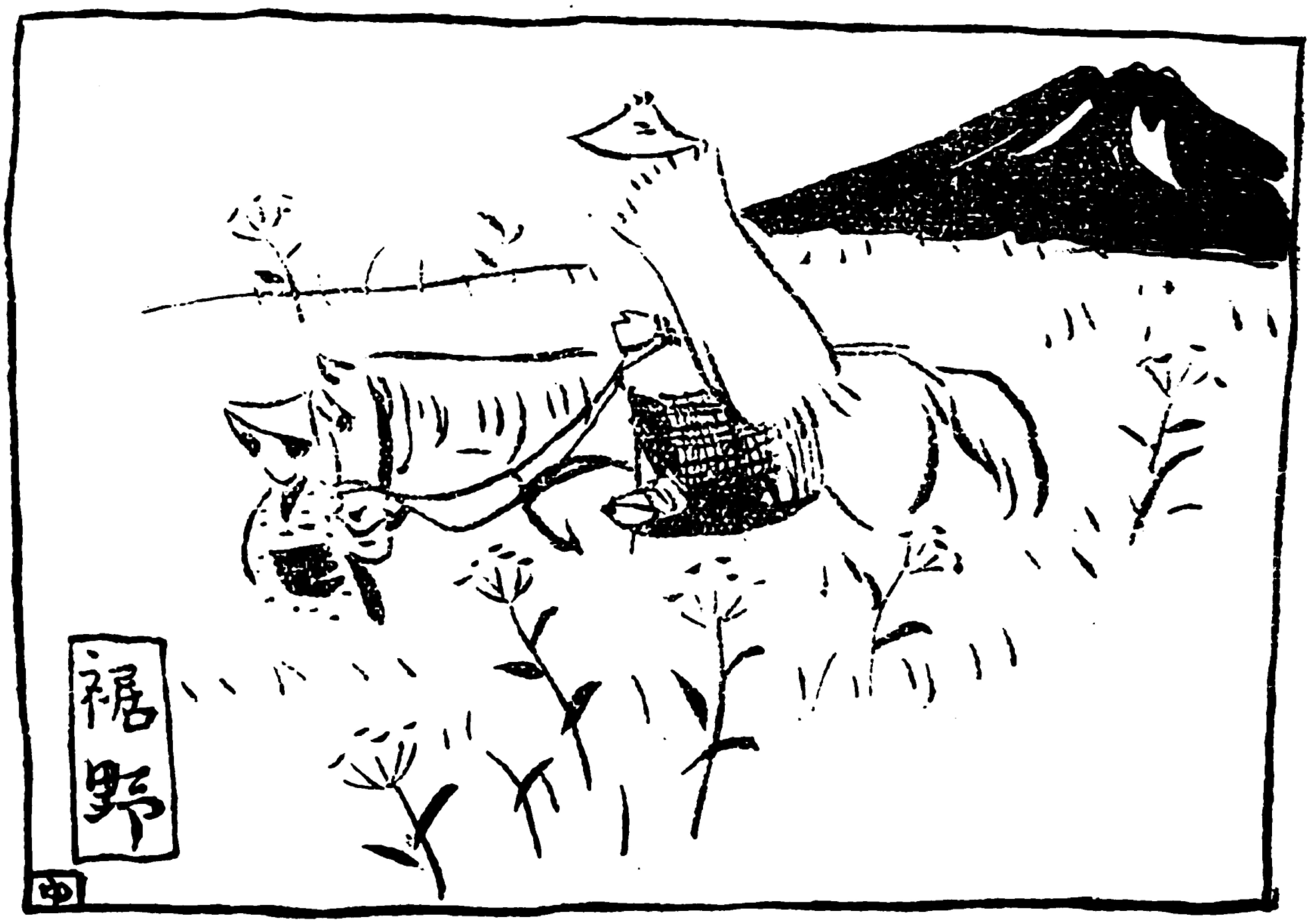
の月は、何等の曇りなく、何等の悲しみもなく、たゞ、あの月の中には兎がゐる位に思つてゐた。蝙蝠が中空に飛び、漸く西の空の紅い夕燒が薄れる頃同じ年頃の子供等と飛び廻つたものだ。戀を知り、情を解してからといふものは、もはや月は自分の眼には意味の深いものとなつたのである。

△月を女性といふのは、月が優しいからであらう。其の形が可愛らしく、其の光が怨めしく、靑白く、艷かしくも思へば思はれるからであらう。日は是に比べると男性的で、旺烈な處がある。熾な處がある。熱烈な處がある。或者は月を男性といふ。而して日を女性といふ。是もさう思へぬことはない、月には何處か冷た味がある。凄味がある。鋭い處がある。其に比して日は溫かみと明るみとすべてに充溢して浩々とした處があるから、思へば月を男性といひ、日を女性といふことが出來る。自分が英語では月を女性とし、獨逸語では月を男性の中に入れてゐるのを見て、興味を感じた。

△月光に神秘的色彩のあるは事實だ。鋭い光の中に暗が半分を占めてゐる。ロマンチシストが月を愛したのは、此の神秘的、朦朧的な處が幽玄の情趣を帶べるからであらう。フエアリーテールにも月がよく出て來る月姬といひ、月の宮居などゝいふ。月は天上の樂園だといふ意味にいつてゐる。けれど現實の樂園でない。彼の世の樂園である、死んでから行く未來の樂園である。だからやはり淋しい。やはり夢幻的のものだ。シエレーでもキイツでもウオルヅヲルスでもコリレッヂでも十九世紀初頭の靑年詩人は若やかな眼で星や、月を歌つてゐる。ボドレールにも「病める月」の一篇があつたと思ふ。流るゝ水と、靑空を旅する月とは永遠に人から同情を寄せられるものである。要するに不死不滅のシムボルとなつてゐる。

△月を一面詩的空想からいへば、かく靈的の、神秘的のものとなるが、一面科學思想から見、天文學上の智識から之を覗つたなら、一塊の遊星の死骸に過ぎないものだ。けれど、月を美なるものと思つて來た遺傳は

長へに人類の血管から去るものでない。いづれの代になつても秋風秋月に對するとか、春風花月の夜に遇へば、怨めしくも、悲しくも思はざるを得ないのであらう。一は思想の遺傳にもよるが、月世界にまだ曾つて行つた人もなければ、蒼天の無窮に懸つて、幾百萬里の彼方に實在することからして、神秘の對照となつたものといへる。自分の切に知りたいと思ふのは、未來の人は何様な感想を此後月に對して持つか知らないが、世界の始めて人類の出來た當時、地球の上には水澤が多く、深林が多くて、空氣も潤ひを帶



んで、清く、風も光りを帶び名も知らぬ百花は暸亂として咲き亂れてゐた當時、——勿論我等の有史以前、神話ではエンジエルのゐたともいふ——何様な考へを持つて此の月を見たとだらうと考へる。長髪碧眼の少女に、此のみづ〳〵しい圓い、淸らかな月はどんな思ひを齎したであらうと思ふ。

△昔、駱駝を引いて、沙漠を漂泊したヘブライ人は南極星の光芒を見て、我等の運命を主宰する神だといつて跪いて拜したそうだ。また太古、少女等はパレスタインの丘の上に篝火を焚いて、三ケ月の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

漸く大きくなる頃妾の身に幸あれと祈つたともいふ。是等は美しい詩歌でないか、野蠻時代にあつては宗敎が自然力の恐怖以外に出なかつたのは當然であつて、其處に今から回想して見て盡きぬ詩趣がある。

△私、自身の經驗からいへば、月に對する感想が年々に異つて來た。其は心持が異つて來たので、何れの思想の聞き手ともなり得る月に變りがない。人は月に對して當座の自分の心を映じて見るまでに過ぎないのだ。私が、子供の時分漢楚軍談や、日本外史を讀んだ時は、月に對しても野營の有樣とか、襲擊する斥候の有樣などを描き、彼の平民の風流人が笛を吹いて、月夜舵樓に登つて海に投じたといふことや、足柄山で新羅三郎が笙を聞いたとか、謙信が七尾灣頭で詩を吟じたといふ有樣を心に描いた。また私には漢詩を自からも作り、愛讀した時代がある。其の頃にあつては、靑天月あつてより人生幾何とか、涼秋友を送つて、蕭關の道を越ゆれは、北風に悉く天山の草は枯れて、月は崑崙山の南に傾いたとか、一片の月に長安軒を並べる萬戶の家では砧を打つてゐるとかいふやうな、詠嘆感慨に趣味を持つて月を見ると、譯もなく厭世的に觀じてしまつたものだ、西詩を讀むに至つて、始めて別趣味の感想を月に抱いた迄は、重に厭世的な考しか浮ばなかつたのである。

△都にあること多年、自分の境遇にも變遷はあつた。曾つて、信州の山中で、夏の月を溪畔に立つて見た時の感想は、今から見れば塵埃の氣のない、しかし、隱れた仙人の考へじみたものであつたが、軒を並べた狹い路次で、三味線の音の洩れる時、彼方の物干竿の上にかゝつた月は決して凄みのある、冷朧雪の如しとは思はれなかつた。

要するに、自然は大きい、而して月には獨特の感想といふものがあるのでない。たゞ人生の憂や、喜びを勝手に其に映じて見られるものである。喜べば月は喜び泣けば月も泣く、微笑めば月も微笑み、涙ぐめば月も涙ぐむ。

△たゞ一言自分は、今は月に對してかういふ感を抱い

てゐる。

「人の一生は荒涼たるものだ。此身は何のために生きてゐるのだやら分らない。格別生存に興味もなければまた強いて自殺したくもない此の月にも別段に若やかな生命が宿つてゐるとも思はれない。」と思つてゐる。

（九月十日）

秋の水なかの島なるおん寺の時鐘うちぬ月のぼる時

月の夜をさそへど出てずこほろぎを待つといふなるとなり人かな

高き屋にのぼる月夜のはだゝむみ髮の上より羅をさらに著ぬ

背白し寒しつめたしもち月の夜天に似たるしら菊の花

おほらかに黒き背見せて勇魚ゆく上總の海のあかつき月夜

月の夜や水立も草の花もなし水をたゝへて馬だらひを置く

月ありぬ辻にたまりし夜のかぜにぬけ毛の舞へるさびしき路に

晶子女史の集より

中流以下の女の働らき

山路愛山

私は暑中三十日ばかり上總の長者町で送りました、其邊は一體よく女の稼ぐ處で、方々近在に市が立つ、或は一宮では幾日、茢谷に幾日、大原に幾日と云つた樣にある時にも、いつも女が物品を持て出る、遠方は五六里も離れた處からも重い荷を擔いて此市に出るのである。其れて出る女と云ふのが貧乏人かと云ふのに決してさうては無い、中には地主や金持の家からも出るのである、女の働くのは市のみならず、家に在つて耕作する時ても、女の方が餘程よく働くとになつて居るのである。

私は或時其邊の田舍を歩るいて、或る茶店に寄つたが、其處の婆さんが、「お前何しに這んな處へ來て居る」と問うたから『海水浴に來て居る』と答へると『お前一人てか』と云ふ『イヽヤ家内中東京から來て居るのだ』と云ふと『それはなか〳〵金がかゝるべエ』なぞと話しかけて、『お前が獨りて働くのぢや大變だ、俺の方ては女が稼いて男を喰はすのだからなあ』と云つた。女が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

稼ぐのは此處ばかりで無く、越後あたりも同樣で、新潟邊では『喰はせる事が出來ないならば亭主を持つな』などと云ふ事だ、まるで此邊と反對の考へである。

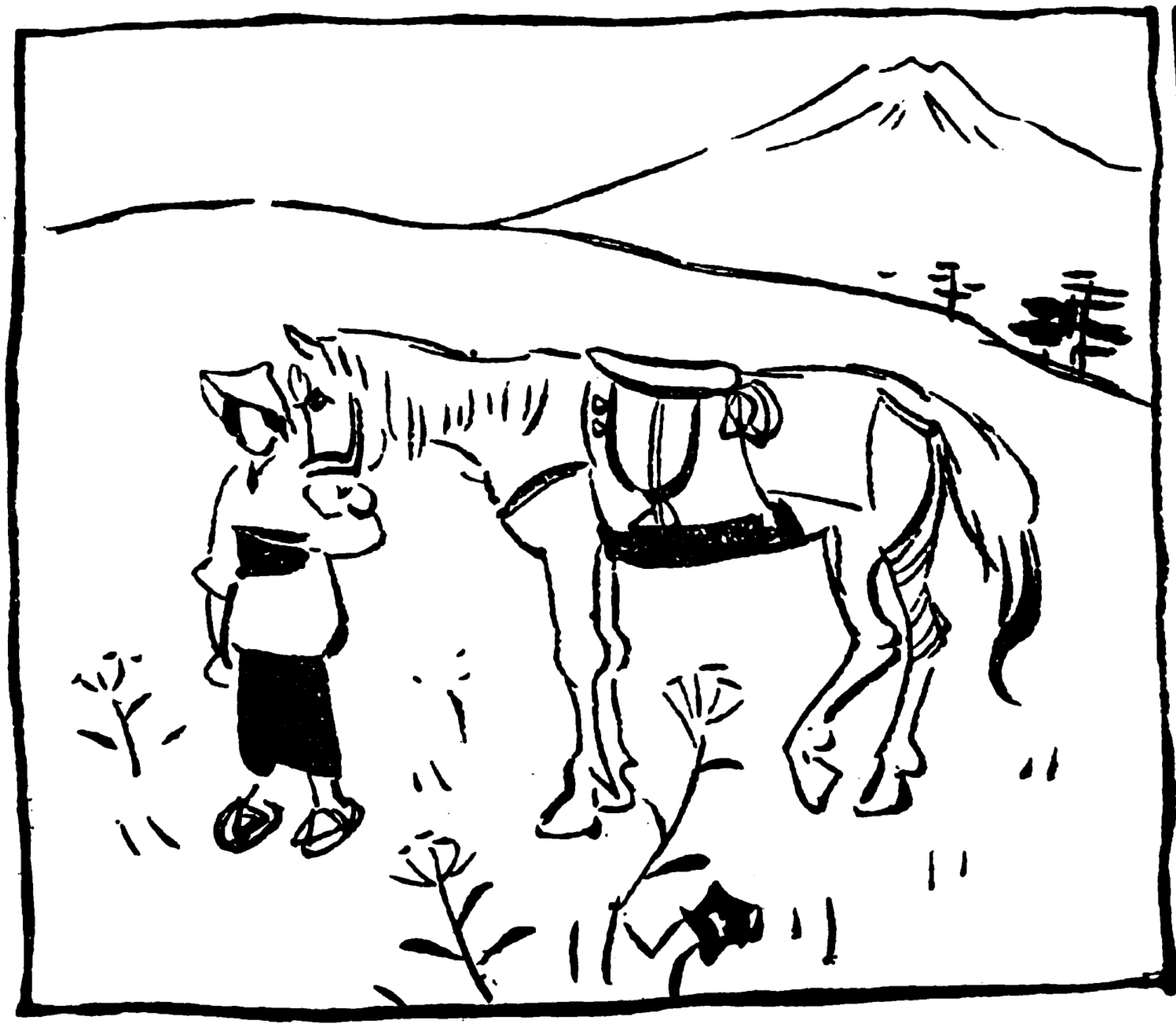
しかし、一般日本の民情をよく考へる時には、上流の方では如何にも男が女を養ふと云ふ事になつて居るが、中流以下に在ては決して左樣では無い。女が男を養ふとは云へないまでも、事實夫婦共稼位の處には有るので、昔し封建時代にあつた樣な、儒教主義で固められた、温しい一圖の婦人を中流以下の階級に於いて、見出す事は出來ない、家庭の事は其權力が細君に存して居て、なか〱亭主の獨斷は行はれて居ないのである、是れは實に面白い事であつて、いろ〱議論だの偏見だのを去つて、其れら根本の道德を看來れば、是れは學問をやつた者が、いろ〱の事を搆へて女を壓倒したものである、其れであるから彼の女大學的の道德が日本の婦人を支配して居るものとは決して見られない、男女は同權で、或る一面に於いては確かに女が權力を有して居るのである。

啻にそれのみならず將來に於いては學問ある者、教育ある者が出來て、勢ひ女權が擴張する、處で女子の職業と云ふものが社會に出來る、かの女判任官など云ふものが出來た。しかしながら是れは何も女子の爲すべき職業が新らしく供給されたわけでなく、唯需要が殖えたので、更らに深刻に云へば男の爲すべき仕事を女が奪つたに止まるのである。一口に云つて見れば一家庭に於いて女房と亭主とが職業の競爭をして居る形である、或る家で亭主が小學教師で卅圓取つて居る、ところへ細君が又職業に就く、それはいゝが其れ丈けのものが何處かで減つて居るわけである、斯の如き有樣で進めば渾然たるべき家庭でありながら、夫婦が利害の眼を以て對立する樣の事になる、是れは必らず將來一問題となるべきもので、歐洲では既に一問題となつて居る、此問題を解決すべき時には、私はどうしても先づ中流以下の生活に就いて其慣習を看取して考ふべき必要があらうと思ふ、其れは彼等に在ては、幾百年來の經驗に於いて、磨擦すべきところは磨擦し、衝突すべきところは衝突して、圓滑なる發達をしてうまく社會が出來て居るのであるから、紙上の空論を去つて學ぶべきところは學び、捨つべきところは捨てして、男女の眞關係を發揮し、夫婦間の關係を幸福ならしめねばならぬ、

私は又或る夕方散歩して居ると、假屋のこちらの橋

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の處て婆さんが三人唄を歌つて居るのに出會つた、多分何處かに盆踊りでもあるので、其唄の練習をして居るらしかつた、渠等は日頃は荷を擔ぎ鍬を取つて働いて居るのだが、この唄をうたふさまは實に樂しさうだつた、て、私はさう思つた女を本統に働かさうとするならば又本統に遊ばさねばならぬ、さうならねば働く元氣が出ない、家にばかり居据わつて居る樣な女に對して、社交の娛樂のと云ふ必要も無いが、共稼ぎでもするものならば、どうしても娛樂を與へねばならぬ、此婆さん達が一年一度の盆おどり、唄の稽古を、我を忘れてやつて居る位のとは



裾野

少くとも是非あらしむべき事と思ふ。

　女子の問題を云爲する時直ぐ西洋ではどう、支那ではどうと云ふが、其れよりも今少し日本の中流以下の社會を見なければならぬ、正直に云へば紙の上丈けではまだ／＼本統の女性の研究は出來ない「女子文壇」に投書をする如き女性はまづ類が少ないと云つて宜い其れらを通して觀察するよりも、もつと一般的な平つたい女性の研究を根本より爲すべき必要があらうと思ふのである。（談話）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

地震の村

澤村胡夷

雲――雲は壞るゝ壁の
間より草をぞのぼる。
伏呻き寂しくわらひ、
支へたる面はあをし。

少婦――わが少婦よ、阿彌の
蛇籠うつ水のひゞきも
堤より、けふは聽えず。
傷ましき湖の色、見よ。

壁、瓦、垂木のひまは、
疲れうむ人の顋寢。
一株の杉の大樹の
蔭にまた四人團欒す。

眼をあげて、鳥を望めど
かつ鳴かず。山を瞻めど
昨みたる姿にあらず。
少婦、わが少婦よ、湖の――

板塀うつ風の音にも
黄に光る夏の日かげに
蒼白し頬を傳ひて、
安らかぬ胸のなみ起。

丹の雲す。床の鶉の
さ迷ひて震ひゆく道、
野の草の息に蒸りて
横ふすは棟木の枕。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かなしみ

前田夕暮

海の日に色づく君が頬のあたりわづかに昨のかなしみ殘る

かなしみを忘れむとしてあやまちて君とのわれを忘るゝなかれ

君來たるうすら冷たき瞳して秋風の吹き絲啼く聲

乳色のさびしき花をみいてけり君が憂ひをまぎらすによし

物いへどいらへせぬ子とおそ夏の黄ばめる草とさびしかりけり

新らしき心となりしよろこびにおもはぬことを口走りする

おそ夏の街の埃にまみれたるこの悲しみを父は知らなく

遠く來てとほく消えゆく葉づれの音つめたき床にこほろぎをきく

我が胸のこの悲しみをわかつべき君は海よりいつかへるらむ

雲光るとある異聲のさびしさを窓によるたびおもひいてぬる

こゝろならず時たがへせしあやまちに君うしなひし夜の寢苦しさ

月あかり空一面にひろごりしとりとめもなきさびしき心

崖上のあかるき木々の秋の風戀ひうみし耳にうすらつめたし

無花果の葉蔭

兒玉花外

私の窓から、無花果の樹がみえる。碧玉のやうに熟せぬ果が喰着いてゐる緑葉の下蔭に、あの朝晩、水を汲みに來る美しい妻君がある。時折には日中だといふと、白い手拭を頭髮へちよいと載つけてゐる。

井戸の一方は瓦屋根の庇が少し黒う突出てゐる。井戸に拵へた小さな四角い木の屋根に、其手が届きさうで三尺ばかりの空間ができてゐる。思の戀渡しでもする心か、蜘蛛の絲のみが初秋の風の吹きやうでキラ〳〵と光る。

井戸の滑車と、片方の釣瓶とが、繩の羈絆に繫がれながら、いつも面と面とを向けあつて、淋しさうに高く懸つてゐる。

美しい妻君はいつも無言て、白い柔かな腕で以つて水を汲むでゐる。無花果の青い重つた葉は、白い中形の浴衣姿に照りを返へして、現實は宛ら夢のやうに浮び出させる。

近隣の植物園では、蜩の聲がカナ〳〵と喋かしく、土用過ぎの赤い太陽に名殘りを惜むで笛に鳴く。南の方の窓から銀色の小雲が空に飛ぶのが見える。

カタカタ、、ギイ、、、、——十歩計りを措てこのたよりのない、間隙のある水汲む音が、私の耳朶へ一種の音樂のやうに響いてくる時は、乾度、井戸端には、例の妻君が細い足で立つてゐることは私の神經で解かる。

顏の色は蒼味がゝつた白さて、黑瞳勝の美くしい目はいつでも下方を向いてゐる。て、水を吊る折も何やら物を思ひ〳〵汲むでゐる樣子！釣瓶は生憎大きい重いやつだ。

この女の水を汲むのは、多分他の人の三倍も長さがかゝる、井戸は餘ッ程深いとみえる。太い長い水蛇のやうな、釣瓶繩が昇り降りする。

私はこの若い女が、那處の家の妻君であるかは知らぬ。只髷の形でそれと分かるばかりだ。向方裏には幾軒も家屋があるが、水を汲みに來ては直ぐと姿は消えて仕舞ふ。

麗しくて、年が若くて、あの纎痩な身體をしながら朝も晩も、井戸端に桶を搬ばねばならぬとは、大抵はその竈とも想像がつく——。磯ては眞黑い蜑女が自由

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にお汲みをするか、家庭にあつては丸髷も重い苦しいものであらう?

盆の夕景、おそくなつて、細い夕月が前の無花果の葉の茂りを照らした折、立ち出てたその人の白い浴衣がけの姿は眞に畫にある様に思はれた、雨の挾、水を汲むてはザア、、と注ける、夏の水は月光に銀のやうに美くしく輝き、女神が市に降りて來たのか!と障子一重を隔て丶。

私は好奇心にも、この女の所天なる人は?と懐ふたが、直ぐ其んな想像を打消した。何故かならば、その男の顔を見たら恐らく今迄ての幻影は破れるてあらうから、花園へ犬が一匹飛出したやうて、私のロマンチックの夢は倏ち醒めるてあらうから………。

所天があらうが無からうが、私には何の變ふるところもない、元々關係のない女だ、唯ロマンチックの女として私が瞻めたばかりだ。人形屋の前で吾が物とせずして單目にみたばかりだ。

笹川臨風氏は『新小説』の質問に答へて、佛蘭西の女傑コーデリヤには人間の世に配偶を持たせたくないと云つてゐる。私はこの人にしては奇嬌な事をいはれたと感心してゐる。實際、世に天才のある女には夫などは禁物である、純潔な薔薇色の血潮を濁させたくはない、時としては波立ち狂い紅い胸を壓へさせたくもないのだ。埒を越える髮の長い春の牝馬——黑髮の長い女性——。

古昔、女詩人サッホーはユーカヂヤの海岸に投して千歳讀書子の袖を濕ほす。斯の女房は平凡な普通市の女てはあるが井戸端へ水を汲みに來て、偶々私のローマンチックの夢を動かした。

夏の朝

岡田八千代

私はこの夏、久し振りに國府津に居る友達の處へ逢ひに行きました。友達は私よりも年下てすが、もう三歳になる男の子を持つた母て、その良人に從つて濱松に住んて居るのですが、今度二年振りに實家へ遊びに來たと言ふので、私は取るものも取りあえず出かけて行つたのてした。

私が着いた翌朝、友達は我が子の着物を洗ふと言うので私も一所に井戸端へ出ました。裏庭の胡瓜は大き

く茄子の色の紫も、まだ朝露に美しく濡れて居ります。そよ〳〵と吹く朝風にレセダが幽かに香つて、垣に絡した藤豆の花もほら〳〵と動きました。裏も表も一面に名產の密柑畑で、生々とした青葉は今日も暑さうな日に光つて居ます。

丁度友達が二度目に井戶綱に縋つた時、ギイーッと裏門を押して這入つて來たのは、兩方の籠に靑物を一杯に盛つたのを、天秤で擔いだ六十あまりの老爺さんでした。

老爺さんは其儘友達に一寸會釋したまんま臺所口へ這入つて行きましたが、どうも私には見覺えがあるやうな氣がしてなりませんから、

「あの人は、以前に當家に居た爺やぢやないでせうか?」

私は友達が娘時代には折々此處へ來た事があるのです。

すると友達はひそかに、頷いて、

「さうですよ、心柄とは言へ今ぢやア彼んな事をして暮してますのよ、」

と言つて一層聲を秘めて次の物語りをしました。

「あの爺やを家で返したのは最早一昨年になりませう彼も家に居た頃は隨分まめに働く事は働きましたがね、一人子息が大の大のなまけ者で、女房もあり子供の四人もあるのに何にもせずにブラ〳〵遊んで歩いてるので、商賣物の荒物は賣れず、家には波風が絶えないので、爺やも夫には大さう弱つてたやうです、尤も少し智慧の足りない方で、仕様とも思はず、又思つても出來なかつたのでせうけれども……夫てとう〳〵女房も愛想を盡して實家へ歸つて終ふ、乳吞は疾患ひつくと言ふやうな譯で、爺やも惡氣ぢや無かつたのでせうが、丁度秋の事だつたので、之ほどある蜜柑畑の蜜柑を大低半分も持ち出して賣つたりしたものですからね、兄が怒つて遂々出して終つたのです。

然れどもまだ其時分は此濱邊に一軒、ちよッとした貸別莊を持つて居たので、夏場冬場に限らずかなりの實入はあつたものですから、家を出された所が別に大した困りもしなかつたのです。

處が昨年の春でした、何と言つても夫からが盛りと言ふ時、氣の毒な火事の爲に只一ッ命だつた別莊を燒いて終つたのです。

その時には貴女も御存じの下女のモトがまだ勤めて居たもんですから、長らく一所に奉公してた友情に夫

と言うと、臺所から襷掛けの儘飛び出して荒物屋へ走けつけて見ると、薄暗い店に爺やは只一人座つてたさうてす、夫からモトが
「お爺さん飛んだ事てしたね。」
と言つても、身動きもせずに默つて居るから、此方も手持無沙汰に立つて居ると、やゝ暫くしてから不意に眞青な顏を上げて、
「別莊燒いちやつた！」
と夫は〳〵陰氣な聲て言つたので、物凄さにモトは思はず一足下つたと言ひます。

夫からは全て氣落のしたやうにいつも店先に造り付のやうに座つて居るから氣が違うのぢやないかと言ふ評判だつたさうてす。けれども別段そんな樣子もなく人の噂も大低無くなつたこの春時分、フッと臺處へやつて來て、今このお向ふの御別莊の御用を聞きに來たんだが何か用は無いかね、之は御別莊へ持つて行くんだが、もし此家て要るなら賣つても好し、賣らねえてもよしさと言つたさうてす、夫ても賣り度い一心て來た事は分つてるから一種二種買つてやると、夫からは一日置二日置きに來ちやア同じやうな事を言ふのてすつて、そして御覽なさい、今頃ぢやアあんなに荷も殖えて、もう疑ひなしの八百屋てせう？夫だのにソラ御聞きなさい、あんな事を言つてます、茄子は要らねえか？、尤も賣つても賣らねえても好えんだから、少しは高えかも知れねえわさゞ、ゝ、ゝツてね？全くさう言ふ譯てすから他所のよりも高いのてすがねまア可哀いさうだから買つて遣るのてせう？夫てすから此節ぢやあゝして毎朝々々極つて來るのに、夫ても極り惡いのか、商買ぢやない、商賣ぢやないと繰り返し〳〵言ふのてすよ、可笑しいぢやありませんかねえ。」
と友達は洗ひ物を濯ぎ〳〵物語つて、その老爺の血の氣の失せて瘦せさらばつて居乍ら、何處までも見得を張つてる樣子を哀れ氣に見遣りました。

傀儡子（三）

横瀨夜雨

大雪小雪。
雪に凍えて死ぬるものは叢らにかくれた虫ばかりてはない、いつの夜か知らず曉かけてわが見たあや子が夢も寒かつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

痴人夢を語るといふ。肩に置かれし手――熱を帶びて悲しげに見えたる瞳――何をか語らんとしてをのゝける脣――その毛は黒くして長かりき。

寂しげなりしおもかげよ。

夢には私もひとりではなかつた。絢子と名づけた子もあつた。ひと度は『母は無くとも十七の、少女の姉が育くみて、小さき乳をも含ません、絢子は君が子なるもの』とすかしながら、「今日よりは、夢に見えても人の兒よ、たはむれなりし――旅の戀、――ああかくて絢子が頰は瘦せ行かむ』と脣を反して去れる姉もあつた。あゝ絢子が頰は瘦せ行かむ、生れてたゞちに母に別れたる彼れはまた第二の母にも捨てられたのである。

……生れたのは京都の下京の寺であつた、なやまし氣にする母を氣遣うて枕元につき切てゐた姉の雪子が退けられて庭に出て、しばらくして歸つて見たら泣いてゐたといふ、辰の年辰の日。

姉とは三つちがひて、よく肥立つて人を見てほゝゑむまでになつてから、絢子は出されて京を三里の在家に預へ(預け)られた。

雪子は里に遣らるゝ妹を唯泣いたが、母は深く考ふることをしなかつた。蜘を見よ、袋の裡に子を入れて、雨ふれば廡合にかくれ、日てれば網の上に放つ、況んや人。絢子は片言交りにひな唄などまね初めた頃寺へ歸されたが、乳の人を思ひ出しては泣くので母は藥師の緣日に連れ行きて丈の人形を買てやつたり、すみ〳〵て外の兒共々かくれんぼをして遊ばせたり、しんきを盡したけれど、すべて遲かつた、をさなき絢子の眼には、添寢の醍醐味を知りし乳の人が有る切りて、菓子を雪子と二人に頒けても、顏を伏せて取らうとはしない。いぢらしくも悲しくも思ふたであらう、母は泣いたけれど。……

ともすれば、絢はあつらへ兒だから母さまに叱られると言ひきかせる人もあつたので、月にも花にも獨泣いて、心は疾くから暗き國に暗き山野に離れてゐた。

髮をふさふさと小さな袴を穿いて學校へ通ふころから口かずは少なかつた、雪子を愛し雪子を戀ひて、ちつちやい姉さまほど綺麗で、ちつちやい姉さまほど聲の清い人は無いと信てゐたらしい、雪子はされうのよい子であつた。

新發意が内密で捕つてくれた雀の兒を、夜姉とふたりて抱いて寢るとて、ハンケチに包んだまゝ脇の下へ

入れ、明旦は早く起きて蜘を探さうといふとや、水も呑ませにやかわいさうだといふとや、それよりかすぐに籠を搆へて貰はうといふとやを相談しながら眠つて夜中にふとハンケチを弄つて見たが居ない、懐をはだけて見たがやはり居ない、袂へ入れたのかも知れぬと手をやるとチユチユと鳴いてこはい翼の尖が指にさはる。たうとう雪子を起して取つてもらうた。

生れると、母の膝をおし退けられたうらみも姉にばかり慰められてゐたが、或る夏の末つかた熱を病んで母と寝るのが夢か、父にかかへられるのが、現か、枕も髪も焦るかと思うた時、曉の雲ひや／＼と床に落ちて眼を明けた、まづ見えねばならぬ筈のちつちやい姉がゐぬ、ふだんあそび馴れし小室には二人の人形を二つ共かざつて、紅いきれや青い絲や手筥は蓋をはねたまゝ雪子は遠く北國に移されたのである。

机の下を過ぎ銀杏を右に廻れば、築山の路盡きて、裏庭の木立の中に觀音堂が在る、扉を押せば氣高きおもかげの夢に見る母のごとく暗きかたに立つておはすので、絢子が涙の捨て場は此お堂の扉であつた、楓の葉を拾うとては行き銀杏の子を採すとては行き、人に跡をつけられて濡れたる睫を發見されたとも一二度ではない。

なげしに、金の柏の紋が打つてある、柱も貫も鏡のように映えては居るが、朝の夢は鯨音に驚き夕の魂は梵唄におびえて、悲しいかな絢子が心は終に母に歸らなかつた。

乳母の里へ、乳母の家へ。

夢にだも忘れぬ乳の人を慕うて、絢子はある日單身寺を去つた。髪はやゝほつれて草の色にまがふリボンを揷してゐた。

歩いて海の岸へ出た。辰巳から吹く風と眞黒な巖とに挾まれて浪が三角に踊つてゐる海の巖の上に危なかしく垂れ下つてゐる白百合を捲き落さうとしてか浪は巖へ駆けあがり這ひのぼれど、花はいやいやをするばかり。絢子は巖のとつつきにかゞんでその百合を溯回る浪の中に投げ入れた。「浪よ、花を抱いて遠く氷海に行き、氷となりて封ぜよ、おもかげかはらぬ戀人はながく汝の有たらん、行け、行け、極光白き北氷洋に」

歩いて山の上に出た。身丈を沒する草の中をかさかさと音立てゝ行つた。行つても行つても路は草の下を離れぬに、やがて月が出た、おぼつかなき光を力に絢子はなほ歩いた。

草の色は沈んてゐた、葉とすれすれに飛ぶ鳥の黑い羽を見た。夢のように霧につゝまれて月下に動くわが影のたゞ一つなのも見た。

むかし燃ゆる火を目早に見つけ、消ゆる火をたまゆらに認めて、月明き夜さまよひ出て野に泣く女があつた。月は沈んだ。つぎの夜、女は來なかつたけれど、月は草の上に泣いじやくりする女の影をうつしてゐた。來る夜も來る夜も月は光つた、影は出歩いた。が、女はそれを知らなかつたといひ傳ふる。

黑百合の
　黝き破衣に
眼といはず
　眉もつつみて
肩のあたり
　散るはたれ髮
見よ、人の
　月に行くなり
更闌けて
　風なき小野に

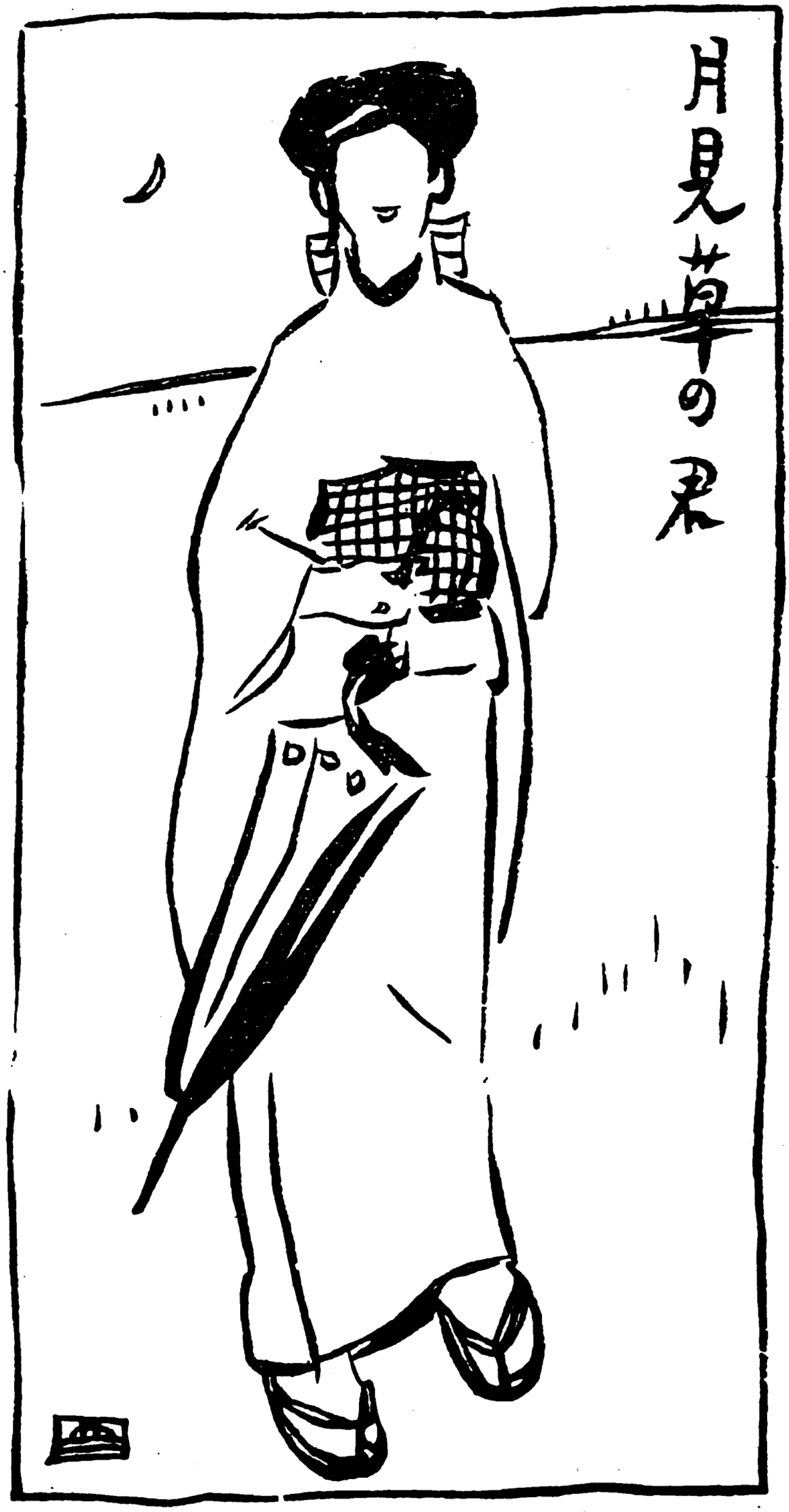
鈴蘭の
　花かも搖く
行き〳〵て
　月のかくるる
霧のなかに
　入るとはすれど
比ぶれば、
　思へば、母の
懷と、
　冷たき墓と、
亡びける
　靈と肉との
いつれにか
　涙は落ちし、
人の影は
　月に從ひ
月は人の
　影を從へ
今ぞ行く――

天にも地にも
容れられぬ
一人法師の

鞠子は草を藉いて、目に掌を當てゝ坐つた。月は寂しく上から照つてゐた。

わが心は重く暗い。

Cは權榮に生きFは富貴に生きIは美しき衣に生きVは輝ける珠に生き、ある人は高樓に生き、ある者は大厦に生く、みな、女だ。亡び行く家を悲しむかたはら、父母にう



とまれる兄をあはれみて、聖なる愛には——「人屋の中に思ひね」の囚人すら慰めらる、ましてわが兄をやと歌うた女もある、瞑目して遠ざかり行くその聲を聞けば、新愁頻に湧きて、わが「生」のなほ光明あるをおもふ。されどそは罪釋て繩を放たるゝとき昂然と

して歩み得る人の上だ、われに行くべくいづれの道があらう。

阪神電氣鐵道から墮ちて腰を轢れて兩足とも切られたNといふ工學士は、許嫁があるのでよく人にやつかまれたが、義足を故郷の地につけてなつかしき父母の家を望み見た日は、許嫁なりし女の他に嫁いだ日であつた。門に倚りて待つべき母は早く亡くなつたし、第一に手を執りて慰めらるべく期せし彼女は他家に入つたのだ。それでも書院にひつくりかへつて馬位にはなつて三人の姪をあひ手にのんきに遊んでゐる。三千ちやんが嫁てくれたらと嫂が泣くと、なあに僕がすゝめてやつたのですと、すましていふ。人は歎くべし、かへりみて寂しき命のはてをおもへば、ソロモンの榮華を點にあつめて地球の如く大きくすとも、以て寂しく悲しきわが生を購ふに足らんや。嗚呼斯の涙！

まことに自分は世のまま見てあつた。生きながら墓に葬られ、うらみはいはぢ、十年親交の友に賣られ、血にて誓へる人に背かれて、わが舌はどもりわが筆は澁る、三十年、人に輕んぜられ辱しめられたる痛恨は九つの世を代ふるとも忘れねど一路の火の如き自尊心は身を燒いて、花かざす、女子の群を冷笑し熱罵しつつ、すでに千里獨行の旅にのぼつたのであつた。

雪に埋もり行く心よ、雪に痛みを知る足よ。日よ、星よせめてわれに感覺なからしめよ。わが心はあまりに傷つきわが足はあまりに冷たし、生きてこの痛楚に泣かんよりは紅爐磐上一點の雪ならましかば……。

絢子、絢子、絢子は夢に生れてまた夢に死んだ、伴はれて墓に下るを待たなかつたけれどもわが夢にはなほ悲しく生きてゐる。（完）

インキの話

工學士　西山榮

五千年前の埃及の墨汁……インキの沿革……十一世紀の百科全書……一家相傳の處方箋……インキを作るは主婦の仕事……最初の墨汁製法……煤黑と同じ物……鐵劑と茶を一緒に飲めば腹でインキが出來る……黑インキの改良製法……インキとペン……どんなインキが宜いか……赤インキは貴族以外使はれなかつた國……金銀色のインキを使つた國王……色インキの製法。

多く使はれるのは黑インキですから、始めに黑インキのことを話します。極古るい處を云ふと、今から五千

年許り前の事、埃及では今支那と日本で使つて居る墨に似寄つたものを使つて居ました、即ち植物や動物を燒いて炭にしたものを、膠や油の樣なもので煉り墨の汁を作つて字を書く爲めに用ゐました、それから後希臘、羅馬の文明時代に、引續いて此類のインキを用ゐて居たので、英國でも昔時は之ばかりであつた樣です。今使はれて居る樣なインキが始めて出來たのは何時頃か判然とは分らないが、書物の上では十一世紀頃にテオフィラスと云ふ坊さんの書いた百科全書の中に始めて載つて居ます。

今から八百年許り前では字を書くといふことは今の樣に行き渡つて居なかつた爲めに、インキ屋と云ふ商賣もなくつて、大抵家々に一家相傳といふ樣な處方書があつて之に依つてインキを作ることが主婦の仕事の一つになつて居たといふことです、インキ屋の商賣が出來る樣になつたのは、四五百年此方のことである相です、それから後は色々な新らしい發明もあつたり、追々立派なものが出來る樣になつたのです。

黑インキの出來る理窟を云ふと次の通りです。タンニンといふ藥を水に溶かして其中へ鐵の化合物、例へば綠礬といふ藥を混ぜますと、始めは液が無色ですが段々に黑くなる、之がインキです、即ちインキには二つの材料が入ります、一つはタンニン、一つは鐵の化合物です。そこでタンニンを含むものは色々ありますが、多く使はれるのは五倍子(五倍子は百匁中に三十匁位タンニンを含んで居る)鐵を含む材料としては專ら綠礬を用ゐます、綠礬といふのは硫酸と鐵の化合物です。之でインキを作るには五倍子を碎いて藁と混ぜ樫の木で作つた深い樽の中に入れ、温い水を入れて置くと、五倍子の中のタンニンが水に溶けて出ます、一晝夜位經つてから液を拔き出して、之に綠礬の溶液を混ぜるとインキが出來上るのです。併し混ぜた當座は液に色が着いて居ないから、之で文字を書いても字畫が明瞭に判らない不便がある、そこで此液を暫く空氣中に曝して置くと、一部分だけ變化が起つて、タンニンと鐵との黑い化合物が出來て液に色が着く、併し此物は水に溶け難い故底へ沈澱が出るから、石炭酸とか硼酸とかサリチル酸とか云ふ防腐藥を少し加へて置くのです。

序だから申して置きますが、昔し日本の婦人にお嫁に行くと皆齒を涅めました、之に用ゐた鐵漿はこのインキと同じ材料であります。それから鐵の入つたお藥

を飲む時に茶を飲むとを禁じますが、あれは茶の中にタンニンを含んで居るから、茶を飲むと腹の中でインキが出來て仕舞つて鐵が薬の働きをしないからで有ります。

以上は昔時のインキの製法でありますが、之では不便が多い、第一にゴムを入れる爲めにインキがサラ〱しないから、細かい字を書くのに不便だし、又書いた文字がピカ〱光つて如何にも下品でもあるし、又インキがよく紙の中へ浸み込まないから水で洗ふと書いた字がとれて仕舞ふ。そこで種々工夫した上今より五六十年前より、ゴムを止めて硫酸と青藍を入れるとに改良した、かうすると沈澱が出來ないで液がサラ〱して居るから大變使ひ易い上によく紙の中へ浸み込むから洗つても落ちなくなつて文字が丈夫です、書いた時にはインヂゴの爲めに青い色をして居るが、日が經つと酸化して黒くなるから前の書いた色は隠されて仕舞ふのです、大抵長くても一週間位經つと眞黒になります。ブルーブラックと稱へるのは此種類のインキです、藍を入れる代りに紅緑紫等の染粉を入れて置くと、それ〱書いた時は紅緑又は紫で日が經つと黒くなるインキが出來ます。

此樣に今のインキには硫酸を入れますから、どうしても鐵のペンは害み易いのであります、或る人が鐵ペンをインキ壺の中へ落して、よく栓をして六週間經つてから取り出して目方をかけて見ますと、百分五だけ目方が減つて居てインキは粘くなつて使へなくなつて居ました。無精をして鐵ペンをインキ壺へ挿し込むだ儘捨てゝ置くと此樣にインキもペンも共に無益になつて了ひます。此種類のインキでも永く空氣中に曝して置くと終には粘くなつて沈澱が出來る、これはインキの性質上止むを得ない譯ですから、成るべく使はない時には蓋を取らない樣にして置かねばなりません。

此外に獨逸の化學者でルンゲといふ人の作つたクロムインキといふのがある、之はログウッドといふ木の煎汁に曹達を加へ之にクロム酸加里を入れて作つたもので、サラ〱として居て書いてから後早く乾き又酸が殘つて居ないからペンを傷めない、併し之は永く置くと分解してインキ壺の中で塊が出來る欠點がある。又ニグロシンインキと云ふのがある、之は黒い染粉を水に溶かしたもので、普通のインキの樣に黒くは無いが酸を含まないからペンを犯さないし、又粘くならないから萬年筆などに用ゐるには好都合であります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

以上はインキの作り方ですが、一體どんなインキが良いインキかと云ふに、第一にインキの色が透明でペンの尖からよく流れること、第二にはインキ壺の中で沈澱物が出來たり又は黴が生へたりしてはならぬこと、第三に書いた時に判然讀まれ五六日の間に眞黑になつて何時までも變らないこと、第四に紙に幾分か浸み込まなくては不可ない、併し滲み出しては困る。第五に成るべく鐵ペンを犯さないこと、第六に勿論有毒な物質を含まないこと、之だけの條件が揃へば好いインキと云ふことが出來る。インキの上等のものになると可成丈夫ですが併し永い年月には幾分か變色する、之は一つには鐵とタンニンとの割合によることとて、鐵が多いと書いた文字が赤つぽけた色になる傾がある。日本でも近頃までは公文書などにインキを使ふことを禁じてあつたのですが、此程漸く使つても宜いと云ふことになつた、併し丈夫なことは何と云つても墨の方が丈夫ですから大切な書類は墨で書いた方がよい。

インキは種々な薬品に依つて色を失ひ又は變色する五倍子で作つたインキは晒粉亞硫酸、硫黄を燒いた時に出る瓦斯、蓚酸、枸櫞酸等に會ふと色が消える、酷酸、稀硫酸、稀鹽酸などで洗ふと大部分色がとれる、又アムモニア、苛性曹達などで洗ふと非常に淡くなる、併し勿論インキの材料にもよることて、例へば藍の入つて居るインキなら鹽酸で洗ふと赤くなります。インキで文字を書いた上へ酢、梅酢、蜜柑の搾り汁又はアムモニア等をかけると色が消え若しくは淡くなるのは皆さんの御存じの通りです。若し誤まつてインキを覆した時は、大部分吸取紙で吸はせた後前記のもので拭くと大抵とれる筈ですが、着物の樣な物などは之が爲めに地を害したり變色したりしますから、素人で扱ふことは一寸六づかしい。インキで書いた字は年月が經つと薄くなつて終に讀めなくなることがある、此際再び讀み得る樣にする方法は色々あるが簡單なのは、硫化アムモニアの瓦斯に觸れさせると黑い文字が現はれます。

序に色インキの事を少し話します、古るい書物を見ると面白いことがある、ビサンチン帝國では赤インキは皇族の外は使用することを許されなかつた、皇帝が幼い時には攝政が其代りに緑色のインキで署名をしたと云ふことが書いてある。希臘や羅馬の皇帝は名前を書くには金色や銀色のインキを用ゐたといふことである。

昔時は染料は皆主に植物や鑛物から取つた爲めに色

の數が少く從つて色インキも澤山は出來なかつたが、今から五十年計り前から石炭の滓から色々の染粉を作るとが發明されたので、今では殆んどどんな色のインキでも隨意に出來る樣になつた、之で作つたインキは流れ易くはあるし又ペンを犯さないが、其代りに人造染料は色が弱いから是れで書いたものは水をかけると直ぐに流れるし、又書いて置いても數ケ月經つと色が無くなる、殊に紫インキ赤インキは色が弱い。製法は非常に簡單だ、單に染料を水に溶かしさへすれば宜いのだから。普通に用ひられるのは赤てはコチニール、マゼンタ、又はエオシン等を水に溶かしたものを用ひる、青ては藍、紫てはメチルバイオレット、黄にはピクリン酸などを使用します。

舍監を欺かんとしたる淺はかなる女生徒

萩の花妻

エス子の物思ひ……母からの手紙……うつかり外泊を許す……二三日が一週間……海岸からの電報……不安の念を增す……いよ〳〵實地探索……停車場で出會ふ……ボロが出る……實家への照會……娘を手討にする……校長の喫驚……父親の一徹……習字のすきうつし……今は實業家の夫人

女は早くませるやうでも、案外子供〳〵したものですね。見得も虚飾も要らぬ女ばかりの世界を作つて、唯勉強一圖に凝つてゐれば好いやうな學校——殊に世間と遠い寄宿舍なんかては、女は全然雲雀のやうなものてすね。朝から晩まて、唯だペチヤクチヤと唄ひ興じて、キヤツ〳〵と笑ふてゐればすむのてす。

かうした屈託もない樂しい世界へ、エス子は胸に重い石を包んで歸つて來たのてす。學校第一のおハネとして、又白粉香水の先驅者てあつた彼女が、どうしたものか春前ごろのやうに、人々の群に交つて笑ひ興ずるといふ事がなく、獨り物蔭に佇んで茫乎と宙を見てゐたり、人知れず深い吐息を洩すやうになつたのです。てすが、それが何うした理由かと云ふとは無論私達に分りません、唯だ、まだ躰の具合が本當によくならないのだらう位に考へてゐたのてす。

すると又或る日の事、エス子は某主座教員の所にやつて來まして、母からこんな手紙が來たからとそれを見せたのてす。其の手紙には「お前の今ゐる町の△△

といふのは、元と私の宅て保護してやつたことのある家て、それを恩にしていつも宅の事を思うてゐてくれてるが、お前が其地にゐるといふので是非二三日てもよいから來て泊つて貰ひたいと言つてゐる。他ならぬ家だから安心して、勉強も然う忙しくなかつたら先生にお願ひして行つて來たらよからう」と恁ういふ意味なのてす。一躰舍の生徒の取締に就ては、舍監なら舍監の一手に權利があつたらよいのてしたが、其頃はまだ複雑な事件



も生らず、殊に宗教學校てはあるし、とそれに自惚れた譯てもないてすが、舍監といふものが萬端の權利を有つていたわけてないものてすから、うつかり其主座敎員はエス子の見せた手紙を信じて、私に相談もせずに外泊を許して了つたのてす。

エス子は私の許にも鳥渡外出の事を申して來ましたが、主座敎員が許したといふので深く問ふともせず、其儘外出を許しますと、夕方になつても歸つて來ないのてす。最早歸院時刻も

過ぎたがと、私は氣が氣でありません、幾たびか門の所へ出てはエス子を待つて見ましたが、三十分過ぎ一時間過ぎても影も見えぬ。で心配して主座教員の所へ相談に行きますと、ナニあれは二三日泊つて來ると云つて行つたのだといふのです。私にはそんな事は云はなかつたがと不平を申ますと、お母さんからの手紙もあるのだから仔細はあるまいと案外平氣なものですから、私も腑に落ちぬエス子の擧動を怪みながらも、まあ／＼と胸を撫てゝ寐みました。

果してエス子は翌日も學校に登校しません。二三日の許されだからだとは思ひ乍ら、何とやら心落ちつかず、人から預つた娘なればと猶ほ心配は募つて、夜もおち／＼寐られないのです。若い娘達が、他愛もなくスャ／＼と無邪氣に眠つてゐる寐息、それを聞き乍らまぢ／＼してゐると「若しや」といふやうな疑念が起つて來たのですが、「イヤ／＼そんな事を思ふのは、若い女の神聖を傷けるものだ」と昔の我身に引較べて、ついヒイキ目に考へて了ふのでした。

所が三日目になつても歸つて來ず、四日になつても亦歸らず、私の疑念は再び輪に輪をかけて起つて來たのですが、そこへ突然電報で以て「病氣二三日遲れる」といつて來たのです。「病氣？」とそれにも私の心は驚いて兎見かう見しますと、意外、意外、その電報は四五里離れたさる海岸の田舍から出てゐるのです。私は最早評議するまでもなく、慌てゝ最初行つたといふ○○通の其の家へ行つて見ますと、成程其家はエス子の親に保護せられたやうな人に適はしい構へ、お内儀さんが出て來て、

「お孃樣は一晩お泊りなさつたですが、親類の方とかと××村へお出てになりました、之がそこからのお便りで」

と端書を出して見せました。では又あの從姉妹と一緒かと、少しは安心しましたが早速其端書から所書を寫し取り、其日は學校へ歸つて來て、翌日終日は若しや歸校るか待つて見ましたが歸りません。然うすると苦勞性の私は最早捨てゝおくとが出來ず、その村へ行つて病氣の次第も見て來やうと、エス子が出てから一週間目の午後、授業が終ると直ぐ停車場へ行つて切符を買ひ、今や出やうとする汽車に慌てゝプラットホームへ出ますと、まあ折よくも、エス子が今着いた上りで歸つて來たのです。

「あらまあ先生……」と驚いた顏。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どうしたの？病氣といふから見舞ひに行かうと思つて今出て來た所なのよ。
と別心なく親しく云ひますと、
「まあ濟みませんわねえ、私ね從姉妹の〇子さんが來て二三日海岸へ行かないかと申ますから從いて行きましたら、つい少しお腹の加減を損じましたものですから。てすが最う先生、すつかりよくなつてよ。」
人中て恥しくもなく髪を亂してはゐましたが、顏は元氣て頰にも僞りならぬ紅が潮してゐるのてす。私は其儘默つて伴れては歸りましたが、色々穿鑿して見る程ボロが出て、學校を出る時も甘く外出簿なしに出たのてす。私を出し拔いて主座教員に許可を得て、それから私に挨拶したのもその謀をせんが爲めでしたと分かりました。斯うなると最早打ちすてゝおく譯に行かないと、正規の如く一應保證人に通じますと、保證人からは以ての外だと責任を學校に塗つて來たのですそれは無理もない事てすから、今次は東京なるエス子の家庭に申てやりますと、エス子の父は怒るまいことか「私の家庭は苟も武士の家庭だ、然ういふ不屆な娘は生しておく譯に行かぬから手打にしてくれる、早速東京に歸してくれ」と恁う申て來たのてす。其手紙の趣で、女の從姉妹はなかつたのだと分りまして、私達一同驚き呆れました。家庭からの要求までもなく、學校からは無論放逐すべき筈でしたが、何しろ前申したやうな父親の意氣込、校長の西洋人は吃驚してそれを眞にうけて、あべこべにエス子を執りなしたのです。其文面には「貴下も世の罪人貧人を救濟せんとて慈善事業をなさるもの、若しエス子に罪があつたとしてもそれは許して悔改めさせるべきでありませう、それも今度は全く學校の手落てしたから」と、理の當然をせめて低く出ましたのてす。父親はそれても中々承知せず「然うまで仰しやるなら刄にかけて殺すことは思ひ止まりませう、併し親に耻をかゝした彼の子は卒業したとて決してよせつけず、精神的に殺してやつて、東京京都大阪の三府にはおきません」とそれは〳〵甚い鼻息、猶且此方が低く出たのにつけ込んで、「娘をきづ物にした、預かり物を粗末にした」と言ひ開きの道もない程の突つ込みやうには困りました。
其後エス子は兎に角無事に學校を出て、今では然る實業家の夫人になり濟ましてゐますが、以前のやうな不誠實な行爲の無いことを祈つてゐます。

花言葉

水野葉舟　撰

へ、ぺ、ぺ

葫蘆、　誇大。
伏牛花、　嚴しき性質
ヘーアベル、　服從。悲しみ。
ヘレニューム、　涙。
ヘリオトロープ　獻身。眞實。
ヘレボーア、　誹謗。誣告。
ペパチカ、　信任。
「ベッレヘムの星」（スター、オヅ、ベッレヘム）　清淨。

ほ、ぼ、ぽ

ボラス、ヘンリカス、　善良。
ボレエチ、　無禮。
木爪、　誘惑。
ホヤ、　彫刻。
ホルテンシヤ、　あなたは冷い。
酸漿、　奸計。
ホーリー、ハープ、　妖術。
牧草　服從。利益。
鳳仙花—赤…　私に觸つて下さるな。氣早な決心。
鳳仙花—黄—　短氣。

ま、

マッグウォルト、　幸福。
迷迭香、　記憶。
まんぐさ（あつに、あつし——ウイッチ、ヘーゼル）　呪咀。
松、　哀憐。
松—脂の出て居る—　哲學。
マッチチール、ツリー　僞り。
マンドレーキ、　恐れ。
マージョーラム、　赤面。
マーキュリー　善良。
白英　眞理。

み、

女貞、　永存。
ミカヘル祭の雛菊、　追想。
ミルクエッチ　あなたがお出になつたので、私のなやみもへります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

花言葉

水野葉舟編

ミルクウオルト — 遁世。
ミドウ、ライチニス、 — 頓智。
ミドウ、スウヰート、 — 不必要。

む、

ムーギング、プラント、 — 動搖。
紫水晶 — 賞讃。

め、

羅勒(スヰート、ベーシル) — 好意。
メッセムブリヤンセマム、 — 怠惰。
メゼレオン — 快樂の慾望。

も、

モーニングブライド、 — 不幸な愛着。私は何もかも亡しちまつた。
樅、 — 時。
樅樹、 — 高上。
木犀草、 — あなたのチヤームのある樣子より、あなたの性質の方が勝れて居る。
モック、オレンヂ、 — 相似。
モンクスフード — 武士道。

や、

山桑皮、 — 愼重。
やどり木、 — 私は凡ての困難に打ち勝たう。
柳—匍匐したる— — 許された愛。
柳—水邊の— — 自由。
柳…フランスの— — 武勇と人道。
柳…きぬやなぎ… — 愉快。
白楊—黑(ブラックポプラ)… — 勇氣。
白楊—白(ホワイトポプラ)… — 時。
矢車菊 — 優雅。
山吹 — 待ちかねた。

ゆ、

虎耳草、 — 愛慕。友情。
百合—デイ、リリー— — 情を衒ふ。
百合…インペリヤル— — 尊嚴。
百合…白… — 純正。親愛。なつかしさ。
百合…黄… — 僞り。華美。
ユダの木(ジュダス、ツリー) — 不信。反信。

よ、

葦 — 無分別。粗忽。御し易い。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

turned to fly—each dashing, pressing, crushing against the other. Trampling recklessly over the fallen, amid groans and shrieks, the enormous crowd was rushing aimlessly in every street. But darker, and larger, and mightier, spread the cloud over them. It was a sudden and more ghastly Night rushing upon the realm of Noon!

犇合ひ，倒れし者を踏み越へて叫びつ,呻きつ,目的なく只市街を翔くる事狂人の群に異ならず。かくて雲は愈々暗々黒々，其面積を巨廣たらしめて，彼等の頭上に弘布す。是れ實の眞の夜よりも火急にして，幾増倍も凄慘なる暗夜の眞晝の領土を襲擊するものの如し。

A Full Life.

If your cup is small, fill it to the brim. Make the most of your opportunities of honest work and pure pleasure. If we had twice as much time to spend, we could not afford to squander any of it on vain regrets, or anxious woriments, or idle reveries. The best thing we can get is a heart of wisdom; for such a heart is full of medicine for the day of sickness, and music for the day of sadness, and strength for the day of trial, and richness for eternity. Remember that what you possess in the world will be found at the day of your death to belong to some one else; but what you are, will be yours forever.

全然的生涯

若汝の杯小さくば，溢る迄に此を充たせ。正直なる業を，清廉なる快樂の好機會を充分に利用せよ。若我等に平常より二倍の時間ありとすとも，無益なる後悔,小心の煩悶,散漫たる幻想を之を徒費する能はず，我等の得て最も益するものは智慮ある心なり，そは此の心は病の日には良藥となり，憂の日には音樂と變じ，苦痛の日には氣力と化し，永遠に對しては富となるべければなり。記臆せよ，汝の今日所持するものは，汝の死する日には他人の物となるも，汝の汝たる人格は限なく汝のものたる事を。

Loving Upwards.

There are many kinds of love,
As many kinds of light,
And every kind of love
Makes a glory in the night.
There is love tnat stirs the heart,
And love that gives it rest,
But love that leads life upward
Is the noblest and the best.

Henry Van Dyke.

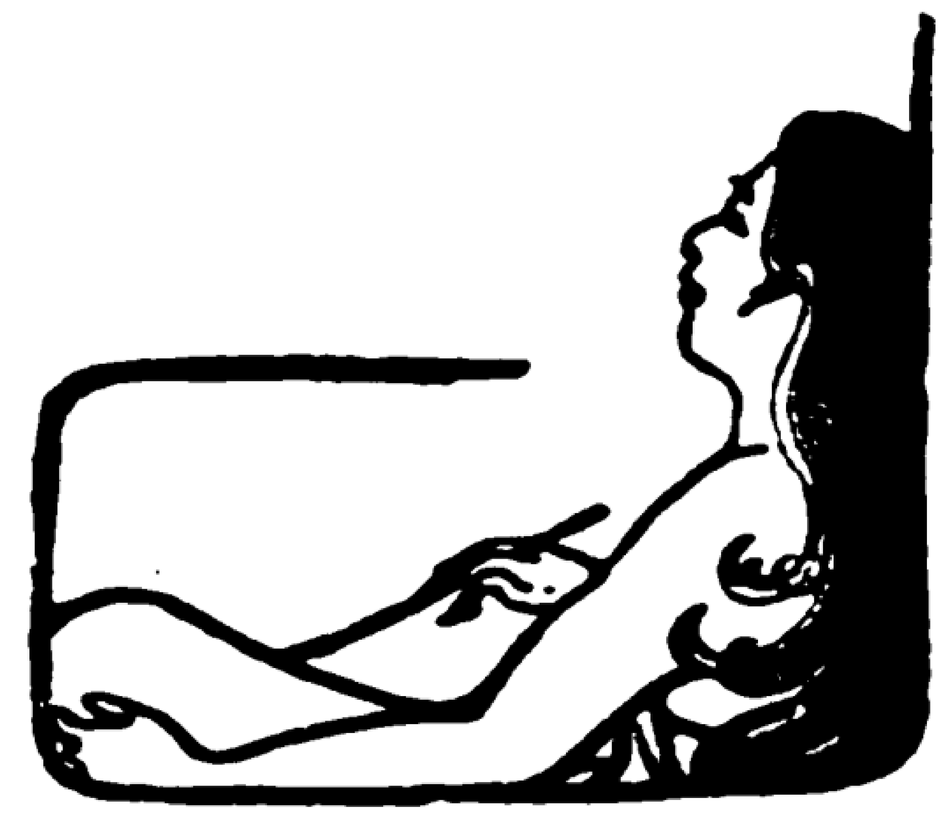
高を愛する情

愛には種類多きこと
恰も光の數多きが如し，
而して何れの愛も
暗黑の浮世の光輝たり。
人心を刺戟する愛あれば
又平安を與ふる愛もあり，
然れども人生を高きに導く愛こ
　そは，
最高，最上のものにぞある。

英　文

（第五年第十四）

女子英學塾講師 河井道子



The Eruption of Mt. Vesuvius.

The crowd saw a vast vapor shooting from the summit of Vesuvius in the form of a gigantic pine-tree; the trunk, blackness,—branches, fire!—a fire that shifted in its hues with every moment, now fiercely luminous, now of a dull red, that again blazedterrifically forth with intolerable glare! There arose the universal shrieks of women; men stared at each other, but were dumb. At that moment, they felt the earth shake under their feet; the walls of the houses trembled; and, in the distance, they heard the crash of falling roofs; an instant more, and the mountain cloud seemed to roll toward them, dark and rapid, like a torrent; at the same time, it cast forth from its bosom a shower of ashes mixed with vast fragments of burning stone! Far and wide, with many a mighty splash in the agitated sea, fell that awful shower. Every one

ビスービヤス山の噴出

群衆はビスービヤス山の頂上より多量の蒸氣が恰も巨大なる松木の形狀を呈して，烟煙天に漲るを見たり。此の大木や幹部は黒煙，梢枝は火炎にして，併かも刻々其色を變じ，烈しき光輝とみるまに忽ち錆赤に變じ，又瞬間にして睨視すべからざる熱烈な猛火となりて天を蓋ひ。婦女等は一齊に叫聲を擧げ，男子は默々相互に睜視するあるのみ。即時に彼等は足下に震動を感ずるや，四方の壁は戰響し，遙に家屋の破壞の音物凄し。俄に山頂よりの黒煙急流の勢を以て墜降し彼等を被はんとすれば，・又山底より燒岩の碎片，灰燼と混じて吐出され地上に驟雨す。動搖せる海中には遠距離に至る迄，其恐ろしき火石の雨降りて蒼波を蹴るも慘絶なり。衆人は皆避難せんとて互に衝突し，押合ひ，

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

北極の美觀

▲北極の花は石竹躑躅岩梅雪の下姫石南木等最も壯觀石竹躑躅は色紅岩梅は白雪の下は黄白の類姫石南木は粒々挑色の微細の花、形は孰も小なれども色は目覺ばかりの鮮麗葉は一般に形丸く天を指して裏も表も同一樣多く團子の如くに塊まり集まり茫々として生へ續き春分來りて日出づる時暖氣俄かに至りて斯の如き百花は一時に開きて忽ちにして花は散りて忽ちにして實を結ぶ、植物は此他緑黄白灰等色々の苔類數多く紫色の實を結ぶ岩高蘭黄覆盆子莎草燈心草菅依蘭苔水苔杉苔、樹には柳と樺の唯二種但し孰れも丸葉疎に長は僅かに二三寸日本に於ては二抱にも三抱にも餘るべき大樹がには實に僅かに二三寸▲銀座日本橋神田等帝都の大通を始めとして近頃各所に盛んに行はるゝ廣告電燈を見るが如く北極の地は赤く忽ちに青く又忽ちに白く瞬時に變色す此奇蹟的なる瞬時の美觀は全く一種の苔の作用にして俗に北極の血の雪とて眞白の氷を宛らの血潮に一望悉く紅とする極微の草花ありてこれが忽ちに實を結びて一望悉く青變又黄變す初見者は實に驚かざるを得ず▲北極の花は皆小さく朝顏木槿樣筒深の花は更に無ければ花蜜を甞むる虻蠅の類も孰れも悉く舌短し蜂蝶の類亦色も樣々咲き亂るゝ紅白紫黄の花瓣に翩飜樂しげに飛び交ふ樣全く我邦の高山の氣候に違はず吹き來る風も肌を劈くものゝみにもあらず▲氷を掘りたる洞窟には白熊麝香牛、鹿狐兎等孰れも思ひ〳〵の巣を組て鹿兎牛は樣々の草木狐の類は虫魚の類を取り食ひ熊は或時は海豹を喰ひ殺し海馬を斃し又或時は魚を漁り或は鹿を追ひ牛を殺し狐兎等を引裂き食ひて宛然の氷原の王なり凹凸十數尺平原と雖も天險惡なる大氷原を八方に馳驅して獨り傲然として天に嘯く此他天に黑鳥あり海に大魚あり鳥は或時は天を蔽ふて暗きをなし冬は色又悉く變じて白となる▲此の如き動物此の如き植物其生ふる所は何處も大氷原下は恐らく海氷の厚さは蓋し約七八尺乃至二十尺以上氷山は寧ろ北極外圈に近く存して北極に近附けば寧ろ平原にして多少の高低十數尺の凹凸はあれども望見する所寧ろ一路坦坦たり▲日は春分の初に現はれて先づ地平線をグル〳〵舞夫れより次第に螺旋を畫きて次第〳〵に舞ひ昇りて遂に頭上に圓を描きて天頂に達すれば又次第に螺旋を描きて再び地平線下に沒し去る此時は即ち秋分なり其間の二百八十餘日は實に全部晝なり。

小翠風葉選



○規定 題材凡て自由なり一人一篇を限り半紙又は罫紙に振假名をつけて明瞭なる楷書にて認むべし長さは二十四字詰八十行以内とす賞は甲種に據りて送呈す▲本欄以下本誌の投稿は凡て女子に限るものとす

○若き妻（天賞）

日本橋 佐藤萬壽子

從姉のお蝶さんが結婚してから既八月程過ぎた。慥、二月目だつたと思ふ、若い美しい内儀姿のどれ程婀娜だらうと其姿を見たさに尋ねて行たら流石に未だ年若の氣まりが惡いと見えて顔を見せなかつた。

お蝶さんは、妾の父さんの妹の子で五ツの時は既、憐な孤子であつた、て室町の伯母さんが貰つて、子供の無いのを幸に養女にして跡を取せる事にきめた、お蝶さんは妾と同年の十六て愛嬌はないけれど美しい人だ、未だ妾の父さんが亡らなかつた時分やつぱり室町に居て毎日一所に學校へ行と道で逢人達がよく振返つて、なんて美しい姉妹だらう、と云ふ、お蝶さんは妾より二つ位老成て見える。

今度結婚したのはどう云ふ機會からだか知らないけれど、何しろ久濶逢なかつた友に逢のと、内儀姿が見たいのと、其に妾を見たらどんな顔をするだらう等と、種々な想像を胸に描いて、三越の前で電車を下ると欣々して伯母さんの家の前に立た（鰹節問屋）見ると三四人の客が買物をして居る店に添ふた細いろじへ這入と左側に奇麗にとぎ出した格子戸が有る、一寸のぞくと、足音に氣が付たか格子と並んで一間半計り先の小さな高窓から粋な丸まげに結た伯母さんの白い顔が出て「おやッ」と計り表情に富だ目ににこ〳〵して妾が格子戸に手を懸た時既はた〳〵と子供の樣に馳出して來てすうッと障子を開けた「まあ〳〵めづらしい事、よく來たねさあ早くまあお上りよ」と手を取らぬ計りにする、伯母さんはいつ見ても若い「今日は」妾は嫣然して上ると「あゝ階下は暗くて陰氣だから二階へ行ふ、

さあ」ともう〳〵嬉しくて堪らなさうに、下女に茶の用意を云附て其の儘妾と一所に二階へ上る間も種々な話しをする、雖然お蝶さんの事は少しも云はない、十分位過ぎてから「あのお蝶さんは」と聞くと、少し薄くなつた眉の跡をぴくりとさせて「あゝ在るがねえ」と不快さうな顏をして「ほんとにあの子の強情で片意地なのにも困るのさ」と態とらしい溜息をふうッと吐いて「やつぱり何さ、自分で生んだ子でなくつちやあ駄目だね、忌にひがんでね、其に幸さんと夫婦に成てからは何だかつんと澄してね、妾の云ふ事なんぞ些とも聞かないんだからねえ――妾だつて年老てから樂をしようと思へばこそ、小さい時からあくせく育てさ、今じやあ押も押れもせず女一通の事は出來るんぢやあないか、其にお前……」と云かけた時横の襖か音もなく開かれて色の蒼白い見違る程やつれたお蝶さんの淋しい顏が瞥と見えて「まあ、方々さがしたわ、此處に居被たの」と何だか赤い形のある奇麗なめれんすの小さな着物の樣な物を持て這入て來た、伯母さんは悖然とした樣に愕然として人をきる樣な嶮しい眼を燦りと光して「ふゝん此處に被在もないもんだ、平生からそう云つて有るじやあないか、何だつて人の話しを立聞するんだい、チヨツ仕樣のない子だねえッ」とさも忌々しさうに白眼む、お蝶さんは呆氣に取れた樣な顏をして「あら妾今昇つて來た計りよ」と言乍らひよつと妾の方を見て慌てた樣に持て居た着物らしいのを向ふの袖の下に隱す樣にする伯母さんは目ざとく見て氣味宜さうに鼻の先で嘲笑つた「あらまあ戸塚村のお露さんじやあ有りませんか、まあいつ居被いましたの妾ちつとも知らなかつたもんですから失禮致しましたわ」と蒼白い顏に少く紅をさして帶の下へ袂を當て、向ふの手を疊へついて太儀さうに座る、伯母さんは不安らしい眼光で交睫もせず凝とお蝶さんの顏を視詰て居たがそうらしくないのでやつと安心した樣に赤い着物に目を移して「おやもう出來て仕舞たのかい、まあ早い事、もつとも御自分の赤ちやんのだからねほゝ」伯母さんは意地惡るそうに言の内に針を含んで態とらしく笑ながらふんわりと擴げる、妾は喫驚して思はず「ゑッ」と出樣とする聲をごつくりとのみ下して、竊とお蝶さんを見た、お蝶さんは眞赤に成て俯向た儘、細いきやしやな手を幽に震わして下唇をきゆつと嚙て居る「まあお前羽織も着ないでさ、ほんとにまあ宜く恥しくないねえ、見つともないや大きなお腹して」と益

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

々嘲ける樣に云ふので妾は既うどうしようかと惴々して俛首たまゝ半巾を弄つて居るとほゝゝと伯母さんは陽氣に笑つて「まあ久し振て來た露ちやん些とも構わないてさ御免よどれ御馳走の支度でもしましようかね」と立上り乍ら眄然と冷やかな笑をお蝶さんの長い襟足にあびせて、其の眼を妾の方へ向けた時二人の双眸はひたとあつた慌てゝそむけ樣とする妾に嫣然と媚る樣などんな者でも熔かされて仕舞相な微笑を漏してくるりと後を向た、體にしつくり合ふ糸



（天賞）町の屋根　京橋　くに子

繻のをりいぶがかつた亂立じまのゑりのかゝつた袷が、娉婷とした體によく似合つて黑繻子と紅無友禪の腹合せ帶を仇ぽく引かけに結んで、絹づれの音しとやかに裏梯子の方へ行く廊下を靜に步む、其の姿！是がどうして四十三に見えよう、妾の眼は知らず〳〵夢見る樣に恍然と其姿後を追ふ、風がさッと吹いて伯母さんの淺黃縮緬の襦袢の袖がはらりと溢れた。

其れから四月經た今年の一月に、昨日男の子を出産したと云ふ端書が來た、伯母さんがあゝいう樣てはお蝶さんが可哀相だからと母さんに願つて三四日御ひまを戴いて早速出懸た。

電車の中て、同年――結婚――子供――若き母、――など種々な想に耽つて行て見ると、さぞ悅んで居るだろうと思つて居た幸さん（此の人は伯母さんの亡つた御亭主の知人て此の家に番頭同樣に働て居た人）が仲の間の柱に背を倚せて萎然と俛首て腕を組んだまゝ深い思に沈んで居た、直ぐ御產所へ行くとお蝶さんは妾の顏を見るや、感謝の淚を目一ぱいに湛えてさも懷しそうに「露さん宜く來て下すつたのねえ、あゝ有難う」と計り細い手を出してひしと握つた。

「他家の人はね、好きてなゝつても子供を生むと可愛くて堪らないと云ふわ……妾だつて、妾だつて――だけれど、妾はね此の子の生れたのが怨めしいの――でも母さんがそう云つてよ妾位の若さて眞個のじやあないけれど、孫と名の付く子の顏見るのも、嫌だつて……あゝ――」妾が枕邊に座つてから二時間計り經つとすや〳〵寢入つて居たお蝶さんは夢中の樣に此樣な事を云つた、妾は產婦の容態を氣づかつて「どうしたの、え、其樣な事云ふ物じやあないわ」と云ふと、疲れた樣な眼光をぱつちり開いて「おゝ露さん？あゝ妾はもう――妾はもう、氣違に成りそうだわ」と見る影もない双の手に蒼白い額を力なく押えて、無理に淋しい笑をもらした、眼には露の玉がぎらりと光つて。

紙の若い孫嫁が、養女の結婚妊娠に對する不合理の嫉妬と嫌惡、復雜なる人情の弱點と云ふやうなものが巧みに含蓄されてゐる、養女の可憐な樣子も目に見えるし、所謂東京の下町の家庭の空氣も相應に出てゐる、筆の蕪雜が難てある、（評）

○腹痛（地賞）

大分縣　原田澪子

お雪が夜着引かけて寢んでから最早二時間近くなる微かに呻吟き乍ら下腹の痛みを兩手で抑えて居た。

昨夜宴會に行つて今朝歸つて來た邦夫は、机の前て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新聞讀んで居たが、何時の間にか長くなつて寢込んで終つた。お雪が身持になつてから五ヶ月になる、一日々々倦怠を覺えて時々腹部の疼痛に艱まされる、今日も先刻から下腹が引つ釣つて痛い、夫に頭痛さへする――是は昨夜の不眠が原因してるらしい――が、夫を夫に訴へるのが何だか降參でもする樣な氣がするのでじつと怺えて居た。一晩家を明けて置き乍ら、歸つて來て馬鹿に冷淡に構へて居る邦夫が、お雪には癪に障つて仕樣がない、反抗心は纔て心細さになつて、涙がハラ〳〵と頰を流れた、去り乍ら夫も一時旅の身は邦夫一人が便りである、お雪は居膝り寄つて輕く邦夫の脊のあたりを叩いた。そして低く呼んだ。

『貴郎々々』と

『何だい、』邦夫は吃驚した樣な大きな聲を出したが、起きようとは更にしなかつた、眼が非常に充血してる。

『妾し先刻からお腹が痛んで堪りませんの』と心細い聲で云つた。邦夫は案外優しい聲でこう云つた。

『産婆でも呼んで來ようか？それとも明日病院に行くか』今日は日曜である、病院には無論邦夫自ら連れて行く氣で居る、斯麼言葉を聞くとお雪は張りつめた氣がゆるんで拗ねて見たい樣な氣がしたので、暫時無言て居たが甘えた樣な調子で

『濟みませんが、産婆を呼んで來て下さいな』

『今直ぐにか』『はあ』

『よし來た』

邦夫は俄破と跳ね起きて勝手口から出て行つた、お雪は其荒々しい足音に顏を蹙めた。起つては止み〳〵する異樣な痛さをじつと怺えてると夫か歸つて來た。

『直ぐ來るつて云ひましたか』

『うむ、雜布がけして居たよ』

お雪は靜かに身を起して、浴衣の上にモスリンの細帶を締め床をのべて休んだ。程なく産婆が來た、五十五六の品のいゝ婆さんである。斯麼事に馴れない邦夫は一方ならず困つて居る、次の三疊に寐て居たお雪が氣の毒がつて起きやうとすると、如才ない婆さんは手て制した、お雪は淋しく笑つて起しかけた身體を復床につけた、そして夫が何とかお世辭の一つも云つて、慾にはお茶でも淹れて呉れればいいと、勝手のやうな、當り前のやうな事を思つてると、邦夫は不格好な手附て茶を淹れて出した。

『夫ではおさすり申しましよう』と敷居一つ離れたお雪の傍に來て、夜着の下に手を入れて揉み始めた、お雪

は心地よさゝうに身を打ち任せて、チラと夫の方を見た、邦夫はきまり惡いので向ふ向きに寐轉んで、讀み古しの雜誌を擴げて居る、浴衣の尻が大分垢ついて居る、あれも最う洗濯せねばとお雪は思つた、產婆にお菓子は何を出さうと思つて、お雲は臺所の中を考へて見たけれども間に合ふ樣なものは一つもなかつた、今更に旅で持つ新世帶の不自由さと、賑かな生家とを較べて染々年の寄つた母を戀しく思つた。產婆の來るのは是が二度目である、此前の時產婆は確かにお身持だとは申されませんけれど、多分お樂しみだらうと存じますと斯麼云つた、で今度は確然した答をする筈だが、何と云つて呉れるかしら？男か知ら？女だらうか？何方でもいゝから早く產み出して見たい！どんな顏か？女なら私に似させ度い、此頃急にふつくりとなつた乳房、夫を始めて含ませる時の心地！十八の正月はお母さんになるんだもの、なんてお雪はこう取り止めもない事に思ひ耽つて居たら復どつと痛み出した、けれども默つてじつと我慢してると、產婆は馴れたもので
「痛み出しましたねえ」と云つて急所を摑む。
「ええ少うし」と答えて邦夫の方を見たら、先方でも恰當此方に振り向いた時であつたので、お雪が急に眼をそらすと、邦夫は起き上つて火鉢の側に來て煙草を喫い出した、ピシヤリと打ち出す煙管の音が、お雪のたかぶつた神經にシンと響く、
「始終ブラ〳〵してるが入つてる事は入つてるか知ら病氣じやないてせうかね」と邦夫は婆さんに聞いた、
「オヤ赤さんお出來なさいますよ、未だ何方樣だか其所はわかりませんけれども、御出來なさる事は確かて御座います」と答えた。
お雪は何とも云はれぬ嬉しさと、心强さと、恥しさを隱してそつと夫の方を見た、
「やあ、それじや愈々お父さんかな、まあ坊主でも女でも出來さえすりやいゝ」と邦夫は欣欣として菓子買ひに出た。お雪は急に世界が明るくなつた樣に感じた。

初めて姙娠した若い妻の心理が巧みに描かれてゐる、旅の不自由な新所帶を傷み、郷里の生家を思ひ、或は夫の一擧一動に連れて愛憎の念の交々相起るなど、精細周到、姙婦の面目見るが如しだ、(評)

○妹の家（入賞）

豐後　佐藤みどり

お峯はいま暮れかゝりの緣先に出て、凝乎と自分の袂をかみ締めて、目には玉のやうな淚を浮べて居る。華かな夕燒雲がぱつとお峯の顏を照して、淋しい頰が

何處かで鳴いて居る。
お峯が妹の家へ同居するやうになつてから、もう二ヶ月あまりになる。
それが初五六日は流石は姉妹であつた。
「先さまがそれ程までにするに、姉さんだつて居れないのは理ですわ」
と妹のお袖も云つて居た。
それだのに此頃ではすつかり妹義弟の樣子が變つて來た。
妹夫婦はお峯には些つとも關つてくれない、關つてくれないのはいゝが遮問者にしてよく突慳貪にあたる。



（地賞）　往　來　　青　森　　松　尾　千　代　子

お峯は今からの自分の身の處置に苦しんで居る。
妹の家に厄介になつて居るお峯は常に這麼事を思ふ、
「奈何したつて妾はお袖のたゞ一人の姉だのに、も少しは親切にしたつてよさそうなものだに——と妹を怨んでも見る——けれども仍尚妾が惡いのだわ!、どうしても妾は意氣地なしだ!
斯麼事なら彼の家を死んだつて出るではなかつたに」お峯はそつと顔を上げて、ぼうと淡暗くなつた庭を見詰めた。

六つになる妹の子が庭の飛石傳ひに厨の方へ走つて行つた。お峯は其子を見て居たのだが、ちらりと其子の視線と出逢つた時、子供の目には、いやないやな冷笑を含んで居たやうて、お峯はその後姿を凝乎と睨んだ。

ふと妹夫婦の聲を聞きつけたお峯は耳を兎のやうに聳てた。

「お袖、もう燗が出來やせんか？」

義弟の聲がする、

「えゝ、もう斯麼に出來てますの、」

と妹は燗瓶を持つてくる樣子、そして小さい猪口の音がした。

「今日は肴のいゝのをこさへたな。」

「えゝ、買つけの魚屋が來てあなた、買つてくれつて拗ねるんですよほゝゝ」

「はゝゝ拗ねる——面白い事を云ふな」

お峯はぴんと彈れたやうな心地がした、そして深い溜息を吐いた。

「孝一々々」と義弟の子を呼ぶ聲

「夕飯ですよ、お歸りよ。」と云つたのは妹であつた。

「義姉さんは……」云ひよどんだやうな低い語調であつた。

「…………」

妹は默つて居る。

お峯は直、妹が腮て緣の方を知らせる樣態を想像したそして低いそゝるやうな妹の笑聲を聞いた時は、頭がくわつとなつて知らず知らず、手を握り締めた、

茶碗の音ががちやがちやと聞えた、孝一が歸つて來てお汁がいやだの飯が硬いのと云つて拗ねて居る、

それから鳥渡靜かであつた。

「姉さん」と妹が呼ぶ

「はい」

お峯は恐る恐る臺所へ入つた、膳に向つた時は妹夫婦は橫の方を向いて默つて喰べて居た。

子供がぎよろぎよろお峯の顏を見る、

お峯は默つて茶碗に盛つてあつた程、喰べてしまふと、膳を持つて立上つた。

「よござんすよ、どうせついてがあるんですから、抛つて置いて下さいよ」

お袖はほんの形ばかりに云つた。

お峯は音のせぬ樣に洗つて拭いた。

次の間へ出やうとすると妹夫婦は顏を見合して、辛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い顔をしてせゝら笑つてるやうに思はれた。
次の間へ來てから僅か許りの自分の荷物に凭れていろ〳〵の事を思つた。
妹夫婦の囁に時折、低い笑聲が交る、それがお客にはぐしぐし針てもさゝれるやうで一語一語聞き取らうとしたがどうしても聞えなかつた。
妹はがちやがちや故意と音をさして茶碗を洗つてるらしい。
子供を叱る聲が聞える。暗い晩であつた。

日本の家庭には絶えず見る所の慘事である、獨立の栄養を與へられぬ女性の、斯る運命と斯る境遇とを捉へて、相應に讀者を動かす所、取材筆致共に凡ならずである。（評）

【秀逸】

○姉さん

武州　福島操鏡子

僕は姉さんは嫌ひぢやない。姉さんの爲る事が嫌ひなのだ。僕は時々さう思ふ、僕の樣な年配（十五）で僕のやうな大人びた心配をしてる者が、又とあるだらう？と。實際敏雄や政一君などは、始終愉快さうに飛跳ねてる、否僕も飛びくらや毬投げては、皆に負ける樣なことはないけれど、ても何だか心持が、僕だけは暗いんだもの――。

三四年前、姉さんが女學校へ通つてる時分にやア、僕と二人同じ室へ寢たものだから、朝夕隨分喧嘩をやつたものだつた。それあ僕も其頃は今よりは、餘程亂暴だつたけれど、姉さんも隨分お轉婆だつたよ。

『高等の教育を受けてゐながら、千尋（姉さんの名）も溫和しくないねえ。』

と言つてはお母さんに叱られたよ。うん、お母さんと姉さんとは性が合ぬので言んだらう、と今では思ふがね。姉さんが平みつぶした樣な髮をして、靴を穿いて、ツンと濟して歩くのが厭だと言つて、お母さんが『實る程頭の下る稻穗かな』と言ふ樣な事を云つて、誡めてゐた事などあつたけ。さうかと思ふと姉さんが學校から歸つて來て勝手のお手傳もせず、二階へ上つて寢てるので、僕はお母さんの命令で、豆ランプを點けて行つて、枕元て破れるやうな聲を出し、

『山内一豐の妻は鏡の底より黄金を出して――』

などと、當てこすりに讀書した事などもあつた。

姉さんは斯う言ふ厭な事をしたけれど又直に後悔しては、お母さんや僕にあやまつた『妾が惡かつたからどうぞ許して下さい』ツて泪をホロ〳〵落すので、お母さんは笑ひながら『忘れるから困るねえ』と言つて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐたが、僕はそんな時には眞から姉さんに同情して、姉さんの爲に辯護した。何だつて姉さんは女の樣ぢやない、

早惚の早飽、思ひついた事は怖ろしい程熱心にし、厭になれば直ぐ止めて了ふ、愛想もなければ追隨もない、ぶらつきぼうの性だ。或時の事、親に捨てられたと言ふ、穢い乞食小僧を可愛さうだと云つて、作爺さんとこの作事小家を借りてやつて、毎日いろ／＼な物を持つて行つてやつた事があつた。それから義務教育を受けぬ子守ッ子を連れて來て、自分の本を貸してやつて、毎晩讀書習字なぞを敎などしてやつた事もある。『突飛な娘だ。』と言つてお父さんも笑つた事がある。

一昨年の四月、姉さんが、補習科を卒ふ時になつて、先生の奬めだと言つて、俄に高等師範へ入る目的をたて、何んでもお母さんと日夜論を爭つてゐた。お父さんは例の放任主義だから、自分の好いやうにするが可いと言つてるので。――その内に、田村（田村はお母さんの生家）の伯父さんと兄さんと同伴に來て、一室の内にお父さんもお母さんも一團になり、何かしらぬ相談を始めた。暫らく經つてから兄さんが室を出掛に、斯麽事を言つた。

『千尋さんが、さう言ふ立派な目的をお立てになつたのは、結構なんですから、私は其の充分ご勉強なさつて立派な敎育家に成られるのを心から希望します、待つの待たんのつて言ふよりも、之は斷然前約を絕つて戴いて義理などと言ふ覊絆を切つて了つた方が、お互ひに自由になれて、幸福だらうと私は思ひます、ハイ、私はどうしてもさう言ふ考へですから、後は何分宜しく。』

久しぶりで、兄さんとボールでも投げて遊ばうと思つて樂んでた僕には、默禮したきりで、詰らぬ顏をして歸つて了つた。何んでも姉さんが兄さんのお嫁になるちう約束があつたんだなあ。僕は此時程詰らなかつた事はない。だつて兄さんのお嫁になれりや可いぢやないか、それだから姉さんの爲る事が嫌いだつて言ふんだえ？　何その癖えらい先生になど成るもんか！、其年受けた試驗はお芋になつてね、今度こそはと一生懸命に勉强した去年は、到頭腦病で試驗どころぢやない。そこで流石の姉さんもスッカリ發心したよ、看護婦志願とは變りも變つたぢやないか。

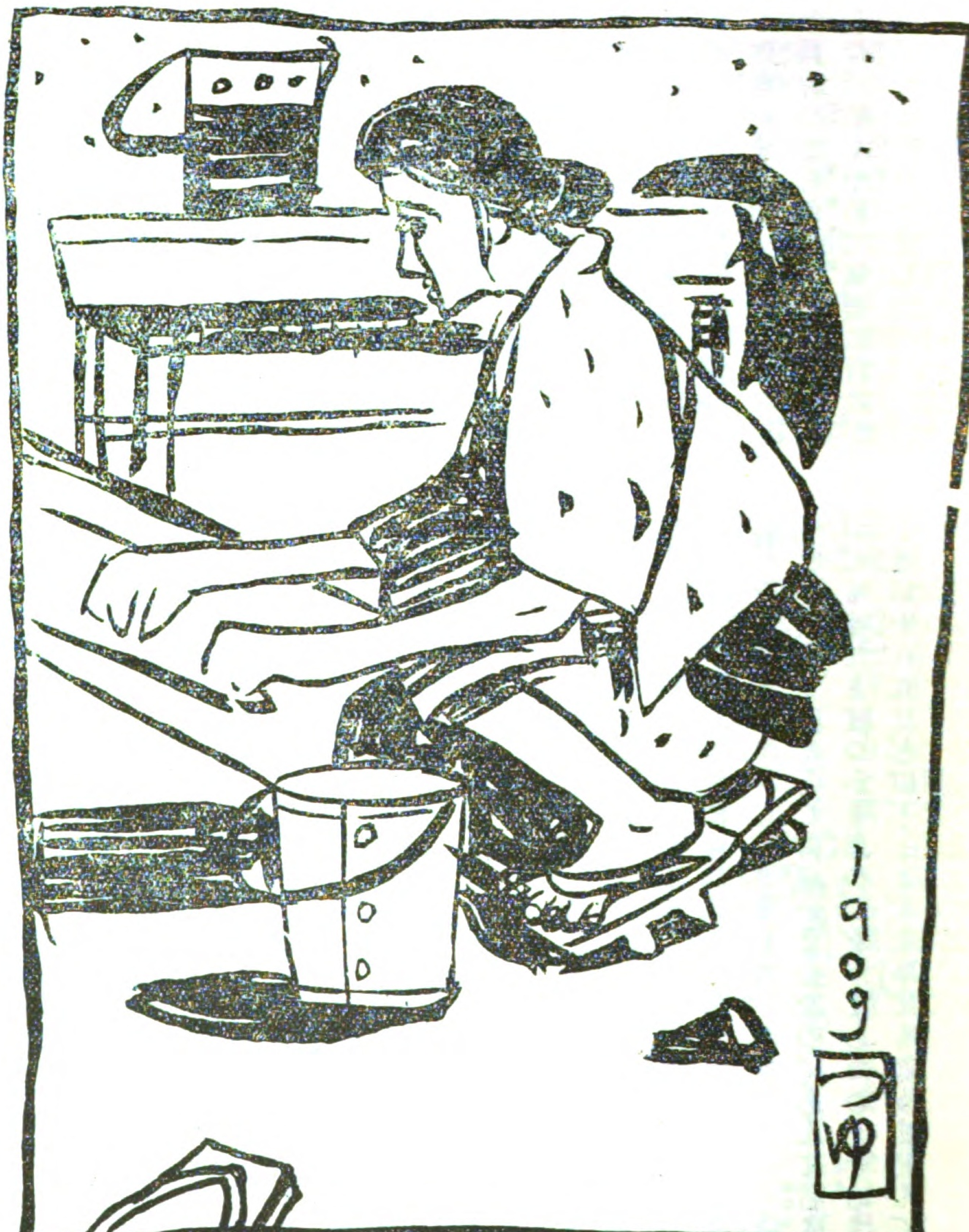
「ナニ長い事はないよ。」

とお母さんは平氣でゐるけれど、僕は看護婦なんて

何だか厭て仕様がない。あゝ姉さんは之からどうなるんだらう、田村の兄さんも此の頃はちつとも來ぬし……あゝ詰らない。僕はどうして詰らないのだらう。

幼弟から見た姉が能く出て居る、其の性格、其の行爲なぞが弟の口を透して髣髴と浮んで來る氣の利いた雛だ、（評）

（入賞）生活　芝　河南つゆ子



○をんな

伯耆　竹本春江

あれはもう四年も前の事、私が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

尋常小學を卒業した年で御座いました。村田先生と云つて女學生あがりの方が新たにお出でゝ、私の宅に宿つて通つておいてました。學校は貝田先生と仰る若い校長樣と二人きりで、村田先生は一年から三年迄の合級を受持つていらつしやいました。繪や作文の樣な、美術的な事が堪能でいらつしやる、それに女學校出の樣でもないおとなしい、地味なお方でしたから貝田先生のお氣に召してるといふ事で御座いました。貝田先生はよく私の宅にお寄りになつてお父樣と御酒を召しあがる、氣のさばけた方でよく面白い事仰る、一月に一度位はきつと泊つておいてるのが常で御座いました。よくお母樣やお婆樣家内中お話の相手に出てお待遇する。お父樣はちつともかまはない人でしたから、村田先生を無理に引つぱつて來て色々な話を持ちかける。家内の者が氣の毒がつてもちつとも頓着しない。村田先生は、兩手を膝においてきまり惡るげに俯向いてゐらしやるのが、常で御座いました。

そして村田先生は「教員程つまらぬ者はない。面到くさくていやて〱ならぬ。早くやめて氣樂に百姓がしたい〱」と何時も仰つてゞ御座いました。

其の翌る年の夏で御座いました。あの折の事を私はよく記憶えてをります。私は叔母さんと二人畑に行つて歸る途中で御座いました。日曜の午後です。村はづれの車小屋の處に村田先生がぼんやり考へて立つてゐらつしやる。その視線の止つた處――稻田の畔道を一浴衣を召した貝田先生が後向きに歩るいてゐらしつしやいました。三人は一緒に連れ立つて家に歸りました。あゝ今でもしみ〱忘られません。胸にあり〱と殘つてをる樣な氣がして……その頃、叔母さんは嫁つて居た家の叔父さんが不品行で、久しい間團つてゐた女を遂々家に引つ張り込んで叔母さんは離緣されてをりました頃。叔母さんは村田先生にこんな事を話しました。

「先生……わたしは戻りましたわ――、顯次が道樂は長い事でしたけれど、あれでも〱とあの子があるばかりにこれまで馬鹿になつてをりましたに……もう兩親までがあの女に迷ひ込んでしまひまして……」

唇を嚙んでハラ〱泣きました。

「まア矢張りほんとで御座いましたの。あんな話はあつても嘘だとばつかり思つてをりましたわ、せめてお子樣が十八九だとね――こんな事にもなりませんでしたらうに……」慰め顏に仰る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「兄も今迄の樣じや御座いませんし、厄介になるのは氣の毒てなりませんけれど、どうせ運て御座いますから私はもうこれて女の仲間からはづれて、一生このまゝておいて貰ひたいと申てをります。同じ苦勞する身なら、女は女らしく身を定めて我が家と定めた處で苦勞をしようと身をつめてをりましたんてすけれど…………」と言葉が切れて。「あの子は祖父祖母もあり父親もあり、立派に育てられて嫁ても迎へましたら、男の心に母親とも思ひ出して呉れる事がありますやら……私の胸はえぐつたつて、削つたつて一生あの子を忘れる事は御座いません、先生女には生れぬものて御座います。」つて泣きました。つひぞ御泣きになつた事を知らぬ先生のお眼にも涙が見える、私も何が何だかわからずに泣きました。

それから一月程後に貝田先生に奧樣がお出てるといふ噂て、村田先生がいらつしやるといふ話が宅てもありましたから、そう思つてるとそれは嘘て、貝田先生自身ては熱望していらつしやるのだけれど、お母樣が不承知との言ひ草て、それは村田先生がお可愛さうだと村長樣やお父樣が先生のお母樣に懸け合つて見なすつたけれど、先生のお實家があんまり貧乏てといふのを楯に遂々駄目になつてしまひました。

それからすぐ村田先生はお歸る事になりました。叔母さんはそれは力を落して名殘を惜しみましたけれど先生はさほどでもなく、「教員がやめられると思ふと、氣がせい／＼するなんて平氣て、つんとすましてゐらつしやります。「何といふ片意地な打ち解けにくい人だらう」と叔母樣は怒りながら、でも「村田先生はお可愛そうだ、あれは滿更貝田先生のお母樣ばかりの心からじやない八九分までは村田先生の方へなびいたお母樣のお心がそう／＼急に變るものか、女の操をむざむざ蹂躪つて置いて知らぬ顏てしまふのが男の本性だもの」つて自分の事の樣に憤つて居ました。

先生のお歸る日には全校の生徒六十人ばかり村はづれまで見送つて出ました。それからまた二三町縣道へ出るまでの間、私と叔母さんと二人お見送りしました。もう早稻の穗が出て、秋風の肌に涼しい頃て御座いました。三人は色々な事を話しながら歩るきました。

道に平氣をよそおふてはゐらしても、お胸の中は先生の擧動に讀まれて何となし、物うれはしげな、力ないお顏がいじらしいまて……叔母さんはたえず、殘り惜しい物立らないと云つた風に沈んてゐました。と

だしぬけに「先生……」と呼んで、ちとためらつて、「あなたはよくこんなに冷やかに物をこらへておいてますね」と申ました、「エ……」と仰つて先生の目は異樣に輝やいてボロボロ落淚遊ばすと、叔母さんの手をしつかり握つて、「みき樣……貧乏程情けない事は御座いません」つて、叔母さんと一緒にさめ〴〵とお泣きなさいました。お互に女と生れた因果に色々な苦勞を嘗めねばならぬ、たとへ別れた後々でもたよりだけはとかたくお約束なすつて別れました。それから一週間ばかり立つて後に、ごく簡單な禮のはがきがお父樣あてに屆きました。みき子樣春子樣によろしくとだけ御座いました。

二年ばかりすぎて、叔母さんは羽山といふ、三ッと五ッになる繼子のある人の妻となりました。昔の樣でもない家に厄介になつてるのを餘程居辛らく思つたので御座いませう。心から、心の底から可愛くて〳〵ならぬ生みの子とのほだしを絕たれて、人の生んだ子に愛をそゝぐべく餘義なくされた、叔毋さんは僞りの日を送つてると申すので御座いませう。私は叔母さんの心の中を思ひやると、矢ぱり女といふ因果の絲にからまれてるのだと思ひます。村田先生はどうしていらつしやいますか、叔母さんは來る度に村田先生の噂をいたします。「女つてほんとにすかない、尼にでもなつてしまつたら佳い」つて口ぐせの樣に、やけを仰つたあのお姿を見る樣で御ざいます。

作者の所謂「女と生れた因果」なる情趣を相應に味はせる作である、讀んで泌々女といふ弱い者の儚い運命を思はせる、（評）

○師弟間

鳥取　きさらぎ

文章家の房樣に細中先生が私等の國語科受持——つい去年赴任した許りて、今迄は技藝科の方の受持であつたのが——に轉られたのを非常に欣んでゐた、然し勿論房さんの事、何の意味があるのでと云ふのではなく、たゞ文學狂で、始終新らしい事に憧れてゐる房さんにはその早稻田大學の文科卒業と云ふ點が無上、好奇らしうおもはれた故であつた。

房さんはもう嫌になる程、頻に文藝談を持出す樣になつた、「昨日だつたはねえ、最近の詩壇に關いてお話なすつたのは、それから坪內逍遙の事や。……ほんとに、あゝしたお論、如何したつて現代の方でなくちやねえ……」とか、何とか、もう夢中に話してゐた。

細中先生は房さんの作文をもう幾度も作る每生徒に讀んで聽かされた、而して、いつでも、「余など大に閑

口です、」と、云ふ様なことを仰有つて、非常に稱めて在られた。

房さんの文章は全く恐ろしい程の天才で細中先生も眞から感心いて在らした様子、房さんは又その稱められるのが唯一矜なので、一體房さんの始め非常に欣んでゐたのには生徒時代に特有な自分の文才を示つてもらふと云ふ様な野心も多少含まれてゐたらしいとも思へる、

細中先生は以後も幾度も讀んで聴かせては、矢張り賞められた、然し房さんの矜らしげに見えたのはほんの、最初の程だけて、何も云はないけれど、寧つてそれを不快氣にしてゐる様子が見えだした、人には其様子を隠さうとはしてゐるけれど。

如何したのだらう、と、可笑しい様な氣もしてゐると。房さんは妙なことを云ひ出した、

「ねえさうは思はなくつて、細中先生は生徒に對しては些少とも生徒の様な念へは懐つて在しやらない事よ、きつと朋輩かなんかの如な氣がしてるに相違ないわ……或方面から……。」

房さんは他人の心をよく探む人だ。

「貴女なんか矢張りあれ稱めてるのだと思つてるの？

まあの故意た様な



無題　　青森　松尾千代子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

云ひ方、嘲笑るつたつて程があつたものだわ、彼麼皮肉な口振りて……寧ろお氣の毒になつてよ……思ひ切つた暴言を言つてみたわ……」

　私は以後細中先生が房さんの文章稱められる毎に疑惑つた、左樣思ふと、實際さうだらうかとも感はれないでもないが、まさか房さんが話す程、それ程に、皮肉とも、嘲笑りとも思へなかつたが。

　嘲笑り、諷刺、私は考へてみた、生徒の作物から、先生が……實際其麼事があるものであらうか、私は何だか解らなくなつた。

　何時の頃からだか細中先生は房さんのことを若い女詩人などと仰有る樣になつた、然しこれこそは他人にも知る程、わざとらしくきこえる、而してその文章を稱められるにも同じ事を、それは幾度も、幾度も、讀まれる、そして其文句について、生徒に嘲笑せようとでもなさる樣て。

　勿論、級生は房さんが稱賛られてゐるのを嫉妬んでゐるのだから、先生のさうした心に氣がついては、どうしても氣味よい感ひに嘲笑まれるのてあるし。然ども房さんは其風を些少とも口惜さうな風はみせない、可笑しい程平氣なもので、他人の事ても聽いてるかの樣に、他の人と同じに面白げに矢張り嘲笑つてゐる。……其丈け房さんが憎いが、また其だけ氣の毒にもなる。

「若い先生つてもの隨分面白いものだわねえ」

　房さんは妙に大人振つた悟つた樣な事を言つて笑つてる。「誰方先生？」と故意と云つてやると、

「總體によ……」、一寸時、沈默つて仕舞つたが、直、

「細中先生、生徒なんかの言つた位の事でもよくお氣になさるのねえ……別に何云つたと云ふのじやないけど」

　きつと、あの人の事、細中先生に對つて何麼奇拔い諷刺的を云つたのか知らない、昨日仰有つた成績の事「どうしても眞面目な方が勝利を得られる」、彼言は確に房さんへの當刺りだつたと思はれた、そして私は誰かと評つた「少女の如な先生」と云ふ語が妙く適中してると思つた、房さんは大の[illegible]入だもの、「成績なんか氣にする、其麼幼稚しい時代はもう遠うの往時でしたわ……」と、自分も言つてゐた。

　私は細中先生に何か云つてみたい樣な氣がする。

若い男教師と年頃の女生徒との間は、恐らく斯うしたものであらう、面白からざる師弟間だ、筆が今少し鋭く冷靜であつたら好からう、（評）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○淋しい家

（上）

高知　まさ子

今宵は亡くなられた兄樣が初盆のお祭り。

お座敷の佛壇には新らしいお位牌、御戒名の墨色も鮮なのが飾られて磨きあげた種々のお道具燈火に映えて金色の光がまぶしい。白い桔梗と萩がさびしげに供へられて香の煙がゆら〳〵と立ちのぼる。

床の柱には大學の制帽制服なつかしい兄樣の凛々しいお姿がハッキリ今にも物を仰しやりさう。

椽側にともしたお燈籠の火影淡くかすんで冷い夜風の渡る度に眞白い紙のふさがサラリ〳〵と亂れたつ。水の如くすみきつた大空に十三日の月が明う輝いて其光が座敷へ呉竹の影をゑがいてゐる。お庭にはシットリ夜露が下りてキラ〳〵と月に光る。ジイ〳〵とたえず虫がなく。あゝ去年の此頃であつた、さう丁度今夜の樣な月の晩兄樣とお隣の珠江姉樣と私と三人、この椽側でご一所に月を眺めながら樂しいお話に夜を更した。其時兄樣が來年の此頃はと微笑ながら被仰ると姉樣はパット顏を赤くされて併も嬉しげに笑まれた。そしてお仕舞ひに兄樣が尺八姉樣がお琴で雪月花の合奏そりやアよかつたわ、「袖打はらう蔭もなし」と美しかつた姉樣のお聲が今でも耳に殘つてる。兄樣と姉樣とは前から親しくして居られるが去年の夏おめでたい約束がきまつたさうでそれ以來一層お睦じく、式は兄樣のご卒業を待つてといふのであつたがとうと、兄樣は無常の風に誘はれて卒業式を前にひかへたまゝあはれ口惜しくも歸らずなつてしまはれた。あゝ來年の此頃はと樂しまれたのも夢、珠江樣はうちの姉樣になれなくなつたのですもの「兄樣が亡くなつてもうちの姉樣になつて頂戴つて私が姉樣に申上ると何にも被仰らないてハラ〳〵と涙をこぼされたそして私の手をシカと握つて「私はなりたいのだけれど……」と云つてお泣きなすつた……とこんな事を偲んでると不意に「お奇麗にお祭りがおできになりましたと皺がれた聲がするので驚いて振返るとお佛壇の前に作爺がキビラの糊のツンと立つた着物をきて座つてた。其側に母樣がうら淋しげなお顏をなすつてじいと佛壇をながめて被入る。「まあねえ、……もうこんなお祭りする樣になつてしまうて……」と母樣はもう涙聲。「へエこんなお祭り遊さうなんて夢にも思ひませんでしたがなア…何とも仕樣のない事で…南無阿彌陀佛々々々々」骨細遑

しい雨の手をシカと合せてひれ伏した。お燈明が風にチラチラとさ搖いて白い萩がハラリと打敷の大和錦の上に散つた。寂莫を破つてお燈籠のふさがサラサラと淋しい音を立てゝゐる。

（下）

流るゝ月日に淀みなく兄樣亡くなられてよりこゝに三年の夏、日はふるとも年はたつとも夢忘られぬみ面かげこの三とせは寂しさが上に寂しく、母樣はメッキリお年をとられてお髮が白うなられた。嘆いて返らぬ夢戀ふて逢はれぬ面影淸く諦めてもさて、雨の朝風の夕思とすれば馳せんとする兄君が上……。

この三年の間にお隣の姉樣はとう／＼よその姉樣に天晴な奥樣となられて今は可愛い坊樣抱かるゝ身。忘れもせぬ去年の春、御結婚の其夜、姉樣はお髮を高髷に、平打透彫の金簪一つ、お召は白を重ねた黑縮緬のお振袖、思ひ切つてはてな牡丹に胡蝶の縫入りの高裾摸樣、キリッと堅やにしめたのは金泥織のまぶしい樣なの、かつて兄樣がお土產の勿忘草の襟止がま白のお衿にキラリと光る。お首懸の金鎖歩む度にチラ／＼と、ダイヤの光るみ手に褄をとつて車に乗られた美しいみ姿、私はあかず眺めてあゝこんな姉樣がほしいと泣きたかつたが……早いものもう母樣になられた。この夏お里返りのお姿、可愛いのを抱かれて丸髷によく似合ふ奥樣ぶり、ふつくらと血色よく肉づいた頰に樂しげな微笑がたへず浮いて三年前の姉樣とは見違へる程の變り樣、私が上つても何だかよそ／＼しくて前の樣に打とけては下さらない。もう兄樣の事などお忘れの樣だ。けふもけふとて作爺が母樣に話してる。「奥樣死んだ程詰らないものアございませぬ。お隣の孃樣をご覽じませ、もう赤樣だいて立派な奥樣になつて被入るじやございませんか死んだ程つまらないものアありませんなア」「ほんにねエ」母樣はやるせなげの御吐息。折も折、お隣ては赤ちやんてもあやしてお出てか、ホヽ……と賑はしい大勢の笑ひ聲がさも樂しさう、私はツイと立つて表座敷へかけ込んだそして兄樣のお寫眞の前にピッタリひざまづいた儘……「あゝ兄樣……」と止めどなき涙にくれて――

吁!! 我家はとこしへに淋しい。

不合理な愚痴には過ぎぬが、さて人情の餘儀無き弱點である、一通りは哀れに讀まれた、筆の艷麗な割に人を動かす力が足らぬ、文章に多少コンベンショナルの句がある、（評）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

横瀬夜雨選



○規定　題意も材料も律格も凡て自由なり要するに風情を歌へば可なり三十行を越ゆるべからず一行には一句以上を書くべからず凡て振假名をつけること字體は明瞭を要す乙種の賞を送呈す

○赫き懸崖（天賞）

信濃　太田きし子

熟したる木の果實はすでに墜ちにけり。
熱蒸るゝ日光ことごとく吸ふみどり葉は
汗かわき素裸に塵埃塗れつき
つかれの吐息するを見よ。
午後三時――、
ひとすぢのいとにひかれゆく如く
間斷なきものゝうごめき
日光は今し東の山嶽に强う射かへれり。
（目とぢ給へや吾れも今、
重なるみどり葉楯にとりぬ、
いたましとのたまひし赫き崖、
赫き懸崖。）
みづ〳〵し若きを青き大地とせば
くづれたる赫き崖は
何にたとへむ。
肉そげてやせし地骨の曝露に、
あたるは、强き光線と――雨と風と
また――垂氷する冬の日と。
爛れはてたる神經には、
ふとの刺戟もえ堪へざり、
みどりばそよぐ朝時も、
赫く爛れし痛き神經、
無言よ、永久に無言よ、
（目とぢ給へや、吾伴侶よ、
人に理解れぬ胸抱きて、
謀叛をつねにさけぶべき）

（七月廿二日土用三郎の日）

赭き山の崖を仰いて、神經のたゞれたるにたとへたもの、獨斷の句も有つてさう傑出した作とはいへぬ、がつとめて人の言はぬことを言はうとする努力は買てやる。山田邦子今來りて都門にあり「ゆきてはかへらぬ人の世の運命は同じ我も亦……憂愁のくびうなだれて、消え行く夜半の灯火見たり」とうたひて、一躍して群を抜いたのは三年の前である、君も亦やうやくすゝんでたやすく人の追隨をゆるさぬ地位にのぼらうとしてゐる。洋々たる春の海は君の前にひらけたり、さらば行け。

○脫獄（地賞）

岡山　高木清子

君よ――、
日毎々々煩えの室に琴ひく君よ。

君も我も同じ少女
戀の渦よりぬけ出てし緋の少女。

君よ何を憂ひいませる、
若き二人が胸と胸、
菱と、菱と相擁きて、
行手さびしき秋枯の、
野をこそ行かめ。

君よ何を思ひいませる、
我も少女子二とせを、
かなしき人の胸に巣くひて、
戀の言葉につかれ果てぬ。

いざ君よ打つれて、
限りなく高く淸き靑空を、
羽音さびしく飛び行く鳥の如く、
打つれて辿り行かずや。

君よ同性の二人、
相携へて秋の野を行く、
そのさびしみを、
心の限り味はゞや。

戀の家を牢獄にたとふるは古けれど、されど囚はれたる戀より脱れて、女どち秋の野を行かんといふが面白し、この君はたして才ありれがはくば他力を借らずしてまつしぐらに進め仔細ありてかく言ふ。

○心の波（入　選）

和泉　金田よし子

白い雲も、　みどりの空も、
皆灰色にぼかされて、
冷たい風が身にしむ　秋の朝だ、
何か書かう？と　思つて
机の前に坐つて、　紙をのべ
頰杖をついて、　じつと考へる。
澄み切つた　心の水の上を
いろ〳〵の　思の舟が、
流れて行く。
ふるい　悲しみや
苦しみの舟が　通つて了ふと
今度は新らしい　樂しみや
喜びの舟を　通さうと
波がゆらぎ初める。
がどうしても〳〵通らない。
すると何處かへ行つて、
さがしてこう——と、
又強く動き出した、
そして「何處かへ行きたい」
と音を立てる。
もしこんな時に、
「何處へ行きたいの？」
と尋ねられたら、　何と答へよう。
「總ての地へ同時に行きたい」
と答へるより　外にあるまい。
心の波は　さらに強く
動き出した。

どうしてこんなのが出來ました、進歩の速度がかうだとすると、きし子さんにべつかこうをしてやれますよ。

【秀　逸】

○黄なる印象

攝津　みな　しご

日は曇る、午下り。
家根に啼く群鳥、はた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

轍の響きれきろくと、
あゝ、ほてりたつ窓のへの――。
たゆげに伏して目閉づれば
腦ましく綟れし記憶を、
手繰りくるものありて、
ふと浮ぶ黄なる印象。
しめやかに小雨する日なり
黄色なる一本花の、
わびしくにほふ野にたちて
君と見てふと別れけり。
瞬間のことなれば、
面影は消え失せぬれど、
ともすれば――
云ひしらぬ心の底の慄きに
浮び出づる黄なる印象。
日は曇る、午下り。

努力の結果やうやくあらはる、君の爲に祝す。

○小鳥

金澤 むらさき女

憂に沈む夕ぐれの
吐息の色は灰色に
疲れし町を十重二十重
包みてやゝに底ずりゆく。
なだめの涙湧かしつゝ
啜り泣くなり萬象は――
――あゝ汝も亦敗殘の
哀れの子かと僅にも
赤く殘れる西窓に
胸わなゝかせ飛入りし
小鳥を撫てぬ――骨太の手に
傳ひ流るゝ戦き我和胸の花
かすかに慄ふ。……
あたりさまよふ死の影は
とりつきぬ〳〵かれが眸に
水々しかれが眸に――。

骨太の手とあるから男のようでもある、柔胸とあるので女かとも思ふ、垂死の人の病室に飛入れる小鳥をうたへるもの。



收穫　埼玉 野原夕花子

○壁の花

近江 西村悦子

花の魂戀の小琴を
朗らかに胸に彈くとき
よき歌の生ると思ふに
何なれば紛れて去ぬる

大御手の常世の花を
はた清き少女の戀を
擾したる罪のかせ負ひ
呻き泣く遑あらんや
ガンヂスの砂の數ほど
白妙の胸につゝめる
百合さうび壁の花ぐさ
有りとしも見えでうつろふ。

「百合さうび壁のよき歌、囚はれぬ悔恨の色」とあつたのをかうなほしたのだ、原のままではなんのこつたかわからぬ。透徹せよ。

○此色

淡路　千鳥子

那方此色お好きですつてね。
姉樣が嘉代は小さい時から此色が好きだつたつて昨日手紙の中に封じて
有りましたの。
實に良い姉樣だと私は、
心から感謝致しましたは。
美しいリボンでしよう
それに嘉さんは大變結ぶのが得手だつたから結んで貰つて御らんつて。
有りましてよ
結んで頂戴ね。
實にお得手だ事、
一寸よく似合つて。
そう。
嬉しい
良人此色もいつかはさめる、
時が來るでしよう。
しかし、
私はたとひ此色がさめたとて
那方と私しとの中は永久までも
さめない事を
契ひとう御座いますの。

おむつましいこと。

○砂原にて

熱海　木村綾野

夕餉しておとづれぬ、砂原に
わびしき心、けふも濤に語らんと
戀もなく、希望もなき、
うつろなる此胸。
夕闇は、磯にたつ美ひとの
身をはみて、波をつゝみて、
行方もしらず流れゆき
沖合遠く、波は顫へり、
今、えもいはれぬ淋し心を
泌々とわかしめぬ。
ひたぶるに暗を慕ひて——。
風ふきぬ。
淋しいかな。
うつろなる胸をたゝきて
丈高うくづれし石崖の
まやみの穴につと入りぬ
暗を慕ひて——。

青春何の心ぞ、暗を慕ふ。

○まよひ

臺北　稗貫みつ子

宵なりき、人無き間に開かんと
たと小窓によりしたまゆら、
「こは危ふき誘惑ぞ」
と心の叫び高くして、
持つ手はふるへ目はくらみ怪し亂る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るわが心。
開かんか。開くまじきか、
たゆたへば、
「そも汝は何をかためらふ何故に艶
なる若き日を華やかなる戀知らで葬
らんとする」と心の底より低く囁く
あり
空には月冴えて、
ひらかぬ文は窓の上に、

つけ文をよこすような阿呆の手紙はおはなをかみたまふが第一よし。

○その心

岐阜市　篠田とみ子

メリンスの浴衣、下髮金絲のリボン
上げ下す手の品よく紅の頬は床しか
れども
恐ろしき惡魔の仕業!
姉が筆、將に穗先開くを
あゝもすも墨にひたせる
たまゆらの心の底にひそめるは、何
照り續く夏の日はらん／＼と燃え
胸を心をとかしつゝ冥途にさそふ
幾百里木蔭なき砂の原
行きたふれ毒氣に滿てる蛇の
今死に按ふ刹那なれども
己れより猛きに逢へる心のおびへ
身にそへる毒ふきかけて
猛きに死をば……我先出たじと
くわつと眼を閉ぢつ開きつ
狂ひに狂ふそれの如

仰山きはまらずや、姉さんの筆を弄つただけの子供なうはばみにたとへたのは何ぼ妹でもひどい、誇張も程度ものです、中毒してはいけませんと妹が言ひます。

○夜の書齋

宮城　手戸まさる

さら／＼とペンをはなれし
エツキス、ワイは紙の面黑うなる迄
筆のはこびはツト止みて何考ふる夫
の顏
夏痩の淋しきまでに白かりし。
水色表紙の歌日記
綴り終りて增鏡開く手さへも寢たき
に
時を刻むセコンド
頁くる音ペンの音
難解にくるしむ夫のといき
ふけ行く暗を破りて
靜さはさめぬ時打つ音にされどあゝ
さびしさはまさりぬ
杜絶えしペンの音さら／＼と
一しきり急がしう……ブツト紙の
面は破れぬ
黑う跡をのこして……ペンは置か
れぬ
燈火ごしに見る夫の面凄き迄青かり
し。

あなたをひきつけておいて代數を考へたつてたうてい出來つこはありはせん、御亭人は氣がつかないのてせう。

○かひな

小草子

白き布につゝまれて
手術臺によこたはりし人!
あゝ其右手
白く美くしかりし右の手は
赤土色に變りはてゝ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

骨もくさりしと醫は云ふを
一度筆をにぎりては
若き老人
いくたの人を
泣かせ笑はせくるはせし
やさしのみ手も今日をかぎり
君が體と別々に
はなさん運命いたはしや
目あぐれば
コロヽホルムの香は高く
醫は今刀に手を掛けぬ
惜きかな君が腕は切られんとす。

○姿見　奈良　中富よしみ

胸を射る君がみ姿――
窓の外の青葉のかげの
切り株に腰かけて、
詩集ならんひもとき給ふ
その懐かしのみ姿
かゞやかの日の光見る心地して、
まばゆさ覺えも得せず、
燃ゆるばかりの、懐しさと戀しさと、
爭ひの念とせめぎ合ひては、
やるせなき。

あゝ今こそは心和みぬ
まばゆさも覺えず、恐ひもせず
心限り見るを得し、
戀しや姿見に宿る君。

○淋しき子　府下　三ケ島よし子

巻きし髮をはづしたる
家なる人は見えずして
われも隱れぬ垣の中。
涼しげの衣とりぐに
色美しき友などの
魂むかへする宵なれば
山川遠く隔てたる
母のみ墓の草を思ひ
近きみてらの塔高き
月にかゝらむ雲を怨み。
秋に生れて春しらぬ
我れは淋しき子なりけり。

○はぢらひ　神戸　田中ますゑ

さりげなく愁ひ悲しび
胸にひめ大岩の上に
我はたゝずむ
大理石の像の様して――
あゝ月も我を嘲むか
あゝ波もわれを嘲むか
誇る子の弱き心を――
あゝ今宵始めて知りぬ
この磯に恥らひをしも
若き日は貝殼に
砂盛りて遊にし濱なるを
波と月とは默しつゝ
我を誘へて恥をしも
今は數ふる

○亡き君　東京　島貞子

消き戀路の憧れの
美くし君がはぢらひ顔
月下に語りしそのゆふべ
眞夏の雲の鵬の如
廣がり飛ぶを眺めしか
眠るが如く世を去りて
冷き君が屍に
凉る思ひや死に迫る

○朝の海　越後　木島しのぶ

サラ〳〵と小石を運ぶ――
優しい小波の……さゝやき
山の端からお日樣がニッコリ現はれて
若き男の波を追うては又追はれて――
しづかな……靜な朝の海
ボーッとして果しない沖合に
浮き出し如く船が現れた
舟子の歌も耳元に聞ゆる――
いつともなく雜閙して來た
やがて――魚の山も……築かれう
――ああ朝の海

○夕月　紀伊　田中富美子

渚によする上汐に
ひた〳〵つかる青柳や
入江の雨、波も靜かにたそがれて
星まばらなる天の原
月も凉しきけしきかな。
岸の蘆のおばしまに
美しき――人のかげ
京の大臣の愛姫。

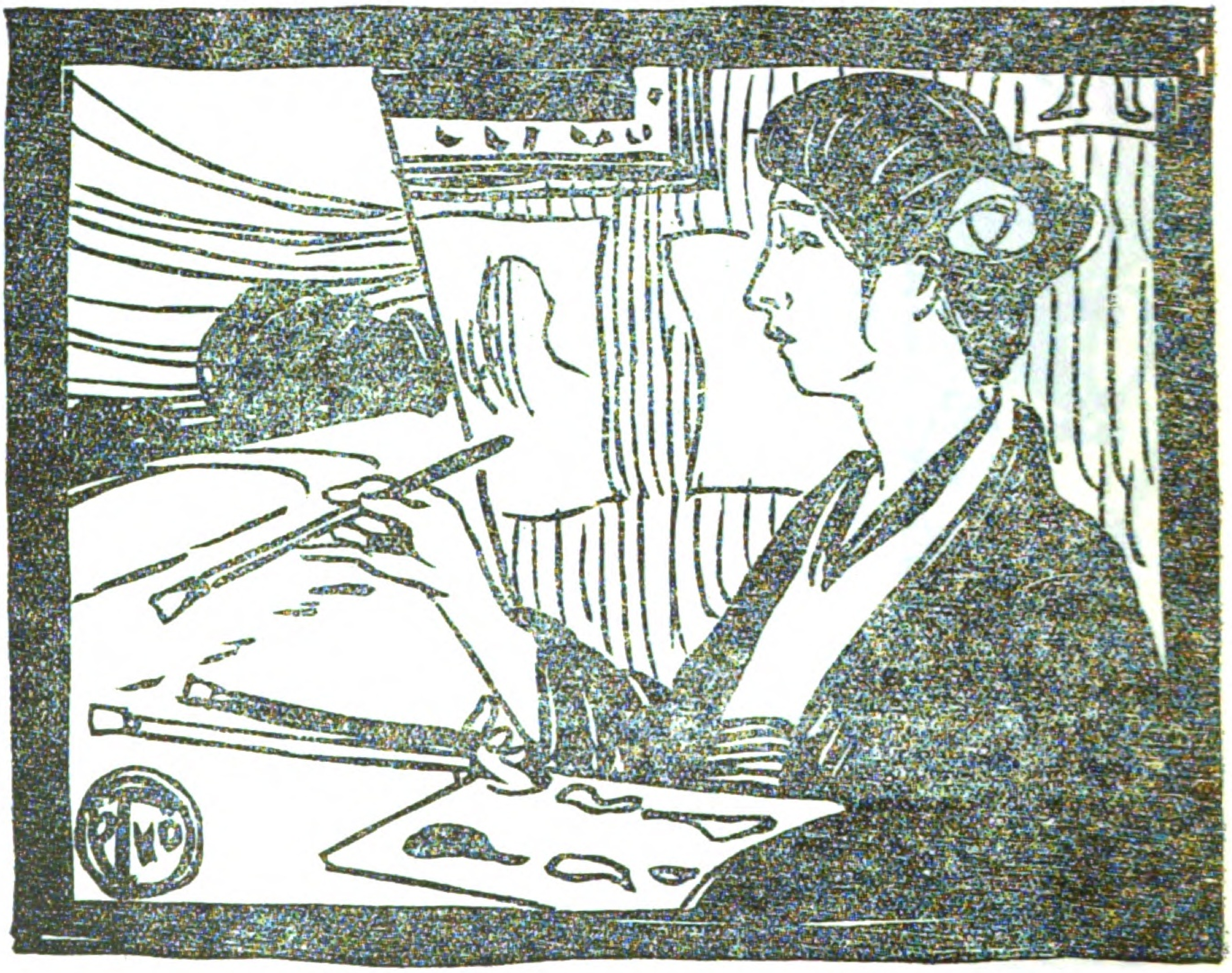
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

〇この思　小石川　海老澤得子

寂しいとも悲しいとも
此の思を胸に抱いて
心ゆく迄泣いて見たい
思出が次へ次へと走る
見じめな自分の影が
忽然と消えてゆく
後には惨しい今の吾影
涙が痩せた頬を流れる
一針〻〻縫ひ込んだ樣な悲が
堪へ難く胸を壓する
悲のみ不安のみ
かくて吾が春は逝く

〇魔の蝶　信濃　東條周子

弱き少女はひた泣きぬ
とりてしは、一條の文殼なりし、
僞り多く書きつられたる
……「男とは弱き物にて」
かく、よみて少女子は怒りの星光、
するどくも、
つと…　その文殼を破りて、
……よゝと許りに泣き伏しぬ
やをら赤く燃る火の中に、
つと投げ入れぬ。
其の文がらを。——
さら〱と音して然えぬ、
文殼は



畫室　孫津とよ子

わな〱と、
くらき蝶の如——クラ〱と魔
の
笑む如く、
笑まひつゝ、舞ひ立ちにけり
舞ひ立ちにけり、
くらき魔の蝶

〇胸のほのほ　羽後　すみれ

苦しき息炎と吐きて
かき裂かん胸のおもひや
黒髮はおどろに亂れ
逆立眉血走る眼
熱の火はわが身を燒きて
わな〱と肉はふるひつ
憧れたるのぞみは破れ
禍神の荒しき征矢に
射すくめられし十九の胸の
巡る血は沸きたちかへり
幻や——恐ろし人の
そゞろ笑み嘲る如く
わがむくろ岩にあたりて
骨碎け肉はちぎれつ
月に雨に洒され朽ちよ
その魂は惡魔となりて
世にながく人を咒はん
波よ風怒れよ荒へ
汚れ世は火と化せよ

〇君が魂　靜岡縣　清子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あ、といふひまもなき、たまゆら、目のあたり
すぎし光りの玉、なが尾ひきほと消し。
月は今雲をはなれぬ。‥‥
胸に手をおき、といきしぬ、
今消し光りの玉、美しく輝やく玉、君が魂はた
我魂、
もろともに消えばやすしと。

○まひる　本郷　柏木　折香

夏中の強き光に、
苑のうちくしきかをりす
白壁の反射きらゝに
梢のせみじじとなく
枝たれし門辺のやなぎ
そよろとの揺も見えず
大路行く人の影たえ
さながらや君にと燃ゆる
戀の火かダリアの花の
日紅うまひるのかゞやき。

○雲　京都　千代子

おゝ、くもよ空ゆく雲よ
ひえい山にかゝるくもよ
うつせ我がふるさとの山の形
なつかしき雲よ
長門に住む父母の
影にばかりも似せよかし
西の都の
賀茂川のほとりに
家戀ひしと泣く子を
父君は知りたまはず
母君も知りたまはず。
われぞ立つ新月は
空色の雲の戸やぶりて
撫子さく河原に。

○虫の音　備前　すみれ子

別れしは、櫻散るうす月の、夜なりけり、
おもひ出の、長き野は、虫の野と、なりけらし、
月さゆる、夕ぐれも、露かわく曉も、
ちろ〳〵と、虫ぞ鳴く、あゝ君はいつ方に。

○運命　相模　淀島　千草

夢は四とせの古にかへりて、君にすがれども、
人妻と定められてより、兄の心をも、許し玉はず、
さばわが命絶ちてよ、迫れどそれもきゝ玉はず、
味氣無の涙や、終に亡ぶるわが戀。

○失題　信濃　山本　操

秋の夜白き燈火の、影に殘れる人あはれ、
父もなく母もなく、十二となりし人あはれ、
花もさゝざる下髮の、首にからまる人あはれ

○とけいの音　信濃　たけ子

ふと吹く息に、洋燈は消えて、
ま暗き岩の、洞の底、
魔ひそめる、ひやゝかき、
洞底に、
つき落されし心地、
——不安——恐怖——の念、
かちかちと、
時をきざめる、時計の音、
恐ろしき魔の、
わが命とらんと、
かけくるあのと‥
影やあらむと、目開けど、
目に浸み入るは—黒き色、
ま黒き中に、いまにも、‥‥
かちこちと、かけくる魔の
あのとの如きとけいの音。

○夕雲　枯尾花

黒雲湧きぬ。
日いづる國の曉に、匂はむ花も散りそめて、
はては實も熟む、初夏の、
木かぜよ涼し、みどり葉よ。
今暮れなんの柴の戸に、
牛歩を、うつしゝが、
あゝ越すらむか彼の峯
闇に漂ふトーキの香
甘き滴に醉ひやせむ。
逍遙し山の麓
早夕雲は天地を
被ひぬ我は涙しぬ。
我十五年祖母君の情もふかき
兩の手に別れし今ぞ
なへかしき越のよれ山。
夢かよれ山の山外の
燈こひてたゞずめる
あゝ古里の山よ川よ。



○規定　抒情、敍事、敍景等凡て他欄になき文章一切を含む字體は明瞭に認め必ず句讀を切るべし一人一章に限り半紙又は原稿紙に認むること匿名を要する者は本名を別記せよ二十四字詰三十行限甲種の賞を送呈す

○墨の色（天賞）

備後　きく女

「お宿は何處ぢや」といふ誰かの洒落が根となつて、反對もあつたけれども、遂に「舌切雀」と命名された此の金蘭簿、二寸と三寸の小形にして表を緋鹽瀬に忘勿草の油繪は、クラスメートがわざ〳〵此の春の袂別に際し、こさへさせた物である。中の名札は行末の紀念にと卅六人何れも直筆の取り交つて、濃いのや薄いのや、蔦かづらのやうなのや、樫の木のやうなのや、何しろ卅六種といふ書きわけ。然もそれが各自に性質を現してるので、一目見るといつも直ぐ三年の樂しさを思出るのである。

いの一番に挾まれてあるのが池田さん、「乘」と書き切つた處から山口縣熊毛郡阿月村と、一寸觸つても痛いやうな角張り方、元は何うしても短い袴の紐を眞前にキチンと結んで、いつも白襟に細い縞をこゝした池田さんにでなきや他に一寸書けない字。次は幸通り井上すみえ、之は又細莖の秋の艸、なよ〳〵とした風情は、何處迄も文金式、矢の字式、ひいては色の青白い、背の高い、すみえ式。「雨の夜を、京に生れて」、とでもいひ度いやうな。之と反對が中程の津村さん、肉太いといつたらまるで何かの番附宜しく、いつかも「墨代がたまらないでしやう」と皮肉屋の咲子さんにやられて、「御心配御無用、母の弟の嫁の叔父が文房具問屋の番頭の二男」なんて濟ましてゐらしたつけが、實際すみえさんの隣に置いたらいゝコントラストである。おとなしいお手は、難波さん、三戸さん、門田さん、後藤さん、何れも半くづし。達筆といつたら吉田さん、安部さんあたり、殊に吉田さんのは飛龍とでも例へやうか。嫌に氣取つたのが澤田さん、假名まじりの洒落書きが

村瀬さん、岡部さんは例によつて蜀山人、但し正直にいふと怪しいもの。

亂暴なのは君島さん、たつた一人、インクで然も傾斜三度半の筆記體、五月蠅いと云つちや髮を一束にグル〱卷いたり着物の前をツンツルテンにしたりなすつた姿が目に浮ぶ。

一等終りが峯子さん、格好の難しい伊豫國を事なくこなした處から、鈴木とくづしてある邊り、はやらず、迫らず伸びりとした工合、何と云はふか確に一種の超絶した趣がある。さう、高田さんの美しいお手を牡丹と見たら之は正しく木蓮の花、それも尼寺に經寫す君が御衣に薫れる。此の方には妙な癖があつて、新しい筆といつたら必ず穗先を切つてお使ひになる。

其他異彩を發つてるのが蚊の涙と仇名をとつた三浦さん、夕立の今井さん、カイゼル式の森さん、ほんに之は何時でも何處でも御自稱クラスの三筆である。アラ他の事計り、自分の金釘は、何筆と云はれてるだらう？

斯う云ふ事は女學校生活の實驗ある方でなけりや書けない、實驗があつても、これだけ才分が活躍してゐないと書けない、此作者は地方ですが、學校は東京と想像します。まうでせう。（評）

○見たる人（地　賞）

阿波　長曾我部　菊子

いかけや

華やかだつた青春の時にこそ私の注意といふものも若い男美しい女の姿にばかりそゝいで吹けば飛ぶ掌上の緋の眞綿の樣なありさまであつたが、――あゝ年は一つでもよけいとるだけ私は眼が開くやうで嬉しい。

私は、もう爺さん媼さんの好いお友だちの花代となつてしまつたから私の注意は質實になつた。

「なにの音よ！　玄關ですつぽ〱聞ゆるのう？」

美和の方にふりむくと

「おなべなほしに來て――るのや!!」

あごを無邪氣にひいて囁いて妹はにつこり。

私は机をはなれてついと玄關に出た。

「お爺さん！　今日は。

「へい、これはどうも。

これはどうもと爺さんはやまりよその老人なみに、所有の言葉をもつてゐるので、これはどうもと、はげた頭をつるりとなでて、

倉とそのひきだしの横に印してある大きい道具箱の前につくねんとすわつて、ふいご(火をこしらへる器)の柄を、すつぽすつぽと突いたりひいたりすると、くわつくわつと眞紅い火がむかうの方で光を放つてゐる。

「爺さん――まどちら？」

「これはどうも、へい。芝原でござります　・・・。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

爺さんの顔は一寸恐らしい。色が黒赤くて頬骨が出張つて小鼻の上に赤い一筋一寸ほど傷のあとがみえる。

「爺さんは怪我してるんね、どうして？」

「へえ——へえ！婆さんと二人もんて、ついして婆さんがもつてゐたつむ（糸をつむぐもの）にくらがりに行きあたつてひつかいたてござります。

すつぽ／＼もう火はくわつ／＼してしまつてから爺さんは器の中て鹽酸にとたんを入れる。しゆつ／＼とわくと、火て焼いたのみをまへの鹽酸の中に入れてろうにふれるとろうがぼろ／＼と溶けてくるのを、いそいでなべの、こわれた箇所にくつつけた。

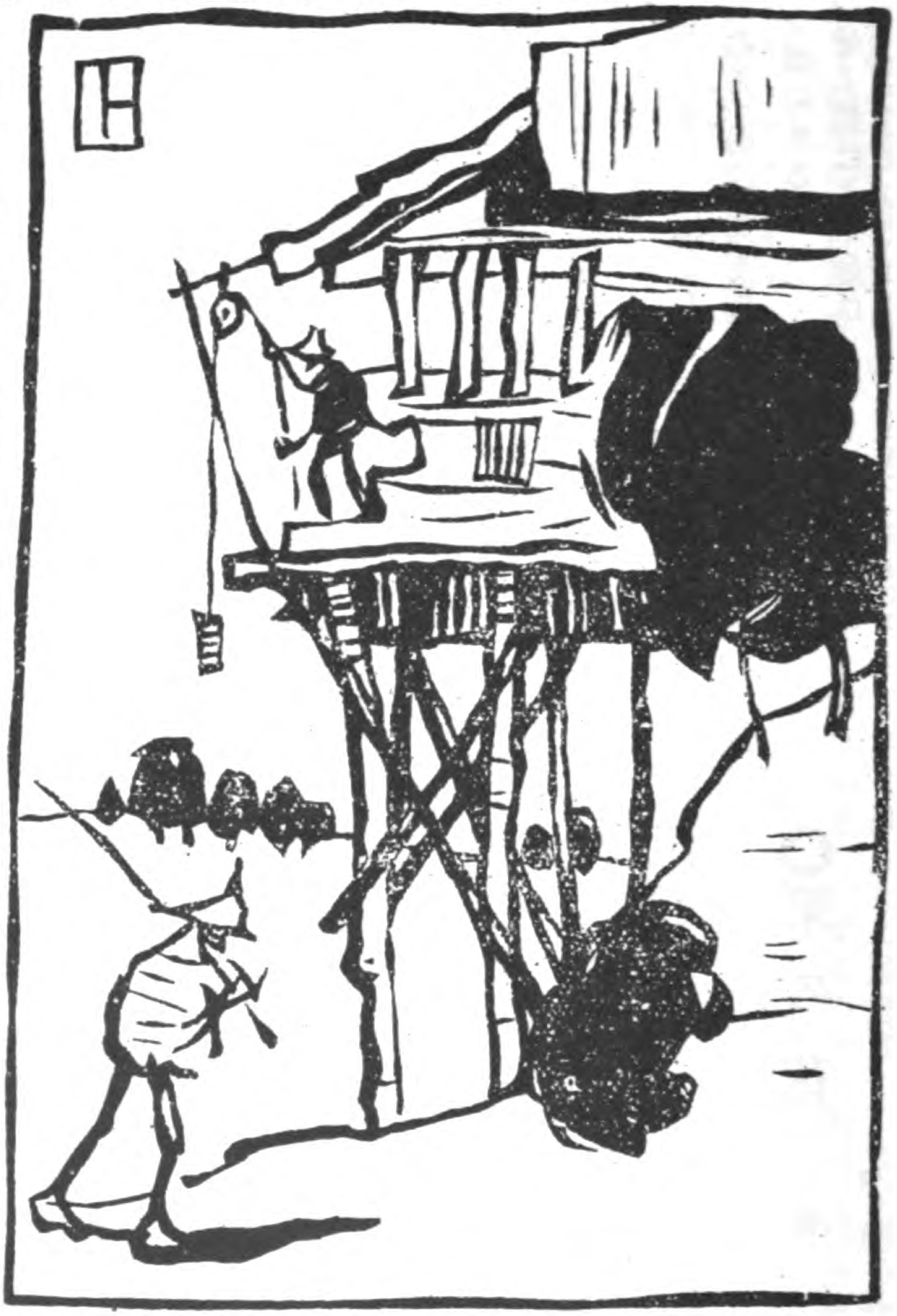
「爺さん、おもしろいね。それだけしてお金いくら。」

「これはどうも！」

と私の顔を満足さうに一瞥して老人笑ひして、

「四錢でござります。へい」

愛らしき爺よ!!　私は忘れまい忘れまいと、その醜い姿を注目した。生れてはじめて爺は人にかく注意されることだらうがさうとも知らないで。すつぽ／＼とまたふいごの柄をならしはじめた。



河岸の家　　青森　立花とも子

舞妓

ぱッと明るくなつた常夜燈の中が――。黒い着物をきてる女が兩方の手毎のばして火を點したのであつた。常夜燈は左右にまんまると三日月との象を彫りぬいてあるので、今點つた火影で、その日と、其の月とが、ほの〳〵と紅るく光りを放つのである。

女は身をすこし退いて、手を際にさしこみ、つつと顔を仰向けた。――眉、口、頰が東を上る七日の月にてらされて蒼白い。年は四十程の痩せさらぼうた姿―ぞつと私は、水をかけられた様に、しーんと骨身ふるへて立ちすくんでゐると、女は、あちこち見まはして、しんどさうに

「何時頃だらう……」とふるへるやうに心細げに、

「あ――ああッ」と悲しげに聲をせらした。

それからそろそろと西の方へ廻つて地面に下りて、またたちすくんで上向いて常夜燈をみる。灯は、石龍中に明滅してゐる。

冷なる天にかゝる月の光は、ゆるしもせずに、女の額を青白く光らしてゐる。女は歩き出した、よろよろと。

「姉はん消しまつせ！姉はん、姉はん――ん―」〇と十とを大きく摸様した浴衣の大振袖に、桃色の帶だらりと結び下げた光奴(舞妓)が「美山」としるしたかけあんどうの下にたつて家の中へ問ふてゐる。

中から聲はせぬ。ぽんぽん、じれつたさうに下駄を地でならして、八尺の袖くるりと腕にまとひつけて、舞の足どりでゐる。あちらこちらを見まはして、

「姉はんにい――、炭谷も消しましたん……の……」

格子の中を見入る。夜は二時すぎである。さつき花からもどつて、衣裳をそつくりとつたばかりで、奇麗な島田に花かんざしが一つ名殘とのこつてゐる。足をうちはに、つんと反り氣味に嬌態をして立ちすくんだ。

美しい事!!舞妓は。

淋しい、辻占賣の聲が曲り角に細く長う消え入る。

我にかへつたと見え、白いうちはをあげて、ぱッと煽つた。くるりと身をかへして正面から再びあふる。漸く明滅してぽつと消えた。

きたならしいお爺さんを見ても、美くしい舞妓を見ても、それが文章に能く表はれてくるやうになれば、眞に藝術家たる第一歩を踏えたわけです、ものずきに書きわけてみやうなどの野心があつてはいけません、やはり眞を描寫せねばなりません、此二篇とも態度の確かなるを稱揚します。（評）

〇栗の花（入賞）

羽前　九輪草

褪せた紅薔薇の花片が、ホロリ〳〵くづれるやうに砂利のうへにこぼれる。もうとつくから見てゐるのだけ

れど、私はやつぱし見てゐた。

瞼がだるいので、机によりかゝつて右手で額を支へながら、――。

曇つた空には灰白色の雲が澱んでゐる。

風が吹くので、――杉垣のがけの往來――片側町――には、土埃が白く舞ひ上る。

垣のうへには向の野の高い栗の樹が梢ばかり見える、青黒く茂つた葉のうへに、卵色の花を盛りにつけてゆら〳〵揺れてゐる―花の香がこゝまでも匂つてくる。青臭いやうな香だと思つて――心ゆくまで嗅いてみやうと、香がするたび鼻で息をした。が、ほのかに知らせるきりで、嗅ぐ間もなく、重い空氣のうちに消えてしまふのでわからなかつた。

あゝどうしてこんなに毎日懶いのだらう、それに鈍い頭痛がして何も考へられない。何もしたいと思ふ事もない、明るくて冷めたい氷のやうな室にでもひとり靜かに臥てゐたい。

栗の花の咲く頃には、死ぬ人が多いとか聞いたが、私も死ぬのではあるまいかと、ふと思つた、けれどもさう思つただけで、別に何とも思はない。

周圍をとびまはる蠅の小さい羽音が耳につく――。

つゞけ様に欠伸が出て、そのまゝ机に突伏してしまつた。

うしろ影

文さんが來た私の室に……。

「これかして頂戴な…たゞ居ると母様にお仕事いゝつかるのですもの」と笑つて獨歩集を持つていつた。

その前に父さんは何か言つた。私は默つてゐたやうでもあるし、一緒に何か笑つたやうな氣もする。

私は何を考へてゐたのだらう、それさへ覺えてゐない。

たゞ少し開いてる襖を斜めになつて出ていつた、文さんのうしろ姿だけが、何時か見た夢のやうに目にのこつてゐる。

自然主義の空氣が徹底してゐる文章です、所謂近代人の感覺力は鋭くもなり、細かくもなつたと感じます、此一文に徹してもそれが能く分るのです。（評）

【秀逸】

○むらさき色

金澤　むらさき女

闇い室の机によりかゝつて、あたりから寄せてくる蒸暑さをじつと耐へてゐる――顔に汗の上るのが明にわかる――外には不安の氣が滿ちて、大きな恐ろしい人がぴか〳〵の劍を握つて、立つてるかのやう。星は一つも出ておらぬ…さや〳〵と火の國から送られた風は、青葉を黄色に染めて私の頬をぺら〳〵なめた…

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と思ふ刹那ぴかつと紫の光りが、私の膝の下まで射した。…紫色の淡い後先もない、折れまがつた細い路を私は先へ〳〵と辿つて行く。私には其路がだん〳〵體を入れる事の出來ない程細くなつてゐるのを、知りながら、其紫色に浴びやうと肩をすぼめて歩いてる。私は何時の間にか小さな〳〵人になつてしまつた。そして細い紫の路の中でやせこけた頬に淋しい笑を湛へて立どまつて振むいた。……あ、あれが私？——ぶる〳〵と身を慄はした。……と紫の光りは消えさつた。同時にだら〳〵ざあーと大粒の雨が降り出して、恐ろしい雷鳴——細い道を登つて行つた私は、奥から影のやうな或物に追はれて、胸を抑へて逃げ走つてる——光りは又射した。私は目を瞑つた。動悸が高い……。

壓迫の心持が能く現はれてゐる。（評）

○泣くのを許して下さい

麻布　江森美子

秀樣又秋が來てよ、いやな〳〵秋が來てよ、私今まで貴女に少なからぬ涙をさゝげてね、秀樣知つて居て下さること、秀樣を想ひ、秀樣の死を悲む清い〳〵熱涙を、きつと知つて居て下さるでしようね。秀樣貴女が一滴たりとも、此の誠心の熱涙を受けて下さつたら、どんなに嬉しいでしよう、私、涙のあらん限り、涙の涸れ切るまで喜こんで、秀樣一人のためにさゝげてよ、いへたとへ受けて下さらずとも、秀樣の死後わずかに私を慰めてくれる者は、私の兩眼から限りなく流れ出る涙と云ふものが有るばかりなんですもの、私何時でも机の前へに座つて、貴女のお寫眞を眺むる毎に戀ひしさ懷かしさに、もう〳〵たまらなくなつて、最愛の君が長しへに眠れるほど近き青山墓地へかけ行つて、溫たかき君が肉血、總べての物の化身とも思ふ石碑へつつぷしたまゝ、泣いて〳〵身も心も冷へ入るまで泣く、其の間が私の最も樂しい時なの、花にあこがるゝより、月にあこがるゝより、前途の光明にあこがるゝより、秀樣が死して後、始めて立てられた冷やゝかなる石碑につつぷして、秀樣が私の手をふりはらつて親しく握ぎられた死、其の死と云ふ者にあこがるゝのが無限の快樂、最も嬉しい時なの、あゝされど秀樣は何日までも私の泣く事をゆるして下さるでしようか。涙はほとけのためならずとの事、秀樣はもうほとけ樣ね、其のほとけ樣となつて終つた秀樣に、涙をさゝぐるのは惡いでしようか。けれど涙は私に取つて唯一つの慰藉者。どうぞ秀樣、私に生の有らん限り貴女の死を、泣く涙を、受けて下さらずとも哀れと思つてゆるして頂戴。

惡く云つても、善く云つても女は涙の化身見たやうなものですね、あ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

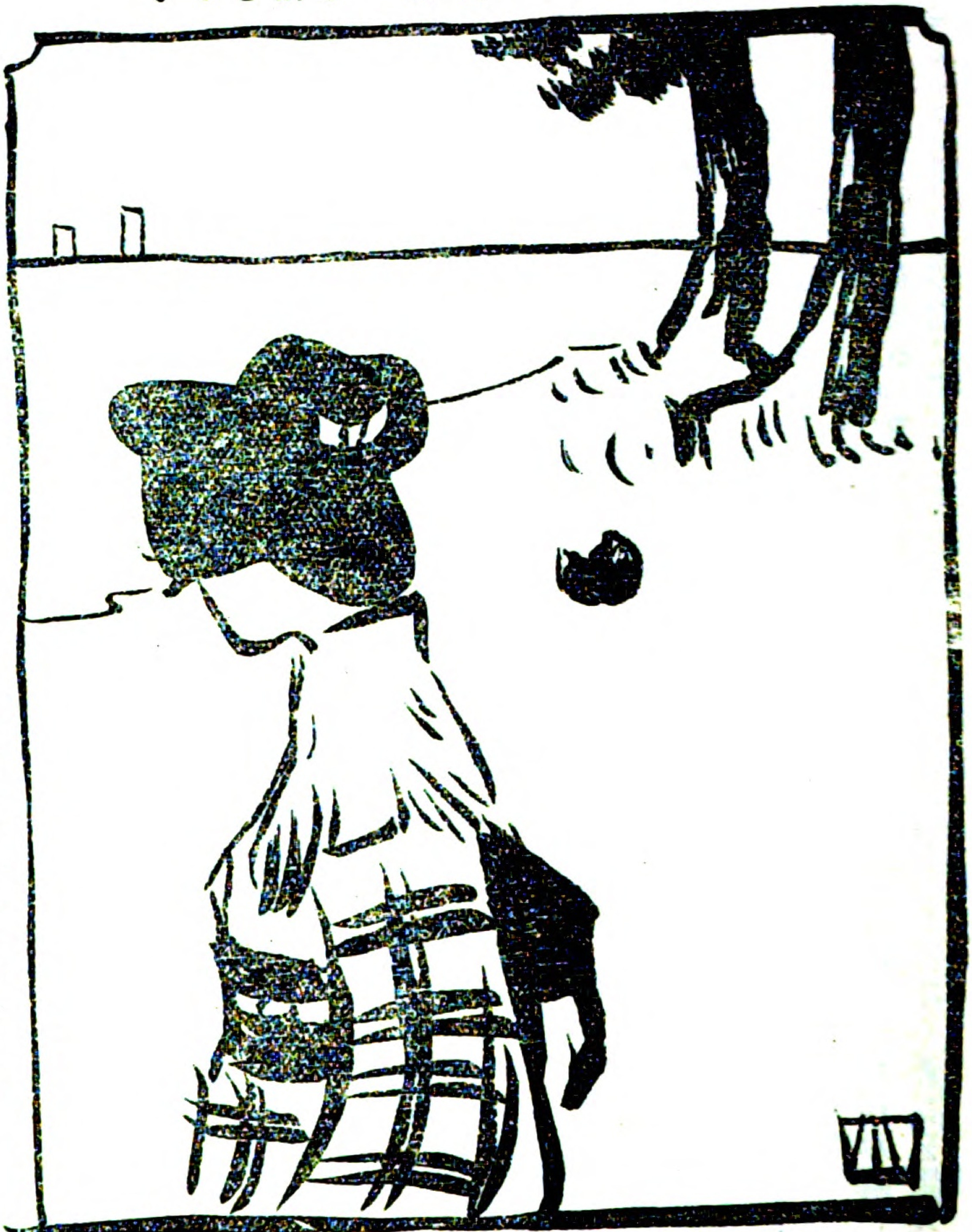
とから〳〵泣く人が現れてくるんですもの、選者も、もう何とも申しません。(評)

○玉

青森縣　いく子

乳母やが何處から可愛い黒と白の猫子を貰つてきてくれたので、直ぐ緋縮緬で頸玉をこしらへて其から鈴を買つてきてつけてやつた。ほんとに可愛い事、顔立がいゝので美人でない美猫だわ！玉……玉と云ふ名にした。其方でも此方でも玉々〳〵赤や白の紐がたくさん降つてくる。水晶の様な可愛い目を大きく見はつて、體を動かしながら鈴をならしてねらつて居るあの姿まアなんて可愛いてせう。其方の紐にヂャラケたり此方にヂャラケたりなか〳〵忙がしいものだ。妹は綺麗なくゝり毬を持つてきてコロ〳〵轉ばすと今度は毬をお相手にして可愛い手付をしながら轉ばしては追ひかけ追ひかけ一匹で興がつてヂャラケて居る。書手本にあるのにそつくりよ！……一寸父様の所からカラーを借りて來て玉の頸に卷いてやる、アラアラハイカラハイカラと妹ははやす。實際だ。僅か七八寸の體に二寸もあるホワイトカラーに鈴のネクタイ頗るふるつたもの、ほんとにハイカラだわ！頸ばかり長くつて

潮風　茨城　小堀とも子



カラーの廣告？玉が遊ぶのにぢやまになつてか鳴くので惜かつたけれどもとつてやつた。丁度母様がお魚を燒いて被居つたのでニャーオ〳〵とお魚の側に座る、母様は「マアこんなに小さくてよく魚の香ひがわかるね」と感心して被居る。かりにも猫と名のつくものお魚と鼠とは先天的に緣があるのだからあたりまへだろう。兄様に造つて頂いた玉のお家に、小さいふとんをしいて入れてやつたら疲れたものと見えてねてしまつた。なんだか寂しくなつた事、妹はポカンとして居る。

天眞の妙文、斯ふ云ふやうな文章はいざ作つてみやうと思つたつて出來るものではないのです。（評）

○畔に立ちて

常陸　秋山欣子

「いつかは己も」といつも思つた、純一は、毎日の成功雑誌に麗々と掲出される現代名士謁歷をみる毎に、肩を張り、燃えるやうな眸をあげて、うつつなの樣に未來の大成功を空に描くのを好んだ。

自分は一個の男子である、男子である以上必ず事を成してみせる、きつと天下を驚倒せしむる大事業をやるんだ、かう思つた。自分は高等小學を此春卒へた斗の兒供である。農家でこそあれ、家には可成の資産がある。自分は中學へと望んだ、けれど頑固な家風に制裁された自分は、幾多の講義錄、或は雑誌に依つて、僅に學ぶの餘地あるのみだ、「併しいまに、いまに、」と、思ひ至れば額に汗して不思舌を嚙むのが癖だつた。

初夏の朝である、露涼やかな山陰の小田の畔に立つてコバルト色に澄み透つた涯しらぬ空を瞻仰げて、しみ〳〵と默想にふけつた。友は皆都の空に一意學んで居る、一歩々々新らしい頭を作るべく腐心して居る、自分はどうか、夜のみの勉强、追つく事が出來やうか、あゝ、いつそ〳〵、鍬の泥をポンと彈いて再空を仰いだ「人間至る處青山あり」二三度吟誦してみた、四邊は靜寂の極致を盡してゐる、遠く〳〵連亘する靑田には、白露が涼しく閃いて、がは〳〵と啼きしきる蛙の聲も、幽しい反響を聞かせる程、思ふともなく彼は思つた。山は仄暗きライトグリーン、水は經緯の袖に快き色、踏む草は風嚬きテキサスの大平原に生ふるバタカップ草、その山かげの其水流るゝほとりを、その野草よりいてゝ草に輝る月影を浴びて、群をなしつゝ野を行く時、我が若き胸には抑々何の思が燃えるであらう、勞作につかれし我等に平和の光を投げつゝ、其草の涯に落ち行く月を仰ぐ我等が瞳には、果して何物の姿が寫らう、あゝテキサスの空や、空や、自分が戴くこの果しない蒼穹のいづれにか隣して居るであらう、首を回らしてあてどなく蒼雲を見入つた彼の眸には、いふべからざる懷かしさの色が漲つて見えた。

山を離れて赫と映ゆい光線が、折から若やいだ純一の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

類に華々しく句つた。

他の美文とは甚だ趣が異つてゐます、これでは下手な小說をみたやうで、氣乘がしません、美文といへば只自己の感情ばかり訴へてゐる此頃の多くの作も單調には相違ありませんから、何うしても斯う云ふ態度の人が現れてきて單調を破らなければなりませんけれど、態度はそれにしても、材料はこれでもなからうと思ひます。

○夏

牛込いく子

學校のお休みになつてから、もう一月過ぎました。四山の緑はいよ〳〵深く、朝心地よいかな〳〵蟬の聲も聞えます。

「あゝ夏だ。」

と思うと心の中に、言ひがたい哀愁を感ずるのです。強い光線が、木の根の苔にまで照つて、美しい花が咲いても、涼しい風が吹いて、白銀のような月が輝いても、夏は私には苦しいのです。ましで悲しい身となつて迎ふる第二の夏ですから。

丁度今夜のような夜でした。姉と私とは自分等の家庭の爲めに泣いて祈つたのでした。父が亡くなつてから、どんなに家庭が變つて來たでせう。人の出入は反つて、前よりも多くなりましたし、今まで出不精であつた母が出好きになつて、よく出かけるようになりました。其間に私共二人は、どんなに多く不愉快を感じたでせう。丁度二年前の今月三日に父は何の不安も無く亡くなりました。

こんなに泣いて私共が、自分の家庭の爲めに、吾母の爲めに祈つて居るとは、知らうはづがありません。胸の中には糸のやうにいろ〳〵の思ひがもつれて、ほんとに苦しいのです。今夜も母は夕飯後、散歩に出て、歸りは十時近くでした。どこへいらつしやつたかと聞きもしませんし、また話されもしません。三人はたゞ默つて居るばかりでした。あんな優しかつた母がどうしてかと、思うとなほさら悲しくなります。そして人を怨まずには居られないのです。

亡くなつた父を思うと戀しくてなりません。今の我身を思うと苦しいのです。悲しいのです。そして私には、殊に夏が堪へ難いのです。

情緒のすきとふつた文章です、事實とすれば此處にも深い哀愁を感じます。（評）

○祇園祭

常陸なでしこ

遠く聞ゆるおはやしの音に、人々は我勝ちに居所を見つけて居る。橋の兩岸とも人がいつぱい、向岸にあるいくつかの提灯が、ちら〳〵と川の面にうつゝてゐる。おはやしはだん〳〵近づいてきた、兩岸に居る人はます〳〵どよめいてきた。

おみこしは若者にかつがれて水にはいつた、お神輿についてゐるいくつかの提灯が、きら〳〵と水に輝いて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

居る。浮つ沈みつ、水にひたつたのか提灯は皆消へてしまつた。鶴の首についてある提灯が詫びしそうに淡い光を投げてゐる。

若者の聲はもうすつかりしやがれてゐる、もう三日もかついでゐるのだもの、折りしも仕掛してあつたのだろう、からくり花火がすーと向岸へ行つた、それがいくつにも亂れる、亂れた一つが輪見たいな物についた、それがいくつにも亂れる、亂れた一つがすーと水の面高く飛んだ、それが皆川にうつる、美しい事。

兩岸の人は皆それ許り見つめてゐると、すーと消へてしまつた、あたりは又もまつくらになつてしまつた。

お神輿にはいつしか提灯がついてゐる、向岸では今盛んにお神輿へ車花火やら花火を投げる、それがばちんとお神輿の上ではねる、雲にかくれてゐた月が出た、お神輿をかついて居る人も向岸の人も、うつすら顔が見へる、年番らしい人が今年は例年より水がすくないと話して居る、だがつらいだろうあの川へはいつてゐては出て來る人はみな顔がまつさをだ。そしてぶる〱とふるえて居る。

あゝこれが今年の祇園祭の終かと思ふと名殘り惜い、お神輿が水を出てお宮入する時は、一層重くなるとやら。

常陸地方の祇園祭は私も一度行き會つて見物したことがあります、此文、寫生式に出來てゐて、田舎の祭を田舎の人が書いたと云ふ趣に味ひがあります。（評）

○雨の日

伯耆　竹本春江

しと〱雨の降る中を歩きながら、はじめて蜩の聲を聞いた。雨に濡れた山は色あざやかに笑つた樣、小霧の中に濃みどりの杜？　堤の先きにうつすら原が見える。

去年の夏、富樣達と田草取りして唄をうたつた、邪のない、そして元氣の佳い百姓の私を思つた。あゝ私は意志が弱かつた。今更に胸が切ない。入日に向つていそ〱と家路を辿つた私は、世にもこれほど幸福な者はなく、これほど聖いものはないと信じてゐた。あの下河原の、干瓢の花がましろに咲きつゞつた夏の夕ぐれを目に見る樣……あの頃が私の一生の春、のぼりつめた春だつた。あのまゝ、迷ひの雲におそはれなかつたらも少し永い歡樂に醉ふてゐたらうに。あゝ今の生活は味もない、香もない、活氣もない、かうして葬られ行く私の春がいじらしくなつた。今日來た祖父樣の手紙を出してよんでそして、袂で顔を蔽ふてしまつた。泣くのはまだ悲しみのうすいのだらう。涙も出ぬ、聲も出ぬ、このまゝ吸ひこまれて消えてしまひたい。

何時やらの女子文壇の美文に「あゝ歸らう、歸つて墓參しよう」といふ句があつた。あれを思ひだしてまた

新たに悲しさが込みあげる、私は、あの人をねたまし
いまで羨ましく思つた。歸ると云つてすぐ歸れる人は幸ひだ。私は何時、何時この束縛を脫して安樂にお父樣の墓守りして、風あたゝかい故鄕に、日を送る事が出來るだらう。あゝ何もいらぬ、いらぬから早く歸りたい。けれど……どうする事も出來ぬ。しばられてゝ身の自由がきかぬのだもの……せめて、生中に心よいものと人樣に愛せられなかつたら……あゝ



窓靜　鈴木ます子

つらい。つらいと云つてる内に私の盛りは逝つてしまうのだらう。

これも美文式の型にはまつたものですが、何處となく根ざしの深い處があつて、外のものを見たら屹度歎服するかも知れぬと云ふやうな氣もします。（評）

○沼のほとり

日暮里　京子

古沼の水はゆらゆらとかすかにふるへて、金盤を浮した樣な十五夜の月はやゝともすればぎら〳〵と亂れて金蛇の樣！岸から三尺ばかりはなれて居る蘆のしげみに、何虫かしきりと哀をつげて居

る、先刻から水面ばかり見つめて居た私はふと顔をあげて、向岸に彳んで居る人影を見出した、何氣なくすかして見ると月あかりにおぼつかなげながらたしかに女である事だけはわかつた。彼の女はなぜ今頃こんな處に立て居るのだろう……もしや私とおなじもだえに囚れて居るのではなかろうか？……女は岸に添てあちこちさまよつて居る、私もふら〳〵と歩き出した、女がつと立止つたと思ふと又一人早足に近よる人影――私も立止つてぢつと見まもつた、と影は二つになつて見る〳〵夜霧につゝまれてしまつた、私はホッと吐息をもらして、よろ〳〵と傍の柳に倚りかゝつて、さら〳〵と肩へたれる葉をむしやくしやまぎれにむしつて無雜作に水面になげつけた、そして今更の樣に露にしめつた空氣草履の氣味惡しさに心づいて、ふと自分の家の方へ目を向けたが、歸る氣もてず空をあふいで又も吐息をもらした、皎々たる月の光に消れてか星はまばらに力ない光を地上になげて居る、私の目からははら〳〵と泪が流れた、と胸のどこかでしきりとあざ笑ふ樣な氣がして、あわてゝ袂でふくとひとりでに淋しい淋しい笑が片頰にもれる。あゝ私はどうしたのだろう、なぜこんなに迷ふのだろう？……「京さん！」突然背後からひくい聲でよばれて思わず「ハッ」と振りむいたが、こゝに誰が居ようはずがない、後にはたゞ自分の影が淋しげにうつゝて居るばかりである。あゝどう仕樣私はもしや〳〵此まゝ氣がちがつてしまふのではなかろふか、と自分で自分の心をうたぐつて見た。

激してゐるやうで存外激してゐないやうに思はれます、迚も氣が狂ひさうに見へません、あたりの景色と心持とは善く調和してゐます。（評）

○旅立ち

府下　三ヶ島　よし子

私の大好きな山ですもの、四方を高くとり卷いてゐるけれども、この地は少しも狹いとも淋しいとも思はないのです、たゞ冬の夕日が白い嶺に落ちる時と、此頃のやうな夏の月が、あの山の頂にかくれやうとする時だけは、あゝ平らかな地であつたらと思ふのであります。

知らなかつた鳥の名も、こゝへきて幾つ覺えましたらう、山櫻の蕾をみて喜んだのもつひこの間でしたに、山吹や藤の花を映した秋川の水も、五月雨を集めて濁つてから、更に淸く澄みかへつて、木蔭ゆく流は一層懷かしくなりました。そこにもこゝにも香る白百合は今花盛てあります。

きのふまではこの机の上にも、顏蔽ふばかりの大きいのを一輪挿して置いたのですが、隣の子供がきた時、おもちやに困つて瓶を持たせたので、捨てゝしまつた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のです。
せめて三年もと思つて、やう／＼不自由なく運んだ身につくものも、この身體が動けばやつぱり一しよに動かさなければならないと思ふと、小箱一つも邪魔になつてなりません、ぢき秋風も立たうに單衣だけ持つてもなか／＼の荷厄介、それに人にいはれぬ不安と恐怖とを抱いて東京へ行く――人にはさも樂しげに聞えませうが、こんな鈍い目や耳を以て、電氣の光や音に接したら又どんなにまごつくことでせう、ましてこの暑さに、私はこゝを去りたくないのですが。
むし暑い座敷をとり散らして、荷ごしらへをしてをりますと、遠くの方で雷鳴がして、庭へはもう人も草木も待ちに待つてた雨が、威よく降つてきたので、燒け埃の濕る匂がむーと汗ばんだ肌に泌みるやうです。
外をも見ずに身の前後を考へながら、やう／＼片づけてしまひましたので、はじめて冷たくなつた緣側に出て見ますと、綠の山をはるかに高く、七色の橋が架つてゐました、あゝ美しい虹！濃いのと淡いのと二筋並んでゐます、あしたの朝はちよーどあの下をくゞつて行くのだと思つて眺めて居るうちに、日は又山に入るのでした、今夜限りと思つた月は高く登つてゐるのですけれども、さつきの雨の夕殘の雲が、絕えずさ迷うてゐて、昨夜に增した光を見ることが出來ませんでした。

忠實に書かうとしてゐるやうですけれど、まだ力が足りません。（評）

○雨あがり

大分縣　原田澪子

をやみなしに降り續いた雨が、三日目の今朝全く晴れた。急に世間が明るく成つた樣な心地がしたので、二階の物干臺に登つて眺めたら、家々の屋根から立ち上つてる湯氣の間々に白い襦袢、派手な浴衣、紅い腰卷なんぞが一面に干し並べてある。欄干につかまつて宅の勝手口を覗いたら蛇の目傘や、洋傘が五六本心地よげに日光浴して居る。その少し先の井戸邊で裾へし折つた下女が大盥を持ち出して、セッセと洗ひ物して居る。西窓を開いて通りを眺めたら、露を帶びた野菜を滿載した荷車や、新しさうな果物を擔つた人々が目映い日光を嬉しそうに、東の町へ東の町へと呼び聲勇ましく走つて行く、緋襷かけた娘の籠に未だ少し早さうな青梨がまろび出ようとして居た、風で落ちたんだなと獨り言してたら恥もなく、大風呂敷抱へこんだ母樣がニコ／＼してお歸りなすつた。何だろうと下りて見たら枝折れ梨の見切物とやらだつた。
何となく氣が晴々するので、庭に出たら憐れに吹きなやまされた夏菊の桓根に、重さうな雨下駄が二足背を並べて乾してある、一方は燃ゆる樣な緋の緒をすげた白桐で、一つは灰色の皮緒てあつた。

寫生にしても印象がはつきりしてゐる。（評）

○花一束

東京　華子

ほうづき

私が六つ位の幼稚園に通ひはじめの頃だつた。裏の畑の隅に、馬丁の植えてくれたほうづきを大切にして置て、毎朝水をやつては樂しみにして居た。其が靑い實の二つ三つ成つた時分、隣の車夫のお女房さんがツウツと入つて來て、鍬の折れたので根を掘つて前掛にくるんで出て行つた。私は傍で見て居たけれども別に何とも云はずに後姿の見えなくなるまで見送つて居て、見えなくなると急に悲しくなつて大きな聲で泣いた。

金魚

これは九つの時、十一になる兄さんと一緒に池の金魚を二匹殺してしまつた。婳やに見られると大變だからつて內密で櫻木の下に穴を掘つて埋めた。そうして江戶菊のしほれたのを一本さして置た。其から一週間ばかり過ぎて櫻の木を植えかへると云つて植木屋が二人來た。私は心配な樣な氣がしてたまらなかつたので、傍に行つて土を掘るのを見て居た。少し掘つて居る中に、白くくさつた樣な目も何もなくなつたのが、一つだけ土だらけになつて出て來た。兄さんは忘れてしまつたらしい。何とも云はなかつた。

身投げ

一昨年の秋、女中が何處からか歸つて來て、「今お堀端に土左衞門が居ましたよ。」と大きな聲で話して居た。女なんか見に行くもんぢやありませんよと云はれたけれど聞えない振して兄さん等のあとをついて見に行つた。巡査が菰をまくつた時一寸顏を見たら眞つ白で大きな顏だつた。胸が恐くなつたので一人でづん〳〵先きに歸つて來た。二三日中其の顏が目に映つて居て、恐くつて一人で便所に行かれなかつた。

金魚もよし、ほゝづきもよし、身投はもつと氣を入れて書けばよろしかつた。（評）

○米搗き（外一篇）

播磨　さゝ舟

米搗き

涼しい風に木の葉がさら〳〵と音を立てる。蟬の聲もしない、靜かだ。私は竹椽に座して雜誌を見て居ると、つひうと〳〵と寢てしまつた。暫くしてふと眼が覺めると何こからかドシン〳〵と米つく音がする。ドシン――ドシン、何だか勞れを訴へるような氣がする。あたりは靜かだ、皆はまだ寢て居るらしい。凪盤の寂寞を破つて又ドシン――ドシンと强く胸にひゞく。

狂人

御免と聲がするので私は店にいつた、見た事のない四十餘りの男だ、いやに頰骨が高い。色が赤黑くて白縞の着物に紺の木綿の三尺帶をだらしなく結んて居る。突然卵を十ケと砂糖一斤とビール一ダースと石油一升とあまり多くならべるので當惑しながら成る可く早く持ち運んだ。すると母さんが奥から手招きをなさるから何だらうと思つて一寸行つて見る

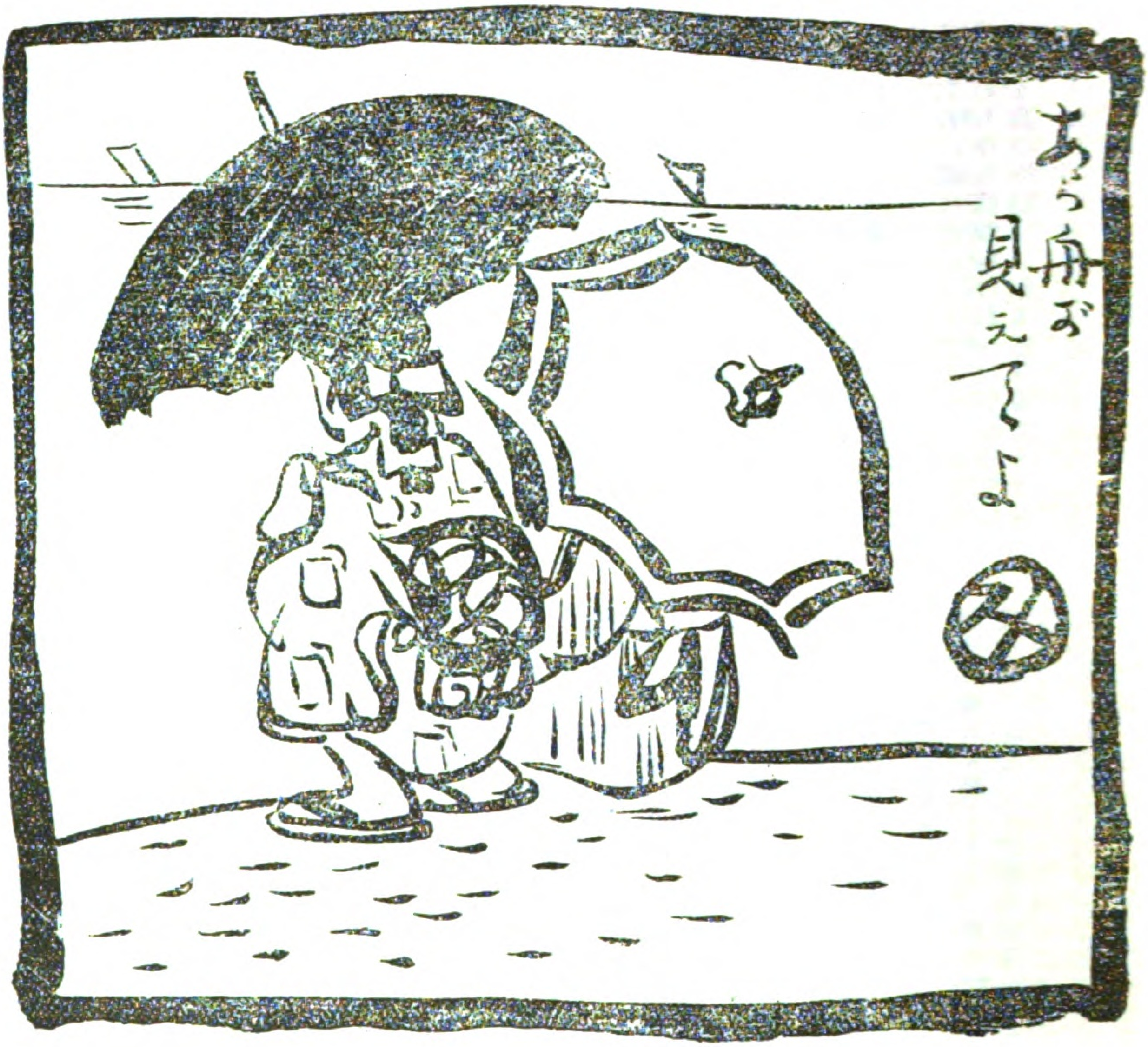
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、あれはきちがひだよと仰つしやる。私は急に怖ぢ氣がしてどうしやうかと母樣にいふと、ほつて置きなさいといふ。店では頻りと何か云つて喧しく云ふ。私はおど〳〵しながら、そーつとのぞくと姉さん〳〵何々を早く下さいと頻りに又品物の名をならべていふ。と門の方では子供達がヤイ狂人だ〳〵といつてわいわい云つて居る。私はもう恐わい〳〵一念で胸が固くなつた樣な氣がする、店では黑山の樣に人が來てわいわい云ふ。もう呆として居ると、人の中からおまわりさんが出てこられて、何か云ひ聞かせ乍ら向ふへ連れていつた。私はほつと息ついて全身冷汗をかいて居た。

○向ひあひ

土佐　桃の花

今日も亦嫌な雨の日だ。妾は二階の窓に倚つて呆然と往來を見て居ると「山田町小松屋」と大きく記された



海　　本郷　鈴木とみ子

番傘が、ついと目の下に浮いた。傘の中には酒德利をゴッチヤにして肩にかけて、しぶ色の帷子着た、下男風の男が二人、背の高いのと低いのと。「熊公、手前や知つちよるかい彼の煙草屋の娘さ、別品だぜ。」低いのが見上げて云つたらしかつた。妾は彼の娘だな、と嘲笑つて後影を見送つてゐると妾の家とは斜向ひのつい此間轉宅して來た煙草屋の前て止つて、店を覗き込んでゐる。亦ニヤ〳〵してお店番だな、といつか一寸みた色白の瞳の涼しいニコ〳〵と愛嬌振撒いてた娘の顔が浮ぶ。ジッと店をみてると濃茶色の御煙草と白く拔いた軒暖簾がゆれてついと白ガスリの若い男が出て來た。妾の胸は怪しく波立つた、男は未練らしく店を振り返つて東へ行つた、下男風の男は何か囁きながら店前をウロ〳〵してゐる。何だ馬鹿らしい、自分は餘程馬鹿だ、と私は耐らなくなつて內へ入つた。と、ふと二三日前の事が浮んだ。其れは從兄の男樣が此室へ上つて來ると突然、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夏さん！あの煙草屋の娘は中々ビユーだれつて、妾は何だか侮辱された様の心地がしてフツと噴き出すと、「實際彼様のが眞の女かな愛嬌があつて柔順て」私は妾がお轉婆だからと、男様が眞面目なだけグツと癪に障つて、妾はよくも考へず有る事無い事しやべり散らしてそれて誇りかに怒じたが、其時男様は無言で降りて行つた限りまだ今日も來ない。妾は其れが詰らなく氣になる。妾はもう頭がクシヤ〱して階下へ降りると、店に坐つてた母が「まあお前まだ髮も結は無いかいお向ふの娘さんを御覧、キチンと身拵ひして、男様の咎めるのも無理は無いよ、お前もちツとあの娘さんに習つて店番でもしなさい。私はお母様までがと「馬鹿にしてるわ、看板でもあるまいし」とわざと階子段をひゞかしてかけ上つた。わけは解らず熱い涙が頰を傳ふて――。

○小さき母　　下野　中村はる

十時のかねがうつ、皆床にはいる、あと見廻つて同じく床にはいつた、いかに眠ろうとしても眠られぬ、先づ亡き母を思ひ出し、世に妾程兩親に縁の薄い者もなからう、十歳で父に死別れ、又十九歳で母に死別れた、このあとはいかにしよう、どうしても自分のせきにん妹二人に弟一人、三人の子供の母となつて敎育せねばならぬ。其れにしても金がなければ一日だつて世を渡つては行かれない、財さんもなき此の松村家、何としよう、こうなつてはもう親せきだつてたれ一人見むきもしてくれず、あの金持の高林さん父の丈夫な内はよく尋ねてくれた、くる毎に又よく妾に色々みやげなど持てきてくれた、そして父に私を下されなど云つた事もある、其頃は我が家も金持のかづにはいつて居た、人と云ふ者はなぜこうつれない物だろう。

父が逝かれてよりは何事も皆不幸のたね、家はだん〱左まへ、其内母は色々心配のあまり病氣にかゝり、あらゆる醫者をむかへ、手をつくしたが衰へる身は病にかてず、とうとう長のねむり、金は藥の爲に湯水の如くついやし、今は其の藥價の心配もせねばならぬ、一俵づゝ取つて居た米も、今日よりは一升かひのなさけなき身の上、之れよりはならひをぼえた針の道にても開き、人様のなさけによつて此の荒浪風の上を渡つて行うかなどゝ小さきむれに種々なる事のみ思出し、あれもこれもと終夜かんがへどふして夜があけた、而しまだかんがへは十分に行かぬ。

○二時頃　　水戸　重子

あゝ退屈と思ふと、直ぐに二階へ上つて、格子窓から往來を見るのが一番面白いのです。

今日も暑くつて〱居眠がほしそうなので、例の二階の窓の所へ來て眺て居ると、馬の背へ木を乘せて日除にして通る、鹽湯治の客が大きい荷物を人力車に着けて、幾組も幾組も威勢よく通る、田舎の娘達が農が閑になつたので、裾を端折つて日に燒けた太い足を出して買物にでも來たのでせう、父様や母様お祖母様迄と暑そうな顔をして通る、眞黑な顔の藥屋が、廣目や廣目や諸共につて、日陰を撰みながら行く、今度は氷々つて涼しいのが通る、かと思ふと又今度は別な藥やが、何だかわからない唄を怒鳴りながら、ハンドルガンをぷうぷうやりながら通る、水稽古に行く男女が、ツバの廣い帽子を被つて行く、通る人も通る人も、皆暑そうな風姿をして居る、向ふの茶屋のお神さんが胡瓜の皮をむいて、トントントンと、お定りの胡瓜もみが始まつた、よく向ふてはいつてもあれ計りだと思つてる、格別忙しくもない様だ、今度はマクワ瓜をむいて食べてると、島田に結つた大きい體の女が來て一しよに食べてる、と納戸地に千鳥を拔いた着物にオリーブ色に黑繻子を合せた帶をメた、一寸意氣な女が通つたら、見えなくなる迄險しい眼をして眺て居た、隣りの氷屋で氷をかく音が絶へ間ない、まあ好い風だ事之で眠氣が取れた。

○書物の土用干　　福岡縣　荒川みつ子

今日は朝から暑さうに、宮の杉林には油蟬ミン〱蟬が聲を競つて鳴いてゐる。此といふ仕事もせなかつた、が、午后に書物の土用干をはじめた。

父の教員時代の古本から亡くなられた兄の小學時代、通記とか詩經とか、十八史略、易經、それから醫學の書物が支那カバンいつぱい、弟妹や妾

等の小學時代の書物を干した。土からは土の香ひ、草木からは草木の香ひ、干した書物からはかびのして古くさひ香ひが、此暑い日光に蒸れて、ほや／＼と立ち登る。夕方、三つに分けて本箱に入れる、一番古い本が黒い本箱、其次がはしのかけた本箱、それから今入用なあたらしい本が新らしい本箱、として入れる中から亡くなられた兄の少年時代の時に筆記された詩集を見出した。嗚呼人の生命こそ果敢きものなれ、昨日までは、にこやかに笑もし、やさしく語つた兄も、今は早幾年まつても、この世へは歸らぬ人の數に入られた。

此の字、此の詩、見れば見る程、昔が戀しく兄が慕しい……。醫學に志ざされたのが、十五六才から十何年と云ふ永い年月、前期は早く及第されたが、後期取る爲に上京されたが、やがて歸鄕も近まる頃、ふとした病から腹膜炎と云ふ病にかわり、うらみを東都の空に殘して歸られ、看護に力つくせどもかいなく、亡くなられたのが、三年あとの五月廿五日の明け方と、追想に追想してゐると、青田の上をすべる樣に、凉しい音をつたえて、夕暮の鐘がきこゆる。

○通小町

横濱　さゝ川

梅雨晴れてまもない暑い／＼一夜だつた。

燈火の下で浮世話にさゞめいてゐた人達もいつか皆默つて仕舞へて、そこゝにはた／＼と團扇遣ひの音が絶えず聞ゆるばかり、しづかに夏の夜は更けてゆく。机の前に座つて本をひらいたが讀まうともせず一輪ざしに投げ入れた山百合の香をかいてゐた。うつとりとたゞ夢見るやうな思ひに耽つてゐると突然、物の音は起つた。夜の靜寂を破つて人の唇から洩れさうな聲はしつとりと重い空氣を傳うてきた。「入瀬の山里に一夏を送る僧にて候。」團扇づかひに餘念のない人達も耳ひきたてる。あゝあの影のやうに來ては唄つて影のやうに歸つてゆく例の男だなと思つた。きそはれるやうに私は外に出た。闇深くたちこめて、空高う星がすんでゐる。「いかなる人こそ名を尋ればやと思ひ……句はぬそてぞ戀しけれ――」なだらかな肉聲は柔く闇を透して響く。門の柱に寄つてきいてゐた。唄手の立つたところは筋向ひの格子戸の前、灯に背いた顏は見えないが、姿正して折り／＼手にした扇子を拍子をとつて急かず迫らず悠々とうたひつゞける。からころと下駄の音させて人は幾人も通つた。曾ちよつと足を止めて唄子を眺めやつたばかりで行きすぎる。忽ち前の格子戸がすうつと開いて內から白い手が出た。小さい白いものが手から手に渡つたと見ると、外の人はいんぎんに頭下げたがその聲音も止まず節も亂れず曲はいよ／＼進んだ。あき風の吹くにつけてもあなめ／＼小野とは云はじすゝき生ひけりとありこれをおのゝ小町の――あゝ通小町力ある底に美しいひゞきのあるその聲は、絶世の麗人が老ひてうらぶれた悲惨なさまを偲ばせる。微かな哀歌は胸にけぶつた。ふる淚のあめかあら暗の夜や夕暮れは一かたならぬおもひ哉……

私はこの哀れな老ひた唄手の上を思つてみた。

聲に震ひもなく朗々と唄ひ去りうたひ來りて曲は終りに近づいた。……小野の小町も少將も共に佛道なりにけりなりにけり。」餘韻長く、再び聲はない。「ありがたうございます」低い聲を殘して彼は格子戸の前を去りて步みだす。私はまだ見てゐた、小聲に何か口吟み乍ら淡い軒の灯に其半面を照されて、とぼ／＼と暗い道をゆく老人のさま、侘しいはかない感じは激しく私の胸を衝いた。

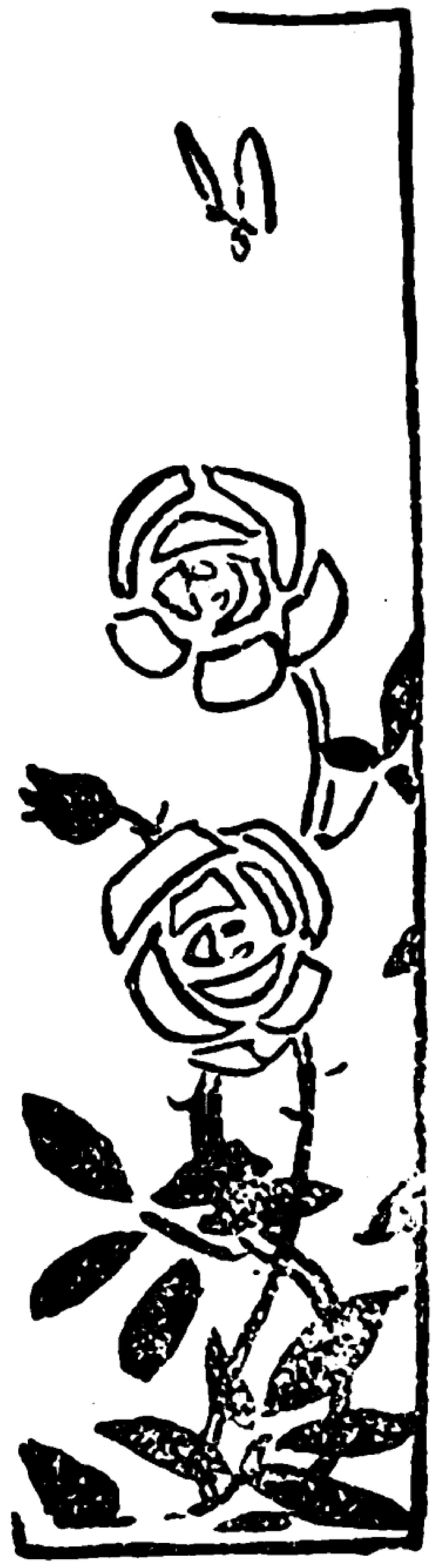
○初秋

備後　すゞな

いつであつたか今日の樣な凉しい日、私はお母さんに連れられて高い山のお寺へ詣つた、百日紅が咲いて居た、大きな杉や樫等の葉かげがさら／＼とする虫くひの長い緣を傳ふて御堂へ這入るとホツと線香の香がする佛壇の薄暗い所に鬼子母神さんを祭つてあつて、可愛らしい子猿を澤山糸でくゝつてつるしてあつた、私は其れが欲しくつて、お母さんにそう云ふと、あれは鬼子母神さんへ上げてあるのだから取つちやあいけないと仰つた、私は欲しくつて／＼堪らないのだけれど其まゝ默つて返つた其夜寢間へ這入つてから晝間お寺の御堂で見た通りの小猿が十も二十も三十もチヨコ／＼步いて私の所へきた夢を見た。今ふと恁んな事を思ひ出して私は獨り微笑んだ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭日記



○規定　家庭を主として書いた日記文を云ふ實際的の日日の出來ごと又は心得となるべき事若き奥樣の新しい經驗談も宜し二十四字詰三十行限り半紙又は罫紙に認めること乙號の賞を送呈す

○下女になつた日記（天賞）

土佐　桃の花

一日、私は明日から下女と呼ばるゝ身かと思ふと、亡くなつた父、後妻に嫁つた母の事など小い胸に交々と湧いてなか／＼眠られない。一寸とろりとしたかと思ふと、コケッコーコーと裏の鳥小屋て耳をつんざく樣な聲！妾は飛び起きた。寢しなに心にかけてたのですぐ臺所へ出られた。火を焚き付けて茫然してると「まあお前早起きたかえ」と奥樣が來られた。「此樣に早起するにや及ばないあの大きく光る星が氏神の森の上に行つた頃が丁度だ、と云はれた。田舍ても此家は舊家なので奥樣と呼ぶにも張合ひがある。坊樣が二人、孃樣が一人、皆腕白盛りなので何樣していゝか手の着け樣が無い。十時頃、裏の小川の青柳の下て孃樣の着物を洗つてると川上から白百合の一片が流れて來て長い緋のひもにかゝつた。何となく水上が懷かしく其まゝ竿に通す、生れて十六年下女になつたのは初めての私、下女つて何樣すればと心配してたがそんなにも無い奥樣が優しくて失敗の無かつたのが何より嬉しい噫母樣喜んで下さい。

二日、朝飯を食べてると、茄子を持つて行かうかと思ひますがつて隣の人が來られた、妾は御飯を置いて笊持つて裏の畑へ出た。まだ日の登らぬ間の草と云ふ草皆しつとりと露にぬれて活々してゐる、私は心地よく張り切つた紫の色もつや／＼しいのをプチン／＼ともぎ取つてゆくと。ふと若しや此茄子母樣の御手に渡りや仕無いかと妙に懷かしく其一つを頰にあてた、ひやりとして妾の溫るみは彼れにうつつた。奥樣が髮結ばるゝ間孃樣を庭て御守する、且那樣が草と一緒にひかれた可愛らしい螢草が目に入つた、けれど今は簪す身ても無いので夏樣への手紙に封じ入れた。夜母樣の事思ひながら、優しい奥樣の傍て裁縫する。

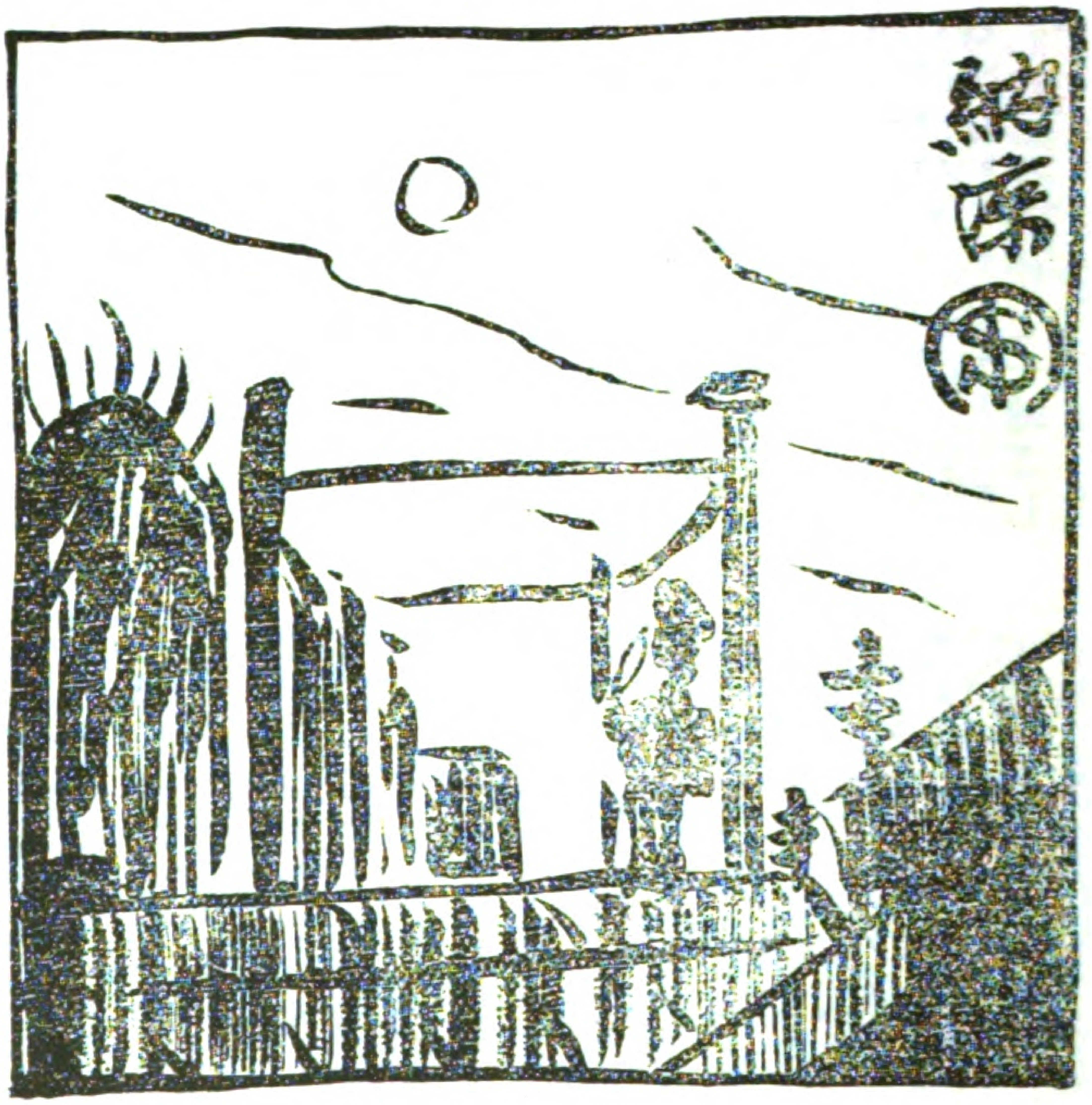
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

摘みとつた茄子の紫の露、君の眼に入つては紅の雫ともなるだらう、好箇一篇の小説。(評)

○お蟲干 (地賞)

名古屋　てふ

八月一日、お二階の長持の蓋を取るとプン、と黴くさい匂ひがする、毎年蟲干するのにネ今年はあまり梅雨つたせいか知ら、と被仰る。絹夜具は皆な裏の南二階に干し、木綿夜具は屋根に干す。北の間には塗り竿を渡して、亡くなられたお祖母様の御殿勤めの時の大柄な美くしい裲襠や、立派なハコセコや、紫緞子に金絲銀絲で胞から裾への百花摸様の大振袖を、一番竿に二十何枚かける。御自分の三寸もある裾の裲襠や、山まゆ入りだの疋田鹿の子、龍紋だのをかけて被在る母様に、昔はこんな大きな袖だのふきだのの着物を召して居ては何んにも出きなかつた事ネ、といふと、何んの昔の女は今の娘たちにくらべると立派だつたよ、稚茸たぼの島田に結ふてこんな振袖を三枚も重ねて、長く引く裾と裲襠の裾を一緒につまみ上げて、召使を連れて、重ね草履をはいて、しと〳〵とお成り遊ばす御様子はもう〳〵今では見られぬ圖、お祖母様は御殿で評判の御器量よしで長刀の名人だつたよ、としみ〴〵被仰るので、何んだか悲しうなる。私の小さい裾摸様の一ッ身や、よだれ掛けだの七八ッの頃、さらへにお染踊つた時の鹿の子の振袖やら、晴れ着の裾摸様やお召やらをかけて居る、と次ぎの間では母様が亡くなられたお祖父様と父様の昔し〳〵のお召物や社杯を竿におかけなさつた。御香の匂ひがする。床の間には甲冑や、御拝領の大小や、御差料やらを袋から出して、一口〳〵丁寧にされてふいて、



納涼　神田　白井尋奈子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

刀掛けにかけて秡在る。昔はあんな重い物を二本も腰に差して居たもの、と思ふと可笑しくなる。金の獅子の目貫きや龍頭がピカ／＼光つて居る、帯留めの金具にほしいといつも思ふ、次の間は父様御秘藏の短冊や軸や蟲の蝕つた書物や、私が學校て頂いた御褒美やらで足も立たぬ位ゐ、こうして同じものを毎年／＼お蟲干してしまひにはどうなるのであろうと毎年私は思ふ。

そこが家庭てす。あなたの家庭には、お嫁入の時一度しか要らない衣物や裝束よりも、まだ／＼美しい、尊とい、思ひ出の多い紀念品が澤山ある。カラッとした梅雨晴の日の、その虫干の美しさが想像して樂しい。（評）

○天神祭りの日（人選）

松山市　曉子

伊豫は機所だからと、この夏休みを利用して、母様が手をとつて教へて下さつた。五色のふとん縞がもう二尋織り殘つて居る。四本の梭は他所の借り物だから、一日も早く織り上げてと夜が明け放れた頃機に上る。花賣の子二人も呼び入れて見たけれど、お床をかざる様なものは何もない、仕方なしにお荒神松と一輪ざしへさす浦島草を一束とつておく。初枝は客間に飾り付けをした。ひるから母様が織りしまひをして下さるので、初枝に手傳はせてお勝手を働く、お獻立はおすしに吸物、冷しそうめん、鯛のあらひにあかえのすつぽん煮、さゞえの和物の六種だけども、何しろ十人の家族に五六人の來客ある見積りだもの、目のまはる程の忙はしさだ。午後五時頃まだてあらうと思つて居た、弘、遠方の親類の家から歸つて來る。汗が瀧のやう。何時も喧嘩ばかりする千枝子もけふは兄様などゝなつかし相な事を云つて居た。私は槇の葉かげにたらひ据ゑて、けふの汗を流し乍ら、樂しげにまどゐせらるゝ皆様の笑ひ聲をきいて、此上なき滿足の笑をたゝへた。食後さつぱりした浴衣にきかへて、幅をかへ、障子をはづし青々とした蘭の鉢植をおいた二階の手すりに上つて、天神宮へお參りずる人々の賑やかな有樣など見て居たがお客樣は一人もいらつしやらない。遂に千枝をつれて横町のみどり様をさそひ、ゾロ／＼と道行く人に交つて、町々の作り物を見てあるく。お宮へも參つて生花、作り物、奉納の大文字なども見た。奉納大文字は年毎に減じてゆく様だがどうした譯かしらなどひとり思ふ。西瓜の香、林檎、生姜糖、あめゆなどの香をかいて、氷、雪などの勇しい呼聲の中をぬけ、門口まで歸つたのは十時、呉服屋の作り物の夢を見る様に美しかつた事など思ひ乍ら、堀端のベンチへ腰を下すと水の様な涼風がサッと脊を吹いた。人のよいよく笑はれる隣りのおばさんと一時間もいろ／＼とおもし

ろく話して家に居ると、母樣はお客樣がなくて的がちがつたとて明朝まで惡くならぬ樣、煮物に火を入れていらつしやる。私も手傳つて後二階でこの文をかくと恰度十二時。涼しい夜だ。――八月九日、

いつもながら達者なもので活々としてゐる。が、こんなもの位は、と馴れ切つたら平凡になつて了ふ恐れがある。(評)

【秀逸】

○墓參日記

京都　井上澄子

七月十五日、磨きあげたやうな空は青く透きとほつて、夕立のおこりさうな白い大きい雲が南の方から覗いてゐる。道はもう乾き切つてゐる。兩側に並んでゐる家は、幾度かの雨に晒らされて薄黒く汚れてゐる。その上を撫でゝくる生溫い風に吹かれつゝ、私は妹のお墓に詣づべく町の共同墓地へと足を運んだ。

十五日なので、織屋の工女等の着飾つて遊んでゐるのを見つゝ、大榎の下で靜かに眠つてゐる妹のお墓にまで來て見ると、何誰が供へて下すつたのか、花すゝきが兩方の花挿しにさしてある。その間から『井上千代子之墓』と細く堀つた石碑の、既に薄ら苔の生へたのが、半分程顔出して人まち顔――。私は手に持つて來た山百合の花を挿しそへ、松の落葉をはらひ、ひざまづいて兩手を合したが、拜むことを知らなくつて、たゞ頭をばかり下げた。

いつものことであるが、今日は殊の外淋しく感じた。妹の直ぐ横な古びた石碑は祖母樣ので、妹の居た時分に幾度となく參つたのであつたが、その時は一人のお墓を二人して拜んだに、今は二人のを私一人して拜むのかと思ふと、耐へきれなくなつて、二尺ばかりのこの世の妹に靠れてひたに泣いた。泣いて思ふと昔のことがあり〳〵と偲ばれる。「……姉さん來年の春はきつと歸つて下さいよ。」と小さい目をみはつて言つたが、その來年の春急いで歸つて見たら、妹は既に一塊の石碑に化してしまつてゐた。その時には、あゝその時にはどんなにか悲しかつたらう……

淚を拭うて仰ぐと、日は矢張り雲もない空に照つてゐて、地上のあらゆるものは悉く沈默をつゞけてゐる。風もないのに、襟元へ松の枯葉が二三本落ちて來た。

目のくるりとした、可愛い〳〵妹御さんでしたでせう。お年はいくつ記者もお參りして花すゝき一枝を手向けてあげたいと思ふ。(評)

○お道具の行く日

越前　露女

六月二日

今日は姉上の御嫁入の道具が行く日。

朝から家の内は大さわぎ、來なくてもよい者までドヤ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

〱と臺所へ來てしやべつて居る、用はないのだよといつて遣り度い位。お母樣は彼れもこれもとごちや〱した物を春に買ひにやられる。正午頃漸う落ちなくとゝのつてたので、簞笥から長持小簞笥迄ずつと並べて一々入れにかゝる。着物は母樣が姉上を傍に居いて、單衣は單衣羽織は羽織と入れられる、小簞笥の方へは自分と姉上とで椽白粉香水と順々にいれた。皆きちんと入つてしまふと雇ひ男が新らしいハッピに紅木綿の鉢卷威勢よく出て來て厭なはてしばり、擔ひ棒を通して、ねづみ地に白く桔梗の紋を染めぬいた天竺金巾のおほひをかけて表庭へずつとかつぎ出してならぶ。私とお母樣とは玄關側の廊下の窓から見て居る、妹は春に負はれて庭へ出てゐる、丸い眼をきよろ〱して。

すると一人の男がおきまりのあの歌を聲高らかにうたへば皆ドット調子を合せて門を出る、庭内にワイ〱見て居た人は潮の引いた樣、後皆はぼんやり氣ぬけのした樣。初等はお母樣の前に來て「奥樣これ迄に運びます迄がどれ程の御苦勞樣であつたか知れませんこれで奥樣ももう二三年は御心配はいりませんよ」といふ母上は襦袢の袖でソッと涙をぬぐはれて「わたしももうこれでしばらくは安心だよ」と答へられる。夕やけの日影美しい頃髮結が來てかみを一度結んで見ようといふ。三十分餘り立つて化粧の間から出てこられた姉上を見ると、サワ〱した前の束髮は影もなく、てか〱光つたまげが重さうにのつて居た。夫れきり自分のお部屋へ入つて出てこられない。夕飯もこれが名殘かと思へばいつもに似ずしめつて居る。姉上も母樣も時々箸を停めて鼻をかまれる、自分も涙に眼が曇つてお茶碗の中が見えない、目出度い樣な物憂いやうな變な日は今暮れて行く。

紙裏に深い哀愁をおぼえしめるものがある。（評）附言、自ら投稿に圏點を附すること嚴禁。

○お隣の日記　伊豆　辻村かと

餘り寢苦しいので椽に端居して蚊を追ながらじつと空を見て居ると、白い雲や黑い雲龍の樣な形の雲が後から後へと出て來る。お隣ても表は締めたが暑苦しいと見へて南の戸は開け放してある。隣の伯父さんは襦袢のまゝ仰向に寢ながら足の蚊をたたいて居る。ランプの側にお神さんは子供を寢かし付けて居る、豐ちやんとすみちやんは今日の日記を書くべく仕度して居る、さあ豐ちやんお父さんが言ひますから書きなさいよ、三十日入の部。菓子賣上高四十錢、ラムネ十五錢、晝食三人分三十三錢、茶代二十錢。出の部、豆腐一丁四錢、お醬油は昨夜買つたんですが今日の部に書いて置

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さませう、十五錢、釘と云ふ字は金へんに甲乙丙丁の丁と云ふ字を書くのですと教へる。寢て居つたお神さんは二錢や三錢の菓子ならすぐちよこなめてしまうが釘なぞは安いものですねーと云ふ　今度はすみちやんの番ですよ言ひますから假名てお書きなさいと言へば、私は平假名て書くのよと書き初める。　三十日晴、五時に起きました、朝食をすまして古奈のお盆に參りました、古奈のお伯母さんや菊子さんとお墓參りに行きました、お晝食を頂戴して四時の上りて歸りて子守をいたしました、氷水三杯九錢、菓子二錢、汽車賃二十四錢、合計三十五錢と申しますと、横合からお神さんがそんなみつともない事を書かないで只古奈行小使いくらとお書きと云ふ、其の言ひ方が餘り滑稽なので皆て笑ふ。

成程之は實際を聞いてゐたら餘面白かつたてあらう。（評）



豆賣り　初子

○開店日記

本郷　えりか

初日。毎月定た月給て生活して來たのが父樣御死去の爲今日からは小商に依るのである、昨夜叔父樣がお前もう明日からは菊屋の姉さんだ、御孃樣なんて云ふ人はありはしないよつて仰しやつたが、私はそれほど氣にもならない、けれども、母樣のおかみさんと云はれるのをきくと何だかおかしい、朝こんな事を思ひながら表を掃いて居たらもう店へ日があたる。日よけをかけながら上を見ると昨日出來上つた看板が目につく、小間物化粧品雜貨菊屋商店と配合よく書いてある。店に居ると通る人通る人が私の顏ばかり見て行くような氣がしてきまりが惡い、七時頃からは通りが通りだけに學生が多い、先生に見つかるといやだからと此間にお清と代はつて朝飯をすました。後は又店番、お客が來て何々をくれと云はれても何處にあるかわからなくてまご〱するので自分

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ながらおかしい、それに「いらつしやい」に「有がたう」がどうしても云へないから、左樣ならつて云ふとお客樣は變な顏してしまう。今日はものめづらしさに何度も錢函を勘定して母樣にしかられた。

二日目

今日少しなれた故か昨日程きまりが惡くもない、お晝から小石川の兄樣が來らして筆でも買はうかと云ひながら、御自分で筆箱の中から幾本も出してこれだけで幾何？あら私未だ價を覺えられないから箱から出してしまつてはわからないわつて云へば、それては困るね、姉さんしつかり願ひますよつて仰しやるんだもの、眞實にいやだ、兄樣まであんな事云ふんだもの。今日は隨分いそがしかつた、けれども暇ては困るんだから……。

お孃樣が姉さんになつて、そして此日記を得たのは大儲け、日々につむ人生の經驗を勘定して御覽なさい。（評）

○わが弟

相模　小夜子

夕飯の支度は、最早や濟んだ。弟はまだ歸つて來ない、又何處ぞへ、寄つて居るのかしら、早く歸つてくれはよい。

父上が、死去されてからは、他に便る人とては無いし、母上も自分も、只弟許を……。

今迄、性行も好く成績も勝れ、級中の明星の樣に、其名が光つて居たのに、近頃では、餘程樣子が、變になつてきた。なんでも、お隣りのお琴さんの話によると、彼の近頃交際し出した、神谷さんは、非常に品行が惡くて、折々學校等休まれるそうだ。「朱に交れば……」との、諺もある故、もしやと氣に懸る。

たつた、二つ年上の自分を、姉樣〳〵と、慕つてくれたのに、どうやら此頃では、自分の顏色をうかゞふ樣な妙な素振が、折々見える。でも昨日、お母樣が、お寢みなさつた後で、それとはなしに、誡めたら、さも、心に思ひ當つたと言ふ樣が見えたので、自分は嬉しくて、弟の幸福を祈つて寢たのに、又、今日になつたら忘れたのか、あゝ情無い……。早く歸つて呉れゝばよい、お母樣が御心配なさるだらう。……と行く末長い弟の前途を、かうかあゝかと、思ひ惱んだ。

弟は程なく歸宅したが、机にもたれて、何かしきりに考へて居るらしい。

もう十一時も過ぎたのに、とそつとのぞいて見たら、あら……弟の眼には、涙の露が宿つて居た。

悔恨の涙か――それとも思ひあまることでもあつてか。男の心は男が知る、姉さんは唯々祈ればいゝ、涙は蛇度美しいものに極つてゐる。（評）

○そのまゝの記

岡山市　高木濟子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

八月一日、大坂大火の報來る。號外！と配達夫の威勢よく投げ入れし聲に、眞夏の夢醒ぬ。あはれ今猶燃えつゝありとか。風下にたつ人々の心如何ならむ。おそろしき心地はすれど、また密に垣間見たきやうにもあり。

八月四日、風しきりに吹く。疊と言はず板敷と言はず、ざら〱として居心あしし。母上も妾も始めの程こそ甲斐々々しく箒を持ちて立ち廻りたれ、後は當々疲れ果てゝ、唯濁りし空を眺めてあるのみ。午後五時鐵道院に出ています兄上の歸宅遊ばさるゝにより、それ迄にとて風呂の下焚つけ置きて、此風に捨て置く法やあると、母上に叱られぬ。勝手元もいそがしけれど、實にもとてしたがひまゐらせつ。

八月六日、夜に入りて隣りの君琴奏で出て給ふ。かしこを今少し力入れなば、など母上の宣ひますに悲しうなりぬ。われもかにし世にあらば、かの如くに學習ひて、月清き夜々の思ひ出ともなさむを、今は針もつわざに追はれて、日々一時間の讀書もわすられ勝なるぞ悲しき。

八月七日、妾といふみじかき一語に亡び行く若き姿を君おぼさずや。遠き友より唯一首送り來りぬ。悲しきことといひ給ふ君にもある哉。如何答へてまし。

八月八日、夜母上横になり給ふを、腰さすりまゐらせんとてよりそへば、此宵も隣りの君大勢の友さへつどへて琴彈きたまふに、母上はと見まつれば涙ぐみ給へり。謡ひの稽古にと出て行き給ひし兄上いまだ歸り給はず。寂しき夜なり。

徒らに冗長ならむよりも、これも亦日記文の當體たるべし。語短かけれどわれよく君の涙を知る。（評）

○朝顔

本郷　山崎千鶴子

八月一日、夜來の雨が、唐辛子賣の聲が聞ゆる頃、漸く晴れた、雨の後は、何となくすが〱する、全く、心迄が涼しくなる……三十分程して、花屋が朝顔約束通り持つて來た……今日は鈎舟のに、活ける筈なのが、朝顔はどんな風にするのかしら、嘸むつかしい事だらふ……こんな事を考へながら、先生がお出にならぬ前にと、道具の掃除や、此前の時に活けた床の間の黄蓮摩が未だ、チャンとして居るから水を入れかへたりして居ると、まあ、もう八時を打ち始めた……こぼれた水を拭いていたら「お姉さんに！」と、妹が端書を持つて來た、見ると先生からの……あら今日は病氣の爲、お稽古に伺はれないからつて……まあ、つまらない……では朝顔は……何うしやうかしら、自分で活けるわけにもいかない、だつて、朝顔は始めてなのだから……外のものならなんだけれども……暫く、先のわれかかつてる蕾を眺めてたが……どうにも仕方がないからソット、庭のコスモスの側へ、鉢の儘、地に埋めといた……が、氣になつて、氣になつて堪まらないから、暫くして、行つて見たら、水色の、桔梗形の大輪が、只一つ、青い葉の上に、ツーンと、澄し込んで咲いて居る、莖が曲つたなりに、空へでも昇る様な威勢……そして……何處かに、得もいはれぬ優しさが、宿つて居る様に、思はれる、ヂット見てるとからだも心も自然に涼しくなる。あゝ先生がお出てならば、此の莖も今頃は下ばかり向いてるだらうし、花だつて萎れて居るに相異ない、私の手に掛らなくて却て幸福だつたのだ、あゝ、よかつた、先生が御病氣て……だが何うか、お癒るければよいが……何だか氣にかゝる、併し、如何に巧に活けたとてこの様に愛らしい姿を見る事は出來なからうに……ほんとに幸だつた事と、ふと花の中をのぞいたら、羽の生へた小さな虫が一疋……必然蜜を吸つてるのだらう。

花其者に之だけの愛着があつたら、枝をためるにも亦其心が出て來るでせう。（評）

○八月七日の晩

金澤市　後藤芳子

私休暇で歸省したらみんなが休暇中に弟の亘雄（九さい）によくものを敎へてやれと仰しやつた。

或晩亘雄にみんなの前で立つてお話をなさいといつたらすぐ立つて次の様な演説をした。

おぢいさんは目鏡をかけて新聞を讀んだり白毛のヒゲをなでたりしてい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つも内になるものです。

おばあさんは腰をまげて歩くものでワシに菓子を買つて與れたり遊につれて行つて與れるものです。

おとうさんは洋服着て毎日役所へ行くもので、日曜にはいつも竿を持つて川へ行くものであります、そしてこの夏雄を叱るものです。

おつかさんはたいそうおとうさんと仲のよいものでいつもあそんでばかりゐるものです。

姉さんはいつでも鏡を見たり手紙を書いたりするもので男子の寫眞をたくさん持つて居るものであります、またレース糸で栞や錢入などを拵へては人にやるものであります。

下女はからだの肥えたもので食事の用意や洗濯などをするものでありす、そしてワシを一番かはゆがつて與れるものであります。

猫は鼠を捕つて來て子に與へるものであります。

ワシは毎日遊ぶもので、時々おとうさんに叱られてはおばあさんに菓子を貰ふものであります。

一同大笑ひであつた。私は聞きながらイヤな感じがした。

子供は正直てす。この複雜な家庭の複雜な人々の性格に、最も簡にして明なる定義を下すところ、これ天眞の小兒に非ずんば能はざるものてせう。聞く人の恥づるは心不純ならざるによるか。一同ヒヤ〳〵として聞いてゐる所目に見えるようてす。(評)

○代筆日記

常陸　木村那賀子

八月四日、朝の食事がすむと直ぐ新聞讀みに帳場へ座り込むだので、終日代筆をして了つた。萬朝報の小說を見終へて報知を取る所へ德次が來て東京の取り引へ物品注文の書面を與れろつて、其壓事は電話てしたらいゝぢやないかつて云つたら、電話てすむ位なら賴みやしないつて、眞當に口のへらない奴だと思つた。けれど致方がないから書いてやつたら書いた半紙一疊の長さも有るむだもの、最も私がへタの長文句のせいもあるけれど。

此手紙一本書き上げる迄に一時間半費して了つた。やつと終へてまあよかつたと思ふ間もなくお父さんが來て今度は近在の取り引き店え出す菜番を仰せ付かつた。十三枚。ても之は新荷着の知らせなので文句は皆同じだから柴だつた。

午後お盤の食事休みに又帳場え座つたら、お千代が來て實家えやる手紙を書いて與れろつて。少いさい時から子守りに來て居て、何も書けないのだから可愛想だと思つて心よく承知してやつた。何て云つてやるのつて聞いたら、枝豆が出來た頃には行きたいから其時には用があるから來いと云ふ手紙を寄越して與れろつて、書いて下さいつて。私は呆れて了つたと云ふのを通り越して泌み〳〵哀れに思つた、云ふがまゝに書いて讀むで聞かしたら、それても大變喜こんで居た。

其れから眞壁町と下田町へやる送り狀を三本書いて日が暮れて了つた、終て今日は代筆て日を暮らして了つたもう〳〵帳場えは座るまいと思つた。

いゝえ〳〵お座りなさい。代筆又代筆、その中に深い人生が織り込まれてくるのです。(評)

○洗濯日記

美濃　中村澤子

八月七日、朝顏が三輪うす紫の色あざやかに咲いた。「ヤア今日も日照りの朝盛りぢや、いつたい天道様「どうしやしたあ、盤さんざ照り廻つたあげく夜に來たらどんどん雲が出やがつて、おかげて朝つから暑うて堪らんや」、表の道を農夫が二人、罵りながら通つた。道理て朝顏に露がなくつて生氣がない、夜露が下りないのかしら、空は一つぱいの雲、けれどけれどゆだん大敵……昨日の如に暑くなつちやあ何も出來ない、早くお洗濯てもするとしよう。

凉しい柿の木影てヂヤブヂヤブ……ふだんの一衣を一枚とカメピラ襦袢を一枚、ほんの汗だけだからザッと洗つておきつて母様はおつしやつたけれど、サア洗ひにかゝれば何だつて丁寧てなくつちや氣がすまぬ、キユキユキユともんてゐる間に玉の如な汗がポタリ、ポタリ、暑い事?どうせ死ぬんなら水の中へは入つて死ぬべし!!何ものかゞ心の底てさゝやく……

淺瀨の音にボンヤリしてると、突然!背骨をシタタカコツン!あいいた

？石の如な青柿が向ふの水だまりへドブンと音して……あゝそれ？さるかに合戰のお伽噺ぢやあるまいし、首をちゞめたまゝとうとう逃つて仕舞つた。

○お休みの一日

大阪　春愁女

文壇の投稿でも書いて見樣と朝から机に倚つた。一行書いては消し、二行書いては消し、とう〳〵半頁程眞黑に染めて仕舞つてからは、書けぬ恨だとか理想を實現した人だとか——無意識に筆を走らせて居た。心持ちのいゝ、涼風がそよ〳〵と庭の若葉に訪れる。「土用には珍らしいれ。」と母樣のさえたお聲が池一つへだてたお居間から聞えた。女中が何だか云つた樣だつたが——。とう〳〵筆を捨てゝしまつて窓越に軒の桐の木を通してどんよりと曇つた空を見上げた。眞つ黑な雲灰色の乳色の—が一團になつて西へ〳〵とかけて行く。ふと八年の昔——と悲しい追憶が胸に浮ぶ。私の樣な身の上に誰が此麼悲しみのあらうと思つて下さるだらう——。お靈前から父樣は健次と網打ちにつて出て行かれた。「また私の指位なのが二つ」て笑ふと、「今日は五つ位とつて來るさ」つて、ほんとに呑氣なこの暑いのに。私はお机の前で寐つて仕舞つたのでお踊りになつたのは知らなかつたが、何でも今日は獲物が多かつたらしい、父樣の大氣焔が聞える。いつの間にか晴れ渡つて又暑いこと。

母樣に願つて水を書齋に置いて戴いた。女中を呼んでやると涼しい〳〵つて大嬉び。一番年下の花やがおかげで御本がたくさん讀めましたつてほんとに花は感心だわ春なんかこくり〳〵とお舟をこいでるのに——。西の空が眞紅に染まつた頃花と春とを連れてお買物に行つた。此間からあつらへて置いた三枚櫛をもらつたついでに美くしいりぼんを買つてやる。櫛の模樣が氣に入つた。歸ると母樣が「いゝものが來てるよ」つて道子樣からのお手紙を出して下すつた。又相かはらず面白い事ばかり。すぐお返しを出す。

お手製のアイスクリームを戴いて床についたのは九時。



夕の濱　紀伊　多賀とも子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

和歌

與謝野晶子選



○規定　別に新派舊派の名稱にかゝはらずと雖も成るべく清新の作を迎ふ一人一首限りにて必ず半紙又は罫紙に認むること一人にて二首以上ある時は沒書とす丙種の賞を送呈す

○（天賞）　大阪　梅本八重子

かばかりの苦るしきことを忘れ得し大火の夜の安かりし胸

○（地賞）　信濃　東條周子

尼寺の鐘のひゞきは黒髪のきられて歎く聲と思ひぬ

○（人賞）　秋田　北林まつ子

ともすれば涙こぼれぬ母うせし日より月たち年かさなれと

【秀逸】

○上總　森婦美子

この二人心にこそは思ひけれ形見に云はぬ契なりけり

○山城　木の花

我心買はんとすなる人多き中に立てども價ひしらずも

○伯耆　竹本春江

女てふいとやごとなき誇らひに亡びぬ我は廿年にして

○麻布　江森美

白き手にもつ白ばらに紅の唇ぞへてしばし眼ふたぐ

○山梨　塚原けん子

幸なべて我を離れぬ黒髪の地に落つるたび衰へてゆく

○大阪　梅本龍子

大火事や火の子亂るゝ御社の草原に咲く常夏の花

○下總　相川みよ子

相模野の茅生の上に我いねて心に似たる秋の雲見る

○伊賀　山村龍子

捨てられて歎くをいともよきことゝ思ひて歎く我は女子

○讃岐　安藤たか子

またもよく思ひ交してありと云へば身に關らぬ人も妬まし

○本郷　富美子

落髪の一筋ごとに我若きあまき思出うすれゆくかも

○大阪　中村秋子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とある子の唯一言に百年の身を過ちて悔るしらずも

○　大阪　山内溪子

古寺のいからに生ふる青き草息するごとし月のぼる時

○　廣島　横谷小島子

草の戸にふけて月さす初秋の夜のさびしさに歌の集讀む

○　稲井やまざと

おほらかに夕顔咲きぬうば玉のくろ髮組みて戸にしばしよる

○　茨城　田村波津子

夏の夜は浴衣に紅の帶むすび涼むと越えぬ七つの橋を

○　岐阜　日野歌子

藁草履はた／＼鳴るをわびしみてふりかへりつつ花つみに行く

○　ゆり子

なにものをしみ給ひて神はただ涙の泉一つくれにし

○　埼玉　育薬女

吾れを戀ひ訪ひ來る君を見る度に花一つづつひらくるここち

○　豊後　吉頁靜子

夢のごと御おもかげはうかびきぬ萩の花ちるたそがれのまど

○　石狩　河合菊子

旅人の疲息はのかに渡りきて今朝我が窓に若菜にほひぬ

○　横濱市　村田千代香

なつかしき君の御ひざに打伏して夜ただあらむと思ひぬ春は

○　沼津　渡邊とよを

初秋の涼しき月の影うけて夜すがら吹かんかたみの笛を

○　麹町　牧野銀杏庵

腸はりしせつなのおもはとこしへにむれに刻めりそれといはれど

○　みどり

わがうなじまくと人きぬあらひ髮たばねずいれし夜をあやにくに

○　讃岐　小野定子

もろ／＼の思出のうちえも言はぬ悲しみなどはなつかしきかな

○　和歌山　橋本貞子

歎くとき喜ぶときの吾がこゝろ知るは大なる天地ばかり

○　常陸　初澤さく子

湯上りの白き乳房をほの見せて我が立つ窓に白百合の咲く

○　尾張　霜田みのる

大なる天の寂寞のひゞきかや暮れ行く秋の夜のいなづま

○　小田原　靜子

遠方に走らんとあせるものぐるひそのごとき身を君さゝへます

○　秋田　白百合子

言ひがたき悲しみありて外を見れば心ありげに桐の葉の散る

○　大阪市　鹿島綾子

鐵のごと堅き御胸も情ゆゑ熔くる時あり君それを見よ

○　新潟　佐藤岩子

朝霧に峰の松のみほのに見え夢にも似たる景色なる哉

○　四ッ谷　平田きよ子

昨日けふわれは盲目となりにけりこゝろのやみの道にさまよふ

○　横須賀　白井とき子

日蝕のまゝに日暮れしいとくらきくらき戀すれわれと彼の子は

○　府下　三ヶ島よし子

立ちこむるさ霧の中に白はちす有明月の如くにほへる

○　三重　川原みさを

戸にたてる尼ものいはず夕庭の小草の花に秋の雨ふる

○　佐渡　古藤以惠子

甘き香をさゝやく君は惡魔ぞときけば惡魔の戀しくなりぬ

○　山口　酒向とし子

吐息して背高き君は來給ひぬうはばみのごとおそるこの君

○　宮城　沼倉ふく子

君とわれ緑いろこき清瀧のいはに凭りつゝ思ひ語りぬ

○　紀伊　福本蒼生枝

千日のわが戀さめぬ長き夜を萩原の虫かしましときく

○　金澤　むらさき女

葉のかげに淡く消ゆなる蚊遣火の中に小さき君を見出てぬ
○　京都　河邊てる子

夏の夜は寢ぐるしけれど明けやすし君おもいつゝも二時三時四時
○　京都　天野春世

加茂川に千鳥飛ぶなりよもぎ摘むかぶろの髮の少女の上に
○　京都　寺井芥子

高瀬川舟をひきゆく幾人の中なる人よたれやらに似し
○　長野　臥雲紫子

紫の袴つけたるいくたりかすみれかざしてまたまひしかな
○　長野　古畑正子

時鳥一聲啼ぬわぎも子とはじめていねし曉にして
○　備中　かつら子

夏と云へど夜は淋しや我谷を訪ふは松風山ほとゝぎす
○　熊本　友田紫

何ものも君より外にあらざりし昔のわれに變られどされど
○　鳥取　桑本きさ子

秋の雨鎮守の宮の燈明は疑ひぶかき眼のごとくてる
○　常陸　木村那賀子

こほろぎの泣く音淋しき秋のよひ戀しき君に文かく我は
○　下關　阿多良子

いく度かさだめぬかくて幾度か敗りぬわれはたのまれぬ人
○　靜岡　清子

あな淋ししも枯の野の虫よりもまひるなれども君まさぬとき
○　遠江　宮永響子

君は今如何に居ますと思ふ日の小窓に細き秋の雨かな
○　美濃　中村澤子

萬象をやき盡さんと日のみ神いかりはげしく廣野をすぐ
○　日本橋　松岡千代子

玉しきの都大路に住む人も秋の哀を知らぬものかは
○　信濃　平澤きよ

後の世に君をもとめて目覺むればまどにはかなくこほろぎのなく
○　秋田　佐々木萬子

四五人の友うちつどひ語らへば心の雲もはるゝもの哉
○　京都　河村光子

吾きかむ榮えありし日をいざかたれくらき露店の古りし鏡よ
○　呉市　庄田亭子

我がなさけ眞夏をかざる夕やけの雲に似たると君思はずや
○　茨城　岡田きよ子

さめ〴〵とわれは泣かましこの思ひ今日もかたらず日の暮るゝとき
○　奈良　白ぎく

人に似ぬ君が心とつゆ知らで思ひ初めしを今にして悔ゆ
○　奈良　中富よしみ

思ひ出の糸くる度に悔多き生命を恨むこのさびしさよ
○　茨城　喜惠子

あきつとぶ庭に咲きたる撫子はうなゐ少女の姿なるかな
○　石川　山田まつ子

ねたましきまゝに君をばのゝしりてそが淬多き戀をものろふ
○　和泉　岡野千枝子

行きかへり電車の中に見しといふかりそめごともにくからぬかな
○　京極　せゝらぎ

山寺の鐘の音淋し月の夜をわが行く方に萩の花散る
○　京都　伊藤初瀬

物思ふ身にはあられどなんとなくわが身悲しき秋の夕ぐれ
○　茨城　中山慶子

秋の月緣に居並ぶ人達に葉の影さしていとすゞしけれ
○　神田　三好富久子

悲しみてなげきて今日も早暮れぬかたぶく月に時鳥なく
○　和泉　谷ふじ枝

廣野原枯木のそばに捨てられし小犬に秋の入日のさしぬ
○　岩代　つゆぐさ

ある時は君がかどべにさまよひてみこゑにゑみし少女子なりき
○　神戸　岡靜子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我が心玉のやうにも美しく清き音を偲びて泣きぬ
○　靜岡　すその
この野過にわれ迷ひ出て西の空の黄雲のちぎれ君と思ひし
○　群馬　志美津貞子
いくそたび跪きつゝ涙せし君を男と呼びけふたらぬなし
○　加賀　勝崎きく子
夕くれやごみのような蜘蛛の子のやれし垣根にすをつくり居ぬ
○　下總　小出保花子
涙なし戀もまたなし天地に生くるすべのみわれしてありぬ
○　伊豆　水村綾野
秘事を一人の君にあかさむとあかさむとして幾年ふりぬ
○　藤澤　常盤幸子
草の花かつ散る夜なりさびしさに或は君のれて在すらむ
○　四谷　縦原芳江
おとろへにほと吐く息のうすぐもりされど拭けどもかげはきえなく
○　四谷　味方古宇子
つれ〳〵のありのすさびに物の本繙きにし日より胸たゞならず
○　相模　目代つれ子
思へりと一言をだにのたまはゞかゝる闇は知らなくにわれ
○　美濃　卿ときわ
雁鳴るわびしき岡の夕ぐれに亡き御母の言傳てを待つ
○　越後　吉田かほる
此夢を誰に語らん術もなく獨りもだえて涙すいく日
○　牛込　平塚白百合
こともなく從兄同志のまゝごとにむつみ合ひしもうらはづかしき
○　日暮里　細谷鏡子
君とわれ一つの家にありながらなどて心のへだてそめけむ
○　山形　大瀬すみれ子
月の夜に琴の音送る浦風は殊に涼しき心地こそすれ
○　紀伊　三栖鶴江子
鴫追へば蘆の根白き野の海の中にかくれぬ我は淋しき
○　常盤　秋山咲子
かへり來て都少女の噂する兄をうとみぬ何となけれど
○　仙臺　浮草子
いたづきは務めにしことも破るらむみ名くり返し忍び音に泣く
○　大阪　春愁女
我が如く物や思へる森かげに白き花さく秋草の花
○　紅葉
こほろぎの鳴く小夜中に寢さめして亡き母思ふ秋はかなしき
○　小石川　海老澤得子
寂しさにえ堪ず家を逃れ出て夜の街行くを好むころかな
○　大分　本田一枝子
夕燒の雲照る松の遠方に海あるらしきこゝちするみち
○　弘前　川村露子
しらしらと月照る花のかげにわれ君をおもひぬつくれむとして
○　信濃　藤澤さと子
少女なりあゝちからなき少女なりなにもなすなく泣く外はなし
○　東寺尾　星野なか子
くれなゐの花にやどれるしら玉の露にふるればつめたかりける
○　大阪　吉田勝子
秋風のおとづれなるか桐の葉のものあはれげにほろ〳〵と散る
○　三河　永田舞鶴子
遠方の暗に聳ゆる高樓を暴風こそはと轟がしてけれ
○　京市　磯井與竹
大颶風怒濤雷雨の攻め來るも變らぬものを心と知れな
○　靜岡　高田もと子
今あげし魚よく光るはま市にぬれたる月のかげぞすゞしき
○　長崎　佐野數子
秋の水菊のさまざま植ゑならべ君住みませる家を思ひぬ
○　淡路　加藤菊子
暫くは君をも忘れ身も忘れ虫きく人となりにけるかな
○　三重　瀬木入重子

和歌

かの日より胸によするはあら海の冷たき潮に外ならぬかな
○ 遠江　加藤敏子

只一人一室にこもり蟄すきぬ秋行く日なり心淋しく
○ 小草子

その日より二尺にたちし袂さへ長しとわぶるわが身となりぬ
○ 新潟　白菊

何となくたゞ何となくなつかしき川ぞひ村の夕まぐれかな
○ 羽前　野口菊

我が涙玉なす紫紅ゐの糸につられてまゐらすべきか
○ 薩摩　山下美佐子

夕暮の鈍き光りに向ふ時若き誇りの終りをおもふ
○ 若狭　瀧本なみ

疲れたる如く雨は斑々と今日も降るかなわれの旅路に
○ 長野　はる女

桃色の河原なでしこ五つ六つあをき茅萱にまぢりて咲きぬ
○ 本郷　千とせ

まどろめば君がみ手取りうつゝには見果ぬ夢の儚さに泣く
○ 樺太　岡田のぶ子

み姿の如何あらんと偲ばれぬ清きみ聲に琴の音のして
○ 京橋　佳菊子

緣とわが居にかはりて形代は波のまに〳〵に漂ひてゐぬ
○ 和歌山　木澤てる子

なが月のこの九日を身はやみぬまがきの菊も土にまみれて
○ 京都　井上すみ子

からかみのそばにそとより父母の語りたまふをわがことときく
○ 京橋　石田美子

君故に知りしうれしさ君故に此悲しさと今日は悟りぬ
○ 韓國　原登里子

桃色の衣着て野邊にたはむるゝ韓の童児を美しと見る
○ 北の海邊　たつ子

いとかたく閉せるとびら開かむと集ひくる子をあはれと思ふ
○ 鹿兒島　貴島野百合

枯れてゆくつるに朝顔咲きにけり今日も生く〳〵吾れは思ひぬ
○ 中蒲原　長谷川ます子

百花園みぎはに咲けるあぢさいの陰より出てぬ美しき人
○ 北仙　春木宮女史

名なし艸赤き小さき花さけるしづが窓辺に春の雨ふる
○ 福岡　紫の人

をしかりし夢よと窓の戸を押せば父の御寺に月のおちゆく
○ 日本橋　八千代子

天つ女が舞の衣のいろどりか御空に高き虹のかけはし
○ 石川　ぬひ子

山里は霧たちこめてわかれどもよそめさびしき秋の夕暮
○ 大分　原田澄子

いろ紅き椿の花の甘きつゆ吸ひて笑まへる君なりしかと
○ 遠江　波多野いち

我れ笑みてありのすさびの歌やれば百のますら男額さげて來る
○ 長野　平林琴江

はらからに語りもはてず窓によりてひそかに泣きぬ初秋にして
○ 長岡　秋月すゞ子

雨やみて飛石歩るくこけの上のくぼみにうつる月をめづわれ
○ 岡山　高木清子

心にもあらぬことのみし來りし此一年のうとましき哉
○ 筑前　熊本はな

給はりしうつしゑとりてほゝ笑めばやさしき君も笑みたまふごと
○ 大阪　ちどり

何となくものみなうれし笑まれぬれ十八才のをとめなる我
○ 日向　大平安枝

かく思へどかく惑へどもなぞやかく冷たく見ゆるわが心ぞも
○ 日向　吉田しげ子

あらし吹くま窗の町は悉く戸閉ざしありぬさびし路びと
○ 宮崎　むらさき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何事もわれが犯せし罪として病りぞ泣かむいざさらば君
○　信濃　深井靜子
彩鳥の翼まかるゝおもひしてそゞろにいれぬはじめて君と
○　門司　松永みよを
南歐の眞夏を一人行く如くわが手はふるひ頬ほてりするも
○　播磨　藤井楕
つれなしとおもひわぶれど恨むにはまだうら若の少女なるかな
○　兵庫　阪上かめ子
花が散る花の片散る花が散る君を見る目のなみだの中に
○　備中　篠原しげ子
大風の吹きにし朝賤の女が枯木を拾ふよろこびのさま
○　熊本　立花登美子
網絲のあまたくるしく纏れたる樣にも吾れは思ひみだるゝ
○　赤坂　福島美代子
いと強き君が言葉に七夜も寢れずに物を思ひぬと云へ
○　姫路　永田喜代子
十八の處女の戀に悶ゆるを君やは知らぬその苦しさを
○　攝津　千代
つぎつぎに語らひをればいつしかも秋の夜いたくふけにけるかな
○　秋田　阿部かつ子
一人の君を慕ひて一人の君ゆゑ泣けるわれならなくに
○　鳥取　桑澤敏子
馬子唄のこゑたそがれて城山の峰の上より夕月いでゝ
○　上田町　宮川ゆう子
月光の曲を奏てゝ小窗ごしに面はゆげなる桂男を見き
○　大阪　沖野英子
相見れば壁に書かれし相合の傘思ひ出ぬ昔なれども
○　岡山　橋本節子
貴人の病みます文に侍らひて曉に聞く時鳥かな
○　伊豆　加藤鶯子
みどりなす草の中なる紅の花のごとくも君をみるかな

○　府下　木原英子
花咲かばきますといひし君を見ず散りし梢のうらめしきかな
○　牛込　山下靜代
常に云ふ女よはしと其の君はわれよりさきにうちあけにける
○　信濃　芳子
只一たび人を戀して只一度人のみむねにいだかれて見む
○　四谷　石山たか子
眼閉づれば笑みます君が御姿の瞳に見えぬ秋雨降る日
○　大坂　順子
石うつくし流にしろき足ひたし黑髮あらふ鴨川少女
○　千葉　安西美園子
みそ萩や源氏をかたるよき人ととなり住むなる山の溫泉の宿
○　信濃　くれなゐ
歐に見し夢のやうなる草の家を原に見いでぬ初秋の旅
○　信州　三上よし
夢に見し紅羽の蝶が舞て來ぬわが二十日やむこの枕上
○　山梨　暑中福歸子
大なる悲しみ覺えおろそかに涙せし日を悔む日となる
○　羽後　佐々木溪子
文つくゑの小かめにさせる萩の花硯の水にちりて浮びぬ
○　寺尾　しら菊女
照りはゆる雪の光につかれたる眼をとぢてさびしさ思ふ
○　靜岡　清子
思ふとも思はぬとにもあられども只だたえがたく胸のせまりぬ
○　長野　敏子
流れ行く野川の水のさゝめきをきゝも見まほし靜かなる夜に
○　長野　川手かづ子
うつくしき望をすてゝ戀をすてゝ君はいづくの道をゆくらむ
○　大阪　京谷欧野
羅を着たる少女とものを言ひぬ青き簾を中にへだてゝ

新論文



○規定　論文と云へどむづかしきことにあらず諸嬢が考へしこと思ひしこと文學上又は一般女子に就いての平易なる論説を歡迎す二十四字詰三十行以内一人一章に限る乙種の賞を送呈す

○形式の世の中（地賞）

滋賀縣　磨志緒

私は反物を買ふ度に常にさう思ひます。此美しい包紙や太い絹糸桐の箱、是れだけでも餘程の費がかゝつて居るだらう、之を此反物の改良に用ひて、外は唯品物の損じない丈けに、繪が書てなくても好いから、厚い紙に包んで置けば好い事である。太い〳〵絹糸は用ひ途もあまりない、美しい包紙だつて別に何にといつて使へるものでなし、といつて捨て了ふのも惜しい氣がして、針箱の中にはレッテルていつぱい、簞笥の抽斗の一つにも、反物の箱と厚紙が積み重つてゐます。兎角世の中の事が此反物の樣に、あまり形式にばかり走つて其內容と伴はぬとが多いぢやありませんか、まあ外見を充分飾つて客を集める商賣ならば、ともかくも、外は綾や錦で覆ふても內側に繿縷が隱してあつては、なさけなう御座います。私はまだ〳〵悲しいお話を聞きました、それは此度某地で藥を製して各地へ賣りに歩くので御ざいますが、それに就て唯賣藥とだけては買ふ人の少い處から、どこからか數人の兒をひろつて來て「哀れな孤兒の爲に」とか何とか言つて人の同情を買ひ藥を賣り付けるのです。人ももうから成つては……さあ何と言つたら好いでせう何とも名がつけられません。表には育兒と如何にも美しい清い名があつて裏には哀れな兒を賣つて己の腹を肥やす恐ろしい罪がひそんで居るのです、此樣に外形許りの慈善者博愛家が世の中に多く出來ますから、たまに一人二人の神樣のやうな人が出られたとて、社會はその人を尊敬せず矢張り前の人と同視して了ひます、今社會を組織して居る人々に向つて此樣の事言つたつて駄目ですから、第二の社會をつくる私どもは內容と形式とをともにして決して〳〵前に言つた樣な惡風になれては成らぬと

存じます。

萬事形式の世の中、看板廣告の世の中なると同感の至りです。此文之を敍して第二の社會を繼ぐ自己の責任を擧げたろなど、抱負遠大覺えず快を呼ばせます。（評）

○心は高く氣は低く

（入賞）

攝津　みなしご

髪や貌の美が女の生命ならば、愛嬌もまた女の命の一つであらうと思ひます。今の女學生方の中には、妄に氣位ばかり高くつて、途中で懇意な人に會つても、つんとすまして通りすぎる方が多いやうです。或は學生時代には愛嬌なんて不要だ、其爲めに却つて誘惑されるやうなことがあると云はれる方があるかも知れませぬが、私とても決して勉學時代の方々に、誰彼の差別なく愛嬌を振蒔けと申すのではございませぬ。余所へ行つて知らぬ道を歩いてゐても、少しでも知つてゐる方に逢つた時などには、微笑をもつて會釋する位の程度に愛嬌があれと申すのでございます。

また其誘惑如何は其人の意志の強弱によるのでございますから可成的心を高尚にもたねばなりませぬ。高尚なる心は堅固にして侵しがたい意志を生むものでございます。



スケッチ　　下谷　佐野貞子

一朝一家の主婦となりました時、愛嬌に乏しい人は如何程損でしやうか、ために家人の機嫌を損じ遂には破鏡の悲劇を演ずるやうな事も、少なくないことだらうと存じます。其一生の出來事を積りつもつたならば、恐らく其半分は他人の誤解嫌厭等のためになるべきこともならなかつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たのでせう。他人に敬遠主義をとられますのも多くはこんな人のやうでございます。勿論種々の事情があるからでせうけれども。

眞の愛嬌と云ふものは、俄につくらうと思つてもできるものではございませぬ。ですから私は今から、朝日にそよ吹く春風のやうな愛嬌と、高尚なる心とを修養しておきたいと思ひます。

亡き母がよく申しました「女は心は高く氣はひくゝもて」と。實に名言だと思ひます。

稍ゝ散漫ながら面白い議論です、愛嬌と云ふ語は或は誤られて居る、私共の申すのは云ひ代ふれば婉淑、優雅、英語のデリケシイの婦德を云ふので、此論亦畢竟それを指すのだらうと思ひます。（評）

【秀逸】

○男女の權利

新潟縣　佐藤岩子

男女の權利など云ふ事は最早陳い問題でありますけれども、今でも世間には男尊女卑がよいと思ふてゐる者がありましたり、女尊男卑を主張する者がありましたり、又男女同權などゝ皮相の早合點をして威張つてゐる女性などもあります樣ですから、妾は少し卑見を述べて見たいと思ひます。

我が國は古來から男尊女卑に過ぎた風習でありました、夫婦間に於いて男子が女子を除りに愛する樣に見ゆると、俗に嬶孝行とか鼻の下が長いとか云つて惡く云ふ風があるのは誠にけしからぬ事であります。自分の妻になればどんなに使役してもよいとか、又は無いものにしてもよいと云ふ事は決してありません、妻女になつても他人に對すると同樣の仁と禮とを以て遇するのが當然であります、男子の橫暴の爲に泣く女子が今日でもどれ程多いか知れません、之は云ふまでもなく不倫の極りであります。

明治になつて西洋の文明が續々輸入され從つて西洋思想も這入つて來ました、所が西洋では女尊男卑の風が多い、なんでも西洋に摸倣するのがよいと思ふ事と從來の男尊女卑の反動として女尊男卑を主張する者もある樣になりました、之も無論間違つた考であります然らば男女は同權であるかなど思つて女子は男子に服從する義務もなく同一の權利を振り廻してもよいなどゝ思つて所謂婦德を傷ふ樣になつた、之れも男女の天職を辨へぬ者であります。要するに男尊女卑ときめ又は女尊男卑ときめるのは何れも極端の說で皆當を得ない全體男と女を尊と卑と區別ある樣に思ふのが抑も間違つて居ます。由來男と女が人生に對する必要と價値の程度は同一である、決して男が七分の必要若しくは價

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

値を有し女は三分の必要若しくは價値さへ有しないと云ふものではありません、然るに之に尊卑を付するのは根本の誤解であります、男女は其天職が自ら異つてゐますから從つて其れに適する樣に身體の構造も異つて居ると云ふ許りである、之を人は男を尊い樣に見るのであります、要は男女が天賦の權利と義務とは同量であるが只そこに踏むべき天職が自ら定つてゐます、之を間違はぬ樣にする事が何より大切の事でありまして、尊卑などは爭ふべき問題でありません。

議論井然として亂れず、結論も亦吾意を得たものがあります、たゞ新らしからぬを憾むものであります。（評）

○理想と人生

滋賀縣　靜江

妾達が若し現實に甘んじて、理想がないとしたら如何でせう、人世は實に汚れたもので、妾達の爲る事も無意義となりませう、大層悲しい時や心の沈んだ時などに、又起つて人生の職場に入らせるものは理想であります、又反對に得意になり過ぎた時などに、妾達は弱い者であると思はせるものも理想であります、此故に理想は人生の生命とも云ふべきものでせう。

さて凡て人々の人生に對する考へは、理想に由つて變るものであります、若し理想——人生の目的——が卑しいものであれば如何でせう、例へば只金錢の欲望を滿足させると云ふ位なものであれば、人生を以てたゞ名譽利益の巷の樣に考へて、其はては淺薄な樂天主義に陷るでせう、之と反對に又無闇と理想が高遠な時は、此有樣に達する爲の內容さへも滿たす事が出來ず、失望の極は苦悶して厭世主義となり、遂には阿蘇か華嚴を以て唯一の救主であるかの樣に思はしむることになりませう、妾はこれは理想が健全でないからであると信じます。

此故に妾達は正當に人生の理想を認めると共に、正しい方法で之に近づく樣に努めねばなりません、そうして此間に人生の眞意義を解して、善をなすのを樂む品性を養ふ事の出來る方法を發見せねばなりません、さらば如何したらよいでせう、妾は妾達が毎日〳〵せねばならぬ本分を誠心から確實に行つてゆくのは、即ち人生の最も高尚な理想を實現する最好の方法ではないかと存じます、妾は此の樣にすればだん〳〵と理想と現實とを近づける事が出來る樣に思ひます、これが即ち人生に對する健全な考へではありませんか。妾はこれを實行しやうと決心したのです、併し口で云へば容易なもの〻、さて實行するのは仲々容易ではありません。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

容易ならぬ大問題でありますが、此結論は最も普通的で穏健なる解決と思ひます、敬服。（評）

○活潑とお轉婆との辯

南多摩　福島操鏡子

活潑とお轉婆とにつきまして、私の思ふ意を述べます。活潑と申しますのは、女の美質である。優美の行があつて道理を辯へ、物事を成すのにねちくちせず、はきはきと、致しますのを云ふので有ると思ひます。此行は、私等許りてなく、廣く多くの人にとつて、實に大切な行てありますから、益々修養いたす事が必要であつて、遊ぶ折には勿論、お話をする時にも、人と交る時にも、此の活潑な行が無ければ成りません。若し、此行が無かつたなら、人に愉快を與へたり、又自分も樂しんだりする事が薄いだらうと思ひます。次にお轉婆と申しますのは、之は前に述べました活潑とは又違つて女の辯に、男のすべき業をしたり、人の前でいやにふざけたりするので有ると思ひます。女は常に、愼むべき物て有り乍ら、此樣な忌むべき行があつては、其の人の品位に係る計りてなく、はたの目から見れば、誠に見惡い者てすから、此樣な行は仕無い樣に心懸ける事が大切てあると存じます。

論じて精しからざるは遺憾なれど云はんとするところは了するに難からず。（評）

○擬物について

德島縣　吉田紫花

前々は男子ても女子ても、何に限らず殊に衣類は格別爲めに好いものを撰んださうでございますが、此頃はまた何でも爲めよりか外見に重きを置くのが大方の風らしう思ひます、矢張虛榮心に外ならぬのでございませうが、絹物と見せたい計りに爲の惡い擬物を買つては一時の腹を癒して居る、何も絹てなければ人前へ行かれぬと云ふてはなし、道德に關すると云ふてはなし、少々光つてゐる擬物よりか心配のない木綿物の上等品をなぜ買はないのでございませう、一寸水につけたら紺が茶になつたり、形が消えて仕舞つたりする樣な化物よりか久留米絣のあざやかなのがいくら氣持がよろしいやら、まだしも女が擬物をつけて居るのは人とものによつて愛嬌になる事もございますし、又場合によつては便利な事もございますが、男子のものには大抵なら擬物を用ひぬに限ります、お酒てもかかつた時、しみぬきも出來ない樣な着物や、どうもせぬのに知らぬ間に半巾に縮み上つて仕舞ふ樣な擬縮緬の帶などをして居ると、反つて人柄を落します、それよりかメレンスの琥珀地の新らしいのが結構だと思ひます、斯う申せばとて決していつも木綿物計りといふのではござ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いません、又絹物を買ふべき時には思ひ切つて精撰の上等品を、縮緬なら濱縮緬のユサ〳〵するのを、博多なら風が吹いて來てもチユウ〳〵鳴る樣なのをと申すと何だか極端な樣でございますが、つまりいつも擬物計りて、ごそ〳〵しないのがいゝと思ふのでございます、丁度二段目の下の方にすがり付いて始終青い顏をしてゐるよりは一段下でも氣安いところに居る方がよそ目にも見よいと同じ事だと思ひます。

女性らしき議論、私も之で新らしいとを知つた、擬ひ物は又化け物であると云ふとを、あゝ今の世の人の多數は化け物に保護して貰つて居るのである……（評）

○箸

大　奥村良子

我國は古から西洋諸國から野蠻國とか、未開國とか罵られる樣てすが、どつちが不文明だかさつぱりわかりません、今箸て西洋諸國と日本帝國との器用不器用を證明して見ませう、箸は極めて簡單な物て只の二本て一物品を象つて居ます、そして豆の樣な物でも、唯二本の箸てポン〳〵口へほうり込む事が出來ます、又少し位な物は箸を以てちぎる事が出來ます。然るに西洋諸國の箸、即ちホークなる物は如何てしやう、三本出て居る、其れが各一本一本になつてるなら又趣味が有りますが、一まとめて唯食物をさし得る丈に止まつて居るのです、ちぎる事はナイフを用ゐる、爲に箸だけて食物を切る事はとても不可能です、此んな工合に西洋のは未だ手の形が明かに殘つて居ます、心に於ては文明と云つても形に於て未だ野蠻を遁ざかつて居ません、不器用も亦甚だしと云はねばなりません。兎に角日本の箸は文明式てす、其れをも知らずどうのこうのと云ふのは大體お先眞暗てあるからです、宜しく二本箸を世界にひろめて、日本人の器用な點を知らしめて、舌を捲かして見たいものです。

痛快なる氣焰、君は箸を以て戰はんとする女丈夫てゐらせらる、選者も驥尾に付して贊同の意を表します呵々。（評）

○無性に就て

麻布　靜代

私は常に母から、物事は何でも手まめにしなければならない、殊に女は少しの事ても無性にすると、大きくなつて、一家の主婦となつた時に困るからと、よく言はれますが、別に氣にも止めないて、衣服の綻びをこの位ならまだ縫はないてお宜いと思つてその儘にしたり、足袋に少し穴があいて居ても、つがないてはいて、さあ今度つぐ時に、穴が大きくなつて困難したことが度々ありましたが、先日ある家へ遊びに參りました時、何かの事て一寸お臺所へ行きましたらば、まあ一ト目見てびつくり致しました。流元には御飯つぶや茄子の

へたなどころがつて居り、向ふの隅にはおしめとお襁が一諸に置いてあるし、お釜の上には雜巾だかおふきんだか、正體の分らないものが置いてあります。この時ふと胸に浮んだのは、日頃母から無性にするなといはれた一言、あゝ私も成長してから家のお手傳ひをするときに、決して〳〵こんなにしますまいと、つくづく思ひました。それから私はつとめて家の掃除、身の廻りの事など省り見る樣になりました。少しの事でもその注意の仕方によつて、仕事でも品物でも知らずしらずの中に、大變な差が生じてきます。一度で濟む物も二三度もしなければならないし、未だ使へる品でも夫れぎり役にたゝなくなつて、遂ひには一家の經濟上に及ぼす損はどの位でせう。例へば衣服でも脫いだ時に、一寸疊んで置けば今度きる時には折目もついてゐて、第一着心もよし人がみても心地よく感ずる者を、面倒だといつて其儘丸めて置くと、今度着る時に皺だらけで着ても心地が惡く、人が見てもいかにも其人がだらしなく感じませう。實に氣をつけなければならないものは無性といふ事でございます、私はこの後一層注意しやうと思ひます。

あなたは良く人のふり見てわがふりを直したものであります、好經驗好論文。（評）

○親の言こそ

京都　向井光子

「雨が降りそうだから傘を持つておいでよ」といはれても「なに大丈夫」と面倒がつて、持たずに行く、すると妙に雨に會ひます、親の言に從はずに行つた後はきつと〳〵後悔するものです、どれ程悔いてどれ程泣いてもとりかへしのつかぬ大事も始めは皆、少しの言に逆らつた事から起ることが多い樣です。其時こそ何とも思はずに逆らつてゐるものゝ、例へば前の、傘を持つて行けと言はれながら、持たずに行つて大雨に會ふ、宿る軒はない知人の家は遠い、あゝこの時こそしみ〳〵と悔ゆるのです、そうすると妙に反抗心が起つて、雨にぬれて家へ歸るのが面目ないやうになつてくる、とます〳〵逃れやうとあせるけれど駄目、此時眞から感じるのでございます。

これはほんの一例にすぎませんが何事もこれさへおしひろめて行けばよろしいです、親の言こそ誠に神の言ではありませんか。

何故親の言に背いて後悔するとが多いか、親の言は子を思ふ餘りに出づるからであると共に、それだけ事實世の經驗に於いて數言だからでありましやう。（評）

○興味

佐渡　靜子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今年は下男も下女も居りませんので其代りをせねばなりません、やう〳〵田植がすんだかと思へば、引續き麥刈に田草取り、毎日同じ事ばかり繰り返すから飽きがきて、頭痛はするし腰はやめる、苦しまぎれに草取る手をやめて、時々立てばほかの人は、仁王樣だと笑ふ、少し手のまわし惡るければ目に泥がは入る、すると皆が目一杯の仕事をしたかつて冷かす、目鏡をかけるはいゝが生意氣だつて、いじめるだろう、三番草頃からは汗の流れる顏を稻でこする、あとが水膨れになつて痛む、こう云ふ風につらい〳〵と思へば思ふ程いやになつて、何とか小言をならべてはなるつたけ家にひきこもつてゐたのです、見れば自分より年下の人が何とも云はんで、面白そうに取つて居るんですから私は不思議でたまらず、彼の人たちは何をたのしみにするのでしよう、ほん衣でも拵らへてもらふのでも、いゝえ〳〵彼の人たちは、自分の家業としてすべき仕事として、歌をうたひ笑ひさゞめいて、他の人よりも早くおへるのが樂しみに働いてるのだろうと、思ふと自分が今までの苦しみは、皆此の心一つなかつたばかりに、かう自覺してからは、體をいためず早くされ



北國の雪　青森　江渡けい子

いに取る工風を餘念なしに試みました、其中にどことなく面白くなつて友だちは暑中休暇で親の膝元に甘つたれてる土用の最中でも、笠かむつて穗を包んだ稻の中へもぐりこむのを我れから望む樣になりました、今では日の出を拜みながら露のしたゝる靑草を半月形の鎌入れてザク／＼とまぐさ刈るのがうれしくて、毎朝白々明けに一筋のなはを以て出るのです、私は自分で驚きました。興味をもつてすれば以外の事まで樂々となしうる事を何事をなすにも興味をもつてなすべき事を、今もなほ心の奥に深く／＼殘つてゐるのです。

文も亦興味津々。(評)

○秘密

月百合香

どの樣なつまらない事でも、一度秘密と云はれた以上はいかなる事が御座いましても、秘密を守りたいものです、何處にでもよくある事ですが一人の人が誰にも云はない樣にして頂戴よ秘密ですよと幾度も／＼申しまして自分の身の上の事でも申しますと、其の聞いた人が又他の人に向つてかならず秘密にしてね誰にもおつしやつたらいけませんよ、と申しまして其の話をする、又其の聞いた人が他の人に向つて貴女にだけをしへてあげますから誰にも云はない樣にねつて、つぎからつぎへ聞えて、終には知らぬ人は少ない位になるのです。又云ふ人も其の人を見て云はないと此の樣な事になるので御座いますけれど、聞いた人がしやべらなかつたなら此の樣な事はないので御座いますから、やはり秘密は秘密として、どこまでも守つて戴きたいてす、秘密を守れば自然人樣から信用を得られます、又宜いお友達も出來ます、人樣の事をしやべつたからつて御自分の德になるのでも御座いますまい――面白い事も御座いますまいと思ひますからどうぞ秘密は秘密として必らず守つて戴きたう御座います。

今少し根本について論じて欲しかつた。(評)

如是我聞

▲美人若し貧しくば之に二樣の注意を加へざるべからず、何となれば其の美麗は他人を誘惑すべく、其の貧困は己れを誘惑すべければなり。(コルトン)

▲婦人の憂愁は夏日の暴風雨の如し烈しきも短かし。(ジヨアン、ペーリー)

▲婦人の首は常に其の感情に惑化せられ、男子の首は常に其首に惑化せらる。(レナー、ブレツシングトン)

▲婦人の運命は其の寵愛を蒙るの如何に存す。(ジヨージ、エリオット)

▲婦人の心は些少の進物に感動せらる。(サツキーレー)

▲男子は勞働せざるを得ず、女子は悲哀せざるを得ず。(キングスレー)

▲婦人は其の憎む時に非ざれば甚しく殘酷なる事能はず。(ロシフーコー)

▲婦人は其の愛する時も恐怖に過ぐ。(シエクスピーア)

▲初婚に幸福を感ぜし婦人は再婚を肯んずるに最も適せるものなり(アヂソン)

▲處女の心は暗き林の如し。(露國俚諺)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



○蠟燭の火（地賞）

愛知縣　山内梅枝

蠟燭がついた、人なき廣い野原の眞中て、小さく明るく美しく。
四方八方から蝶や蛾が集つて來る。
一匹の蚊がフワリと舞つて。美しく光る焔へ、とまりついたかと思ふと、影も形もなくなつた。
今度は一匹の蜻蛉が舞ひ込んて、薄い羽根て抱きしめて仕舞ふたかと、思ふ瞬間、又元の通りに華に光つて居る。
今度は、ばら〳〵と羽音荒く、甲虫がやつて來た、と、見る間に火は消えた。
燃殘りが赤く夢の樣に、ぼうと匂がする。
蝶も蛾も蚊も蜻蛉もちり〳〵ばらばらに何處かへ消えて仕舞ふた。
獨り甲虫ばかりが嬉しそうに其匂ひをかいてゐる。

（評）此火に就いては二三篇の詩が發表されたが、後て出來たゞけ此作が最もまとまつてゐる

○浪の囁き（人賞）

松山　菊池幽子

私は磯の岩に立つて、浪のさゝやきを聞いてゐます——
のみたい、のみたい、人間がのみたいと倦怠そうにさゝやくかと思ふと狂のやうに、叫んで執念探そうに、岩に喰ついた、が、駄目だ。駄目だと恨めしそうに、返る。
そのうちに、新しい聲が起つた。それは、膨れたい、膨れたい、して人間と云ふ奴の領分をかすめてやろう、あゝ膨れたい、上りたいと——
浪が、私の立つてゐる岩を、取巻いて隙をねらつてる。してだん〳〵と膨れて來るやうだ。
あゝのまれたい、してあの濃藍に熔けたい。

（評）浪のさゝやきを言葉に表はしたのは新しい

【秀逸】

○銀の糸

熱海　木村綾野

熱の息、汗じみたる香につゝまれてけふもくれた。
花火の音、人のさゞめきに、驚いて又、驚いて、めざめ、又めざめた。
濁つた夕雲が西の山の上にたゝまれ

○規定　詩歌的情緒を口語を以て綴るべし形式は問はず凡て自由なり所謂口語詩の類にても可なり二十九行以内にて凡て振假名を要す賞は乙種

て、其眞上に星が一つ顫へてゐる、私の魂のやうに。——

濤が嘆いてる、濤が——、其咽び音につれ、星がまたゝく、またゝく、氣のせいぢやあない。

顫う新星！又一つ、又一つ。

三つの星をみつめてゐると、三つの星から銀色の糸がスーと下りてきたスーと天へつれてゆく、身を。

輕い輕い、行方には銀色の玉が一杯ころがつてる。噫天國が近くなつてきた（此儘ねむつたら、このまゝ、安らかだ）。其一瞬間怪雲がひろごり初めた。きられたら、はなされたら彼怪雲の爲此銀の糸を……其時どこへ落るのだらう——身は。

星を云へば、大抵架空的に終るが、此架空的の想像も、よほど情調の昂つて居る時でないと、つくりものになる。嘘らしくていけない。天へ上ると云ふ考は、又一つの考へものであらう。

○そゞろごゝろ

茨城　黒澤とよ子

どうしても、私の心は、おちつかぬ。

畑の、芋の葉に、おく、白露を見つめた。

芋の葉は、風のまゝに、ゆれる、搖れるにつれて、露が、ころ〳〵と、葉の上を、ころがつてゐる。

あゝ、私の心も、あの露のやうに、おちつかぬのだ。私は、つと立つて階段を下りた。

私の心はまだおちつかぬ。

風がふく、涼しい風が、樫の、木の葉が一つ、蜘蛛の糸につられて、空に下がつてゐる。そして、風が吹く度に、くる〳〵と、まはつてゐる、おもしろい。

私は、一心に見つめた、いつか、私の心はおちついてゐた。

おゝ、風がふく、涼しい風が。なほ樫の葉は、くる〳〵とまはつてゐる。

技巧は拙いけれど、死んではゐない、息のある作だ（評）

○水草

府下　三ケ島よし子

青い田の水が小川へ落る音がする。

青蘆や河骨の花が映つてる水が音もなく流れる。

水はきれいだが底が見えない。

菖蒲の葉を煠でたやうな水草が水の向になびいて流れてる。

眞直にしたら水の上へ一尺も出さうな長い水草。

しばらくたつと水草は流れなくなつた。

獅子咲の菊の花のやうに、こごつたやうになつた。

潮がさしてきたのだ。

水はだん〳〵增してきた。

そして前と反對に流れる。

稻のやうな汀の草が水に浸つてしまつた。

水草も見えなくなつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

水草はさつきと反對に流れてゐるのだらう。

繪畫以上の働きを持つてゐる、自然を描くことがうまい(評)

○失ひ

校友　篠田とみ子

あゝ……あら!!……

何處へ失つてしまつたんだらう、さつき、繪屛風の後て、私一人‖紫の包みから緋の紐といて輕うゆすぶつてもみた希望の箱、胸の中の、大事の〳〵あの箱、何處へ失つたんてせう、私、どうしようしら、いろ〳〵いゝいゝ物がは入つて居たもの、天のお星とみくらべて微笑んだのも束の間、にほふてもみ、ゆすぶつても見、誰も居ない處ては抱き〆もしたあの箱‖‖紐をばときつ結びつ何度した事てしよう、私、私、ほんとに悲しう御座いますわ、どこへ失つちまつたんてせう、

才分の豐かなるを探る(評)

○滅亡

神田　田中英子

汚れたかべにまつ白な紙がはられた。大な手が出るそこへ戀と書く……と！忽ち：肉體に變化る腕を組んて踊る……飛ぶ……笑ふ……歌ふ……男の肩に眠ると　思ふと……大きな手がぬつと出て破る……破る……若い二人は丸められて……にぎられて……忽然として光明は滅して……跡は暗黑。

○夢の東京

備中　篠原しげ子

私は一人野に立つて居た、フイと鼻の高い白髮の爺さんが莞爾しながら出て來て、お前さん東京に東京にと私の袖を引く、私は引かされてどうする間もなく只知らぬ間に東京に來た、そして此度は電車に乘してくれた、澤山なんて眼が下せない、電車はある所についた、私は爺さんにつれられて此に下りた、大勢な人、種々な風采をした人皆眼を張つてサツ〳〵と走る樣に歩いて居る戰爭でもする樣に田舍人の樣にクヅ〳〵して居らぬ、あゝ活動〳〵と此時私の胸にひらめいた、あゝ石造や煉瓦造の大きい高い〳〵家、廣い廣い道、眞に東京は巨い、ふと見れば今の爺さんは見えぬ、影も形も無い、はぐれて終つた、

○魔の影

函館　谷内ふさ子

凝として居ると、總身がぢり〳〵と、絞り出す樣な脊汗が流れて、寢衣が遊ぶる、寢苦しい厭な晩だ。妾は仰向になつて、上へ眼を放ると蚊帳を透して、暗い天井の、黑い梁柱の影が、淡い洋燈の明りをうけてうつすりと、何か横はつてる樣に見える。

それを視ると、今にも其黑い影が、妾の上へ被さつて來る樣て、恐しくなつて來る。と其黑い梁柱の暗い奥の方が微かに動いた。妾は其れを視て居ると、闇に潜む魔の使か、黑い、土塊の樣な小さな者が、する〳〵と細い糸を傳つて、妾の頭の上へ降り來た——はツと！思ふと妾は、軀がしびれて太い、強い、金の綱て捲かれたやうに、動く事が出來ない。叫ばうとすると、聲が咽喉へつまつて——藻搔けば藻搔く程、苦しい。苦しい。眼は開いて居る。

○針

羽前　九輪草

ふと針が見えなくなつた。裁物を振るつても、疊を叩いてもみつからない、氣にかゝるが、斷念めてしまはうと、座り直したが、——やつぱり氣になつてならないので、——立ちかけたがふと頭髮に手を遣ると、針が——紅い糸を通して、銀杏返しの根にさしあつた。私はほつと息をついた。

○黑い影

日暮里　細谷鏡子

私はふと立止つた、そして月あかりに向をすかして見た、夜霧の中にぼうと黑い人影がういて居る、それがゆくでもなく來るでもなく立止つて居るでもない、何だか氣味の惡い影だ、私も進むでもなく返すでもなく塀のきわへぴたりと身をよせた黑い影は依然としてういて居る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

短文

中村文學士選



○規定　短くして氣の利いた文章を募る十六字詰七行以内凡て振假名つきハガキは許さず一人一章に限ること賞は丙種を送呈す

○庭（天賞）

横濱　臼井冷花

梅雨がいつの間にか七つの飛石を濡らして仕舞た。世に後れた花の無い翠菊が、何だかみじめてならない。土鉢が三つ、すみの方にころがつて居る外、木立一つ無い十歩の庭を、白い塀がつゝんで居る、其むさうら窓をこして石の上を足駄の音の主が髷だけ見せて通つた。

（評）一分の隙なし、

○好きな花（地賞）

筑後　田中白萩

如何思うても好き、あゝ私もかう咲きたい、雲突く様な石崖に只二筋計り絡んだ蔓に眞白い花、小くて寳に床しい雨も突く風も荒ぶけど、この優しい花は汚れもせぬ、萎えもせぬ凛として居る、何と云ふ花だらう、名は知らぬ、知らぬから尚好きだ、

（評）つよくておもしろし、

○秋（人賞）

鳴澤ゆり子

何だか天が恐しく高くなつた様だ。蒼々と澄み切つた中空に、清々しい月。そこから風は生れるのか。其處から露がこぼれるのか。三里の廣野萩も桔梗も懐しい秋の色に、ゆらいて居る。スーッと雁が行つた。泌み入る様な其聲は。此靜寂を一際强うして。

（評）佳

【秀逸】

○親子

下關　榮子

「高野屠牛場入口」と消えかゝつた木の札が立てゝある坂路を、瘦せた親子の牛が引かれて行く、親牛は上に子牛は下に、然し子はどうしても親の處へ行かうとする、親も亦待たうとする、「馬鹿！命がいらぬのか!!!」と强く叱つて子牛を引ぱつた、けれども少しも動かぬ、「仕方がないなア」と他の男が云つた。群集の目には泪が湧いた。

（評）悲劇

○汽笛

府下　三ケ島よし子

芙蓉の花が萎んだ。のぶ子はまだ歸らない。父は氣樂な奴だといふ、母は暑氣でもしなければいゝがといふ、中川あたりでポッポーと汽笛がなる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「そら、姉ちやんよこんどこそ」と私は言つた、四つになる末の弟が又表へかけ出た。

（評）巧

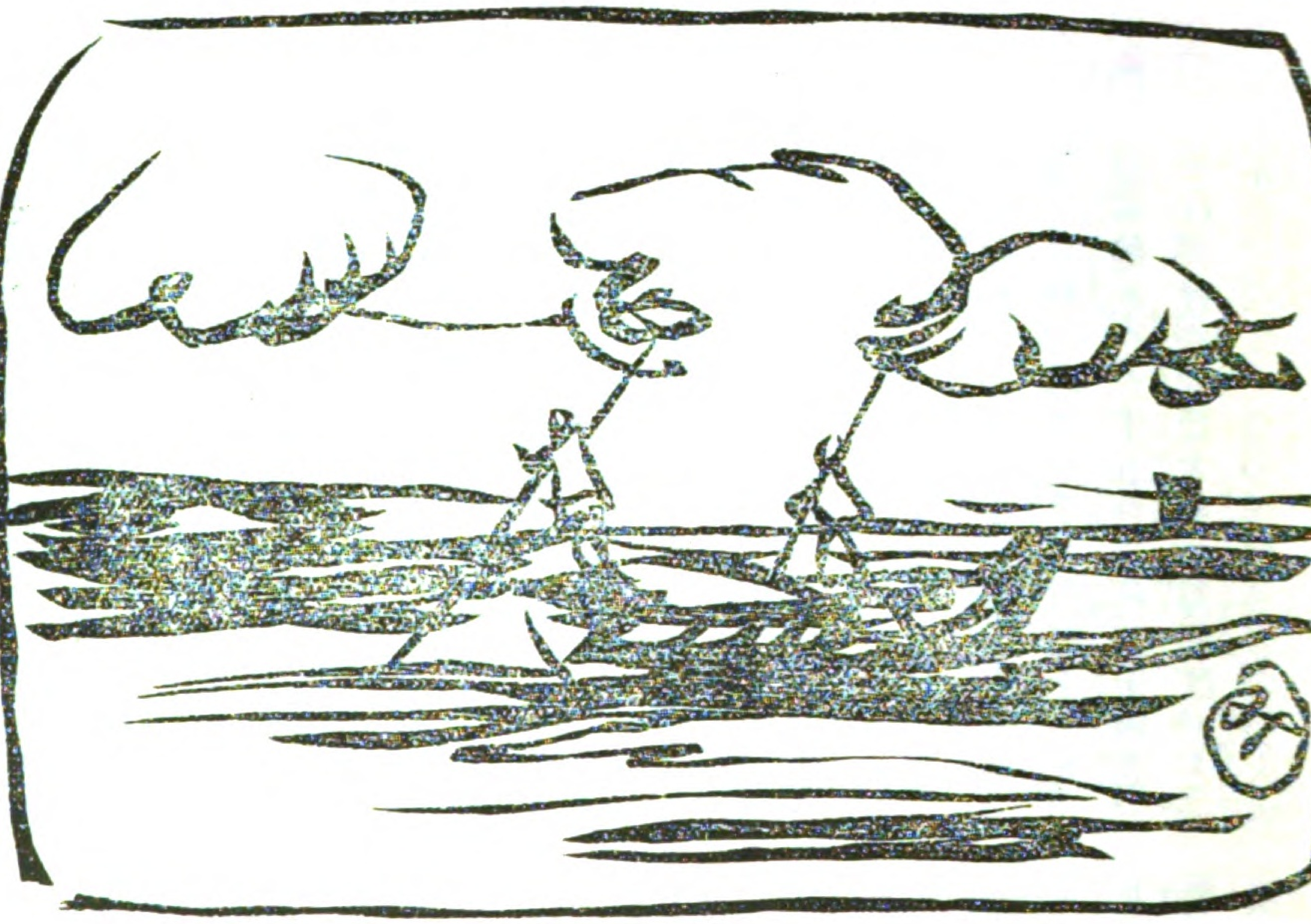
○暮れの川　美濃　堀とわき

荷船が一艘水面に線を引いて降つて行く、其後を鷗が二羽水に擦れる程低う飛んて、靄が二筋三筋上を流れた。向ふ岸の松並木から吹く風が葦に戰いて、平和な村も川も漸々闇に包まれて行く。

（評）靜寂

○日記中より　越後　ふく子

毎年の土用干に、亡母の形見の花見小袖、色も摸樣も至極氣に入つたが、袖が短かく、身巾が廣いため、いつも着物の下じき、此年の蟲干に何心なく着て見ると、行も丈も私



くまの浦　紀伊　稗田みつ子

の躰にそつくり、鏡に向うと急に亡母樣が戀しくなつて、思はず泣き伏しました。

（評）御察しします。

○漁家　熊本　房子

父上樣はさも嬉しそうに歸られた。獲が多かつたのでせう飯臺にまどゐして皆が舌鼓鳴らして夕飯をたべる。母上樣の頰にも無限の笑が漂ふてる月が座つてる所まで輝り込んだ、明日はあの邊に出掛け樣と、小波寄する島影を、箸で指さゝれた。

（評）そして父の目が輝いた。

○お月樣の手　本郷　千とせ

夜が更けても寢るには惜しき雨後の月を、沈と凝視て居たら、きらつと烈しい光線に眼を射られた、お月樣が手を出

すと運が惡く成り升から見詰てはいけません、とよく婆やが云つたけが、若や手とはあの鋭い光を云ふのでは有るまいか、馬鹿なとは思ひ乍ら‥‥何だか氣に懸る。

（評）結句妙

○師範　神戸　愛子

私の寄宿舍では皆じみな木綿の筒袖に紫の袴を附けて髪には一枚の櫛もさゝず毎日毎日學校にいつて勉學致して居ります夕食後の散歩の時間にても二人よつて居られるときつと訓練とか第二國民養成とかいふ言を入れて話ながら散歩して居られます。

（評）面白い時代です。

○零落　大阪市　中村　秋子

あの虚榮心の高かつた君子さんの嫁がれたのは此所である。懐かしい門から覗くと、今は芒の間から離室が見えて、亂れがちな斧の音が洩れて來る。君子さんは夢にも此境遇を思はなかつたらう。赤兒の泣き聲が聞えると、斧の音ははたと止んだ。

（評）感慨無量

○人生の意義　福井縣　やまざと

學生の時分。貴孃、人生を何う解決なさいます。なんていふ事ばかり言つて、何時も煩悶？して居らつしやつた友子さん。近頃生の要求に支配されて、せつかく働いて居られますが、人生の情味を十分に感じて居られるらしい、笑顔で日を送つていらつしやる。つまりいろんな事を考へるのもひまなからだ、と思ひます。

（評）左襟

○たゞ一つ　大阪市　國澤　菊枝

燒失戸數、一萬一千三百六十五戸、罹災者數、四萬三千五百三十三人、損害總高、一千五百二萬四千餘圓、これだけの大阪大火の原因は、と云ふと、たゞ一つの洋燈油壺の引火破裂、萬物の靈長と云ふ人間も心一つてねえ。

（評）おそろしく。

○其お言葉　下野　道乃

一度も避暑にいつたことのない私は友の身の羨ましく、あゝ世が世なら、と、一人親の母上を何となく恨めしく思つて居りましたが、この日中に海水浴にゆく人もあれば、玉の汗を出して車ひく人もあるが、との母上の御言をきいて申譯なき熱涙は絶えまなく落ちたのでした。

（評）よく、お氣がつきました

○暮　樺太　眞田のぶ子

橙黃色の夕陽が名殘りの光りを鎮守の杜へ授けると懶げな門徒寺の暮の鐘が田螺なく苗代の果を響き亘つたと川添の麥の穗先は灰色に變つて忙しさうな撥釣瓶の軋る音や味噌摺る音が灯瞬く若葉を洩れて土臭い村は次第に暮て行く。

（評）よし。

○兄様　　名古屋　末つむ花

また、姉様の獨り笑ひがはじまつた。何がさうられしいのつてきいたら、「あら何? 何も笑つてやしない事よ、へんな人」と早々笑ひをかくして、横をむいてしまつた……そつと母様にうかゞつたら、あゝ、よめたく私には近々兄様ができるつて!

(評)そして姉を、羨やんだのですか。

○文明の餘澤?　　京都　向井光子

海拔二二五〇尺の郡第一の高山の、しかも眞言の古いお寺へ電話がかゝる、洋服男が澤山入り込む。家を飛び出して親を泣かせる子、昨日は變死今日は餓死、弦聲は終日終夜、白壁の家の影を失ふものはや幾軒、かくて我靜かなりし一村落は帶劍巡査の足を休める暇もなきやうになりました。

(評)げに戀しきは昔。

○わが心　　麻布　花子

少女時代、何を見ても美しい世、面白い世と嬉しく、人は男女の區別なく笑みて語れば、優しい人、敎へてくれる人はゑらひ人と、思て慕ひましたのも、いつかは、過ぎさりました。

あゝ今は、優しい人もおそろしくなりましたが、……果して心の一進步て御座ませうか……。

(評)そして又恐ろしくもなくなりませう。

○末子　　埼玉　青葉女

末ちやんもう七時よ、いつまで寢て居るの、とゆすられ私はむく〱起き出したこんな朝寢坊でお嫁に行けますか?、姉様はにつこり笑ひながら出て行かれた。ほんとに私は末子に生れて父樣や母樣に、なめる樣に大切にされるのが嬉しくて口惜しい

(評)氣をおつけなさい

○月の夜　　大分　佐藤みどり

月の夜、枝豆に子供多く輪になりて皆可笑しき話等して遊び居たるが、靜ちやま狐が出ると誰かゞ話しだせば、皆總立にならんとするに、之はまた誰にや、そうれ狐の尾ぞと粟の穗を輪中になげ込めば、側に立てる妾にあれつと四五人の子供抱きつくも可笑し。

(評)又一興

○此頃　　神田　基子

陰欝て、ひねくれの通り者だつた私が、近頃は、唯譯も無く面白くて、嬉しくて、冬の樣だつた胸の底には、刻々に、春の血汐が漲つて來る樣です。得るなら、快活な人と思ふ存分談笑てもして、此胸に蟠つてゐる笑の塊を解して試たい樣な氣がします。本當に什うしたと云ふのでせう?

(評)思ひ通り御緣が定まつたからでせう。

夜盲目　　宮城縣　齋藤きくの

晝は一生懸命野良働ぎ、夜は熱心に勉强をしたせいか、二三日前から、夜盲目になりました、お日樣が山にかくれて美くしい雲が四方に散り去る頃になるとだん〳〵と、薄暗くなつて、田も道も皆一面に黒ずんで、只、お空許りがボーッと、白く見えるのです。

（評）お氣の毒です。

○鼠も錦　大阪　妙子

此前ペスト病が流行してから今日迄鼠を取つて、お金にかへて貯蓄して來たのが塵も積れば山の、たとへのとほり早や五圓近くの金高になりましたこの樣子ではお正月迄には立派な晴着が一枚出來ると今からたのしんでゐます。

（評）然しきもちが惡いでせう。

○見たいもの　麻布　光子

圍くさえた目眞紅のばらの蕾より尙小さい、口元に、笑靨へ、友禪縮緬の元祿の袖の着物に、鶸色縮緬の兵兒帶映りよく排ふらし姿に、ひわ色の鼻緒たてた、空氣草履はき、紅白縞の洋傘さした、振り分け髮の、少女を、想像して居り升の、一度でも實物をみたくて。

○秋立つ日　大阪　京谷政野

秋立つた日の夕暮——私は廣い原中の冷たい石の上にひとり跼してゐる、そして仰向いて、廣い〳〵涯ない廣い光の褪せた雲をジッと眺めてゐる、心では、何だかこう、人を待つてもなし待つてゐぬでもないやうで——私は寂みしいなあと思つた。

○夏の朝　牛込　平塚白百合

白い夏雲がポッカリ池の底に浮んで、山梔も實となつてしまつた。築山の植込は綠の影と影が重なつて鈎すてたハンモックが、河骨を動かしてくる朝かぜに微かにゆれて、蟬の音がジイッイ初まつた。池の中へ差し出た百日紅の枝に、ほゝ白が一羽ペチャクチャさへづつてゐる。

○夏の夕　松山市　曉子

ランプを明るくつけて浴後姿を南向きにお琴の前へきて坐る。西の窓からは涼し相な落日後の空がうす藍色に見えて、東の臺所からは勇ましいラッパの響が花菱咲く塚を流れて渡つて來る爪をさしてシャンテツンーと殘月を彈き始めると、ザアーと擲て行水の湯をかへす音、續いてペチンと蚊をつぶす響、やがて澄さんと團ばたへ涼みに出られるだらう。

○野菊　丹後　臼井八重子

川畔に佇んでゐると草叢の中に野菊の花が一輪すゞ風に匂つてゐますが誰一人勞はるものもない、其面やつれた姿の流れ行く水に影を見ては唯一の樂しみに自分で自分を慰めてゐるのでせう——ア、憐れな野菊の花よ!、私も同じ寂しさを感じつゝあるものよ!。

○蜂のダンス　小石川　なぎさ

薄い白雲の間に紅い雲が細く棚引いてゐる朝、蜂が月見草の花とお話してゐました。離て忙し相に飛んでゆきましたがマア山吹の葉の上で踊つてゐるでは有ませんか。熟視たら黄色い粉のついた細い糸が幾筋も足に纏てゐるのでもがいてゐるのでした。

○ほてり　千葉　岩田よし子

今日はクラス會やつとお粧りして着物は縮緬の二枚重繻ちんの丸帶を矢の字に結び帶どめをペチン左の藥指にはリンクが光つたそして思ひ切つて巾廣のリボンをマガレットに結んだ大鏡にうつる美しき姿そして十八番のあれを彈くのだと思ふ。

○晴れた夜　備前村　雨

天使の眉の樣な月は樹をへだてた西の山に入た漁火は三つ五つ消えつ輝きつ天空の星は暑さに疲れた足を消い消い兒島の波にひたしたいとうらやんで居る樣だ世は皆夜の帷にひれふした燈も見えない物音も聞えない見る間に長い〳〵尾をひいて流星一つ何處へ行くのだらう。

○露ちやん　名古屋　みどり

「玉川の水に晒せし雪の肌」とこの暑い日盛に覺

束ない三絃の音が聞えた。裏のお露ちやんだ来年あたりはもう、藝妓にやられるのだらう。一聞けば親類も何もない孤子を、彼處の内儀さんが買つたんだと。お露ちやんは目の大きい色白の細面で年は十二だ。

○夏の夕　徳島　月見草

お湯から上つた時の心地よさ、青葉の蔭から眺めるともなく、暮れ行く空を見つめて居ると、山の彼方からムクムクと眞白の大きな入道雲があらはれた、と急に夕日の餘光をあびて、オレンヂ色に美しく輝く。築山の傍で妹が夕顔の開くのを、今か〱と見守つて居る。

○秋の人　高知　蔭の人

春の艶めいた色は見えぬ。さりとて冬の物淒い様はあらず、もとより夏の誇りかの景色は更にない。シツトリとやさしい懐しい風情のひそんで居るのは秋!!げに秋てある。姿も心も秋の様な婦人こそ好きな〱涙さんも秋の人てした。

○思ひ出　呉　碓井呉竹

ムカ〱と蒸暑いのと、蚊に攻られるのとて、私は家を出た。そゞろ歩きして居ると、蚊は我家ばかりてはないと見へて、彼方此方の家にも、蚊遣火をたいて居る、其煙は丁度、亡くなつた御母様を、焼いた時の様に、ゆら〱と細う立上つて居る、と忽然と、母様の御姿が、目の前にちらつきだした。



街路所見　紀伊　木下かづ

○魚釣　筑後　勝子

隣の叔父様は、最早老年なのに、此暑さもいとはず毎日魚釣。内の人が心配して魚は買ひませう、取らせませうーと。叔父様は平氣て、取るのが好き食ふのお好き俺には心配するなと。あゝあの小さい川魚が、叔父様には何な味のするのかしらと、私は何時も思ふ。

○古郷の友　韓國　原登り子

歸國の通知に喜んで、二人の友からご返事が來た、新橋停車場へは必ず迎えに行く、そして是非共私の家に泊りに來て頂戴、お話が山程あるからと同じ様な事を——あゝ今度停車場で逢つた時どんな心地がするでせう、どちらへ先に行かうか。種々と嬉しい思ひに二月の前の今から夢の様に立つたり座つたり。

○目覺めの刹那　北の海邊　たづ子

そんなに疑ふなら絶交してもいゝと云つてやつたら、ヒヨツコリ今日來て「いろ〱お世話になりましたが只今出立致しますから」とそこ〱に立去つた彼人、私は波打つ胸を抑へて忘れやう〱とつとめてゐる中うと〱と眠つて醒めた時には呆然、何もかも忘れてゐた、

噫此刹那が私の胸の平かな時。

○校友會　越後　木島しのぶ

まい年「此度は」と行つて見れば相變らず振はない先生が「皆樣の着物や髪の風許り見てゝそれで本會が盛うしてるのではありません」と被仰つたら皆笑つて居破したが別れる時はおじぎの稽古見たいの事や人の口眞似のやうな事許りして。

○秋夜　臺北　稗貫みつ子

冷たい風がヒューと吹く每に、丁度物の怪でもついた樣大小の木の葉がばら〳〵私の身をとり卷く、月は淋しく冴えて、小川の細流は眞實に寒く身に泌む、噫これだ……これだ斯う云ふ夜だつた、私は無い姉樣の幻の影を追つて、彼の川邊をさ迷ふたのは

○兵營　岡山縣　かつら子

時計は一時、寒暖計九十五度、野外の草木も焦つけの水を呼ぶ眞盛、二日續きの演習は、愈よ激を加へて砲聲恰も豆をいる如し、吁々戰中の將士に飮ませたや此清水を！憎くや惰け書生はハンモックに慰廢の夢。

○きらい　妙子

虫を嫌ふのは私の性ですおまけにあの春の女神とうたはれる蝶まで が本當に嫌ひなのです美しい〳〵と思つて見ても何故か毒々しく見えますよく自分のあなの埋まつてる上を一番先に越した者を嫌がると申しますが私のはどんな所に埋まつてるのでせう。

○靜夜　高岡　篠原みゆき

蒸し暑い夏の夜、私は椽側で無意識に空を眺めてゐた、今にも雨が降りそうで大氣がそよともだに搖がない、只風呂場の邊で幽かに弱い虫の聲がする、それが胸の底に泌み入る、何だか遠い森へでも誘はれてゆく樣な氣がするさみしい靜かな夜である。

○悲しき別れ　名古屋　秋園

じや姉さんどうしてもお實家へお歸りになるの母樣は何故あなたに邪慳でせう云ひも終らで勿体ない皆私がわるいの、けれど園ちやん！、私悲しくて……」いぢらしの義姉妹ひしと抱き合ひ今宵限の別れを惜しむ樣のいとも哀れなるよ。

○善光寺の裏盆　長野　優梨子

左ッ、〳〵と云ふお巡りさんの聲を聞きながら、人のなだれに押され〳〵て、如是姬の噴水前邊り迄來ました、もうワーワッと云ふ低い息れ聲が聞えます。本堂の階段へ上りつめると、椽の隅から堂の中まで、著座を背負つた爺さん婆さんがぎつしり。南無阿彌陀佛の聲に一所に此一夜は、佛樣のお傍でお籠りをするのです。

○秋の一夜　赤穗　千鈴子

十六夜の月は、金ケ峰の頂に悠々と登つた。黑すんだ老松のひまからさやかな光りが洩れて中庭の金盥れの露が銀の樣に美くしい。妹は庭の石の上を飛びつゝ「お月樣いくつ」を歌ひ始めた、軒に釣るした籠の鈴蟲が、妹の曲に合せてゐるかの樣に鳴いて居る。

○午后　本所　木幡きみ子

愚圖て愚圖た坊は乳を咬へた儘睡てしまつた、そうと手枕を引く、胸を合せて蚊帳を掛けやると振り返り乍ら忍足に茶の間に行た、乳母は針を持た儘睡て居る、裁縫に懸ろうとするとひよつと眼を醒して極り惡るそうに顏を見上げた、鉛屋の太皷が頻と鳴つてた。

餘興課題　お化粧

本年最終の餘興課題は「お化粧」です、左の解題を見て例の通り盛んに投稿して下さい

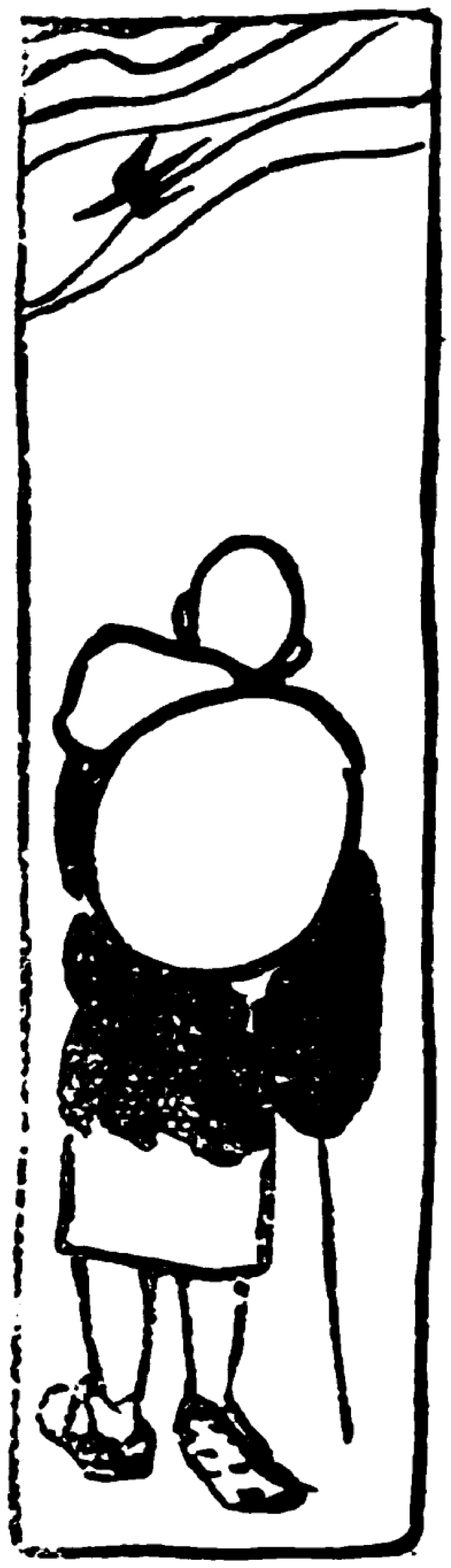
▲題はお化粧ですけれどお化粧に關係したことならさま〴〵な細い事があるでせうから、皆さん實驗の上から思ひついたことを書いて下さい▲お化粧にも上手下手がありますが何うすれば低い鼻が高く見えるとか、頰の光澤が美しくなるとか云ふやうなことも參考になつて好いでせう▲お化粧に就ても得手勝手はあるでせう、皆さんが自分邊の化粧法を說明して下さると面白い▲お化粧をする時間、場所、心持など▲化粧道具は何々を使ひますか▲化粧品は何を愛しますか▲化粧に就ての失策話や滑稽談も愛嬌があります▲よそゆきの化粧と、ふだんの化粧と▲何う云ふ考へてお化粧をするか▲こんなことを細く考へて行けば幾許でも書くことはあるでせう何うか書いて下さい▲十行内外で十六字詰に願ひます▲振假名なし▲題は只「お化粧」として下さい

▲賞品は例の通りです（締切本月十五日）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

俳句

内藤鳴雪選



○（天賞）

現なの鐘や時雨の小夜衣　千葉　吉原靜江

○（地賞）

池の魚の腹をてらして夏の月　美濃　中村澤子

○（人賞）

名月に瓢負ひたり太郎冠者　讃岐　小野定子

【秀逸】

朝風は繪蚊帳に涼し海百里　播磨　森中かづ子

眞帆片帆月の光に浮びけり　加賀　勝崎きく子

塵箱の紙屑吹くや秋の風　横須賀　白井とき子

蜘蛛の巣に蟬がら一つ秋の暮　土佐　桃の花

棠の花も散りける土用かな　紀伊　三栖紫子

萩の花君が爲めとてうれり咲く　茨城　田村波津子

たそがれて鳥一羽飛ぶ堤かな　入戸　華子

天津風通ふ小窓や籠まくら　函館　大場竹子

名香の流るゝ社や青簾　佐世保　岩永きすゑ

花桐や露に灯ともす里の寺　遠江　磯部すみ子

水樓に月見る人の蚊やりかな　愛知　梅枝

蚊やり火を焚て宮守る翁かな　札幌　内山のぶ子

天の川芙蓉の上に流れけり　上毛　小山芳子

蚊帳青く月さし入りて妹が顔　本郷　望月れい子

桑摘の日記古びて人戀し　上田　宮川ゆう子

時鳥淀川下る舟二つ　大阪市　沖野英子

花籠の花にも露や夏の夕　根室　富美子

暑や清水くむ子の紅だすき　徳島縣　上野濃峰子

魚賣の籠の雫や橋涼し　京都府　大森秀子

秋風のふくや木の葉の裏表　金澤　後藤よし子

北斗星拜みて橋の涼みかな　若狹　小原藤垣子

郭公月に片羽の光り哉　熊本　房子

杭を打つ音に青田のさゝら波　薩摩　山下男子

道端や杉垣匂ふ秋日和　若狹　瀧本なみ

朝顔の風に吹かれぬ額髪　麻布　吉田愛子

朝寒の尊くおはす佛かな　島根縣　萩野露子

雨そぼろ夜の團欒や水鷄なく　播磨　藤井精

青簾月見る人の影もして　信濃　優子

川添ひの一軒茶屋や夏の月　熊本　立花登美子

天晴れて地晴れて夏の暑さ哉　岩手　白桃子

雨晴れて石のくぼみに月清し　名古屋　すま子

鳴りくる鐘の音高し秋の月　高知市　秋澤花涙

○規定　同じ材料で二度以上使へば陳腐になるとか剽窃になるとか言ふ人もあるが餘計な心配てゐる前の人と異つて自に轉換して活用して居れば幾度同じ材料を使ても差支ない（鳴雪）一人一句限賞丙種

公達の話も涼し青すだれ　千葉縣　吉井光子
故郷や彼岸の鐘に偲ばれぬ　大分縣　本田一枝子
萩の小路み歌の使の通りけり　京橋　石田笑子
大根の二葉に秋は伸びにけり　徳島縣　吉田紫花
旱魃や蛙も鳴かず田千頃　名古屋　日比いく子
薫風や公達の射る弓弦より　仙臺　光子
夏草に蝶の團欒や二日月　岩代　中村清子
寢て見ればわが家も廣き月夜かな　吉野　泮金泣月
行く秋を馬におくれて芒原　德島　月見草
紫の頭巾する子や後の月　阿波　みのる女
どの宿もどの宿も蚊遣哉　吳市　碓井吳竹
湧き出づる雲は盡きずよ夏の月　備中　小見山春子
見て過ぐる黒き涯迹や雲の峯　淡路　千惠女
涼しさや夕立やみて竹の風　紀伊　福本若生枝
吉原へ簑着て來たり菖蒲賣り　三重縣　吉川澄江
初雁や水の砦の灯おぼろ　愛知縣　華影
月すゞし椰子の林の風の音　山口　西園きみ子
鴫や山田を落ちる水の音　長門　中村琴子
高麗人も驢馬もかすめり桃月夜　藤澤　常盤幸子
朝雨の朝顔の戀破りけり　群馬縣　志笑津貞子
舍利塔や一しほ寒き秋の月　神戸　落葉子
朝顔の庭に公子が掃除哉　下總　小出保花子
なつかしき古郷や妹が蕎麥を打つ　相模　月代つれ子
庭石に硯持出す月見哉　大阪市　山内溪子
朗々と馬上の吟や轡鳴るゝ　備中　馬越昌子
名月や遠くて近き家二軒　京都　白井喜志
順禮の石を投げ行く清水かな　京都市　河辺てる子
江に臨む家や涼しき夕灯　遠江　富永露子
月好くて琵琶の秘曲をかなでけり　京都　河村光子
夕立に追はれて走る白帆哉　奈良　はざくら
馬市の埃の果や雲の峯　秋田　三浦とみ子

由良の戸を渡る一帆や秋日和　伊豆　鈴木安子
露深き萩押し分けて叩く門　靜岡　すその
夏の日に鉢の小松の落葉哉　備前　村雨
草の花白き徑の夕かな　讃岐　安藤たか子
いと廣き小椽の茶や虫の聲　大阪　鹿島綾子
明笛の聲遠くして夏の月　新潟　佐藤岩子
虫鳴くや馬屋に馬は眠るなり　京都市　芳枝
懸崖に猪ほゆる霜夜かな　下關市　阿多貞子
爽暇富士の裾をめぐりて青嵐　本郷　文子
東明や卯の花匂ふ雨のまど　遠江　島花子
月落ちて鷄啼くらしき水の音　岐阜縣　日野歌子
かも川はなつをよりてなる夜明かな　美作　靜子
物おもふ女住みけり萩の宿　ゆり子
明月に誰が御使の馬急ぐ　大阪市　中村秋子
苔清水隣の庭へ流れけり　攝津　阪上龜子
涼しさや笛ふきかはす人と人　札幌　みどり子
山陰や舟は涼しき若葉風　陸前　今野しせよ
春の日を衣干すなり紛河寺　香川　綠子
閑古鳥朝の遠音や笹の露　弘前　川村露子
蚊のなくや田舍錢湯の小暗がり　常陸　大阿久千代子
卯の花にはやほのぼのと明る窓　福井縣　明星
紫涙の外にものなし天の川　香川縣　子松さと
がた馬車のしげみに入るや蟬時雨　牛込　千鳥
水無月や山繭黄なるぬるでの葉　下總　月沖さゆり
新らしく涼しき蚊帳の月見哉　陸奥　月舘とめ子
露ちらす若葉の山の微風かな　四谷　笹原よしえ
蓮の月戀物語更けにけり　三河　加藤眞佐子
五月雨や茶の木の陰に蝶一つ　久留米　山口龍子
夏草の深き泉や星一つ　新足立　福子
雲の峯崩れかゝりぬ船の上　岩手　三上興志子
夏川のかげに魚よるしげりかな　沼津　山縣梅園

女の名



○規定　毎號課題を出して諸孃の餘興に供す十六字詰十行迄一人一章に限丙種の賞を送呈すべし新題は欄末にあり見落す勿れ

（課題）

○わが名の歴史（天賞）

名古屋　てふ

父は兆とつけて下さいました命ながかれと。尋常の時先生が、こんな可愛い子に兆とは縁起が惡いからとて長として下さつた、それから高等三年の時、光子先生が、あなたは無邪氣な野の蝶のやうだから蝶としなさいと被仰つたから、それからは蝶ばかり名のつて居ります、それで幼い時の迷ひ子札や繪本には兆、十二三の時の持物はみんな長、それからのは蝶としてあります、て今でも蝶。父樣のお心とすつかり違つた命の短かい名を名のつては、私不孝か知らと思ひます。

一點の邪氣なし

○珍らしき名（地賞）

岐阜市　篠田とみ子

同じ陛下を戴ける南溟の孤島、沖繩縣立高等女學校卒業生と現在學年にある才媛の方に左の如き名があるそうです。知念マカメ、安次富マカト、親泊タムシ、吉濱ゴゼ、大宜味マヅ子、大灣カマト、大宜見ムタ、宜次志ウシ、翁長マツル、久手堅ウシ、譜久村ナヘ、波阿運マツル、平安山オミト、諸見里マカマト、岸本マゴゼイ、新川ウント、喜屋武カメ座喜見オト、眞境名カマド、宇和慶カマト、今歸仁マツ、東恩納オミト友寄オミカメ、上江洲オト、仲尾次カマト、楚南マンチ。こんな事を書いて御本人樣にはすみませんけど。

これこそ眞に奇抜、何と假名を振つて宜いのか選者すら見當がつきません

○和歌の浦（人賞）

大坂　山内　溪子

紀州の和歌の浦地方へ行きますと皆其土地に應ふた名をつけるそうでございます、私が初めて和歌の浦の磯邊村といふ所へ行きました時、村人の名は皆海に付いた名でございました、私が宿つた家は六人暮して十九頭で四人の娘がございました、姉の名は波江、其次は岩江、それから砂江、其次は濱江、そして母親の名は磯江と申ました、私は下の江の字が不思議でなりませんから問ましたら女の名の下に江の字をつけるのは、紀伊一帶の國風だそうてございます

趣味ある風習

【秀逸】

○二人文子

熊本　加江子

お隣の文子さんはいつも私の姪をさそひに來られます。私が姪は五ッの春濟州から歸つてきました、今年は七ッて歳も名もお隣の文子さんとおんなじて互に文子さん、文子さんといつて仲好く遊びます。或時二人垣根て遊んて居りますとき村の人が、文子さんとかいはれましたら、はいと二人て答へました。

○私の十七年間

大分縣　原田澪子

私が幼い時母様はよくみいやとお呼びなさいました。父様はみよと兄姉はみいちやんと云つてましたので、人から聞かれると私みよさんと云ふのつて云ひました。所が七つの春學校に參りましたら先生がみをさんとお仰るのです、不思議に思つて家て尋れましたら町役場のが左樣だそうてしたて學校てはみを子さんと近隣てはおみよさんと呼ばれて居るのてすが、去年國文の先生が澪と云ふ字を昔海から引き出して、以後用ゆる樣勸められましたので只今此の字を書きますが、郵便配達なんぞよく原田れいさんはこちらてすかつて聞きますの。

○名にて誕生日を知る

越後　貞子

私の知り合ひの御家に三人の女の御子樣があります小父樣が其子の名にて誕生日を知る法と云ふ奇拔なる考を起され一番目の子は十月四日に生れたから、とよ子其次は三月十日て、みと子三番目が八月の五日だからやい子、といふ名さて此次に生れたら、何と附けるてしよう、小父様は今から思案中だとの事てした。

○生れぬさきの三人がゝり

尾張　宇佐美　璐々江

私がまだお腹に居た時分、お夕飯が濟むと何時も私の名が一つの問題となつて、お父さまは「郁」がよい名だと申され御母様も御贊成てあつたさうてす。處が一番の姉樣は「父樣の（進）のすと母樣の（増子）のすと姿の（悅子）のえを取つて璐々江がようございます。又鈴の樣な美しい眼てからからした性質になる樣に」と申されお父樣も大贊成て遂々「璐々江」となりました。

○あそ子さん

大坂　高山米子

私のお友達に阿蘇子さんと云ふ方があります、お國は肥後てございますが、お宅の庭先きから阿蘇山の噴火が一と目に見えますそうて、お祖父様がお撰び遊ばしたと申す事です。

○俊一がゆきになる

四谷　櫻子

「お前が生まれる時は醫者も產婆も母樣もどうも男らしいといふので、皆もう男だときめてしまつてな、俊一といふ名までこしらへてまつてゐたら、女のお前が生まれたので家中がつかりしてお七夜になつても名がつかない。あんまり可愛想だつたから私が爲行といふ名の一字をやつてゆき子とつけてやつた。行は行ふとよむ、こんないゝ名は又とない」とはよく亡きお祖父樣が私にして下さつたお話。私はいつも自分の名をかく每にやさしいお祖父樣の御顏を思ひ出さぬ事はありません。

○おなべ

山口　璐子

私の御友達に醫者の娘さんてすが、お客樣が歸るとお父樣がおなべーと大聲ておよびになるので、お母さんは氣の毒におもつて、なーつとおいひだと、又お父樣がお叱りになります、其わけを聞きましたら、女は鍋釜が友だから御友達らしい名が好いつて、まー私何だか氣の毒な樣なきがします。

○お父さまを怨む

京都市　井上すみ子

私の知つてる人に小梅といふ方があります。その名をおつけなすつた由來を聞きますと、姉樣等三人共、餘程脊が高いので、女は餘り脊が高いと見にくいから、とおつしやつて、小梅とつけなすつたさうてす。それが不思議ぢやありませんか、同じ木にても、色の違ふ花が咲くこともあるてせうか、それはく脊の低い方て、よくお姉樣等に、蜘蛛の巢にかゝりますよ、桃の核に躓いて轉げますよつて、からかはれて大さうお父さんを怨んて居られます。

○兄弟どうしの合評

鳥取　春子

私共兄弟四人の名について面白い評があります、私が春子て此は樂天家の私に相應してゐます、次の弟は幸治てすが、若くて死んだから不幸兒の方が似合ふてすつて、次の妹は波子、臆病らしい名のくせに壯健な事は宅中て一番！てお岩

かお嬢と改名せうつて相談中、末の弟は匿て話題なそれは元氣のいゝきかん氣の子で軍人お望み面白いでせう。

○僞りの捨子

芝　伊藤すて子

私お尋常に居ります時分村のお友達お私を見ると直ぐ、すてこすてこつて、云ひますので、私も眞實にそうかと思つて、母様にお尋ねしたら家では、ふしあはせで御前の先に、男お二人女が、一人あつたけれど、生れて一ケ月かやつと、二ケ月位で、なくなつたから今度こそは、育てたいと思つてお前が生れて直ぐ父様はお前をあの入ッ川堤へ捨てた、そして、おとなりの叔父様にひろつて、いただいたからおすてとつけたのだと申されました。

○まさか女ではなからう

沼津　波遊とよを

私お小學校の三年生の時でした、母お急用お出來て呼にきたそうです、すると先生お、いくらお探しになつても知れないしまいに先生が母にまさか女生じやないだらうれ……と、兩親がお年とられての一人子、男女二人を共に得た樣な嬉しさで豐の字の下へ雄がつきました、これが私の名。

○牛さん

松山市　せい子

私の名はセイと申します。何の理由ともなしに祖父様祖母様が集つて古いきたない本の中から見出してつけられたのだそうです。女の名として愛らしくもなく優美でもありません。私のお友達に牛さんと云ふ方がございます。皆が面白半分苗字は云はないで用もないのに名を呼んでみる位でございます。この方には三人姉様お有早世なさいましたので、御兩親は御心配の余り人々の進めるまゝ干支の中から取つてかくは名づけられたのだそうです。



うしろ姿　青森　稲垣かほる

○美くしい辰

信濃　吉澤辰美

辰年に生れたから辰美とつけたそうです、私の名は、なんて無趣味な名でせう、私は思ひます、もし月美とつけて下すつたら、あのすみ渡た月の樣に美くしい心だつたろうに、もし春美とつけて下すつたら、あの平和な美くしい春の樣に、私ものどかに一生をすごす事が出來たろうに、もし辰美とつけて下すつたらきつと私の顔は、美くしくなつたろうにと、美くしい辰ぢや全くはじまりませんわ。

○又女か、又かく

神戸　あけぼの

或人に女の子ばかり十人ありました、此夫婦は非常に男の子を望て居りましたので、もう女が産れない樣に十人目の子をお末と命名致しました次に生れる子は男と二人がきめて男の名まで考へて居りました處やはり女が生れました、夫婦は嘆息しながら遂に其子をお留とつけました多分其で女の子を留める心算だつたのでしよう、

扨翌年又一人生れましたが又女でした、もう二人はがつかりしてしまつて名を考へる男氣もなく又女か〳〵とのみこぼして居りましたが、遂に其子をお又と命名したそうです、と、伯父は酒の機嫌に話て一同を笑はせました。

○豫想　日暮里　きやう子

名によつて未見の人を想像して、さてあつて見ると大抵はづれて終います、たとへば君江樣と云ふ名だと、まあどんなハイカラな方だろうと思つてお目に掛ると、全く豫想外の方だつたりするのが多い樣です。けれど私のためして見るのに花子と云ふ方に醜い方は恐らくありません、たとい顔立はわるくとも必ときれいな方です。

○名の問答　京都　花影女

私の幼友達に美惠さんと云ふ方がありました、或時、自分の名の云ひこを致しましたが私が「私の名は（伯母さんに秀と云ふ賢い人があつたがお前は其の人に似て居るからだ）と母さんが云ひましたよ」と申しますと美惠さんは「私も美しくつて智惠があるからだつて母さんに聞きましたわ」と、私は其時此の人は厚かましい方だと思ひましたが、考へますと私の方が先に云つたので自分の事は分らない物だと思ひました。

○味方を得た　越後　ふく子

ふくなんて、亡母樣は、御好き故、名づけなすつたのだらうが、自分は大嫌い、花ならば、色も香もなき日陰花、草ならば、馬足にても踏みにじられる名も無い小草のやう、寂しい思ひがする、せめて、紹美とか富司とか、床しみのある名なら嬉しいけれども、いつも、友への手紙には、本名を書きたくない、が此頃ふと神田の三好ふく子樣を誌上に御見受け申し自分もいつか三好樣の御文才にあやかられるやう氣強くなつて、此間の友へ送る手紙に、ふく子と大きゝかきました。

○名詮自稱　東京　静子

名は體をあらはすと云ふ事がありますが、私が全くそうだと感じた人が四人あります。一人は家の下女で、金と云ふ名、鐵の樣にしつかりした心ですけれど、堅いばかりでなく打てばひびくと云つた樣な性です。も一人は花子と云つて十七になる私の從妹で、眉の黒い目だつ顔で、口の可愛らしい美人と云ふ程でもありませんけれど何となく人を引きつける樣な樣子。後の二人は同級生で一人は清子と云つて正直なさつぱりとした心持のよい人です。一人は名は春子、浮き〳〵した陽氣な人で、其は活潑な其の人と一緒に遊んで居ると、いつも浮かれ出しそうな人です。

○鈴、嶺、麗、冷　本郷　望月れい子

私の名はれいと云ひ、あまり無い名と喜んで居りました、これは私が生れた時、祖父が占によつてつけた物と聞いて居ります、それは鈴と云う字でしたが、其後私は清い高いあの嶺と云ふ字にしました、それから後又心も姿も麗しかれと麗と云う字にしました、而しそれも暫し、煩悶を重れた私は今冷と云う字を用ゐて居ります、體を現すと云う名の變遷はこう云う樣です。

○嚴しくも優しくも　伊豆　加藤露子

人の性質にもよりませうけれど、女の名は優しいのをつけたいもので、強く聞こえるのは避けた方が宜しいでせう。まづ頭字にタチツテトのつく名は嚴しく聞こえ、ナニヌネノのつく名は優しく聞こえます。あの竹取物語で、なよかぐや姫と出てゐるので、いかにもかぐや姫が優しい樣に思はれます。かう思つて物語など讀みますと、篇中の人物の性質がよく名の上に現れてゐるやうです。

○わが地方の女の名　金澤　後藤よし子

わたしの故郷の半道ばかり西に一村中の女の名半分はハツ三分はウメ、一分はハル、殘り一分は種々の名であります。珍しき名はおもちや、小枝、よたか、まる、なそ、くち、其他普通になき名數多あります。

○何でもよしよし　府下　三ヶ島よし子

私が母のおなかにあつた時に、家のものはみんな男だと思ひ、又男のやうに願つてゐたのですが、さて、生れて、見るとそれはをかしな女兒だつたのです。それで父は何でもよしよしといつて、よしをそのまま名にしたのださうです。數多い名ですから、友の中にも同名のものが、いくら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もありましたが、私のは多少アクセントが違ふのです。

○瓢簞とお赤さん

愛媛縣　神山ゆき子

名の話になるとすぐ此の話が持ち出されるのですが。隣村に姉をお瓢其妹にお簞と云ふのがあります。是れは其父親が瓢簞と云ふ名を聞いても嬉しいと云ふ程の瓢簞好きてそれて我子にこんな名をつけたのですと。又當村にお赤さんと云ふ娘があります。私生兒なので名をつけない内。お赤さん〳〵と。呼んて居たのが。遂に實名になつてしまつて。十八歳になつた今日てもやつぱりお赤さん。

○よめさん

淡路　白百合

私の受持生徒によめといふ子がある。珍しい名だと思つて其理由を聞くと、此子の母は女ばかり六人產みましたので、男が欲しい〳〵といつてゐましたら、或老人が、それはよめといふ名をつけると今度生れる子は男であると申しましたので、七人目のよめさんが生れた時に、老人のいはれた通りよめとつけたのださうてす。

○名が勝ちすぎる

橫濱市　村田千代香

以前私の宅に居た下女が、自分の村へ嫁入して女子が生れた、よい名をおつけ下さいと手紙をよこしたので、兄樣と私と相談して、東洋子がよいと返しをやりました、母は田舍の子には名が勝過ぎると云てゐらしやると、半年計り過ぎて其子は死去したと云ふことてす、母はそれ御覧名前にまけたのだと云ふ、私は氣の毒な事したと思ひますのてす、其後又姙娠したと聞いて何となく安心致しました。

○却つて苦痛です

麻布　花子

生れた時は、鼻が高くて色が白くて、美い子だと云ふので、花と名付たそうです。十五六年も、遂ない方に違ふと、乾度轟かれます、これがマアと醜理にも賞める方はありませんもの、いやになります。

夫れに付ても、皆樣もう、決して忘れてもお子樣方に此の名ばかりはお付遊ばすな。

これが、と言はれては中に年取つてからの苦痛てすもの……。

○智、情、意

大阪市　團澤菊枝

名は態を表はすとか申しますが、光、藤、文、時、英、清、照子等は智の人の樣、愛、涙、花、紫、春、露、房子等は情の人の樣、菊、靜、雪、俊、貞、芳、秋子等は意志強き人の樣に思はれます。

○かと

伊豆　辻村かと

私の先祖にかとと申す人があつたそうです、御亭主に早く分かれましたが中々きかぬ氣の男まさりて、此の人が家の身代を造らへたそうてす、私の名も御先祖にあやかる樣にかとと付けたそうてす妹には締りの字を取りましてとしと付けたそうてす。

○戀人の亂れ書

松山市　ぎよう子

終りへ子のついたのはそう好きませんしお竹さんおちかさんなど云ふのは俗てす、一番好きなのは曉とかいてぎようと讀ます名、曉さん！美しくはありませんが誠にゆかしい處が好きなのてす。——自身の雅號をかう云つては御無禮てすけれど——それは五六年前、何かの小說て、女主人公がこひしたふ許婚の人の書齋に入つて見ると、帖面の表紙にも机にも火鉢の灰にも曉々とすきまもなう亂れ書がしてあつたと云ふのを讀んてから、忘られぬ名となつてしまつたので、私も女兒が出來たら同じく曉とつけてやはり本誌の投書家にさせませう。

○名前の主

函館　西村恭子

千鶴子とか、美濃子とか、郁子とか云ふと色の白い、脊のすらりとして艷々しい丸髷姿の、若い令夫人が思ひ出され、田鶴子とか、綾子とか云ふと、ハイカラな令孃が、千代田草履をはいて步いてゐるスタイルが目に見えるやうてすし。秀子とか輝子とか俊子とか云ふ名を聞きますと桃割れを結うて、ダイヤの輝くま白い細い手て琴を彈じてゐる令孃を見るやうな心地が致します。

○子供の時はきらひ

佐賀縣　村山ゐか子

私が生れた時父さんから爲可と名を付けよといつて來たそうてす其時名にちなんて「古里に又おひそふる姬小松ふたむらやまはいかにきかへん」といふ歌を添へて送られましたそうて今に其短册を大切にしまつて居りますがふしぎなことには末に生れた私が分家するやうになりまし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た又子供の時に他人からあなたの名はと問はれると妙な名だから何よりきらひてした。

○清音濁音

仙臺　光子

私の名は光と申します、光るやうにつけたのだそうて、現に頭のまん中に一所光つて居ります、そして人によつて、おこちやん、こうちやん、おこうさん、おごさん、などゝよびますが、私はおこうさんとよばれるのが一番おとなしさうて心地がよう御座います、だから斯う呼ばれたときにはハイッてすぐ返事が輕ふ御座います。

○花の樣に

京橋　花子

私の名は、花の盛りの四月に生れましたのと、母が花の如く美しく、花の如く清くなれ、と云ふので、つけたと申します。私はいつも、花子と呼ばれる度毎に、姿は花と正反對ても心だけは、名に負へる花の様に、美しい清い心を持つてゐ様と、それのみ心がけて居ります。

○上にこの字

西播　さゝ舟

私のお友だちに初音さんといふ方があります。其方は一月元旦に生れなすつて初めてオギヤと一聲立てられたのてこんな名をつけられたそうてす。播磨の西南地方は上にこのついた名が多いようてす。例へばこよしとか、こしづとか又こせんとかいふ樣な名てあります私はこんな名は嫌てす。やはり女の名はやさしい雪江とか露子さん、敏子さんなどが好きてす。

○男を欲しい時の名

靜岡　さち子

私の郷里にわぐりと申します名が御座います、これは女の子ばかりて、男の子を欲しいと言ふ時、わぐりと言ふ名を付けますと必ず後の子は男が出來ると言ふ迷信から付けたものださうてす。隨分面白いお話してすけど此の家には果して男の子が生れました。

○心してつけよ

常陸　木村那賀子

初枝、靜江、幸枝、玉枝、雪江、等は華族樣のお孃樣らしい名て、名を聞いたばかりて、定めし美しい上品な方だろうと思ふ、お梅、お花、お菊等はいかにも舊式て、おまけに品がない又何子、等と名の下に子を付けると、ハイカラらしくきこへる、故に私は名だからと云つて、無暗につまらないのを女に付けるものてはないと思ふ。

○落しもの

河内　倉とし子

私は姉樣が三人て四人目の女の子てすが、私の出きる時父樣はこんどこそ男だとりきんていられましたが、やつぱり女子の私、それて、父樣はきつとこれはお腹の中て、おとしてきたんだから、と（とし）と名付られました。

○僧妙見

山梨縣　塚原けん子

私の名はあまり好きな名てはありませんけど「ゆわれ」のある名てすから一寸詑上をけおしてお知らせ申しませう、私のお父樣は大層の宗教家て、丁度私の出產當時妙見と云ふ僧が毎日の樣に出入りして居りました、そして其の僧の見の字を取つて、私の名をつけたさうてす。けれど今朝松、久吉、種吉などより稍々勝つて居る樣に思はれます。

○隣近所の娘さん

土佐　桃の花

お向ふの煙草屋の娘さんはお柳樣、瞳の涼しい色が白くて背のスラリとした、番板美人の評が高い。其すぐ隣が孝子樣、グッと胸に突き出した紫の袴のよく似合ふ女學生。妾の家の東隣は美都子樣、背の低い愛嬌のある方、西隣りの吳服屋は桃代樣、桃割のよく似合ふ人、後のおかるさんは豚の樣なスタイル、けれど無邪氣て可愛らしい。

○男のやう

淺草　古屋近代子

賓さい女の名として私の國程いやな所は有りますまい、第一に私の名前が近代まるて男の樣てす、又古里の親友の仲にはクマンケーシン等と云うて誠に笑止いのてす、故に都の皆樣方の美しい御名伺う度に羨しうて成りません。

○二つの名

下野　道乃

私が小さい時乳母が、三字名は呼びにくいと申しましたら、面白い氣質を持つて居た亡き姉は、それては恰度お鼻が低いから臨時お鼻ちやんが好いと申しましたそうてす、處がその忘れがたき綽名が十六年來の呼名になつて、今迄に二つ名のあることをきかれてこの耻かしい答をしたのは幾度てしたらう。私は花子さんといふ名をきくとやつぱりその方のお鼻がたとへ高くつても其原因はと、余計な事を起して仕方がありません。

書簡文

○規定　手紙又はハガキの通常の書信文を云ふ美文口語體何れにても隨意なり成るべく意味の透徹したる作を採る二十四字詰二十行以内とす一人一章に限る卷紙を用ゆべからず乙種の賞を進呈す

○避暑地の弟へ（地賞）

本郷　千とせ

忠さん此頃は盛に水泳してお出だそうですね、海國男子には最必要の事ですから、日頃やかましやだとお云ひの姉さんも賛成して上げ升、けれ共未だよく泳げも仕ない内に深い處へ這入つたり、兄様のお許しのない時に泳いだりしてはいけませんよ、デ、毎度云ふ事ですが幾ら喉が渇いても決して水を飲んではなりません、家を離れて居てもし病氣にでもなろうものならどんなに困るか知れないからよく〳〵注意なさいよ、夫から今し方お隣の英ちやんが、そら忠さんもよく可愛がつて居た米屋の犬ね、……あれに足を喰ひ付かれたので夫は〳〵大騷ぎよ、多分狂犬では有るまいと思ふのですけれど未だよくは分からないそうです、だから決して〳〵犬の傍へ寄るのでは有りませんよ、あなたは一體犬が好きだから、かまつて居や仕まいかと、お父様もお母様も夫許り案じて被入い升よ、一寸外を歩るくにもうつかりして居てはいけません、今は犬の氣が立つて居るから狂犬で無くてもふいと食ひ付く事が有り升からね、よく氣をお付けなさい、何でも怪我を仕ないやうに、身體を大切にして私が新橋へお迎ひに行く時には、肥えて直黒な子に、姉さん、と呼ばれて恟りするやうに成つて來て頂戴、では又其内に。

温情流露、嗜犬の事を聞いて犬好きの弟を諫め戒むるなど、殊に生意ありて佳し、伴らざる好書簡。（評）

○歸省して友に（人賞）

鳥取　安木はる子

出發の際はわざ〳〵御見送り下さいまして有難う御座いました、九時三十八分に鳥取驛に無事到着、母と共に迎へに出て呉れた妹の大きくなつてゐるのに先づ驚き、肩の細くなつた母の姿にはつと胸をつぶしました。あゝその頬の肉をそいだものは五十里の西にもの學び

する自分ではなかつたか知らと思ふと止度もなう涙が落ちるのでした、歸宅致しますと勿體ない去年から目の見えない祖母も父も下男も下女も門まで迎へに出てゐて呉れました、祖母は大きくなつた〳〵と云つて私を頭から足までさすり上げさすり下ろし見えぬ目からはホロ〳〵と涙の玉がこぼれますので私も一しよに泣いて終ひました、唉樣、私は此夜終に一睡も致しませんでした、久し振りに祖母の懷にねて、もう寐ませう〳〵の云ひつゞけと〳〵語り明したのでありまず。今朝は赤飯をたいて勞つてくれますし、母は只今好だからと云つて私がいゝと云ふのを無理に林檎を買ひに市に出ますし、父はまだ畑に出ないで學科の事などたづねて慰めてくれますし。妹や下女もいろ〳〵注意してそれは痒い所に手の屆くやう、私ほんとにお客樣に來たやうで勿體なくて！三月に女學校に入つてから何程の事をしたかと思ふと空恐ろしいやうで御座います、どーぞお察し下さいませ、委しうは此次としまして今日は無事歸宅しました御知らせまでに止めます、

かしこ。

よくある題ですが、かく心持よく書けて居るのは少いです、これて同時に郷里の風物が出て居たら申分なしですが、温かい家庭の空氣がそれ丈け濃くあらはれて居るから十分に補はれます。（評）

【秀逸】

○道知るべまでに

滋賀縣　磨志緒

静子樣乾度ですよ……きつと日曜にきて下さいよ、今から樂しんで待てます、汽車からお下りなすつたらね何處へ行くのも一筋道て、太平橋迄いらつしたら其橋渡らずに雜木林の鐵道にそうてある小道を來ますと、右は藪て左は青田そこを通りぬけると兩方とも桑畑があります、其畑をぬけると、左も右も田計りで行く先に小さな村が見えます、之が私の生ひ立ちの里て、東の端に瓦屋根の家が御ざいます、それから田を二三枚へだてた處に瓦屋根の二階造りて高地に建てあるのが私の家ですの、門の前には李の木が二本と柿の木が青々した葉を出して廣く場をとつてますが高い木てはありません、二本の李の木の間には朝顏が松皮菱にくんだ垣根をはいのぼつて咲いてゐます。お天氣が好くなければ被居らないんですつてね、おやあねお隣が紺屋てすから染物をほしてゐます、それでよくわかります、私お迎に行きたいのてすのに、お氣の毒だ、なんて仰しやつて汽車の時間も言つて下さらないんてすもの、時間毎停車場へも行つて居られませんし、豊にやつても、いゝのてすが澤山の下車客てすのに、こんな方つて敎へても同じ樣な人もいらつしや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

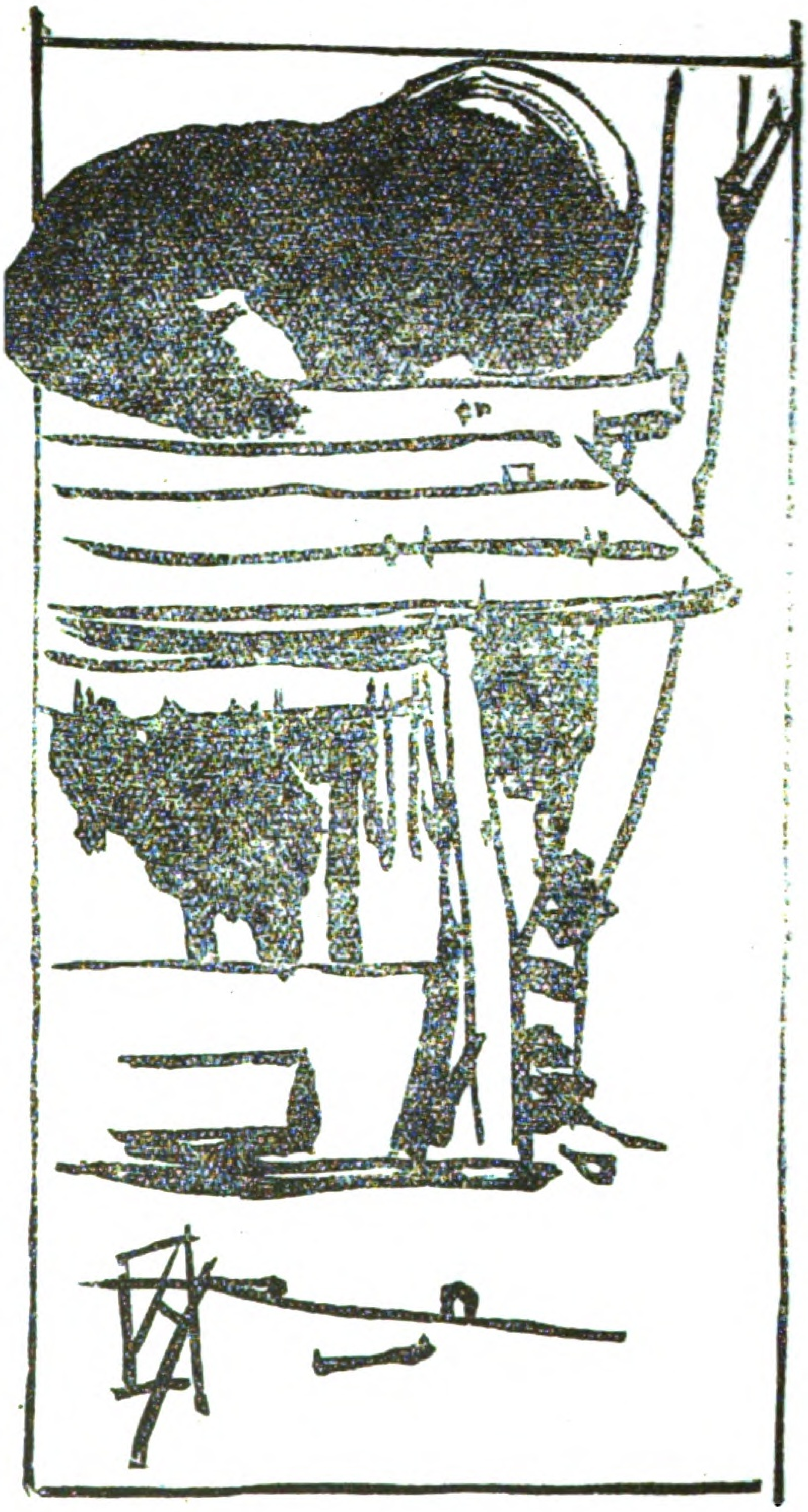
るてせうから、それよりは二階の窓から人待顔に外眺めてる私を見あてに來て下さい、きつとてすよ今日から御馳走して待てますから、

才氣縱橫の文。（評）

○叔母様へ

山口　酒向とし子

極暑の御見舞忝けなく厚く御禮申上候、私方よりこそ先に御見舞すべきを、今更恥ぢ入申候、仰せの如く本年は別して强暑を感じ候に、御なつかしきおば上樣にはいよ〳〵御機嫌にて渡らせられ何よりも御嬉しう誠に安心致し申候、きこゆるも愚乍折角御自愛專一に祈り上候、降て私方にてもおかげ樣にて一同障りなく只暑し〳〵の申つゞけにて暮し居候へば何卒御安心下され度候、



御手洗　京橋　三國秀子

寒暖計は九十三度乃至四度がおきまりにて、我まゝ乍ら十一時頃より午後の二時頃迄は右の者を左に致すも何とやら大儀にて、只うちはのみが實物の樣に取扱はれ居り申候、新聞にて見れば縣下にも傳染病は流行の摸樣てすが、近廻りには一人だになくいと仕合に候、夕は割合に涼しく日中のたからものもついお座敷の眞中に捨られて時たま無意識にいぢられ申候、扨てもゑ手勝手のものに候かな、御邊りは蚊のおみまひは如何に候や、私方では毎年暮におみかんの皮を日にさらしてカチ〳〵になりたるものをかこひ置きてそれを此頃お火鉢にくすべて蚊やり致し申候、おば上樣なか〳〵なつかしき香の致して候よ、お庭の眞中に置けばけむたくも暑くるしくも

御座なく候。これからまだ殘暑も一息これある事に候へば見本旁々御目にかけ候はんかゝ、小包で……扨夜は星のまたゝきあまねきまゝに且つはかすれきこゆる琴の調べにひかされて端居すればいつしか白川の夜舟、こくり〳〵と音のするにや「コレ敏子さん」あはれ此一言にくつがへりし船客、非常汽笛のやう十一時半のピーも一入高うきこえて今更夜のふけしに驚かさるるも毎夜、さり乍らおば上樣、今宵ばかりは御かへり書くが樂しみにて、……おゝ星は今しもふり來やせんとばかりに美しうきらめき居り候、此分では明日もまた炎熱に苦しめらるゝ事かと思へばまさにおきつゝある白露のいと惜しうて何かに入れてゞもひめたく思はれ候よ、返す〳〵も御暑さ御いとひ遊ばされ度偏に念じ上候

先は御禮をかね暑中御見舞迄　かしこ

かりそめの暑中見舞を延べた丈けで新らしい材も用ひてないが、而も孤獨ならしめず枯淡ならしめず、讀み了へて趣味あらしむる手腕、なか〳〵侮り難いところがあります、才氣ある筆（評）

○病床の乳母へ

四谷　石田則子

毎日照り續いて何んて暑い事てせう、丈夫な私てさへこんなに苦しいのてすから、病床のあなたはどんなにお難儀てせう、御察し申します。只今は摘まみ菜を澤山に有り難う、私は夏はどんな御馳走を頂いても餘りおいしく有りませんが、此摘まみ菜のお漬け物ばかりは何より好物てす。母も良く氣が付いたと大相喜んで居ます。病氣の樣子は仙吉さんから詳しく聞きました。もう床の上に座れる樣に成つたんてすつてねえ、御目出度う、之から柱に捉まつて立ち、杖を力にしてあんよはお上手とよち〳〵歩くのてすね、然しそう成ると肥方はめつきり早いものてすよ。私も一昨年の夏海岸に避暑中餘り御行儀の良く無い事をしたものてすから、急性の腸かたるに犯されて、衰弱が餘りひどかつたものてすから治つてから尚一月ばかりは立つ事が出來ませんてした。今考へ出すとおかしい樣てすが、其當時はもしや此まゝ跛に成つてしまうのぢやないかとつまらぬ心配をしました。病氣になつたらあせつてはいけません。時がたてば自然に肥立ちます。決して心配する事は有りません。それに仙吉さんが人一倍の働き手てすから、あなたはゆつくり養生なさい。

此小鳥一番病床のお慰みに上げます。之は昨年私が同じく病氣で惱んて居る時、おもちやに良からうと、他所から頂戴したのてす。此頃はもうすつかり馴れて、籠から出してやつても外に逃げず、私の肩や膝に乘つて戯れます。當座はなつかないてせうが、まあ氣長に世話して御覽なさい。一月分の餌を上げますから又無

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くなつた時分には送つて上げます。此十一月の私の誕生日には、きつとびん〳〵していつもの樣に來て頂戴よ。治りかけの處が大切なんですから、輕はづみの無い樣にね。てはさよなら。御大切に。

取り出てゝ云ふところもないが、全體にわたりて好いところがあります、表面淡泊に云つた言葉のうちに力ある慰めが籠つて居て賴もしい。（評）

○小學校に奉職の從妹へ

伊豫　篠原由美子

御無事御出勤の事と奉存候、初めての御奉職に候へば身心共に御注意被成るべく多の小學男教員間に交りても理想を高く持し超然として彼等には毫も宥すなく充分注意して人に接せられん事を望み申候、御身は大躰人に親み易き性質なれば妾はことに心配致候、世馴れぬ無邪氣なる小羊の如き處女の目より見れば學校程神聖な所はあらじと見ゆるならん、且て妾も其一人にて有之候、そは兎も角杞憂ならん事を願ふ者なれ共若もの事有ては御身の一世を暗黑にする事なれば其積りにて決して婦德を傷け世の物笑とならざる樣心懸らるべく候。男子の内に眞に男子と稱し得る者は實に稀にて、曉の星も啻ならずと存候、殊に理想も人格も無き男子は巧言を以て婦女を誑かし、其節操を弄て少も恥づるを知らず候、高等敎育を受けし者にも品性の具れる者幾人ぞやと思はるゝに殊に比較的下劣なりと見らるる人に圍繞せられたよるに人なく語るに友なき御身が事を思ふと戰慄せざる能はず候。寄宿の窓より濟き眼を以て下界を見ればパラダイスの樣に見え世人は自分を歡迎せる樣に見ゆれ共決してさるものに御座なく候男子と交際するにも成べく疎くせらるゝ樣心懸子供百姓には親切に物事は深慮遠望して自らを處せらるゝ樣十分注意して修養に務めらるべくひたすら望み申候。時候不順に候へば十分御自重なさるべく先は御拜顏の上ゆる〳〵御物語致すべく候　かしこ。

始終有益なる敎訓を自己の實驗より拔摭す、眞摯の氣措表にあふれて覺えず襟を正さしむる槪あり、力ある文（評）

○遠洋航海中の兄の許へ

姬百合

兄樣御手紙有りがたうムいます、兄樣ほんとにお船に醉はしませんか、皆で心配して居りますのよ、軍艦御暑いて御座いませうね、兄樣あの花何んと云ふ花！去年江田島から送つて下さつた花よりも美しいのね、あんな花澤山咲いて居りますか、妾も男なら兄さんと一處に行きますわ全く行きたい事よ。

兄樣あの靴下ねえ兄樣にちようどよう御座いますか。乳母ねえあの事御傳言いたしましたのよそしたらば泣いてよろこびましたわそれてねえ兄樣のお姿が拜見いたしたいと申してお歸りになるまでお待ち申すつて宅に居ります。

飯田町の兄樣の事まだ御知らせ申さなかつたのね二高へ入學遊ばしてよ、それから秋子さんねえ芝へ轉宅いたしましたのよてすからこちらにはうち計り親類は居りませんのよ隨分さむしいのよ。

この頃ね母樣壯健よ父樣はあひ變らずまめよ大兄樣姉樣毎日勉强よ妾もこの頃勉强する事よこの頃毎日々々指を折つてお歸りになる日をかぞへて居ります何うぞ御身體御大切に遊ばせ　さよなら。

無邪氣、「ほんとにお船に醉はしませんか」堂々たる海國男兒爰に至つて始めて醉を覺えるてせう（評）

○麥飯のたき方を問はれて

奈良　白ぎく

紀子樣。お手紙の趣、どんなむづかしい事かと思つたら、麥ご飯のたき方ですの。それは、いとお易い事よ。さうですね、まあ焚き方は、いろ／＼ありますが、次の方法が、一番たき易くて、そしておいしう覺えるやうに存じますからお知らせ申します。

先づ、麥を極上白に精げて、蒸籠で蒸し、次ぎに、それを筵にひろげて、十分よく乾かし、丁度糒のやうにするのてす。それから、御飯にたく時は、米七分と麥三分位の割に一しよに交ぜて、水加減は少し柔かく仕掛けて焚くのてす。かうしてたきますと、一寸と見ては、麥が交つてゐるやうに見えない位よ。

私方は始終これをやつてゐるのです。すると。たまには可笑しい事もあつてよ。宅にお友達の方が見えて。ご飯時になることがあるわね。其時、「出來合ひを上げよ。」と仰つしやるから、麥ご飯て失禮だと思ふけれど背くわけに參りませんから、私は「麥飯て失禮てすが。」ときまり惡いけれど、差上げますのよ。するとね。其の友人の方が「君とこの、麥飯は、よほど甘いね。どんなに焚くのかね。」「いや。甘いといふ程の事はないが、これがそのなんだ、家内の自慢の麥飯だ僕はしじゆうこれをやつちよる。」「ふん。どうも感心だ君の妻君は、仲々振つてるね。」ホ……

こんなこと、まゝあるのよ。紀子樣。試にやつてごらんなさいませ。けどね、あなたのお内のやうに、お客樣の多い内では損てすよなぜつて？ホ……出來合を差上げんならん時に、「一一麥ご飯て失禮てすが。」とお斷りせねばならんだけホ……左樣なら。

是れ丈御自慢付の返事なら責任があつて大丈夫、紀子さんたるもの、安心して學ぶとが出來ると云ふものてす（評）

○遊學せる妹に

福岡　登譽子

無事にお着きてしたつてね、御両親始め皆喜んでをります。
もう暑さも薄らぎましたし、夜は長くなるし、燈火の下に勉强するのが樂しくなつて來ました。一學期の成績はいけませんでしたね。元氣はもう十分おやすみの中に養つておいての筈ですもの。その元氣を振ひおこしてね――。
斯道の大家でも何でもない私のいふ事。當るか當らないか知りませんが、勉强には、怠惰、無神經、慢心といふ病氣が恐いと思ひます。怠惰も無神經も恐しいのですが、慢心病がもつと恐いの。が無神經といふ病氣は、あなたにはない筈。姉として私が遠慮なくいへば、あなたは一番恐るべき慢心病の患者、それに怠惰病が、そろ／＼とおこりかゝつてはゐまいかと思ひます。ねえ過去を考へてお覧んなさい。小學時代は私さへ不安心な程よく出來て、校內の花とうたはれ、やがては村の光ぞと、皆樣に送られて華々しく遊學なすつたあなたですもの。ね。これ以上既往の事を繰り返す必要はありますまい。只、この恐ろしい病氣を治せばよいと思ひます。それには、克己、忍耐、奮發といふ樣なお藥が、一番効目がありますまいかと思ひますよ。
二學期末にはすつかり快くなつて、喜ばせて下さいね――。

此人前號の「踏皆せざる妹に」の作者と同じ方でしやう、隨分嚴しくやつつけ遊ばすと恐ろしくつてよ……と云ふ程峻嚴な筆　（評）

○只今小包到着

藤澤　常盤　幸子

お嫂さま、只今小包到着、松やの手から、引たくつて、奥の座敷で、咄嗟の思案、中から何が出るだらう、抱へて、見たけど、重くもないし、ブツ／＼糸を切る間も悟しくつて、開けて見たら、まあ、夏ショール、空氣草履、リボン新形の四季袋、嬉れしいわ皆欲しかつた物ばかり、母さまは、今迄ちつとも、買つて、呉れなかつてよ。ショールの水色は、涼し相ね、一寸襟に當てゝ鏡を見たの、似合つてよ、明石の絣とは、一屹度配合が宜いわ、此のリボンは、五吋も有り相だこと、草履も手提も中々、振るつてるのね、私急にお孃樣の資格がついたやうな、氣持ちがして、矢鱈笑つて、見たくて、しようがないの、嬉れしいから、御祝ひに、松やに、前掛けを買つてやる約束を、しました、御嫂さま、幸は、欲が深ふ御座いますねエ、品物に斗り見惚れてましたの、御手紙も難有う存じます。いつも筆蹟

のお美事つたら、嫂さんの様になれつて、父様に叱られるのも無理ぢやないわ。父様や母様、長逗留て随分我儘を被仰るてせうね。けどね、父様も、母様も、嫂さまを大變に褒めて、被在いますのよ、幸は何て、幸福者でせう。

それては、近日、父様母様、御迎へながら、參ります、何卒可愛がつて、下さいねエ。其時、私ハイカラになつて、行きますから、吃驚なさいますな。

得意滿々、感興充實、それが筆端に渦卷いて居るから堪まらない、危くつて近つくとが出來ない程な高調な書簡　（評）

○朝顔に添へて

赤坂　靜江

小さな紅筆の穗の様な蕾が微かにゆれて、見事に開きましたのよ瑠璃色が三つ、深紅の亂咲きが二ッ、あとは空色やらしぼりやら。

八重ちやんが緋メリンスの兵兒帶を引きづるのも氣付かず、あれだのこれだのと大騷の末漸々撰んだ二鉢、露の干ぬ間にと、只今竹やにお持たせ致します、大きな方は天馬、小さい方は芳野と申します。

其は十時頃にお摘みになりて下さいませ、そうてないと明日の花が少さくなりますから。

摘んだ花は私はいつも直ぐ白いベースにとつて、水に浮かせますの、こうすると大方一日しほれずに保ちますが、兄は、「露置く間の儚く弱い命なればこそ、美しいとも愛でるものを、一日執念く咲いて居てはと申しますが、私にはどうしてもむごくて捨てられません。

父様、いかゞ思召して？

竹やが待つて居りますからこれで、さよなら。

朝顔の添へ書として絶好の文　（評）

○ちとそちらもお漏し遊ばせな

牛込　平塚白百合

大層おあつうございますのねえ、今年は輕井澤てすつて、まあ夏なんか何處に來てゐるか一寸もお知りなさらないてしやう。今夜のやうな此様な晩、キット細く高く洩れてくるピアノの音にあくがれながら、月の光をまともにうけて、スックりと後手にさゝほれてゐらつしやるお姿、眼に見えるやうでございますわ。

私は故郷へ歸りましたの、毎日妹や弟のおつき合て海へ。ホヽレートが泣きそうね。夜もおとぎ話をしながらだん〳〵落城てすの、

此の頃は西洋花なんか藥にしたくとも見られませんの、鳳仙花や松葉牡丹が關の山、てもねえ時に山から、谷間の女神がさゝげてゝもゐるやうな花冠、まあ花冠てすね白銀の。その百合をとつて來る事もありますの。その代り松虫ても鈴虫ても馬追虫ても、田舎は大音樂堪になつて居りますから自由に拜聽てすね。たまさ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

か涼しい虫の音にはげまされるからロングフローなんか讀んで見ますと、頭の隅から隅へよく入つて、なぜ試驗にあんな事が出來なかつたろうと思はれます位、それは一句〱燒き付けられるやうでございますわ。こん夜のこの月、寄宿舍の窓から見るのと違つて、こう白絹でても奇麗に拭つたやうな。家と家との間から見る月ではなく廣い〱稻田のはてから、すべるやうに昇つてくる月、ようございますわね！、ちとそちらのもお洩し遊ばせ。歸りには今から忘れずに烏瓜を澤山持つて參りますよ。今は花が眞盛りですの。月のよい晩散歩からかへつて來ますと、此の花が白くボーッと夢のやうに咲いて、源氏の夕顏の宿を思ひ浮べさせますよ、自分の家ながらこう雅びた古めかしい氣がして、思はずチーと立つくす事がございますわ。



荷上げ場　福岡　安垣いと子

まあ大變〱ど〱と書いてしまひましたわね！。もうあとはおあづかりにしてそちらをちと。さよなら。

趣味津々として筆端に溢れて居る。（評）

○小猫の死を姉へ

伊勢　道　緒　子

姉樣、大變で御座います、悲しいことが出來ました。あの、玉が、玉が死にましたの、つい今。あんな元氣者が、昨日から、御飯一粒も、牛乳一滴も、喰べませず、しほ〳〵と膝に寢て、時折思ひ出した樣に庭へ下りて、何か吐かうとして苦みます。でわたしも一しよにいつて胸をなでてやりますと、また膝へ來ます。一日かうして居ましたが、今朝から見えなくなりました。「玉――玉よ」と、聲の涸れるほど呼んでさがしたら、納屋の隅にごろりと寢てゐました。「おゝ」と抱き上げて頰ずりしようとしますと、玉は悲しい顏をして口を開きました、鳴かうとしたのに、可哀さうに聲が出ないのです、なつかしさうに顏を見上げて、目を細くして二度三度口を開きました。けど、とう〳〵聲は立ちませんでした。私は、ぽろ〳〵淚をこぼして撫でてやりますと、玉はぐたり首を落して昏々と眠つてしまひました。玉や〳〵とゆり起しても動かうとは致しませぬ。身體は刻一刻冷えてゆきますが目は半分開いてゐます。目を閉ぢる迄は、死なないものと思つてまだ膝に置いて居りますの。けどかう冷え切つては駄目。可哀相なんて言ふなと、祖母樣は仰しやいますけれど、これが泣かずに居られませうか。よく球にじやれるといつちや打ち、雛雞を追つたと言つちや叱つたのを思ひ出しますとね。

でも死ぬと思へば叱りやしないんですけれど……。

あの大事の手文庫ね、姉樣とお揃なんだけど柩にやらうと思ひますの。では姉樣さやうなら。

よく少女のやさしい情があらはれて居る、但「これが泣かずに居られませうか」は、ちと、…ちと過ぎたかと思ひますけれど……(評)

○山の湯より

越後　ふ　く　子

御父樣御義母樣にも御變りはありませんか、私も湯治のきゝめがありますからどうぞ御安心なさつて下さいまし。氣分のいゝ時にはいつでも隣室へ遊びにゆきます。隣室には水野樣といつて五十許の方と六十許のおばあさんがおります、水野樣は大變お酒が好きでそれが爲めに今では手も足も口までも自由にならないんですつて、私がゆくといつでもこんなにならうとはおもはなんだつて、今では酒を見ると血が逆立をするつて笑つております、父樣子としてあまりに生意氣ですが少々お酒をつゝしみ下さいませんか、お父樣一人のお身じやあなし、お義母樣にしても私にしても大切のお父樣、其邊の事にもよくお氣をつけ遊ばして、ふくが一生のお願ひどうぞおきゝ入れ下さるやう、朝夕神かけて祈つております。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新歌謠



○規定　古來の俗謠の形式を取りて專ら優美洒脫なる作を歡迎す野卑猥褻なるものは斷る一人一章限りにして半紙又は罫紙に認むること丙種の賞を送呈すべし

○（地賞）　信濃　丸山榮枝子

日本アルプス夏でも寒い雪のふすまの音天井

（評）霜柱、膽を破るの感。

○（人賞）　四谷　柳の人

京は床しや繪日傘さして豆腐々々と賣り歩く

（評）夕かけ町を高下駄はいて。

【秀逸】

○　上田　宮川ゆう子

草の海原尾花の波が立つて沈むだ月の舟

○　藤澤　常盤幸子

天のみ鈴の響にふれて露の葡萄のゆら〳〵と

○　紀伊　大和しづよ

右は白富士左は青野中を甚五の馬引歌

○　三河島　木原英子

雁になりたや空ゆく雁に落つる堅田は母の家

○　紀伊　白蕣子

葡萄切る兄籠持つ妹妹御覽よ月が出た

○　秋田縣　北林まつ子

鳶が舞ひます稻田の上で村が繁昌と舞ひまする

○　四谷　あさ子

峠見かへりやたゞ水の音蟬のこゑして暮れてゆく

○　出雲　萩野露子

心地よいのは私と月よ朧めくよな風呂の湯氣

○　小草子

姉は十八未だうら若い母とよばすがおしい樣な

○　京都　河村光子

稻穗色づくお馬は肥える可哀やお萬は瘦せてゆく

○　牛込　平塚白百合

白魚そだてる岸邊の波も沖ぢや鯨の子が育つ

○　本所　木暗きみ子
竿で砕いた光を分けて下る墨田の夏の月
○　函館　谷内ふさ子
孤峰可哀や小雨に濡れて何處へ行くやらしよぼ〱と
○　秋田　小原あき子
前は河面立つ波風に蚤も涼しい河鹿啼く
○　伊豆　鈴木安子
黄金たんとやろ鐘つき男秋は撞きやるな夕の鐘
○　山口　酒向とし子
ロイシヨ、オダイダ、マッタヨ、ソリヤと暑わするゝ井戸さらゑ
○　阿波　みのる女
鞍に稲束山ほどつけてお雲馬ひく娘振り
○　信濃　吉澤辰洪
諏訪の湖より大きな海を一度見たいよ死ぬまでに
○　若狹　小谷よろず
汽車もまだない若狹の國で汽船一つが身の便り
○　大阪市　中村秋子
金波銀波の涼しいにはもこはや地獄は板一重
○　近江　西村悦子
立った雲雀を團扇で留めて今の小唄の謠ひ足し
○　備中　かつら子
父様眠った滿洲の野にもこんな白百合咲いたやら
○　越後　長谷川ます子
芋の葉の露手にうけみれば珠はくだけてたゞの水
○　兵庫　杉山春翠
雁に雲間にかくれた月の顔を覗きに飛んで行く
○　福井　明星
妾しやいやです大學白粉やっと尋常を出たばかり
○　美濃　瑞ときわ
テニス選手の男めく面に吹くよ朝風颯々と
○　奈良縣　中富よしみ

人を呪ひの醜神實神かくれとりそな雲の峰
○　羽後　すみれ子
天の河原の草刈る小女忘れ置いたか月の鎌
○　和泉　關野千枝子
文の使の千鳥が迷ふ霧が隠した淡路島
○　滋賀縣　磨志緒
雲が涙を又だす程にないてくれるな枝蛙
○　金澤市　芳子
あらぬ浮名が立つかと思や夏やせしてゐる身のつらさ
○　信濃　藤澤里子
盆になったらまた晝顔の花が咲いたよ秋の風
○　紀伊　蒼生枝
姉は十八花嫁ざかり今宵よばれて月の宮
○　下總　相川みよ
いつか月日も立田の川に紅葉する日を初時雨
○　遠江　花吹雪
秋もはてるか時雨がたゝく草の葉裏に虫が鳴く
○　京都　春子
廣い世界にたったのひとり私しや川末どうしませう
○　紀伊　三栖鶴江子
土用東風吹きや俵を縋れと喰おりやこそ秋は待て
○　ゆり子
にじの七いろ生絹に染めてきせてやりたやいとし子に
○　下谷　人の子靜枝
ありし昔を忍ぶが胸に色は更らぬ菫花
○　德島縣　西野花菱
錦ちりしくお庭の小丘は今日もほうきの用がない
○　宮城　手戸まさる
紅葉のせ行くいかだし老いて時ぐれそぼふる秋のくれ
○　紀伊　田中富美子
さえた月夜に湖上の小舟もるゝ謠は紅葉狩

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

笑話



○規定　面白い話なれば何でもよし實際の話でも一口話でも隨意なり賞丙種

○赤がへる（地賞）

四谷　櫻　子

今年四ッの弟の武坊をつれてお湯に行きましたら丁度よその奥樣が產まれて二十日ばかりの小さい〳〵赤ちやんを連てきていらしやいました、武坊不思議さうに眺めて居りましたがやがて「姉ちやんあれなあに？」ときゝます、「よその赤ちやんよ」と申しますと「さう、あたちまた赤蛙かと思つた」大きな聲ていひましたので皆大笑ひ、私はもう氣の毒て〳〵。

○不動樣の弟子（人賞）

伊豆　辻　村　か　と

子供　富士山へ登る人は皆お不動樣の弟子の樣てすね、

母　ナゼ

子供　ても皆わらじを前に二三足さげて居るもの。

○アナタにコラ〳〵

仙臺　光　子

「お孃さんのお父さまはなんと仰つしやるの」
孃「アナタツて」
「じあ母さまは」
孃「あのれコラ〳〵つていふの」

○學　者

岐阜市　篠　田　と　み　子

お隣の〇〇さん今年寄る年波は六十七とか、お星樣はどうだとか、月と地球が何のと莽りに天文學者振る癖に、一貫目の氷にノミをあてゝさ、太陽の七色が或一部分に映つたら、やあこの氷は……頭を橫に振り乍ら大きな聲て油がは入つちよる。

○たいそう

常陸　小　澤　と　よ

姉「君ちやん早くお起きお日樣が大そーおあがりになりましたよ」
と君ちやんいそぎ起き東の空をながめ、
君「姉さんたつた一つしかあがらないわ」と云ひました。

○初對面の人

備後　百　合　花

舊友が十人斗り集りました時てす、大變に沈鬱性だつた和樣が二年の間に全然一變してそれは〳〵快活になつて被在いましたので一同が御變り遊ばしましたねと申しますと和樣とは今日が初對面の時雄樣が「實際御變り遊ばしました二年前の僕は些ともありませんいや快活て御結構てす」

○お日は丸い

高知市　花　の　淚

お母さんが大分お日が永く成つたと申されますと太郞坊が家からはしり出て不思議そうに空を見ていましたが「お母さんお日は長くないやはり丸いわ――」

○娘のお婆アさん

信濃　中一武　ひ　こ　子

『目鏡をかけたりステッキついたりして、ほんとにハイカラ娘ネ……』
と話して居ましたら傍に居た六つの芳ちやんが、
『あらあすこえハイカラ娘のお婆アさんが來たよ』と指差しますから見ると腰の曲つたお婆アさんが目鏡かけて杖をついて來たのてした。

○我　慢

大分縣　本　田　一　枝　子

學校てとみ子さんと言へばそれは〳〵我慢强い方てありました。ある大變な寒い日「今日の寒い事、あらあなたぶる〳〵震へて居ますわ」と云ふと「イーエ姿少し暖を採るため細かく震動さして居ますの」

○僕の妻てしよ

金　澤　久　世　幸　子

弟と一所に伯母の宅へ行きますと、伯母樣はにこ〳〵顏て、敏ちやんよくお出てお母樣は御機嫌て居らつしやいますか」とお聞きになりますと「僕のかないてしよ、たつしやて居ます」と云つたので伯母樣は家内の事と思つてらつしやるの『妻なんて事どこて習らつて來た」と伯父樣がおつしやると、『僕の父樣わ他家へ行くと、母樣をかないつて、云ふから僕も、云つたのよ」するとみんな腹を抱へて笑ひました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子衛生問答



第百五十一問 (一)脫脂綿膣內に入りたる時は　脫脂綿等の月經の際膣內に入りたる時はこれに起因する害は如何にや、又取り出す事は能はずや。(二)便通悪しく候。(三)子宮內膜炎は處女にもあるものにや。(四)氣兼れ多く勞少き境遇にゐて四五年來安眠出來ず、ゆめを見、囈言、寢言を云ひて困ります、御教示を乞ふ。(十九才未婚女)

答 (1)綿花が膣腔に遺留したりとせば膣分泌物及び子宮の分泌液が之に浸潤附着し黴菌の作用によりて分解作用を起し腐敗するが爲めに生殖器の疾患を發生す可し。又之を摘除する事は容易です、自身で摘除し得ぬならば婦人科醫に御托みあれ何んでもありません。

(2)習慣性便秘の事は前々號の第百四問の答にあります。

(3)處女にもあります、然し比較的少いです。

(4)務めて精神の過勞を避け、滋養に富める食料を執り、適宜の運動を爲し、就眠時期を一定し

產科婦人科專門
醫學士　北畠孝夫述

○規定　女子の身體に就て衛生生理疾病等各種の質問に應ず業務差支なし、每月一日〆切翌月發表す

平安なる家庭を造る可し、先づ之丈け實行し得ば能き答です。

第百五十二問 初月經の時の心得　(一)婦人科的の診察もうけしことなき眞の處女にして初めて男子に接する時出血するとき〻候が、身體にさはりはなきや。(二)初月經の時は如何にせばよろしいでせう。(心配女)

答 (1)此種の問題も文壇の近刊に詳細に述べおきました、處女膜破裂に由りて來る出血は、左程多くはありません、格段に害の起る可き筈はないですが、攝生の如何によりては、或は病毒傳染の因となる事もあります。

(2)初月經時に於ては務めて局部を清淨に保ち消毒したる脫脂綿にて陰裂を輕く押へ丁字帶を施しおき、浸潤し來らば時々取り換へ新しき物を御用ひなさい。

第百五十三問 顏面の分泌物　顏面一帶に脂肪多く出て、黑き斑點をのこします、如何にせばよろしきや。(紳田生)

答 皮脂腺の分泌閉止のためなるべし、最良の石鹼にて顏を清潔に御洗ひなさい、塵埃の附着せぬ樣に注意せられよ。

第百五十四問 月經に伴ふ苦痛　私年は廿才、十九の春より月經を見、只今まで七回、初めは極く少量でありましたが、近頃二回許は非常に多量にて一週間もつゞきます。平生は下腹部に疼痛を感じ、二六時中、顏が眞赤で、そして左の鼻にドロ〱した鼻汁が出ます、時々咽喉の方がつまつて呼吸が苦しくなります。記憶力は減じ、惡夢に襲はれたりして誠に困ります。どこか身體に異狀があるのでせうか。(ゆき女)

答 二十歲の健康なる婦人なれば月經期の一週間に渉るは敢て異としません、然し非常に多量なりと申されるし又平常下腹痛を伴なふ事と白帶下多き等を考へ合せば婦人科的疾患に犯され給ふもの〻如し自家療法では治りません。鼻咽喉部にカタル性疾患ある樣に考へられます。之も可然專門家に治療を御受けなされ、其の他神經衰弱症の徵候も見へます、何れにしても醫士に治療を受けざれば漸次に不治症に陷る可き恐れあります。

第百五十五問 排尿の折に　私事本年三月結婚後は排尿の折及び後ち、尿道口に痛を

覺え候、何故にて候や、妊娠には差支なくや。(二十才女)

答 排尿時及び排尿後の尿道口に於ける疼痛は局部の壅爛の爲めか、或は前尿道部の炎症の爲めか、或はカルンケルと申す一種の茸腫の爲めか、診察の上でなくば確言し兼れます、妊娠には差支へありません。

第百五十六問 不姙症ではありませんか

日常白帯血多量に下り、近頃は經行中にも白帯血樣のもの下り、子宮に苦痛あり、捨て置きても不姙症とはなりませんか。醫士の治療をうくることははづかしくつて出來ません。(里子)

答 確に婦人科的疾患の存在を認めます、隨分不姙症の原因となるでしよふ、一生の大事でありながら醫士の治療を受くる事を御厭ひなさるとは、余り狹見ではありませんか。終生の苦患と一時の恥(?)と何れが重きか御考へなされ、切に專門醫家の治療を御忠告致し升。

第百五十七問 蚊の痕 私は蚊に食はれた痕が皆腫物になります。(夏水女史)

答 前號の百三十七問を見られよ。

第百五十八問 (a)人工的に 私は最早女子の成長期は經過てゐるものですが、尚益々身丈が延びつゝあります、人工的にとめる方法はありませんか。(b)四五年前から鼻病で苦んでゐます、今頃から醫師の診察をうけても全快むづかしいでせうか。(背高女)

答 (a)身長の増加は個人の先天性に屬す之に對し之を停止するの方法を醫師に於て無し。(b)專門醫に治療を御受けなさい。

第百五十九問 常に白帯血が多い 私は常に白帯血が多くて困ります、身体も健全な方ではありません。月經時の手當法を御敎へ下さい。(心配女)

答 白帯血の多量なるは生殖器の疾患に原因す、就中子宮内膜炎、子宮頸官加多留、膣炎その他内生殖器の種々の疾病及びその附屬器の病患に因るべし白帯血の分泌を來すべきであります蓋し是等の疾患には白帯血の他に尙ほ種々の自覺徵候及び他覺徵候が伴なはるゝものであります。月經時の攝生法に就ては文壇の近刊に詳く述べおきました御參照なされ。

第百六十問 足が冷える 私の父は今年五十二ですが二三年前より足が冷え土用中でもアンカを抱へてゐます、身體は丈夫ですが何故でせう、療法をもあはせてお敎へ下さい。(羽前愛讀者)

答 御示しの事柄丈ではその原因を知る事難し診察の上(凡べての系統に對し)てなくば診斷も確實ならず從て療法も不明であります。

第百六十一問 麥角 月經不順の時麥角を服すれば來るといふが事實なりや、又麥角は子宮出血をとめるとも聞くいづれが事實なりや、姙娠したる時服しても差支なきか。(名古屋くれなゐ)

答 角麥劑を以て月經不調を整理する事は難 何となれば月經不整には種々の原因がありますし又麥角を以て月經を促すと云ふ事は難いです麥角劑は子宮出血を止める力は或程度迄はありますが却て之を催すと云ふ作用はありません、姙娠中麥角を用ゆる事は絕對的禁忌であります。

第百六十二問 乳房膨脹 私は二十才の處女ですが昨年あたりより乳房が大へん大きくなりこれゆゑ着物を着ると胸が膨らみ見苦しくて困ります、格好よくする法はありませんか。(牛込、心配娘)

答 六ヶしき御註文ですが人工的に乳房を縮少する事は不可能であります、乳房の自然大は美容の條件と考へます何ゝ苦みて小さくなさらふとするのでありますか反省を乞ふ。

第百六十三問 月經と姙娠 月經止れば姙娠と聞きましたが月經とまりたる時月經下しを呑めて墮胎になりますか。(茨城、BK生)

答 月經閉止は必ずしも姙娠を意味するも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のでありません蓋し姙娠時に於ては月經無きを通常とす然し月經閉止は他に種々の原因に據りて來るものである。月經下しと云ふ事は何を意味するものか不明なれども苟くも假に姙娠したりとするも以此如何はしき者を用ひ姙娠を中絕するは頗る悖德の行爲にして又刑法上の罪人たるを免かれません加之ならず斯る不明危險なる者を用いその惡目的を遂せんとすれば自己の健康を阻害し或は死を招くやも計られず夢々かゝる輕擧に出でざる樣に御忠言を呈す。

第百六十四問 毛深し　毛深くして見苦し皮膚に害なき脫毛劑をお敎へ下さい。(本所みどり)

答 多毛の人に投劑して之を脫毛する事は不可能です。

第百六十五問 如何なる譯　私は本年二十五才、(未婚)淫事を想像すると必ずクシャミが出ます如何なるわけでせう。人樣も皆さうですか。(望面)

答 珍らしき御尋ねですが或は之を交感的作用に依り說明するより他、その理を認め兼ねます通常人體に斯かる現象は余り多くありません。

第百六十六問 驚き易い　妾は鐵砲の音や花火類の音に非常に驚き易く花火の音など聞けば直ぐに耳を押へ胸に應へて何となく心地惡しくなり言ふに言はれぬ程恐しく驚きを感じます平常腦が惡しく毎日鬱々して居ります或は精神病か神經衰弱の樣なものでせうか此れを治すにはどういふ治療を致せば宜しいでせうか催眠術のやうなもので治療すれば如何でせうか御伺ひいたします。(困却女)

答 御說の通り神經衰弱若くはヒステリー症の如き疾患に犯され給へる結果なるべきか詳細に診察致さねば確たる事は申し上げられませぬが兎に角神經過敏の徵候の具はれる事を認めます一應醫師の診察を乞ひ治療を御受けなされ。

第百六十七問 咽喉が痛い　私は二三年前少し咽喉が惡くて外科專門醫に治療を受けて治りましたが外部のはれが取ませんので醫師にさう申しましたら其れはお肥えなさつたのだらうとの事でしたが其後毎年秋より冬に掛て朝起きた時と夜十時十一時頃に成ると痛くなり(飲食呼吸に痛みなく)たゞ口をつむてのみ込むやうにすると痛く喉の內がいが〳〵して喉がつまるやうな心地を致しますそして外部がはれて二重頤のやうに成て大變見にくゝあります何かよい療法はありませんでせうか。(美作、心配女)

答 多分咽喉、咽頭の邊に炎性疾患(慢性)があるらしく考へられます勿論診察の上でなくば確定は出來ませんが、就中夏期に絕へ冬期に再發するとの仰せに依りて考ふれば恐らく慢性陳舊的のものと考へます夏時にはその症狀が減縮し冬期に熾盛なるものらしく專門醫士の治療を御受けなさい。

第百六十八問 寢いのは　どうしたものか私はねむくなつてたまりませんて今日はこれだけ勉强し樣と思つてもすぐねむくなりますのでとんと出來ないで堪えず悲しく〳〵思つて居りますて睡眠時間が足りないのかとよく〳〵睡眠して見ますがなか〳〵治りません運動の過不足かと或ははげしくしたり少なくしたりしますがこれも一向に効目がありません深呼吸すればいゝか冷水摩擦をすればいゝかといろ〳〵いたしますがどうも効目がない樣です私はこのねむくなるのをなほして下さる人があればいくらでも金は出すと思ひますがどうすればよいでしやうか腦力をして健全ならしめて記憶推理力も充分にしますには是非ねむけをなほさなければなりませんが腦力をたしかにする爲ねむけをなほすのはどうすればよろしうございますかくはしく知らせて下さい。(ねむい女)

答 神經衰弱に陷れる爲めならむか神經衰

弱に對する療法は醫治の他に自己に於ても神經系統を强健にする方法を盡されねばなりません、それには種々の方法ありますが之を列擧すれば次の如し生活狀態を規則正くする事、冷水浴及び冷水摩擦、睡眠時間を一定する事（勉めて節定するの心要あり）適宜の運動適宜の執務及び勉强、情慾を制する事、飽食せざる事、消化し易く且つ營養分豐富の食物及び飲料を採る事身神の過勞を避ける事等でありますそれ以上は醫師に就て指揮を受けなされ。

第百六十九問 ●●●毛濃し　私は十九歲の少女ですが足、手、顏に至るまで甚毛濃く御座いますがこれをとる何か方法はありませんか。（大和、林芳子）

答　第百六十四問と同じ。

第百七十問 (a)●●●●色が黑い　私、色が大そう黑いので色を白くする方法をお敎へ下さい。(b)●●●●しわがよる　私は又顏にしわがよつて困りますが治療法はありますか。（翠子）

答　(a)醫治を以てあなたの目的を達せしむる事は困難であります。(b)美顏術技師に御相談なされ然し年老ひ全般の榮養衰ふるに至れば皮膚に皺を生ずるは自然であります。然し年壯にして之を來すは榮養を阻害すべき何等の原因に基するものなるべし能く〳〵その原因を究むる必要あります原因明らかになれば從つて治療の方針も立ちませふ。

第百七十一問 ●●●●●出血につきて　私は十九歲の少女ですが初めて男子に接した際出血多量ありました其次も又三四回少量ありました差つかへありませんか　も早や處女てはないのですか？何も存じませんからくわしく御敎へ下さいまし又受胎の現象も（心配女）

答　之に似た御質問が先達て參りましたから近刊の文壇に答へおきました御覽下さい、又受胎の現象を說明せよとの御要求ですが受胎の現象に就て之を專門的に說明すれば仲々六ケしきものにして到底短欄上では申し盡せませぬ兎に角受胎即ち妊娠の爲めに人體に來すべき現象に就ては他日妊娠の徵候若くは妊娠の人體に及ぼすべき作用と申す題を揭げ御話し致しませふ。

第百七十二問 ●●●●●腦神經衰弱　妾は腦神經衰弱て困つて居ます只今田舍に靜養して居りますが別に神經衰弱の療法も知りませんから只讀書研究に力めて居ましたが此頃は記憶力が少しもなくてそして頭痛、目まいがして困ります。（一貧女）

答　第百六十八問に就て見られよ。

第百七十三問 ●●●●●●●●冬季足のきめ及夏手足の油　我の友は夏は非常に手足に油が出て裁縫に困り冬は全く出ないて足のきめが荒くなつて見にくうございます治する法はありませんか。（友思女）

答　(b)品質良好なる石鹼を用ひ淸洗しその後ちベルツ水を塗布致しおかれよ。

第百七十四問 ●●●●そばかす　私は小さい時から顏に「そばかす」とか云ふものがありますが何すれば治りますか又にきびなども出來て困りますから何卒御敎へをねがひます。（常陸、政子）

答　根治療法は困難であります然し比較的に見能くする云は全然不可能ではありまがん皮膚病科專門醫に治療を受けられよ。

第百七十五問 ●●●日本髮　私日本髮に結ぶ根の所が痛かゆくて困ります。母はハゲる前兆だろうと心配して居りまが如何したら宜いてしやうか？心配のまゝ御願申上ます。（くれなゐ）

答　元來本邦の結髮法は多くは毛髮を緊縛するに過ぐ故に毛髮を根より牽引するの傾向を生ずるを免かれず愈々牽引する事の大なれば愈々疼痛を起す可きは自然の結果である　あなたも恐らくその類なる可し若し之に代ゆるに歐米風の束髮を以てすれば　それを免るに庶幾からん。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

讀友俱樂部



○規定　本欄は誌友諸君の機關として隨意に使用あれ各自に誠意を守られたし不眞實の投稿は沒書とす住所本名は附記することと字體の明瞭を要す

交際を望む

○高女卒業の方　私は實につまらない者とつくづく感じます　誌友交際さへも思ふやうに出來ないてよき　誌友を得ませんのですけれど私は日に修養上について苦心して居るものですから決して不眞面目の事は致さない考へです　私高等女學校卒業の方と海外在留の　女の方は廣く御交際下さいませんか（始めは稍書にて）次に私は東宮殿下山陰道行啓紀念繪葉書鳥取市發行　スタンプ附を澤山持つて居ますから　御本か珍らしき編物草花種子とかと御交換下さい　（鳥取市立川町一丁目樋口露子）

○東京のお方に　本誌愛讀者の方で中等又は以上の敎育を　受けつゝおありなさるお方でごくやさしい方に永久妹として　御交り下さるお方は御座いませんでしようか、　私は本年十八才で女學校卒へましたばかりの　不束者で御座います今は故鄕に歸つて　生花茶の湯琴等の稽古してゐますが私には兄樣も　姉樣も弟もなく只々姉が一人あるばかりで誠にさみしく　御座いますの何卒永久に御交際下さいましな（齊島縣賀茂郡阿賀町、風呂中信子）

○家庭の人に　眞面目に家庭に從事されて、一時的では無くいつ迄もくも、　御交際の出來うる諸姉樣に限り御親交を願ひます、　但し初信は、　お手紙の事（北海道後志國歌棄郡有戸村、橋本千代子）

○苦學の方に　皆樣のお中に苦學して居る方はありませんか　私は目下高等女學校の四年に通學してゐますが　家の都合の爲親類の者が退校を進めますけど　父の情でやつと通學してゐますから氣毒で勉强する氣もせず　實に苦しう御座いますどうぞ皆樣可憐の一少女をあはれんで　頂戴私は苦學しやうと決心しましたそれで　苦學生の方はよけいおなつかしう　御座います皆樣どうぞ末長く御交際下さい　（熊本市井川淵五〇猪本宅方武田ふみ子）

○報告　不束なる妾へ永久御交り下さいますお方が二十三名程御座いました　又新聞御入用の方二十一名御座いましたが只今手許に　（朝日）（都）（萬朝）（報知）（國民）だけで中々至急に多數の方へ御送附致す事出來ません　故先着御申越しの方から順次に十日間づゝ　御送り致す樣に致しました又雜誌も多數の御申越で　御座いますお右は（ムラサキ）（ハガキ文學）（婦人世界）（文藝俱樂部）て皆さまに　一々御送附も出來ませんが今回丈は新らたに求めまして　御送り致します御送り致しました内に十三名ばかり　御返事もない方が御座いましたが旬情取りの　上は御返事下さる樣願ひます　此内で御返事の無いのは女子の方が入分て御座います　男子の方は皆堅い方の樣に見受けました　來月の中旬迄に御返事が無いと失禮ながら御住所氏名を　十一月號で發表致し升故其の御つもりにて　（本所區菊川町二ノ五七、戸邊豐子）

○病後　誌友の姉樣逹妾は今春より病氣に罹り少しも床をとりませなんだので　皆樣に失禮致しましたのですが　此の頃は少しく快方になりましたのよ何卒皆樣病床に　煩悶しつゝある妾を哀み下される御方は　何卒御交際の程幾重にもれが ひます（和歌山縣海草郡紀伊村、　鳥居邦子）

○お斷り　九月號でヴアイオリンを讓ると申しましたら、　諸方から御申し込みになりましたが先着の御方（東京の）にお讓りする事と致しましたから左樣御承知を、　御申し込みの方には夫々返事を出して置きましたが念の爲め（愛知、鈴江子）

○現代的の方に　十九才か二十才の小說のお好きな現代的のお方にお交りをお願申升　（群馬縣佐波郡芝根村大字川井大塚千代）

○お二人に　廣島の田坂芳溪子樣　お懷かしうございます、　何の御相談も致さず、　失禮はなにとぞ御ゆるし下さいまし、　夕暮はいつも夕燒した西の御空を仰いで貴姉のことを思つては泣いてゐます、　九月號のお作を拜見してもう耐らな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くなりました、やつぱり前の所にいらつしやいますか？　せめて毎月美しいお作拜見さして下さいまし、京都の亞子樣、御きげんよく御暮してすか、毎月のお作をくりかへし〳〵拜見してはお懐しく思つてゐます、失禮はなにとぞ御ゆるし下さいましれ、おかまひ御座いませれば誌上にて御消息お洩し下さいまし、終りに留んでお二人のお健康を祈ります（土佐蘭野の里にて芳子）

○英文の交際　私は永らく女子文壇を愛讀いたして居る者で御座いますが、まだほんに英語は未熟で御座いますが文學の趣味を以て英文で長く御交際を願ひます（東京市日本橋區久松町三七、中村房）

○俳句と和歌　愛する諸姉樣俳句和歌を染紙に書いて本月末迄に御送して下さい來月發行の雜誌佐保姫に掲載して御送り致します（奈良市今在家町土門久子）

○皆さんの內で　外國に在住の方東京に住居の方遊坂にある方英語に趣味を持つ方と末長く交際を望みます（靜岡縣濱名郡中の町村松小池小池みち子）

○孤獨の私から　文才多き皆樣には何の御障りもなう渡らせられますか私は八月一日に養父を失なひました五才の冬父に死別れ今又たのむ養父に別れました私は貝誌友の姉樣よりたのむ方なき身となりました文學に深く志給ふ淸き方々に御交はりを願ひます同市の方なれば尙々結構で御座います（大阪市南區瓦屋町五番丁百十一番屋敷改野寧垣）

○心より　妾事片田舍に住する無學のものに候が常に文壇を友と致しおり候ついては皆樣のうちにて虛榮心をはなれて心よりの交際を欲せらるゝ方に末永く交り度何卒宜しく御導き下され度願上參らせ候、尙御寫眞御めぐみ下され候はゞ有難く存上げ候（羽前西置賜郡長井村成田佐々木つね）

○御禮　親愛なる皆樣からお見舞を受けてありがたう存じます妾の家は何の障りもございませんでしたから失禮ながら紙上て御禮申上ます（近江金亀城の麓、佐和田芳子）

○お別れ　皆さん永々お世話になりましたがある止むを得ぬ事情てお別れせねばならぬ事になりました、何だか悲しいやうに思ひますけれど仕方がございません、一寸御報知申上ます（齊森縣弘前市、長尾にしき）

○奥山　當國奥山は有名な名所てす「奥山半僧坊案內記」は立派な案內書て十十餘の寫眞版、和歌俳句の附錄がある、此の美冊お望の方は相當の書籍と交換してもよろしく特にお手引してもよろし、お手引をお望みになる方は照會の上て、先着三十名に造花かりボンか添へて差上ませう（遠江奥山氣附秋篠二十二番邸內、富田もと子）

○左の方々から皆さんに交際を求められました、玉章、繪はがき、書物の交換などを主とした淸く美はしき交際を結びたいとの事てす、本文は大抵大同小異てすから徒に紙幅を費すよりは住所姓名だけを擧げることにしました、御交際を願ひます、猶て皆樣にも能く意志の疏通するやうにして、淡泊て誠實なる交誼の結ばれたいものてす（記者）

○神戶市兵庫仲道通り四丁目七十五ノ十三、藤木露子
○奈良縣高市郡高取町上子島、湯川正子
○東京牛込區若松町五三、神山淸風
○京都市五條通り油小路東へ入大島裁縫所にて、中川浪子
○大阪市東區紀伊國町九三〇、一柳文子
○栃木縣下都賀郡寺尾村尻內、石川さだ子
○和歌山市小松原通九丁目、鈴木文子
○愛知縣知多郡上野村名和、磯部ため子
○千葉縣香取郡日吉村第九區、土屋俊枝
○富山縣下新川郡魚津町字馬場町、谷いくゑ
○大阪市東區上本町一丁目二八、吉本しづ
○神戶市榮町二丁目三二、高原內、しぐれ女
○東京日本橋區箱崎町四ノ一、笹本方、喜榮枝子
○大阪市東區上本町九丁目一五三、阪田淸方、郁子
○神戶市元町通七丁目二十七番士神村俊輔方、和平文子
○長野縣南安曇郡南穗高村細萱、丸山榮枝子
○富山縣高岡市鍛手中町佐野長向ひ、內山きた子
○茨城縣新治郡園部村、倉田政子
○神戶市二ノ宮町二丁目七十九番ノ十二、濱中エツ方、とし子
○茨城縣筑波郡大穗村玉取西方寺內、服部うみ子
○北見網走町南通り一丁目、宮本蝸子
○埼玉縣大里郡市田村津田新田門叶安五郞

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

方、美津子
○大阪市南區天王寺椎寺町一三八、山本清輔方、朝子
○土佐高知市南與力町四番地、秋澤元子
○岡山縣邑久郡朝日村大字西片岡、桐本末吉方悦子
○筑後三潴郡江上村原中牟田、柴田百枝
○東京深川區富川町三百五十三號、大村澄江子
○千葉縣長生郡豊田村北塚、吉井光子
○大阪市北區末廣町五九、吉田勝子

記者と讀者

○記者樣御願ひてす、どうか誌友諸孃の作つた和歌の本誌に掲げられた中の好いのだけ集めて、女子文壇百人一首を作つて新年號の附錄か、それとも別にしても好いのですから、是非作つて下さいな、皆さん如何てす？（四谷、柳の人）（記者曰、愛讀者中に賛成の方が多かつたら何等かの方法て遣つて見てもよろしい）○今度河井道子先生には學事御研究の爲英國へ御洋行遊ばされたとの事實によろこばしき御事て御座います御滯在中御身御健康に御歸國後も御熱心に御敎へ下されん事を祈り上げます（石川夏水女）○記者樣私は貴誌愛讀者の一員にてしかも英語欄を第一番に繙く者て御座います　その寄稿家河井道子先生は御承知の通り去二十八日、日本を離れ御渡歐の途につかれましたのを御見送りした一人て御座います、そこて此後暫らくの間誌上に於て先生の英語に接する事が出來ないのて御座いませうかもしそうならば誠に寂しい感が致しまする、（某女）（記者曰、河井道子先生は今や航路恙なく英國へお着きの事と存じます、今年中の英語欄は同先生も書いて置かれました、以上お二人さんのお言葉は同先生も歡んて承けられることゝ存じます、記者代つて一言御挨拶まで）○記者樣今度の増刊「短篇小說」も待ち兼ねました、皆樣のお作を拜見して實際感心して了ひました、此次の「家庭日記」は何んなに面白いてせう、今からたのしんて待つてゐます、來年は是非婦人の情緖が能く表はれると申す詩歌を主とした増刊を出して下さいませ（小百合）（記者曰、詩歌を主とした増刊も出したいものだと考へてゐます）○滋賀縣西村ゑつ子さんに、バンクーバから歸朝して御病氣の由お大切になさい、私共も拜見いたしませう、増刊はもう賣切になりました（記者）○府下青梅町の吉田欣子さんに。あなたを男子だと言觸らす人があると口惜しい告白を承りましたが、先は紀州、此方は武藏、ずゐぶん離れて居ますから直接面晤して談判してあかりを立てる譯にもゆきますまいけれど、まアあなたが女子てある以上、格別氣を揉むこともなからうと思ひます（記者）○赤坂、靜江さんに。夜雨君は矢張常陸下妻大寶村てす（記者）○澄江、高田もと子さんに、通信として送つて下さいました奧山案内記は餘り長きに過ぎて載せることが出來ません、ずツと短くして御地の現況を主として書いたものなら通信に歡迎します、案内記ては無用てす、折角てしたが一言申して置きます（記者）○新潟縣、寮志波津子。金澤市、むらさき。埼玉縣、一愛讀者。越後、佐藤浪子。能登、近江かのゑ。横須賀、君枝。山城、田舍娘。福岡縣、孤蓮、白露。千葉縣、今村なゑし。神奈川縣、淸水夏子。筑後、勝子。町田かめの。梅子。谷子。京都、君野。入亀子。白ゆり。山形縣、大瀧すみれ子。幸子。美濃、藤酒家文子。飛驒、眞砂子。長田學子。のぼろ子。北見、宮本錦子。筑前、河原かめの。藤原靜子。群馬縣、包子。橫濱、桑原ぜん子。伊豫、文子。福島縣、橋本ふさ子。伊賀、北川志佳子。美作、曉女。以上の諸孃から殘暑のお見舞やら、投稿初めの御挨拶やら、規則の問合せやら、注意やら、いろ〳〵申越になりました。一々御答はいたしませんけれど、御問合せのことはそれてよろしく、又お見舞は御禮申上ます、なほ自今頓に秋冷の氣を覺えますから皆樣の御自愛を祈ります（記者）

繪葉書を好む

○名高い漢詩和歌俳句を美しく書いて名所繪葉書の交換を御願ひ申ます、江の島及高尾山（開府紀念スタンプ附）繪葉書が備へてあります（神奈川縣高座郡相原村橋本、柚木とよ子）○誌友の諸孃樣繪葉書靑毛筆しなり等御交換して下さい御禮は毛無藏と岡山公園のエハガキを以つて御禮を致します、（岡山縣邑久郡朝日村大字西片岡中筋桐木昌子）○寫眞美人繪はがきの交換を願ひます（千葉縣東葛飾郡舟橋町九日市、川島はつ子）○非常の繪葉書狂てすどうか上等の繪葉書を送て被下る方はありませんか（石川縣鳳至郡七浦村字皆月茶木舜枝）○私は繪葉書が大好て御座います御差支の無い御方樣は何卒御交換を願ひます（高知市升形三八内玉泉子）○繪端

等交換御願ひよ私多く持つて居りますよ（越後中頸城郡富田町幸橋、根岸光子）〇本誌愛讀者諸嬢に各地諸學校繪葉書交換を望む、繪葉書は學校に限ること、其れ以外の葉書、無に、文通、物品の交換は堅く御ことわりのこと、學校なればなに學校にてもよし、廣く盛んに望む、但し繪、其物には文字を記さぬ事、一時的にして永久ならざることと私よりは秋田高女、お望みに寄つては秋田中學、工業、當地小學、中學、各諸學校の繪葉書あり（羽後國本荘町裏尾崎町森岳久）

品物交換

〇天下幾十萬の文壇愛讀の諸姉妹様今年の夏は誠に暑うございましたが おかはりもなかつたですかね、文壇は次第に盛大になつたね、誌友倶樂部がたくさんあつて結構ですね、どなたでも菅つき其他編物送つて下されば金澤名所繪ハガキ一組宛進呈いたしますわ（金澤市香林坊裏川屋方後藤芳子）〇京都大阪の諸姉様の內で昨今高女をお終ひなすつた方如何か幾久しく御交際下さいそして編物りボンの交換もね（鳥取市二階町四丁目一入松田千代子）〇手風琴か。ヴアイオリン、古くともかまいません御不用のがありましたら御送り下さいませんか私御禮として、陽琴。上等表付下駄新がた一足。空氣ゾーリ一足。セッタ一足。御土産に頂戴したので未だ新らしいのがあります故、御氣に召したのを、御送り致しますから、陽琴は中古です。何卒御願ひ申します（群馬縣山田郡大間々町二丁目、安藤さとろ子）〇皆様の內耕製寫眞掛造花りボンヒジツき等おもちの方は御送り下さいな御禮は女子文壇、文藝倶樂部、新小說、少女界、若き葉、小猫諸雜誌寫眞（種々）にて致します又若き姿讀編御かし下されし方には相當の御禮は必ず致します繪物エハガキも御送りを私の見憎き寫眞一枚づつ差上ます（東京府南多摩郡原町田松谷ます子）〇皆様の內に、ヴアイオリンの御不用な方がありませんかもしありましたならば御知らせ下さい（岐阜縣惠那郡陶村水上永井芳枝）〇誌友の皆様、私に編物造花其他御手藝工品お送り下さい御送り下さる御方へは婦人世界、女學世界、婦人くらぶ其他二三の雜誌でキット御禮致し升（京都市衣棚通り二條下ル、新川春子）〇諸縣下の皆様私の手許に上等ヴアイオリン、と活動寫眞器、洋琴、マンドリンと御座いますから、皆様の內に交換して下さる品がありますれば御願申ます又只御讓りしてもよいのよ御入用の方は至急に御手紙下さい姿の寫眞は眞先に送ります、ては待つて居ります左樣なら（栃木縣下都賀郡寺尾村初音山稲富ちか子）

寫眞

〇なつかしき誌友の皆様寫眞繪葉書或は新らしき唱歌の譜を送られた御人には姿のみにくき寫眞をきつと上げます（北海道上川郡神樂東御料地第五號にて池田元子）〇永久の紀念にして置きたいのは誌友の諸嬢様　寫眞なのどうぞ送て頂戴な姿の寫眞と小說紀念繪葉書りボンしほり家庭の栞なぞて返禮しますわ（大阪府東成郡中本村本庄七百九十五番地稲井太郎方東艶子）〇御交際下さる人には、エハガキを上げます、御寫眞送り下されたる人には私の寫眞に日光名所エハガキを添へて至急送ります 男子は斷ります よ（神田區小川町一番地林文三郎樣方星野）

各地通信

〇紐育より　遙かに太西洋沿岸の都、紐育より一筆啓上仕り候、記者様初め誌友の皆様、益々御壯健の御事と奉賀候紐育の昨今の暑氣は、實に耐へ難く候、建詰めたる大都會の夏の生活は、皆様の御想像以外に御座候、されば富有の方には、我先きにと避暑に出かけ、殘るは私等の如きお金に縁遠き者が、己が營業上餘儀なくされし人々のみにて候、故に私等の納涼場は、イーストリバーに架る大釣橋、ブルークリン橋の中央にて候、夕の七時頃に相成候らへば、橋上のベンチに此處彼處より集り、終日の勞を慰する次第にて候、月明かなる夜、橋上に立ち飽まで涼風に吹かれ水を隔てて望む河上一帶の夜景は、眞に一幅の活畫に御座候、是につき思ひ出すは、兩國橋上納涼、故鄉忘じ難しとか申す通り、米の之に比して壯大ならず共、矢張り忘れ難きは故鄉にて候、かれて工事中なりし、ハドソン河底の鐵道は開通致し候、紐育對岸ジャシー市及びホボケンの連絡は渡船に代り、河底の鐵道にて、かかる大河を横切る事と相成申候、文明の發達驚くべき事に候、先今回は之にて、筆止め申候（紐育竹田はる子）

問合せ

〇彦根の辻芳子様　此間の大地震で如何しましたか、見舞のはがきが戻つて來ました心配致

して居ります御消息を至急（相模、柚木とよ子）

○高知の藤原靜子樣　其の後は如何遊しましたか御住處々記のおたよりに接し私迷つて居ますよどうぞ早く知らして頂戴、ちかつた言葉忘れては居ません、ありふれた噓つきじやあ御ざいませんわ（廣島縣賀茂郡仁方町手島政子）

○北垣男爵の子息　北垣男爵御子息旭様歐米漫遊七月には歸朝の樣に承りましたが現御住所御存知の方は是非御知らせを願ふ（横濱、袖浦海女）

持つてゐる書物
讀みたい書物

○おねがひ　御姉樣方に御願ひがございますのあの私れ色々な本が讀みたいのですけれど古本屋の前に立つのが恥しくて仕方がありません如何ぞ小說歌集　集何にても御讀み古しの御不用のものございましたら惠み下さいまし御願致すのに我まゝですけど私誌上に本名を出すのを憚りますから思召の方は本欄まで御地名御姓名な願ます御禮とてもないのでつまらぬ絵はがきにて御禮申上ます　私の本名は思召の方に直接に申上ますから右は願迄（田中英子）

○習字帖　諸姉樣方の中で橘千蔭先生書の烏丸帖か新百人一首おもちの方はゆずつて下さることは出來んでせうか御願中ますもしゆずつて下さるとならば御手數乍御一報を願ます（福井縣敦賀町金ケ崎三辻きよ子）

○私の寫眞のある誌　皆樣、今年の六月の少女世界と、私の寫眞の出てゐる女子文壇御送り下さい又秋草の種も必ず御禮は致します、私此度越しましたから御しらせ申上げます。（芝區芝公園十四號の二山下花子）

○詩、歌、俳書　一册につき郵便切手十五錢御送り下さらば、歌集海の聲、あけぼの、靜なる森、白光、玉琴、伶人、わがおもひ、詩集では御風詩集の中何なりとも、亦郵稅四錢送り下さらば歌集では、小詩國、夕暮花、名家模範新派歌集、和歌と俳句、詩集では、すみれ集さらび又は、新派和歌評釋、三十六歌仙評釋、新體詩學、時代小品文、百字文集、入園旅行、高等美文斷片等を送り申します、ついては前に一寸端書でお知らせ願ひます、先着の方に送り申しませう（羽前國西村山郡左澤町伊達よ子つ）

○横笛の傳　天下の諸姉よ、かの壽永の昔嵯峨野の奧秋草に散る朝露に腐たけき姿な映せしと云ふ横笛の傳記物或は小說の不用があれば送つて下さいりボンでもシャリても私の寫眞でも必ず神に誓つて差上ます（靜岡縣沼津町川瀬、山縣梅園）

○國文の書　皆樣の中竹取物語つれ〴〵草いざよい日記伊勢物語源氏物語保元物語其他國文學上の本が御手許にありましたら御惠み下さい其方々には私の寫眞あげます、（秋田縣秋田市楢山愛宕下石川とよ子）

○聖書拜借　みなさけ厚い諸姉樣のお中に聖書と申す尊いごほんをお持ち遊ばす方にお願ひ致します、しばらくの間お借し下さいませんか、決して偽は申しません、若し御厚意のお有り遊ばす方は御面倒樣でも一寸端書でなりお報らせ下さいませ、妾はヤソ教の方にはまつ暗なんでムいます、せめて聖書でも拜したいと存じまして。（越後長岡市千手町佐藤浜子）

○マーチ　おなつかしき皆樣に折入つて御願ひ申上ます私先日來から「軍艦告別マーチ」を知りたいと思つて居ますですが少も知る事が出來ませんので殘念に思つて居ります、み心やさしき皆樣方若し御存じて被入いましたらお手かずですがお敎へて下さいませんか、何か良い事を考へておいて御禮申ます（近江甲賀郡水口町細野その）

○私の手許に左の書物が御座いますから、皆樣借し讀み致しましよう婦人鏡、食道樂春の卷夏の卷冬の卷合せて三册、新寬風戀風、奇女、無錢旅行、歸雁の蘆、美文自在、戀無綠、帝國婦女用文、帝國實業家立志編、祝辭弔祭言萬題、其の外、婦人世界、文章世界、女學世界、女鑑等御座いますから、皆樣のお手許に、眷屬、青春、戀か夢か寬風戀風、己が罪、思出の記、紅葉全集、多情多恨、黄菊白菊、筆子、夏子、戀と愛、噓無情、何れなりとも御座いましたら私に借して頂戴、私も急ぐ送り升、又都合て交換致しても宜しう御座います、（栃木縣下都賀郡寺尾村尻内福富清平方、初音きん子）○妾は婦人世界一の一より實用女學講義錄全部、數學世界二十三册、數學速成講義錄、十八册、文學世界三十一册、女學世界一昨年より今月迄取揃二百册ばかりの雜誌がありますから郵稅九錢お送りの方には必ず送ります又何卒末永く御交際下さい（茨城縣江戸崎局區內、淺野豐）○皆樣私の處に「後

の不如歸」「新不如歸」「子供心」「新家庭」「一葉全集」「明治の令孃」其他「文藝倶樂部」(六)「新小說」一)「婦人世界」(三)「少女世界」「少女界」澤山有りますから御手許の「翌子」「呪はれたる女」「徒然草」「美文作文」「明治才媛文集」女學世界增刊「心の日記」等ゝ御交換下さいませ(和歌山市北打町九、津木內、千代子)○本誌愛讀の諸姉上さんの中に彼の不如歸又は乳姉妹魔風戀風等の小說があつたなら妾の愁芙蓉華族の娘、中學文壇、婦人世界等がありますから御好み本と交換して下さい、倚諸姉樣レターの交際を御願ひ申します(栃木縣安蘇郡田沼町大字吉水九十四番地、松島支那子)○皆々樣の內に、「絵畫獨習書」「學生立身要鑑」どちらでも御持合せの御方は私の「英語談話」(イ、トレーキ)「英語六ヶ月間卒業書と交換して下さいませんか、又、「新不如歸」前後、「新金色夜叉」、等不用のがおりますから相當の書籍と御交換下さいませ(福岡縣八女郡黑木町森昇方枝子)○妾の許に魔風戀風、不如歸、猛火、肉彈、玉蟲、佐保姬、夏子其の他雜誌數十册御座いますがお望みの本が御座いましたら雜誌、小說と御交換下さい小說なら最初御問合せ下さいまし尚絵葉書(上等)にて御申込み下さいましても宜敷御座います(肥前國杵島郡橘下村、眞崎歆代子)○皆樣の中に藤村集御不用のお方がありましたならば私の女子消息文のしをりと御交換下さいませんか、(小本小說ふところ鏡をそへます)尚昨年九月の本誌と新文林今年四月の本誌を御不用なるお方は昨年一月より本年五月までの本誌と御交換下さいませ、折入つて御願申ます(大阪府和泉山南郡男里村入七金田よし子)○婦人畫報お送り下さいましたやさしきあまたの御方樣の內にてお一人御自分のお所もお名まへもお書き入れない方が御ざいましたが何所のどなた樣で居らつしやいますか何卒御申こし下さいましお禮申上度と存じますお日付けは八月三十一日で七月の卷で御ざいました九月三日に着ました(伊藤あや子)○皆樣の內で菅海、英和熟語中辭林、ハイカラ令孃、紅葉全集、魔風戀風、女學生、不如歸、己が罪お持ちの御方は何卒送つて下さいお禮として私の女子美文笹の花、硯の海、寫生文範、金色夜叉、夏子、有情無情位價のもので送ります(兵庫縣川邊郡長尾村口谷坂土留造方かめ子)○諸孃樣の中に婦人世界、女學世界、少女の友、ハイカラ令孃、家庭の和樂、令孃と勇兵、名士と家庭、俳諧師、淸少納言、其外種々の本御持の御方は妾の、紅葉全集。敎育的心理學。緣不緣。家庭小說。文章新辭典。女日用かゞみ。まだまだ面白き本不用になつて居りますから交換を願ひます(千葉縣山武郡白里村中里內山けん子)○妾の許に。少女界。文藝倶樂部。當世奥樣氣質。裁縫細工物全書、造花新書。等其他種々の雜誌がありますから。新小說。絵葉書。類其他新刊の雜誌類御持合せのお姉樣何うか御交換して下さい(德島市大字船場町、宮崎梅子)○古雜誌の交換を乞ふ(東京南品川番五丁目四六五、伊藤はる子)○皆樣の中に、「少女と談話、明治節用、敎育おとぎ話、黑百合、文壇の花、」此中一册でもかまひませんから御不用でしたら私の「女學世界、女子文壇、少女界、ハガキ文學、ムラサキ、及び、リボン、シホリ、エハガキ、カトド」等と御交換下さいお願ひてすから(山家乙訓郡久世村字上久世、風間榮子)○皆樣のお內に今年一月の婦人くらぶお持のお方が有ましたら私の持合せの女子文壇、冒險世界、女學世界、婦人くらぶ、婦人世界、東西南北、太陽、少年等お好みのを二册と淺間山噴火の繪ハガキを添て差上ますからお交換下さい(信州北佐久郡小諸町首藤いく子)○皆樣の內で理科敎科書全四册中辭林御入用の方が有りましたら何卒下名迄一報下さいな又樂譜御持ちの方は御ゆづり下さいまし(石川縣金澤市木倉町川島方かずの)○妾の手許に孤蝶、怪光、不言不語、少女の戀二人娘等ありますから皆樣の百合子、窓、己が罪、魔風戀風外めづらしい小說と交換して下さいまし又未使用の絵ハガキの御交換も願ひます(羽後新室局區內加藤文子)○九月一日の五卷拾貳號の女子文壇御送附下さいませんか御禮には九月一日の秀才文壇差し上げます、女夫波の上に、はやり歌、魔風戀風の上中下、ハガキ文學、文章世界、女學世界、少女界、自然と人生、其外種々の敎科書御望の方は知らせてください、(岩代國耶麻郡喜多方町本仲町、原澤幸子)○妾は古ひのだが秀才文壇、新文林、新潮など澤山持つてますから寫眞、リボン、シホリなどと交換して下さい(福島縣田村郡三春町北町百十八、橋本ふさ子)○皆樣の中で秀才文壇文章世界ハガキ文學新美文新聲かな持ち合せの方は私の女子文壇婦人世界詩人少年世界少女の友と交換して下さい(岩代若松市七日町五丁目吉田きち子)○誌友の皆樣よ私の手元に左の不用書あります新文林ハガキ文學家庭魔風戀風の歌己

が罪の歌乳姉妹の歌金色夜叉の歌などあります皆樣の手元に新聲サンデー東京ムラサキ婦人倶樂部などが不用てしたら送つて下さい何號にてもよくてよ(千葉縣海上郡飯岡町字井花月)○皆樣の中に新金色夜叉戀・戀みだれ髮戀か夢か華子良人の自白嫁が淵色懺悔綠不綠少女の戀多情多恨新己が罪夏子等お持ちのお方は私の婦女子の本分日本歷史辭典淑女妙文集女子美文の資料文藝倶樂部八太陽九文藝界三女學世界五婦人世界五少女世界二少女界三落語集二少年世界日本少女女子の友と御交換下さいましな、又バイオリンお不用のが御座いませば私の許に女學校用の本が有りますから何册なり共と御交換下さいませ(福島縣賀茂郡阿賀町、風呂中信子)○皆さんの内て行く雲、花守、雛子、晴小袖、戀か夢か、湖畔の悲歌、夏子、少女の戀、不如歸の歌、常夏、天うつ波、有情無情、幻影、お持ちの方は妾の露分け衣、悲戀悲歌田園生活黃菊白菊靑葉怪人鐵塔名媛集うきよ草紙本誌はがき文學新潮舶來繪葉書と御交換下さいませそれから何卒御交際も願ひます(茨城縣土浦大町永井方きく子)○私の手許に相思怨、母の罪、虚榮上、ハイカラ令孃、春、故鄕、良人の自白續編、女學生訓、等不用になつて居ますから美しき繪葉書お惠み下さつた方には送つて差上げます(大阪川口富島町稅關役、山内樣方にて小野田かすみ)○誌友の諸姉樣の御手元に文藝世界、女學世界、此年の一、二、三、四月、及び八月號、並びにハガキ文學、八、九月號、秀才文壇、等御不用てしたら御惠み下されませんか御禮としてば大阪名所繪葉書其他の雜誌てきつと致します、(大阪市北區堂島濱四ノ二二、龜田方、國近みどり)○誌友の皆樣方、妾は、雜誌と小說とは、大好みてすから、只今、小說は、夜叉夫人、御茶ノ水婦人殺し、死美人、天一坊、雪おろし、田宮坊太郎をはじめ五十餘册の、小說と、雜誌は、女子文壇、少女世界、女學世界をはじめ、六十餘册あります。又其他洋書書籍三十餘册と女學校用敎科書六十八册ありますが、只今不用てすから。御望の方には、差上ます但し御望の方は、望の書籍名と、郵稅一册につき四錢封入して下さい。(常陸金江津局内戍渡新田山本保子)○誌友のお姉樣方の中に三木とみ子女史の書物指南の本婦人日常生活法習字速成帖の草書の分婦人の重寳弦齋夫人の料理談御持ちの方は私の女子文壇婦人世界女學世界少女界少女の友少女世界弦齋先生の小說飛乘太郎頓智百話頓智談婦女手藝法の中どれでもお望の本に繪葉書をそへてお禮いたしますからどうぞ御交換をねがひます(樺太大泊本町大通り北三丁目十九番地眞田信子)○私の手許に雛子、夏子、女夫波、多情多恨、運命、思ひ出の記、不言不語、百合子、金色夜叉、響、天打つ波、心の波、虞美人草、みだれ髮、凋落、少女の戀、二人娘、ハイカラ令孃、戀と愛、深山の美人、魔風戀風、新不如歸、戀と戀、紅葉全集、戀の旅、魔詩人、女殿下、露子、己が罪、靑春、乳姉妹、血の波、食道樂、小猫、想夫戀、自然主義、伯爵夫人、情戀塚、愛の犧牲、等ありますから寫眞に上等繪葉書(何枚にてもよろし)にて御申込の御方には相當の小說を送ります(兵庫縣川邊郡長尾村口谷二〇八阪上留三方翠子)○私の手許に、小說美丈夫、奇女無錢旅行、食道樂合本女夫波、其他、數學遊戲、女學世界四十一年分婦人世界等持つて居りますから皆樣の内己が罪、新不如歸、少女の戀、旅姿其他の小說と交換して下さい繪ハガキは筑波山名所其他風景、人物寫眞等交換して下さい(常陸國筑波郡小野川村字手代木沼尻利子)○私の許に古き小說や婦人世界。ハガキ文學等の書物がありますから入用の御方は自身の寫眞へ繪葉書々添へて御手紙下さい。又皆樣の内に算術。作文の敎科書御持ちの方は右の書物又繪葉書などと交換して下さい。(茨城縣稻敷郡柴崎村大字戍渡新田風見貞子)○誌友皆さん方本誌の增刊新美文、新作家、短篇小說、女子言文一致文範、和歌入門俳句作法、雁のゆきかひ、衞生化學、食物論代數學難問解義、夢、響、生、草合、強き戀、思ひ出の記、金色夜叉、魔風戀風、二人孤兒、破戒等お持ちてしたらどうぞ頂戴、左の書の内お望みのを差上げるわ、もし出來なければ貸して頂いてもいゝわ必ず本はがきか雜誌をお禮につけてお返しするわ、決してとりばなしはしない事よ、もしも文藝乳姉妹不如歸肉彈婦人の情力靑春ハイカラ令孃己が罪こゝろの日記文壇の光文壇の花大讀者號二十七名家數學講義錄算術手風琴獨まなび自然と人生文章新辭典不知火植物學叢話等(秋田縣山本郡森岳村太良鑛山梅澤婦美子)○皆さんの内てコブシ、靑春、金色夜叉、呪はれたる女、花袋集、魔風戀風、不如歸、伯爵夫人等お持ちの方は、妾の花あやめ、麗子、夏子、雛子、長恨、靑果集、ハイカラ令孃、ハムレット等と交換して下さい、必ずお送りいたします。其他に女子文壇

や女學世界、文章世界等澤山にありますから入用の方は郵券封入て申込んで下さい、繪葉書や玉章の交換も願ひます。（近江神崎郡御園村大字今田居三九九志賀もり子）○女學世界、女子文壇の增刊を悉皆、他に未使用の名所繪葉書、美人寫眞の上等、ハーモニカの上等がありますから、什うぞ皆樣の中の小說乳姉妹、多情多恨、青春、魔風戀風、又は女持の尺八、ヴワイオリンと御交換くださいましな、右の内お望の物で相當に御禮いたします、先着五名の方に限り長野縣案内（美本）を一部づつ添へて差上ます（長野縣更級郡中津村、町田かめの）○諸姉樣の内で魔風戀風、女學生、金色夜叉、寒潮等お持ちの方は拜借さして頂けませんかそれとも妾のなんぞかと御交換を願ひます、おゆづり下すつてもよろしいのよ（名古屋岩井町戸崎友子）○皆々樣、妾の許に、小說、雜誌合せて、三十餘册ありますが、不用ですから、諸姉樣御持の、倫理學教科書、教育學教科書の外、中等教科書なら、如何なる教科書にても、よろしいから、交換を願ひます。（茨城縣稻敷郡柴崎村反渡山本保方春子）

追加

○たむしで苦んでゐる方に　私は三箇月も以前から、脊に「田虫」が出來まして、お醫者樣にも、いろ／＼お世話になつて、お藥もつけましたけれど、只痛いだけで少しも、きゝめがありませんで、だん／＼擴がつてきて、たいそう困難してゐたのでございますが、フトさる人に談法の藥を教へて頂いてつけて見ましたところ、ふしぎにも三四回つけましたら（つけた時も左程しみませんでした）すつかり、なほつてしまひました。私はもう、嬉しくて／＼なりません。それで、皆樣の中でひよつと同病で、ご困難していらつしやるお方がありましたら、教へてお上げ申したらばと、かくは大切な紙上を拜借しまして申上るのでございます。お遠慮はご無用でございますから御申込み下さいませすぐお知らせ申上ます（失禮ですが御申込みの節は返信料を添へておいて頂戴）（奈良縣吉野郡白銀村赤松福西たづ）

○和歌の書物　誌友の諸姉樣方の御手許に、金子薫園先生の和歌新辭典御不用なれば私の、古今和歌うひまなびと御交換下さいませんか、御願申ます（吳市二ッ町西本通二ノ一〇二、碓井吳竹）

○和歌　私は和歌に非常に趣味を持て居ります。同好の諸姉樣、何卒何首にても書いて送つて下さい。多く集れば歌集を出版して御返し申します。屹度ですわ。（千葉縣夷隅郡千町須ヶ谷、鶴岡一枝子）

○編物と栞　誌友の御姉さん方私はつまらん者ですが力の及ぶ限り勉强致し度と思つて居ますが何分交際のない者ですからどうぞ以後御心安く編物栞繪端書の交換を願ひます どうぞきつとお送り致します。（神戸市兵庫永澤町三丁目二五六、柳出ひで子）

○親愛に泣く　私の樣なものにも御いとひなく種々御めぐみ下されし誌友の皆々樣の御なさけじつにじつにうれしくて私は人知れず泣きました十七年間世の中のなみ風にもまれもまれてずいぶんと涙の涸れるほど泣いた事はありますがしんにうれしくて泣いたのは始めてで御座いますが教育もたんと受けない身てすから何も出來ず字など御はづかしいほど拙てすがせめては心だけ正しくもちたいとつれつれ思ふて居ます誌友の皆々樣御ねがひて御座いますから何卒手風琴の御不用なのがありましたならば御めぐみ下さいまし必ず相當の御禮をいたします一日も早く皆々樣の御たより下さるのをまつて居ります故下記へ御知らせ下さい（栃木縣那須郡黑磯役宅大島方宵戸せい子）

○基督教に關する書　皆さんの中に「無花果」と基督教に關する書籍お持の方がありましたら私の女夫波の歌金色夜叉の歌乳姉妹の歌良人の自白中編聞光など〻交換下さい雜誌澤山ありますから添へておかへし致します（羽後酒田上仲町一番地佐藤なつ子）

○和歌俳句好きな方に　諸姉樣方何卒文學上の御交際を熱望致します私は友なき田舍に只文學を唯一の友として居る賤の女故和歌なり俳句なりで何卒／＼御交り下さいませ（北海道龜田郡七飯村なる川のほとり、伊東綠子）

○姉妹のお願ひ　私は女學世界婦人世界女子文壇秀才文壇新文林中學文壇文章世界中學世界無名通信冐險世界探險世界姉妹は少年少年世界日本少年少女の友少女世界少女界幼年畫報幼年の友等の古雜誌を讀み度う御座いますから御持ちの方は一册でもお惠み下さいませお禮としては秋田名物平頭サヽラ舞サエ／＼踊り等の寫眞

絵葉書及び縣下で發行されて居る俳壇白虹其の他の雜誌を以て必ず致します（秋田縣仙北郡大曲町鈴木嘉之助樣方菊子幸子）

○山口の酒向敏子様へ　敏子さん私は新作家でおとなりの花子で御座いますが何だかお懷かしくてなりませんのよ誠に失禮の申分かも知れませんが御交際下さいませんか御手紙下されば其上の喜びはありませんのよ拙い筆ですが失禮の御わびは手紙で致します（麻布區谷町二十六、早川花子）

○八犬傳其他　私の許に南總里見八犬傳一卷より八卷まで八冊、催眠術自在、催眠術稽古、記事論説、日用書翰文、少年世界增刊、入學案内、十二科目、等不用に付小説雜誌と交換して下さい（岐阜縣加茂郡黒川村ますぶち廣瀬舍内古田遊子）

○京城の愛讀諸姉様　私は只今京城西大門に住つて居るものですが心合ふ友なく行く秋を淋しう暮して居ります御交際下さる方は御座いませんでせうか（京城西大門鐵道官舍、富迫露秋子）

○豐後山香より　西に雜逛を以て有名なる鹿鳴越山を負ふて北には岩角突立しいかめしい樣な鹿山を受けて、村の中央には清い〳〵八坂川が淙々と流れて居ます、總して豐州の地は坂が多くて都會と云ふは一つも御座いません、昔は交通が非常に不便であつた相ですけれども近年は國道が開通しましてて便利になりました、最も川等には充分の橋等もできませんて村民は大變困難をして居ます、けれども、同じ豐後でも國東と云ふ少し奥の方に行きますと、それは〳〵まるで野蠻人見た樣な者が住居してゐます、家は掘立舍で壁等は藁で造つてあります、それ等を見ますれば山香もまだ〳〵都會だと滿足してゐます、そして今は鐵道工事が始まつて居ます前晉つた樣險しいものですから、僅二間巾の道をつけるに二十間も高さを掘らればならん處が澤山あります、又トンネルが非常に多くあります、あの東海道線の山北驛から御殿場まてと變つた事はありません、其のトンネルは皆石山を貫くのですから火藥丈でやつて居ます、ズドーン〳〵と間斷なく響くのと何んにも大仕掛なのとに田舍少女は何れも目を圓るうして居ます。別府温泉へは三里半、宇佐神宮には六里、耶馬溪へは七里あまりあります（大分縣、本田一枝子）

○臼杵より　記者樣游泳の寫眞と申しましたが、寫眞は只今御座いませんので、ゑはがきなお送り申しますよ、載せられるなら誌上に？：：：之は去年ので御座います男子部の、鉛筆てしるしの付けてあるのは五階の花傘です、女子は大てい、三階二階一階です渡る長さは、三町以上、深さは底しれぬ樣に青々としてゐます。尋常科卒業もあれば高等科卒業もありましてそれ〳〵試驗を行ひます、高等科試驗の男子部の方は、よく存じませんが女子部の方は第一、小舟から着物を着て帶迄むすんて、海の中へ入つて立泳ぎで帶をといてしぼつて口にくはへて、着物をぬいてしぼつて、又着て帶をむすんて小舟へ泳いて歸るのです、そして竹竿のふり方、持ち方、その上水中宴會と言ふのがあつて それは名の通り立ち泳ぎでお酒をついだり飲むんだりお肴をたべたりするのです、之等は大てい十一二歳位の女子がするのです、女子は七歳位から十七歳位迄は泳ぎます。十三歳位の女子はもう大てい前の試驗に通つて先生にて、居ります男子は大きい先生方が多い樣ですが女子は十八歳にもなつて泳ぐ人はありません、今年は昨十日大會をいたしました、去年以上の盛大でした、私は尋常科を受けたぎりて高等科には行きませんてした二階の花傘をもつて泳ぎ渡りました、それは三十九年でした。（豐州臼杵、吉田數花）

○誌友諸嬢様、私は極々無學な田舍者ですが直接に、繪葉書、玉草、寫眞の御交換を御願ひてす又近くの御方は御遊にもいらつしやい（靜岡縣濱松榮町、平岩白菊）○山口縣の女子文壇愛讀諸姉樣方へ、私は片田舍て文壇を唯一人の友として樂しく暮して居ます御交際を願ひます、但し男子の方は御免なさい（山口縣吉敷郡大内村、宮原たか子）○誌友のお姉樣方始めてお目見致します以後宜しく御交りして頂戴只今私の手元に小説コブシ全、散かざるの記など十種ばかりと雜誌澤山あります皆樣の中に筆子、青春夏子などお持のお方交換して頂戴な先着二名の御方には臺灣始政紀念第十四回エハガキ紀念スタンプ付のを一組宛御添申します尚御寫眞御同封のお方には私の見苦るしき寫眞も差上ます、（臺灣彰化廳北斗街、岡村綠葉）○私も本月から皆樣のお仲間いりをさせていたゞきます何分女學校を出たばかり不束者何卒おん見捨なく御手紙絵はがきの御交換を願ひます、（長崎市外深堀、樋口靜枝）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雜報

文界消息

▲夏目漱石氏は八月下旬滿州漫遊の途に上つた、氏が『朝日』に連載の小說『それから』は佳境に入り、終りに近づいて居る。

▲德田秋聲氏の小說『母と娘』が『東京毎日』に出て居る、

▲正宗白鳥氏の小說『落日』は九月一日から『讀賣』に續いて出て居る。

▲文學士齋藤信策氏は八月六日卅二歲を以て逝去せられた、實兄樗牛氏も卅二で逝かれたさうで矢張り肺患であつた、氏は野の人と號し文藝評論家として堅實なる論議をした人である。

▲平田禿木氏は學習院女學部敎授を辭し第三高等學校敎授に任命、九月中旬京都へ出發せられた。

▲文學博士物集高見氏令孃芳子（廿四）和子（廿二）兩女は小說志願で夏目漱石氏の門下に入つたと云ふ事である。

▲水野葉舟氏の小說集は『微温』と名づけ本月中易風社から出版の筈である、同集には最近『讀賣新聞』に連載した小說『微温』が卷頭に出る、

▲雜誌『無名通信』では本月一日號に有名號として增刊發行の企がある。

▲與謝野氏の文學講演會は今秋より更に日本上古史を初め、二三の新しき課目を增して例の如く女子の聽講をも許す由。

▲『秀才文壇』は本月二十日增刊に『白露號』を出す筈である。

▲岩野泡鳴氏はまだ北海道に居る。

▲水戶へ行つた橫瀨夜雨氏は再び鄕里大寶に歸つた。

▲小栗風葉氏は鄕里三河へ歸つてから、都會の知人とも音信を絕ち、專ら語學を修めてゐるとの噂。

皇室の御慶事

今春北白川宮成久王殿下と御成婚遊ばされた、周宮房子内親王殿下には、御懷妊と確定此程發表になりました。又富美宮内親王殿下には、明春四月下旬を以て、愈々朝香宮鳩彥王殿下と御成婚の大典を擧げさせらるべしと洩れ承ります。

文部省展覽會豫報

文部省展覽會の開會も近づいたので各畫家は熱心出陳の製作に忙しい、其中で聞くところでは和田英作氏は『足尾』と題し、足尾銅山の光景を寫したる者を、岡田三郎助氏は澁谷の自宅で某家の令孃をモデルに『木蔭』と題する全身人物畫をいづれも執筆中、滿谷國四郎氏のは『月の出』と云ふので赫奕姬と竹取の翁を材料に竹林の背より月の出るところと云つた大物ださうです、中澤弘光氏のは『光明皇后』で、皇后が池のほとりをそゞろありきして、ふと水の面にうつれる己が姿の觀音となれるに見惚れ給へるところを描くとのことです、山本森之助氏は甲州の山水を寫生して歸り、正宗得三郎氏は瀨戶內海の風光を描いて入京の由、宮崎與平氏は花園に童女の遊べる圖を、岡吉枝氏は得意の美人畫を製作、橋本邦助氏のは『觀劇』と題し、幕間に女が二人徜徉するところを寫さるゝ由、日本畫にても寺崎廣業氏の風景畫、鏑木淸方氏の『鏡』と題する双幅の時代物なぞ出品さるゝさうです。

ハリス夫人の永眠

青山學院構內在住、日本メソヂスト敎會監督エム、シー、ハリス氏夫人クララは長く病氣中此程俄かに卒まり、行年六十を以て永眠十日葬式がありました、夫人は米國ペンシルベニヤ州の產で、明治六年夫と共に初めて函館に來り、それより傳道に育英に夫を助けて、日本の爲めに盡すを卅餘年、其間歸國せられた時には、太平洋沿岸日本人の間に宣敎して斡旋至らない大變な日本贔負の人で、其れらの功でハリス博士は一昨年夫人と共に拜謁仰せ付けられ勳三等に敍せられました、北海道の函館遺愛女學校は夫人の創立せられたもので、其他日本古器に通じ歐の造詣もあり、土佐日記の英譯を初め日本文學紹介に就いても盡くされた方であります、惜しい事に思ひます。

幸田女史の辭職

東京音樂學校敎授幸田延子女史は就職以來十四年になりますが、今回職を辭して歐洲漫遊の途

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に上るとのことです、兎角の世評はあるにせよ我國音樂界唯一の人で、ピアノに於ては肩を比べる者がありません、學校の爲めには惜むべきことですけれど、女史が洋遊の結果、其妙手を我が樂界の爲に貢獻されたなら更に欣ぶべきことでせう。

故鈴木野火氏追悼

本誌記者故鈴木野火氏の一周忌は前月十一日に當りましたので、城南靑松寺に於て叮重なる讀經を爲し、社中一同故人の靈に追悼の意を表しました、逝ける者は終に歸らず、靑春の人を惜むの情が、今更のやうに痛切に感じました。

○女優養成所　前の女優養成所、今は帝國劇場附屬技藝學校となりました、學校は芝區西久保にあつて現在の生徒は二十三歲を年長に十七歲まで凡て十名、卒業は來年の九月、目下舞蹈長唄、琴、茶、禮法、義太夫、新舊劇の型、脚本などそれぞれ熱心に修養してゐるそうです。

○新橋驛の女子事務員　新橋驛の女子事務員(出札掛)は目下十六名、日給三十錢より五十錢まで、朝七時から翌日の朝七時までの交代勤務で、其間に眠るのは五時間位です、高等小學卒業程度の者が多く、中には高女に入つた者もあります。

○新橋驛の花賣娘　新橋驛に花賣娘が一人居る、齡は十六とやら、朝八時頃から夜までゐます、花は品川の妙華園から取つてくるので、一日の賣上高三四圓に上ることもあれば、少くも五六十錢は賣れるさうです、鉢に挿したり簪にしたりするのが五錢で、一束にしてあるのが二十錢、花は西洋草花が主なやうです。

○二十三貫目の大女　伊豫温泉郡新濱村松本廣吉の妻うめ(嘉永六年生)は體重二十三貫目。身長五尺五寸二分と云ふ稀有の大女で、其肥大な體を苦にせず、毎日家事に働いてゐると云ふことです。

▲涼しい風が吹く、濕氣が水の樣に大空を流れる、草に置く露が朝毎に滋く、虫の音が雨のやうに聞える、殘炎の動搖も收まり秋もやうやう落着いて參りました、長らく外してあつた障子や襖をもとの樣に建てた室に、ランプの光を强め、靜坐して考ふれば、何となく天地が充實したかの如も思はれます、かゝる時田舍では背戸の茄子畠を渡る秋聲の淅瀝たるに、裏庭の落栗の音が隕石の樣に聞かるゝとてしやう、都は街店の葡萄無花果等秋知り顏に、柿の實の黃ばんだのも現はれ初めた、新たに張り替えた燒芋屋の行燈も亦新秋の景物たるを失はない▲今年は所謂五風十雨悉く順當に叶ひ、厄日の二百十日も廿日も無事平穩で、米作六千萬石の收穫豫定あると云ふ未曾有の豐年とか云ふ事です、暑いとも暑かつたが、兎に角結構な事です▲都下の諸學校は早きは一日、遲きも十一日には校門を開いて舊知新來の學生を迎へた▲鐵道院では八月廿七日京都神戸間に最大急行列車の第三回試運轉をした、其結果京神四十七哩餘を、往きには一時五分間、歸りには一時八分間と云ふ好成績だつた、之が先づ日本一の最大急行でありますが、實施は來年からであるさうです。▲先頃本所で七十年を經た屍蠟を發掘、帝國大學に寄附されたさうですが、これは世界に二つと無い木乃伊であるとのことです。▲九月は東京のお祭り月でした、今年は前月江戸名物と云ふ深川八幡大祭の三十年經りに催されたのに次いて、神田明神、芝神明、湯島天神、根津權現等皆好い景氣で子供等がお祭りの行燈を立て、樽御輿など擔いでワッショ／＼と賑やかな事でご座いました。▲愛國婦人會に何か内訌めきた騷ぎがある樣新聞紙などに見えましたが、今度總裁閑院宮妃殿下の御令旨が出た、と思つた其れが跡方もない虛構であると云ふ事でした、實に嘆はしくも亦恐れ入つたとてありませんか。

飛行器の研究

今や世界の問題として各國人の視聽を聳かしてゐるものは空中飛行器の研究です、元來飛行器に就いては獨逸が最も熱心で、早くからツエッペリン伯など云ふ有名な飛行家もありました。併し今は英佛は勿論世界各國爭ふて飛行器の研究を初めました、我日本でも陸軍の方で飛行器研究の一團が成立しました、人智の發達は思ひの外早いものですから、我等の時代に於て完全なる飛行器が出來上るかも知れません、

北極探險

飛行器問題に次いで近頃の世界的話題は北極探險です米國ペアリー氏と云ふ探險家と、クック

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

氏と云ふ探險家と兩人とも北極を見極めたとの事です、兩氏の内の孰れが最も完全に探險の目的を果したてせうか、明瞭なる報告が世に發表されるまでは一寸分らないやうてす

東京の迷信

一面に於ては文明の空氣が瀰漫してゐるに拘はらず、其半面に於ては迷信の都會とも云ふべき東京の神社佛閣の繁昌は容易に衰へません蠣殼町の水天宮は有馬家邸内に在ると云ふので五日、十五日の外は境内に參詣を許しませんが、安產の靈驗があると云つて女子の信仰はえらいものです。それから深川の不動さんも成田の出張所と云ふので大繁昌、月の二十八日は殊に群集します。市中で最も賽錢の上り高が多いと云はれてゐるのは淺草の觀音様、末社の諸佛も信心者が多い、芝の琴平神社は都下唯一の琴平さんてすが、昔ほどには繁昌しない、赤坂の豐川稻荷も以前はなか〱振つたものですが今は僅に電車の停留場として其名を呼ばれる許り。佃島の住吉はやはり信仰者が多い、市外では川崎の大師が第一て、新井の大師、池上の本門寺なども有名なことは人の知る通り。羽田の穴守稻荷は電車が通ふやうになつてから遊びに行く人が多い、殊にグラウンドが出來てから野球界の一名所となつたが、穴守様との關係が餘りに違ふからをかしい。

新刊

○廢園　三木露風著

三木露風氏の頭角を現はして來たのは最近二三年の事てすが、既に一册の詩集を出して詩壇に重きを爲すに到りました、氏の詩は細い線で强い響を出さうとする風があります、何處までも若々しく、何處までも華かに、何處までも感興を强めて行かうとする風てす、持つて生れた才分でせうけれど、其才分を濫りに動かさず、極く眞面目な態度で青春の藝術に捧げたのは、同じ詩歌の情緒に生きる者の懷しく感ずる所てす、偖て本書の批評は到底此紹介欄て言ひ盡くすことは出來ませんから、折を見て北原白秋氏の「邪宗門」と共に本年詩壇の製作として少しく考を述べたいと思ひます、體裁は「無題」「濁れたる噴水」「暗い扉」「推移」「二十歲までの抒情詩」の五に大別して百二十三篇の詩を集めてあります、製本はクロース本綴の新意匠を用ひ、箱入の立派な體裁てす（定價九十錢、神田末廣町十八光華書房發兌）

○史劇十二曲　山崎紫紅著

山崎紫紅氏は脚本、殊に史劇の一幕物が得意て其作は數次東京の劇場に演じられ、且好評てす氏の脚本は歷史劇と云つても何處か新しい空氣があつて、從來の脚本界には見られなかつた人物の活動、背景の調和があるやうです、小說を書くより脚本を書くには更にむつかしい用意のいるもので、紫紅氏が此方面に新開拓を試みて、些の遜色なきは勇しく思ひます、本書收むる處歌舞伎物語、その夜の石田、前途、信玄最期、亂れ笹、鐵、明智光秀、拾一木、戀の洞、三七信孝、當流鉢木、破戒曾我の十二篇です、製本は米齋氏の意匠て、殊に派手やかな美くしい書物です、紙數五百四十頁（定價九十五錢、博文館發兌）

○模範女子　齋藤鹿三郎編

古代と今代とを問はず模範的女子の言行を集めたもので、教育家の參考にもなれば、家庭の讀本としても至極有益なものです、和裝美本（定價四十錢、日本橋區通砥町六盛館發兌）

○斷脚記　田中白涔著

著者は大阪天王寺中學校に教鞭を把る人て、昨春滊車て不慮の禍に逢ひ、遂に隻脚を斷ずるの止むを得ざる有樣となつた、本書はその病床八旬餘の入院加養中の日記て、患部の苦痛、家族を思ひ遣るの眞情、友人の見舞、其他病閑の教育宗教文學談などが斷片的に集めてある、行文流暢てその爲人もよく現はれて見える樣てす、家庭の讀み物として佳なるものたるを失ひません。（定價五十錢、大阪吉岡寶文館發行）

○筆草　大町桂月著

桂月氏の文集てあります、『日本國民と梗』以下四千餘篇、評論文と云はず、記事文と云はず、または短い金言の樣なもの其他美文式のもの等、最近のものまで收められてあります、桂月

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

氏は中學生に對して其訓育に一種の呼吸を熱知すると久しく、なかなか若い人の間に血を湧かして讀まれてあるとは世の認むる通りであります、集中『男性と女性』『女子の晩逝』『賢婦人の說』等女子問題に就いての解決もありますから諸讀の一讀を推奬致します。(定價五十錢、麴町區平河町五ノ五金尾文淵堂發行)

○永日　　尾上柴舟著

柴舟氏の歌集で、前年上梓の『靜夜』以後の作三百首を集めたものです、作者は溫籍な平和な詩人で、『永日』と云ふ題を見ると、何となく櫻かざして今日も暮しつと云つた風な聯想が來ますが集中の諸作は果して欺きませんでした、『とくとめよ大かたりものとく留めよわが歌ひわが若さゆく』と云つた激越なのは餘程珍らしいので他は優しいものでおります、しかしながら斯く取亂した厲しい言葉は無いが、生活中心から湧く所謂近代的憂愁の色彩と情調とは、淡々しい思ひの底にも流れて居るやうで、讀みゆく間にしみじみとさせます、材料も感興も淸新で、作品そのものは爛熟を超えて恐ろしく平淡になつたやう、それに情緒のゆらぎと云ふよりも、理智の思索と云つた風に傾き、一體の態度が低徊遲凝とも云ふべく、時には讀者に感興の乘り移らない偏跡なのが無いとも云へませぬがそれはかゝる內觀的な作として免れますまい、左に二三首拔いて、韻文の少い折柄の好餐を諸讀の机邊にすゝめます

事なきがまた堪へがたみ森の木の古き皮など剝きて見るかな

夕靄は蒼く木立をつゝみたり思へば今日はやすかりしかな

殘溶(とり)のみとなりしインクの壺ひとつ今日ものこれる古机かな

中澤外二畫伯の挿畫あり、装釘も亦美くしい。(定價八十錢、神田區猿樂町弘道館發行)

九月の雜誌

▲『新小說』眞山靑果氏の『修禪前後』兎に角力ある作、卷頭は上司小劍氏の『笛』▲『趣味』は秋聲氏の『女客』が卷頭、吉田白甲氏の『痴人の母』は面白かつた、雜俎の久保中人の『文壇おもちや箱』はなかなか皮肉に浴せかけてある、▲『ほととぎす』、虛子氏の『箱根越』前號の『修善寺』と同じく短かけれど味深し、外には長塚節氏の『おふさ』を推す。▲『新潮』、小說は小山内薰氏の『乞食』直ぐ惹きつけて讀まされて了ふ、相馬御風氏のは『自殺者の手紙』と題するもの、題の通り手紙を蒐めたもの眞らしく人を動かすところもある、其他の諸欄例に依て賑か、▲『スバル』は卷頭が鷗外氏の『金貨』例に依て餘裕だつぷりの小說、永井荷風氏のヴエルレーヌの詩の譯も載つて居る▲『無名通信』は社會的の記事が多かつた▲秀才文壇はますますよくなつて來た▲『新文林』、『ハガキ文學』亦靑年のみづみづしい活氣を添えて居る。▲『自然と印象』は九集を出すに至つた、九月の集には今井白楊氏の『南の小タウンより』と題する新作三、人見東明氏の『廢人を悲める歌』といふ新作三、例に依て難質なる研究を多しとする（以上寄贈を受けたるもの）

○珍物書傳　　珍物子編

嘗て大阪朝日新聞に連載して喝采を博した、今古の珍物百人の肖像と奇行を蒐めたものであります、其の中には博士もある、僧侶もある、藝妓もあれば、畫伯詩人、どれもこれも一風變つたもので恰もひれた唐茄を並べて見る樣な眞面目なのか洒落たのかわからぬ實に摩訶不思議な珍物揃である。徒らに抱腹絶倒する人は讀む資格の無い本だと序にもあるが、さう云つても可笑しいから致し方が無い。(定價五十錢京橋南小田原町三ノ九樂山堂發行)

○國民文庫刊行會の再募集

國民文庫刊行會では、わが國書の重もなるものを毎月刊行する筈で、嚴に會員を募集し、源氏物語以下數册を既に刊行しましたが、其校訂印刷製本等に於て近頃稀有の好評を博したので、締切後入會希望者に對して拒絶して居たさうです、處でさう云ふ必要上今回更らに三千名に限つて第二回會員募集を始めたとのことですが、非常の好況にて締切期日を俟たず滿員になりさうであります。

○肺病新藥の輸出

よく新聞の廣告にも見ゆる、肺病新藥を人助けの爲め發賣云々とある、府下荏原郡入新井村字不入斗川名助次郎氏の新藥は、最初大阪の名醫が嘗て長崎に遊學し蘭人より教授されたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し、試みに數包を調劑して服したところ、不思議にも拭ふが如く快癒した紀念發賣ださうですが、近來は本邦のみならず、米國、印度等に輸出さるゝまでに發展したと云ふ事であります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

誌友諸嬢の寫眞を望む

我が『女子文壇』の誌友は日に月に增加してゆきますが、此增加してゆく愛讀者諸嬢のお寫眞を是非頂きたいものです、婦人は何んな方でも寫眞を持つてゐます、持つてゐる方はお友達にも見せるでせう、誌上のお友達にも見せて下さい、本社は只其紹介の勞を取るのです。其外お持合せの盛粧せる婦人、貴族名士の家庭、女學生の動作、各種紀念會の餘興、世に現れざる名所舊蹟、又は風俗の寫眞などをどし〳〵お貸し下さい、寫眞は用濟次第お返しいたします。

○女子文壇投稿各種懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲　種（短篇小說、美文）
天賞金參圓。　地賞金壹圓五拾錢。　人賞金七拾錢。

▲乙　種（お伽噺、家庭日記、新論文、書簡文、新體詩、散文詩）
天賞金貳圓。　地賞金八拾錢。　人賞金四拾錢。

▲丙　種（和歌、俳句、短文、餘興、笑話、歌謠などへの庭、少女文壇圖畫は二寸の三寸の大さにて薄き日本紙に限る）
天賞金壹圓。　地賞金五拾錢。　人賞金貳拾錢。

◉各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の吳服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◉投稿締切日　凡ての投書は毎月十五日堅く締切ます

●賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

（服部製本）

振替貯金口座　東京第壹七貳九番

○定期發行分　▲毎月一回（一日定期發行）

一冊（一回分）	定價金拾五錢	郵稅一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊（三月分）	同前金四拾三錢五厘	同　四錢五厘	計金四拾八錢
六冊（半年分）	同前金八拾四錢	同　九錢	計金九拾三錢
十二冊（壹年分）	同前金壹圓五拾六錢	同　拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分　▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一冊（一回分）	定價金貳拾錢	郵稅一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）	同前金三拾八錢	同　三錢	計金四拾壹錢
四冊（壹年分）	同前金七拾貳錢	同　六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部　▲十六回

四冊（三月分）	定價金六拾三錢五厘	郵稅　六錢	計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）	同前金壹圓二拾二錢	同　拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）	同前金貳圓二拾八錢	同　二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▼申込注意

振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……	部數多く有効に比し無類の割安
上等	一頁廿五圓	半頁……	
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切毎號十五日前

特約取扱　○京橋　日本電報通信社　○京橋　明治廣告社　○神田　博報堂

明治四十二年九月廿八日印刷
明治四十二年十月一日發行

定價金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

第五年第十三號
女子文壇
明治四十二年十月一日發行
（毎月一回一日發行）
【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



女子文壇定價金拾五錢　郵税壹錢五厘
【東京秀英舍印刷】

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA